

YU-AP アニュアルレポート 2015

目次

I. はじめに	
1. 巻頭言	3
II. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 事業実績概要	
1. アクティブ・ラーニングの組織的推進と AL ポイント認定制度	7
2. 『山口大学教育理念』整理	7
3. 山口大学学士課程教育の質保証体系	8
4. 教育改善 FD 研修会の展開	9
5. 学生参画型 FD の取組実績	11
6. 他機関訪問調査の受入	12
III. テーマ I (アクティブ・ラーニング) の実績	
1. AL ポイント認定制度に基づく分析	15
2. アクティブ・ラーニング推進のための FD・SD 展開及び AL 推進チーム形成	17
3. AL ベストティーチャー表彰制度の設計	18
4. アクティブ・ラーニング推進のための教室及び ICT 活用	19
5. 正課外教育プログラムの開発と実践	20
IV. テーマ II (学修成果の可視化) の実績	
1. 山口大学生に期待される汎用的能力	25
2. 学修到達度調査及び学修行動調査の実施状況	27
3. 学修到達度の可視化	27
4. 学修・キャリア診断の方向性	28
5. 正課教育及び正課外教育におけるループリックの開発と活用	29
V. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 事業関連イベント報告	
1. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) & KEEPAD JAPAN アクティブ・ラーニング研究会 共同企画 FD・SD ワークショップ	35
『アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう！ －大人数授業、理系基礎科目を事例にして－』	
2. 山口大学・創基 200 周年記念 共育ワークショップ 2015	55
『みんなで山大の教育 (共育) について語ろう！』	
3. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) FD・SD ワークショップ	87
『授業科目シラバスから作成するループリック－観点別到達目標を活かして－』	
4. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) & SCSK (株)共同企画 FD・SD ワークショップ	97
『アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう Part2 －アクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器を中心に－』	
5. 山口大学・大学コンソーシアムやまぐち SD セミナー 2015	111
『大学職員の専門性について考えてみよう！』	
6. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) & IR 室合同企画 FD・SD ワークショップ	143
『教学マネジメント強化のための IR とは －データ活用方策を理解し、実践に活かすために－』	
7. AP 事業成果発表ジョイントフォーラム 2016	161
～山口・広島地区大学教育再生加速プログラム (AP) 採択校の成果発信～	

VI. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業成果報告	
1. 第14回関西大学FDフォーラム・大学教育学会課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」合同企画イベント 共催：関西大学、山口大学、JSPS 科研（15H03473）・・・	189
『学習成果をどう評価するか？－評価課題とルーブリックの開発－』	
2. 大学教育学会 2015 年度課題研究集会	191
『「連携」から広がる新たな時代の大学教育』	
3. SRHE（Society for Research into Higher Education） Newer Researchers Conference2015	193
VII. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）アドバイス会議	
1. 第4回アドバイス会議	197
2. 第5回アドバイス会議	199
3. 第6回アドバイス会議	201
VIII. 各種セミナー等参加及び訪問調査報告	
1. 大学情報・機関調査研究集会	205
『大学 IR 人材育成カリキュラム岡山講習会』	
2. 大学コンソーシアム京都、(株)リアセック 教育 IR フォーラム	207
『変革する大学！「学修成果の可視化」から教育・授業を変える －感覚的な議論から、エビデンスに基づいた改革の実践へ－』	
3. 日本オープンオンライン教育推進協議会（JMOOC）	211
『2015 年度 JMOOC 活用事例－大学の MOOC 活用－ワークショップ』	
4. 筑波大学大学研究センター第58回公開研究会 国際会議	213
『学生参画による大学教育の質保証：7カ国の比較の観点から』	
5. 『第9回 EMIR（Enrollment Management Institutional Research）勉強会』	215
6. AP 合同フォーラム	219
『共通の学生調査を用いた学修成果の可視化への取組 －データに基づく Faculty Development の展開－』	
7. 宮崎国際大学 AP 事業訪問調査	223
8. 平成 27 年度京都外国語大学『大学教育再生加速プログラム（AP）シンポジウム』・・・	225
IX. 活動日誌・編集後記	
1. 活動日誌	231
2. 編集後記	237

I. はじめに



巻頭言

瀨 厚（理事・副学長（教育学生担当））

2014年の秋、山口大学は文部科学省 大学教育再生加速プログラム（テーマⅠ・Ⅱ複合型）の採択を受けました。事業2年目となる山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）は、積極的に大学改革に取り組んでいます。本学では「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」を教育理念に掲げ、山口大学憲章には、学生と教職員とが、共に育み合うことの大切さを意味する「共育」の精神を謳っています。山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、本学の教育理念と「共育」の精神に基づき、学長のリーダーシップのもと、理事・副学長（教育学生担当）の指揮により事業を鋭意推進しています。

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」、テーマⅡ「学修成果の可視化」の取り組みを通して、①多様な学生すべてに対する能力育成を最大限支援する、②本学の教育システムを学生および社会に質保証できる、③本事業成果を積極的に情報発信し、我が国の高等教育全体の発展に貢献することを目指しており、すでにいくつかの成果が挙がっています。

テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」の取り組みでは、ALポイント認定制度が共通教育を中心として運用されており、シラバスにおいてどの形態のアクティブ・ラーニングがどの程度実施されているかが可視化されています。運用初年度としては8割以上の授業（共通教育）でALポイントの入力が行われ、ALポイントの設定状況も講義科目や実験・実習科目などの科目特性が反映されたものになっており、適切な運用がなされています。さらに、学部の専門教育においても一定の入力が進み、新学部である国際総合科学部では入力率が9割以上になっており、ALポイント認定制度の全学的な展開が期待されています。また、ALポイントの科目ごとの分布などから科目の傾向や特徴を把握・整理する取り組みや、ALポイントと授業評価アンケートの相関を調査するなどして、本取り組みに関する分析・検証作業を進めており、本制度の適正な運用を図っています。

テーマⅡ「学修成果の可視化」では、『山口大学教育理念』を整理し、山口大学生に期待される汎用的能力（ジェネリックスキル）の明確化を行いました。学修到達度調査と学修行動調査を通して、学生の汎用的能力の測定を実施しています。本学の教育理念に基づいた、山口大学生に期待される汎用的能力と学修到達度調査の結果を紐付けて学生に示すことで、学生が自身の学修到達度を把握することができ、山口大学での学びをより深いものにするとともに、能動的な学びが喚起されることが期待されています。また、ルーブリックの開発・活用が進められており、『山口と世界』での活用に加えて、正課外教育プログラムのルーブリックが開発・活用されています。さらに、可視化された学修成果はE-ポートフォリオ等に蓄積をされ、それらを活用しながらエビデンスベースの学生支援、学修アドバイスを展開する方向性で進められています。

今後とも着実に山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）を進めていくことで、組織的なアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化を通じた適切な学修支援を実施し、大学教育改革をより一層加速・推進して参りますので、ご理解ご支援を賜れば幸いです。

Ⅱ. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 事業実績概要

1 アクティブ・ラーニングの組織的推進と AL ポイント認定制度

正課及び正課外教育プログラムのアクティブ・ラーニング度を認定する仕組「AL ポイント認定制度」が導入された。AL ポイント認定制度などによる、シラバスや学修成果の可視化を図るとともに、アクティブ・ラーニング対応教室の整備を進め、課題解決型授業を中心とした共通教育全体のアクティブ・ラーニング化を組織的に推進している。

平成 27 年度から導入された AL ポイント認定制度は共通教育を中心に全学的な取組となっている。AL ポイントのシラバスへの入力率は、共通教育科目では 8 割以上、一部の学部では 9 割以上であり、初年度としては評価できる値であると言え、認知度についてもこれに比例していると考えられる。

本学ではアクティブ・ラーニングを「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るため、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法（発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等のほか、教室内でのプレゼンテーション、グループワーク等）を指し、その対象として、授業科目による正課教育だけでなく、授業外学修である正課外教育を含む。なお、授業科目においては少なくとも 1 コマ以上行うものとする。」としており、各種 AL マニュアルや FD において周知が図られている。

平成 26 年度に実施した「新しい共通教育に関するアンケート調査結果まとめ」（回答者数：教員 388 名（40.0%）、学生 1,264 名（64.3%））によれば、「アクティブ・ラーニングを実践しているか」という問いに対して、「強くそう思う」「そう思う」と答えた教員が約 25% である一方で、「アクティブ・ラーニングに関心があるか」という問いに対しては、「強くそう思う」「そう思う」と答えた教員が約 52% であり、教員からのアクティブ・ラーニングに関するニーズに応えるために、各種取組を進めている。

また、具体的なアクティブ・ラーニング事例の報告やクリッカーやタブレット機器活用に関する FD・SD ワークショップが学生も交えて開催されている。学生がワークショップに参加することで、ワークが活性化されるだけでなく、アクティブ・ラーニング実践を教員・職員・学生が体感することができ、より効果的な FD・SD になっている。AL の実践では、グループワーク、クリッカーやタブレット機器が活用される授業が実施されはじめ、さらなる AL の推進が期待される。また、山口大学は、国立大学法人等の 2014 年度に係る業務実績の評価で、アクティブ・ラーニングの組織的推進について高い評価を受けた。

2 『山口大学教育理念』整理

2015 年 5 月に開催された教育研究評議会にて、本学の教育理念に基づき、山口大学生として卒業時に身に付けていることが期待される汎用的能力（「山口大学生に期待される汎用的能力」）の明確化について整理を行った。

『山口大学教育理念』では、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の意義や、教養教育・専門教育において育成される汎用的能力を明示している。今回、それらを次の表のように整理することにより、山口大学生として卒業時に身に付けていることが期待される能力とし

て明確化した。これに基づいて、学生の汎用的能力に関する学修到達度を可視化し、学生が自らの学びを実感・省察し、次なる成長に結びつけることが可能となる。また、『山口大学教育理念』の整理は、大学全体としての教育目標を明確化するものであり、各学部・研究科のディプロマ・ポリシーの再構築等において参照すべき枠組として意味づけることができる。

表Ⅱ - 1 『山口大学教育理念』の整理

「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の意義	教養教育において育成される力	専門教育において育成される力
【驚き】 世界や社会にいつも驚きを感じ、過去・現在・未来に問いを発し続けます。	【驚き】：驚きを大切にし、「自ら」が考え・判断・表現・発言する能力を養います。	【チャレンジし、解決する力】：あらたな問題や困難にチャレンジし、解決する力を養います。
【個性】 他人と競争し、打ち負かすのではなく、自分を発見し、はぐくみ、世界でたったひとつの存在になります。	【個性】：個性を大切にし、心身ともに豊かな人間性と＜美＞を発見するところをはぐくみます。	【自分を活かす力】：専門家としての知識や能力を身につけ、自分を活かす力を養います。
【出会い】 自分のうちに閉じこもらず、自分を超越してひとに出会い、出会いをはぐくみ、つながりを築きます。	【出会いと交流】：出会いと交流の中で、歴史と伝統を重んじつつ、異文化を受け入れるところを養い、地域社会と国際社会への責任感や義務感を培います。	【専門分野を超えて考え行動する力】：専門性を活かし、さらに分野を超えて、人々の幸せや社会・環境全体のあるべき姿について、考え行動する力をはぐくみます。
【夢】 過去を受け継ぎ、現実をみすえながら、夢を発見し、夢をはぐくみ、夢をかたちにします。	【夢】：夢を描き続け、自らが生涯を通じての＜知の探求者＞になる「礎」を築きます。	【世界にはばたいて活躍する力】：国を超えた多くの人々と出会い、世界にはばたいて活躍する力をはぐくみます。

3 山口大学学士課程教育の質保証体系

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、正課教育・正課外教育の双方を含めた幅広い学びによる学修成果を学修到達度調査や学修行動調査などを通して可視化することで、学生の学修成果をアセスメントする方針である（右図）。

具体的には、YU CoB CuS による正課教育における学修成果の可視化と学修到達度調査及び学修行動調査による山口大学生に期待される汎用的能力の可視化をより一層進めて、学生の幅広い学びに対応した学士課程教育、さらには大学院教育を視野に入れた教育の質保証を体系化していきたいと考えている。さらに、2016年度からは修学支援システムが改修され、YU CoB CuS、学修到達度調査及び学修行動調査、そしてGPAなどがシステムに組み込まれることになり可視化の充実が図られる。

また、YU-AP 事業では「学びの好循環」をサイクルさせるために、さらなるアクティブ・ラーニング推進を実施するとともに、修学支援システム改修に伴い導入される eポートフォリオを活用した学生支援、学修支援を充実させたいと考えている。



図 II - 1 山口大学学士課程教育の質保証体系

4 教育改善 FD 研修会の展開

山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) では、林 透 大学教育センター准教授 (IR 室長) より、「山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) によるアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化」と題して、全学部で行われている『教育改善 FD 研修会』にて報告が行われている。報告では、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の全体概要、テーマ I (アクティブ・ラーニング)、テーマ II (学修成果の可視化) それぞれの取組について説明が行われる。加えて、大学教育のパラダイムシフトについての説明として、既存の教育の内部質保証システム (Teaching の PDCA サイクル) を紹介しながら、YU-AP 事業を通して行われる「ティーチングからラーニング」の一環としての「学びの好循環 (Learning の PDCA サイクル)」を創出し、学生の学びを充実させる方向性が示される。

テーマ I (アクティブ・ラーニング) の取組に関しては、まず、アクティブ・ラーニングの定義について確認が行われる。また、新しい共通教育の開始に伴う平成 26 年度 10 月～11 月に実施されたアンケートの結果を参照しながら、多くの教員がアクティブ・ラーニングに対して高い関心を持っているものの実践については、まだ十分ではないと認識されていることについての報告がなされる。AL ポイント認定制度については、AL の可視化や AL ベストティーチャー表彰制度を通じた、AL 実践への動機付けをさらに進めていく方向性が示される。

続いて、AL ポイント認定制度の運用状況として AL ポイントのシラバスへの入力率、一部の科目 (共通教育科目) の AL ポイントの紹介が行われる。AL ポイント認定制度では、自己評価によって AL ポイントをシラバス明示するものであるが、AL を前提とした科目については、他の科目に比して高めにポイントが設定されており、科目特性 (AL 科目や実験・実習など) が反映されていることが見られ、AL ポイントのあり方について一定の妥当性があるといえる状況で

あることが報告されている。

AL ポイントの分析については、弱い正の相関ではあるが、AL ポイントが高ければ、「到達目標達成度」、「授業理解度」、「授業満足度」が増加することが確認されており、引き続き分析・検証を進めていくことが報告される。AL ポイント認定制度はALを組織的に推進する取組の一環であり本制度の整備を進めるのと同時に、ALを推進するFDが展開されていることが説明される。また、実施済みのFD取組として、大人数授業と理系基礎科目のALに関するFD、ICT活用のFDが展開されていることが報告される。AL実践については、ALを授業に導入する第一歩として、ペア及びグループでのワークや振り返り、予習・復習課題（宿題）など少しの工夫を取り入れた授業が望まれることが示され、ALを進める方策としてICTやAL教室を活用するALがあることが説明される。

テーマⅡ（学修成果可視化）の取組に関しては、学修成果の評価の構図を、間接評価・直接評価の縦軸と心理測定学的パラダイム（定量的測定）・オルターナティブ・アセスメントのパラダイム（定性的測定）の横軸による4象限を用いて、多角的な学修成果測定を進める方向性について説明される。具体的には、学修到達度調査としてPROG（Progress Report on Generic Skills）テストが実施されていることが述べられ、PROGでは、知識を基に問題解決にあたる力などのリテラシーと、経験から身につく行動特性としてのコンピテンシーが測定できることが説明される。次に、アクティブ・ラーニング実践を進めるうえで重要なパフォーマンス評価としてのルーブリック活用について説明される。学修支援を進めるうえでも重要なポートフォリオについては、可視化された学修成果を蓄積して、個別の学生に対してポートフォリオを活用したエビデンスベースの学生支援、学修アドバイスを展開する方向性が示される。最後に、学修支援の一環として、山口大学・学士課程教育の質保証体系について述べられ、正課外での学びを含めた幅広い学修については学修到達度調査と学修行動調査で測定し、正課教育では国際総合科学部で進められているCoBCuSを活用していく方向性が示される。



5 学生参画型 FD の取組実績

山口大学では、本学の取組が文部科学省大学教育再生加速プログラムの採択を受ける以前から、学生参画型 FD（学生の参画を得ながら大学教育のよりよい発展を目指す活動）に取り組んでおり、2015 年度よりは、YC.CAM（ワイシー・キャン）として本格的に活動が開始された。

YC.CAM とは、大学教育センターの支援を受け、“廣中レポート”の生みの親である廣中 平祐 元学長が刻んだ「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」をキャッチフレーズに、学生中心の大学づくりを目指している。大学というコミュニティでは、教員、職員、学生が共に学び合うことが重要であり、YC.CAM は学生の声を大学教育に活かす仕掛けづくりの一環として位置づけられている。また、YC.CAM は『山大の「デキル」を創ります！』という言葉を理念として掲げ、学生の手で大学を更に発展させるべく活動している。山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）が企画・運営する FD・SD ワークショップ等にも積極的に参加しており、教員・職員・学生が一体となった意識変容、行動変化を図っている。

学生の諸活動の一つに学外での交流会への参加がある。学生 FD サミットは、2009 年 8 月より 2015 年 9 月まで計 11 回を重ねている全国規模の大会であり、学生とともに進めるファカルティ・デベロップメント（FD）という考え方を基礎とし、自大学をよりよくしたいと考え、行動する教員・職員・学生が、活動の紹介や交流を行うことを目的として開催されている。第 11 回目の学生 FD サミットは、追手門学院大学にて「学生 FD していますか？～本当に大学が“よく”なっている！？」とのテーマのもと開催され、64 大学（北海道から九州までの国公私立大学）から約 500 名の教職員と学生が一堂に会した。本学からは教員 2 名、学生 4 名（YC.CAM）が参加した。大会初日には、本学の学生が山口大学での取組み紹介を約 500 名の参加者に対して行い、多くの参加者の関心を引くことができた。また、2 日目には、全参加者混合のグループワークと各大学別グループワークを通して、学生たちが自大学で取組むアクションプランを設計した。本学のアクションプランは、主催者及び参加者の投票にもとづいた優秀アクションプランに選出され（64 大学中 7 大学が選出）、表彰された。優秀アクションプランに選出されたことについては、2015 年 9 月 24 日（木）に学生より学長に報告がなされ、学長からはさらに積極的な活躍を期待する旨の激励があった。



6 他機関訪問調査の受入

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）のこれまで取組んできたアクティブ・ラーニングの組織的な推進、正課教育及び正課外教育を通した幅広い学生の学びに対応する多角的な学修成果の可視化を進めている。これらの取組成果は、国内外の学会等で積極的に発表され、本事業のホームページからも情報発信を行っている。

こうした積極的な成果発表等に加えて、2015年度では10月に、くらしき作陽大学と名城大学、11月には県立広島大学の山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）取組についての訪問調査を受け入れた。さらに、2015年度の1月には、日本私立学校振興・共催事業団の学修成果の可視化、福岡工業大学のアクティブ・ラーニングに関する訪問調査を受け入れ、積極的に取組成果と情報を発信するとともに、建設的な意見交換を行った。今後も山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業のさらなる発展・向上が期待されている。

Ⅲ. テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）の実績

1 AL ポイント認定制度に基づく分析

AL ポイント認定制度は授業時間内で、該当するアクティブ・ラーニングの形態が、どの程度行われているかをポイント化して表示する制度である。共通教育科目では、8割以上の入力率となっており、ほとんどの科目でAL ポイントがシラバスに明示されている。また、共通教育科目のうちAL（アクティブ・ラーニング）科目として設定している各科目についてもその平均値と入力率が出ている。

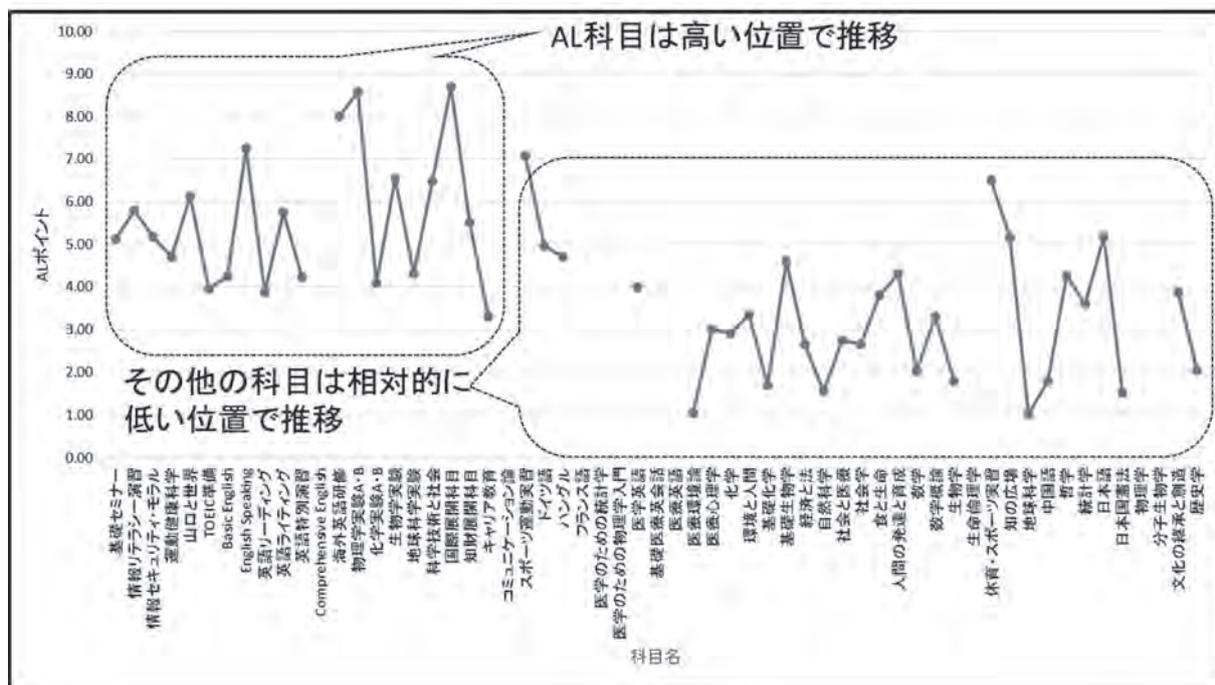
表Ⅲ - 1 共通教育科目のAL ポイントデータ

	平均値	入力率
全 体	4.28	80.5%
講 義 科 目	4.04	80.5%
実験・実習科目	6.95	80.0%
語 学 科 目	4.43	70.4%

※2015年度後期現在（速報値）

全体平均は4.28ポイントで、主なAL科目の平均値は6.44となっており、AL科目とその他の科目との間に明確な差異が生じていることがみられ、ALポイントに一定程度の妥当性があることが伺える。また、講義科目に比べて実験・実習科目の平均値は高く、実験・実習科目に比べて語学科目の平均値が低く設定されていることなど、導入初年度としては、適正な結果が得られている。ALポイント認定制度の導入により、履修登録画面やWEBシラバス画面にALポイントが表示され、単位数や授業計画などに加えて、学生はALポイントを参考にすることで主体的な学修のための履修が可能になっている。

主なAL科目のALポイントデータからは、ALポイントの平均値が高く設定されていることがわかる。共通教育科目においてAL科目として設定している「山口と世界」が6.13ポイント（平均値）、アクティブ・ラーニング手法の一つである反転授業を実践している「科学技術と社会」が6.48ポイント（平均値）とALポイントが高くなっている。専門教育科目においてもALポイントについて一定の入力率となっており、今後、一層の充実を目指す。



図Ⅲ - 1 共通教育科目におけるALポイントの推移

共通教育科目では、各科目を系列別に分類しており、それぞれ「教養コア」「英語」「一般教養」「専門基礎」「教職基礎」「教養展開」に分けている。これらの系列別のALポイントの平均値及びシラバス入力率は表1のとおりである。次に、それら各系列の中で、ALポイントがどの程度のボリュームをもって分布しているかを明らかにすることで、系列ごとの特徴をみることが出来る。「教養コア」では、平均値周辺が最も大きな分布になっていることがわかる。「英語」では、平均値よりも高い6以上の値が大きな分布になっている一方で、平均値付近にも大きな分布があり、大まかに二つのアクティブ・ラーニングの度合いに分けてみることが出来る。また、「専門基礎」は平均値よりも1ポイント程度低い2周辺に一番大きな分布があることから、「専門基礎」科目においては、座学形式の授業が主軸になっていることがわかる。これらのことから科目・系列の特性がALポイントに反映されていることが明らかになっている。こうした分布図等を基礎として、より詳細な分析を行うことで、科目・系列の特性に合うアクティブ・ラーニングの提案やアクティブ・ラーニング化の授業設計等が進められていくことにデータが活用されることが期待される。

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）のALポイント認定制度は、どのようなアクティブ・ラーニングがどの程度行われているかを可視化すると同時に、組織的にアクティブ・ラーニングを推進するための仕組みの一つとなっている。組織的なアクティブ・ラーニングをさらに推進するためにALポイントと授業評価アンケートとの相関をみることで、アクティブ・ラーニングの教育効果を明らかにする必要がある。ここでは、授業評価アンケートで明らかとなる「授業時間外学修」「到達目標達成度」「授業理解度」及び「授業満足度」と2015年度に入力されたALポイントとの相関をみる。

表2は、共通教育科目におけるALポイントと授業評価アンケートとの相関である。授業評価アンケートのうち、「授業時間外学修」については、現時点において相関が認められなかったが、「到達目標達成度」「授業理解度」及び「授業満足度」については、弱い正の相関が認められ、ALポイントを通じたアクティブ・ラーニングの有効性が一定程度示された結果となっている。

共通教育科目全体のALポイントと授業評価アンケートとの相関をみることで、「到達目標達成度」「授業理解度」及び「授業満足度」に弱い正の相関を認めることができた。一方で、一部の学部専門教育科目においては、「授業満足度」に強い正の相関、又は「授業時間外学修」に正の相関を認めることができる場合などがある。これについては、サンプルデータ数等、今後分析を進めるうえで考慮すべき課題があるものの科目の傾向としては、実験・実習系科目などがALポイント上位科目となっており、いずれも十分な「授業時間外学修」が確保されていることが考えられる。

表Ⅲ - 2 AL ポイントと授業評価アンケート指標との相関

	授業時間外学修	到達目標達成度	授業理解度	授業満足度	ALポイント
ALポイント Pearson の相関係数	.153**	.253**	.312**	.279**	1
有意確率 (両側)	.005	.000	.000	.000	
度数	340	340	340	340	340

**：相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

共通教育科目では、AL ポイントと「授業時間外学修」との間に、現時点において相関は認められなかったが、授業時間外学修を伸ばすために有効なアクティブ・ラーニングを模索するための基礎的なデータとしての活用が期待できる。AL ポイントと弱い正の相関が認められる「到達目標達成度」「授業理解度」及び「授業満足度」については、授業において、アクティブ・ラーニングを多く実施することで、当該授業における到達目標の達成度、学生の授業内容の理解度、学生の授業に対する満足度が高まることが示されている。

共通教育科目全体のデータと学部専門教育科目の事例を総合的にみても、アクティブ・ラーニングがより多く実施されれば、学生の「到達目標達成度」などの評価が高くなると考えられ、アクティブ・ラーニングの教育効果が確認できるものになっている。こうした教育効果についての検証を進め、今後も組織的なアクティブ・ラーニングの推進に AL ポイントデータが活用されることが期待できる。

2 アクティブ・ラーニング推進のための FD・SD 展開及び AL 推進チーム形成

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、アクティブ・ラーニングの推進のための FD・SD が実施されている。アクティブ・ラーニング推進のための FD・SD は、より効果的な研修会となるようにワークショップ形式で行われており、体験型で実際のアクティブ・ラーニングに触れることができる機会となっている。2015 年度 7 月には、KEEPAD JAPAN アクティブ・ラーニング研究会との共同企画で『アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう！～大人数授業、理系基礎科目を事例として～』と題して、大人数教室で行われる双方向型授業の実践事例や理系基礎科目におけるクリッカー活用を通じたピア・インストラクションについて FD・SD 研修会を行った。また、アクティブ・ラーニング推進のための FD・SD ワークショップのパート 2 として、SCSK (株)との共同企画による『アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう Part2～アクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器を中心に～』が開催され、動画や専用アプリケーションを活用したアクティブ・ラーニングの紹介とその教育効果について報告があり、参加者参加型の活気溢れる研修会が行われた。

さらに、2015 年度より、本格的に AL 推進のための AL 推進チーム形成が進められている。従来の各学部 FD 担当を FD コーディネータとし、大学教育機構の FD 担当と合わせて 18 名の FD コーディネータが活躍している。FD コーディネータは、学部の教育改善 FD 研修会等の調整や FD・SD ワークショップへの学部教員の参加を促すなど、各学部での FD を推進する役割を担っている。



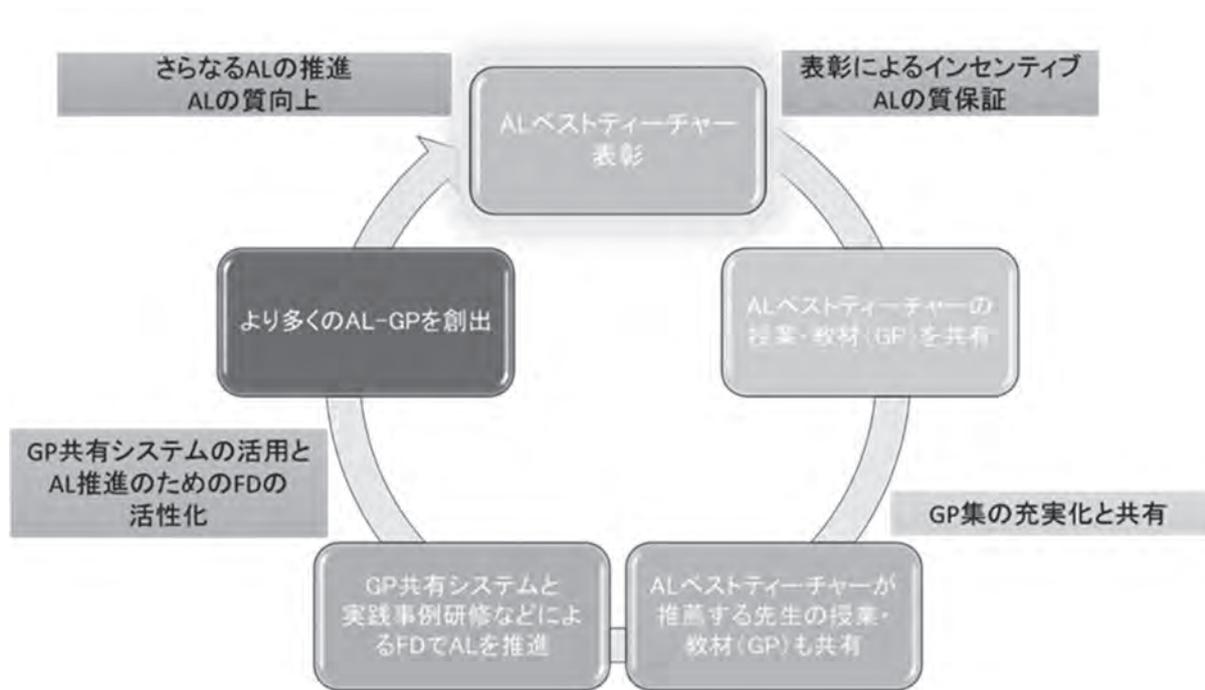
3 AL ベストティーチャー表彰制度の設計

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)では、AL ポイント認定制度導入、アクティブ・ラーニング推進のためのFD・SD ワークショップの開催、さらに現在進められているAL ベストティーチャー表彰制度とそれに伴うグッドプラクティス（授業教材コンテンツ）の学内共有を着実に実施することでAL 手法やノウハウの共有を行っている。

AL ベストティーチャー表彰制度では、「表彰の対象となる者は、授業科目（共通教育の授業科目をいい、国際総合科学部の授業科目のうち共通教育科目に相当する科目を含む。）を担当する全教員（表彰される年度に在職する者。非常勤講師を含む。）であって、かつ、表彰年度の直前の年度に本表彰制度によって表彰を受けていない者とする」としている。選考については、AL ポイント認定制度や学生授業評価アンケートを用いることとしている。

アクティブ・ラーニングのグッドプラクティスについては、これまでアクティブ・ラーニング推進のためのFD・SD ワークショップを開催し、大人数授業でのインタラクティブな授業展開や理系基礎科目でのクリッカーを活用したアクティブ・ラーニング、さらに、タブレット機器を活用したアクティブ・ラーニングのグッドプラクティスを紹介・共有してきた。これまでも学内のグッドプラクティスを共有してきたが、今後はAL ベストティーチャー表彰制度と連携して、受賞者の授業風景や教材コンテンツなどを学内ネットワーク内にて共有できるようシステムを構築することが期待されている。

さらに、AL ポイント認定制度を通じた、組織的なAL の推進では、座学系、実験系などの科目の特性に合わせたアクティブ・ラーニングの実践が推奨されており、AL の各形態（グループワーク、ディスカッション・ディベート、フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）、プレゼンテーション、振り返り、宿題）を柔軟に適用した授業の実施が期待されている。AL ポイントの活用については、AL ポイントと学生授業評価アンケートとの相関分析が行われ、アクティブ・ラーニングの分析が進められている。また、AL ポイント認定制度により、授業におけるアクティブ・ラーニングが可視化されることで、学生の主体的な科目履修などに活用され、より能動的な学びが促進されることが期待されている。



図Ⅲ - 2 アクティブ・ラーニングのグッドプラクティス共有イメージ

AL：アクティブ・ラーニング

GP：グッドプラクティス（優れた事例）

4 アクティブ・ラーニング推進のための教室及び ICT 活用

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、アクティブ・ラーニング推進のための教室及び ICT 活用を積極的に呼びかけている。グループワーク等の実施がより快適に行えるアクティブ・ラーニング教室では、可動式の椅子と机が実装されており、『山口と世界』等の授業を中心に活用が進んでいる。

また、クリッカーや iPad など ICT 活用についても積極的な発信を試みており、本年度後期からは本格的にクリッカーの貸出を開始し、専門教育、共通教育、語学科目にて活用されている。また、iPad では、専用のアプリケーションを使用することで、教員と学生、学生同士のインタラクティブな教育環境を創出されている。iPad を活用することで、授業中の学生の学びの進捗と深度をリアルタイムで教員が把握することで、より深いアクティブ・ラーニングを実施することに寄与している。また、学生の学修状況を全体に共有することも容易であり、アクティブ・ラーニング対応教室との相乗効果で、教室全体を使ったアクティブ・ラーニングが可能になっている。



**クリッカー活用による
アクティブ・ラーニング!**
Let's use Clicker for Active Learning!

大学教育機構 大学教育センター (YU-AP 推進室) では
クリッカー(KEEPAD JAPAN 製) 貸出します※

大学教育機構 大学教育センター (YU-AP 推進室) では、アクティブ・ラーニングの推進に取り組んでいます。2015年7月9日(木)には、アクティブ・ラーニング推進のためのFD・SDワークショップを開催し、クリッカーを活用したアクティブ・ラーニングについて、東京学芸大学の新田英建 教授より事例報告を頂き、クリッカーのさらなる普及に取り組んでいます。2008年12月の中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』において、ICTを活用した教育方法の改善方策として、学生応答・理解度把握システム(クリッカー技術)が紹介されて以降、クリッカーの普及が進んでいます。

このたび、クリッカーの学内普及に向け、クリッカーの貸出しを実施させていただきます。こととなりました。

パワフルなプレゼンテーション Powerful Presentation
クリッカーによるレスポンス技術を導入する最大のメリットは、その参加者に対する影響の大きいです。こうしたアイデアをあなたのプレゼンテーションへも取り込んで、参加者のフィードバックをプレゼンテーションの向上に活かしてみたいかがでしょうか。

●参加者の評価 Quick Response
参加者がプレゼンテーションのテーマをどのように評価しているのかを確認したい場合、リアルタイムで結果がわかるので、プレゼンターは参加者の理解度や評価を即座に把握することができます。さらには、収集される詳細なデータを30種類以上のレポートによって、イベントで重要な案件が効率的に処理されたのかを簡単に判断できます。

※クリッカーの貸出しは当面の間、西田キャンパス内のみとさせていただきます。
なお、クリッカーの台数は190台までとなっております。

問い合わせ先:
大学教育機構 大学教育センター (YU-AP 推進室)
内線(576) yuap@yamaguchi-u.ac.jp

**ICT活用で
アクティブ・ラーニング!!**

学生の主体的な学びを支援する新しい教室環境を実現しました!

山口大学の共通教育棟では効果的なグループワークが可能な可動式机・イスが設置された、アクティブ・ラーニング教室として2A、2B、15番、26番各教室が整備されました。特に15番と26番教室では最新のiPad50台が利用可能になりアプリ「BeeDance」を使用することでiPadの活用の幅が大きく広がります。また、電子黒板やマルチスクリーンのプロジェクターが整備されており、教室全体を活用した授業を展開することができます。是非、共通教育棟演習室2A、演習室2B、15番、26番の各アクティブ・ラーニング教室をご活用下さい。

お問い合わせはコチラ
大学教育機構 大学教育センター (YU-AP推進室)
E-mail:yuap@yamaguchi-u.ac.jp
内線:5261

図Ⅲ - 3 ICT 活用によるアクティブ・ラーニング推進関連資料

5 正課外教育プログラムの開発と実践

山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) では、学生参画による事業推進を行っており、大学教育センターの支援を得て活動する学生 (YU-CAM) とともに『共有ワークショップ』等の企画・運営を行っている。

また、学生の参画を得て新しい正課外教育プログラムであるスチューデント・リーダー・プログラム (SLP) も開発と実践が進んでおり、これまでに7回が実施されている。テーマごとの学習会・勉強会の他に、第3回 SLP では学習相談会 (ピア・サポート) が実践され、第4回 SLP では50名を超える参加者を集め本学総合図書館アカデミック・フォレストにて活気と熱気に溢れるキャリア学習会を開催した。また、こうした活動内容を追手門学院大学や広島大学で発表する機会を得ており、第6回 SLP では学外発表の成果報告会を開催した。

表Ⅲ - 3 スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) 開催時期等一覧

開催時期	メインテーマ	参加者数
第1回 2015年3月	学生参画型FDについて理解を深め、大学教育をより楽しくする。	19名 (学生15名)
第2回 2015年3月	できないを「デキル」に転換するためのできないことへの挑戦について。	11名 (学生7名)
第3回 2015年5月	学生の学生による学習支援の実践。 (学習相談会)	19名 (学生19名)
第4回 2015年7月	大学職員志望(公務員含む)のキャリア形成。 (キャリア学習会)	56名 (学生48名)
第5回 2015年8月	山口大学における学生参画型FDのコンセプト共有。 (YC.CAM勉強会)	11名 (学生9名)
第6回 2015年9月	正課外活動の成果共有を通したリフレクション。 (成果報告会)	11名 (学生9名)
第7回 2015年12月	図書館における学修支援について。	15名 (学生5名)



IV. テーマⅡ（学修成果の可視化）の実績

1 山口大学生に期待される汎用的能力

『山口大学教育理念』には、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の意義とともに、【驚き】、【個性】、【出会い】、【夢】の4つの要素が示されている。これら4つの要素に基づき、教養教育と専門教育を通して、山口大学生として卒業時に身に付けていることが期待される汎用的能力を示している。「山口大学生に期待される汎用的能力」を学修到達度調査により、【驚き】は考える力などの知識を活用して問題解決する「リテラシー」、【個性】は自分を活かす力などの「対自己基礎力（コンピテンシー）」、【出会い】は他人と交流する力などの「対人基礎力（コンピテンシー）」、【夢】は自分の夢をかたちにする力などの「対課題基礎力（コンピテンシー）」として学修成果の可視化を進めている。

学修到達度調査の結果は、結果報告書として学生一人ひとりに配付される。結果報告書にはリテラシーとコンピテンシーのレベルと各基礎力の詳細がわかりやすく記載されており、付属の解説書を活用して自己分析が可能になっている。結果報告書と解説書の配付に合わせて、学生自身の強みや弱みを確認しあうワークショップ形式の解説会が必修科目の『知の広場』と『キャリア教育』行われている。さらに、1年次生必修の『知の広場』では、山口大学生に期待される汎用的能力の到達度を把握するワークが次ページのワークシートを活用して行われている。

さらに、山口大学学士課程教育の質保証を体系的に整理し、正課教育においてはYU CoB CuS、さらに正課外教育を含むより広い学びについては、『山口大学教育理念』に基づく汎用的能力（「山口大学生に期待される汎用的能力」）を測定することで多角的な学修成果の可視化を進めている。こうした学修成果の可視化に併せて、『山口大学教育理念』に基づく汎用的能力（「山口大学生に期待される汎用的能力」）の育成を主な目的とするアクティブ・ラーニングを前提とした新しい正課外教育プログラムが開発されている。

現在、修学支援システムの改修に伴い、学修到達度調査及び学修行動調査による学修成果の可視化（レーダーチャートによる結果の可視化）、学修履歴を集積するポートフォリオ（eポートフォリオ）の運用準備が進められている。こうした学修成果の可視化やeポートフォリオを活用した学修とキャリアに関するアドバイスを充実させることで「学びの好循環」を創出し、「教育」から「学修」へのシフトを図っている。また、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、学生参画による事業推進を行っており、大学教育センターの支援を得て活動する学生とともに『共育ワークショップ』等の企画・運営を行っている。さらに、参画学生たちはFD・SDワークショップにも積極的に参加し、9月に開催されたルーブリック作成ワークショップでは、自身の活動（正課外教育プログラム）を通して育成する汎用的能力のルーブリックを作成するなど、学修意識を向上させている。こうしたアクティブ・ラーニング推進、学修成果の可視化、eポートフォリオ等のシステムの充実に学生参画を積極的に実施することで「教育」から「学修」へとシフトし、「学びの好循環」を創出している。



教育理念	観点	PRCCの項目	PRCCの尺産 (4項目)	レベル
【驚き】 世界や社会にいつも驚きを感じ、 過去・現在・未来に問いを発し続けます	教養教育 【驚き】	驚きを大切に、「自ら」が考え・判断・ 表現・行動・発言する能力を養います。	リテラシー	・情報収集力 ・情報分析力 ・課題発見力 ・構想力
	専門教育 【チャレンジし、解決する力】	あらゆる問題や困難にチャレンジし、 解決する力を養います。		
【個性】 他人と競争し、打ち負かすのではなく、 自分を発見し、はぐくみ、世界でたった ひとつの存在になります。	教養教育 【個性】	個性を大切に、心身ともに豊かな人間 性と「美」を発見するところをはぐくみ ます。	対自己基礎力 (コンピテンシー)	・感情制御力 ・自信創出力 ・行動持続力
	専門教育 【自分を活かす力】	専門家としての知識や能力を身につけ、 自分を活かす力を養います。		
【出会い】 自分のうちに閉じこもらず、自分を超え てひとに出会い、出会いをはぐくみ、つ ながりを築きます。	教養教育 【出会いと交流】	出会いと交流の中で、歴史と伝統を重ん じつつ、異文化を受け入れるところを養 い、地域社会と国際社会への責任感や 義務感を培います。	対人基礎力 (コンピテンシー)	・親和力 ・協働力 ・統率力
	専門教育 【専門分野を超えて考え行動する力】	専門性を活かし、さらに分野を超えて、 人々の幸せや社会・環境全体のあるべき 姿について、考え行動する力をはぐくみ ます。		
【夢】 過去を受け継ぎ、現実をみずえながら、 夢を発見し、夢をはぐくみ、夢をかたち にします。	教養教育 【夢】	夢を描き続け、自らが生涯を通じての 「知の探求者」になる「夢」を築きます。	対課題基礎力 (コンピテンシー)	・課題発見力 ・計画立案力 ・実践力
	専門教育 【世界にほげたい活躍する力】	国を超えた多くの人々と出会い、世界に ほげたい活躍する力をはぐくみます。		



「山口大学教育理念」とリテラシー・コンピテンシー ワークシート II



【個性】 他人と競争し、打ち負かすのではなく、 自分を発見し、はぐくみ、世界でたった ひとつの存在になります。	感情制御力	自信創出力	行動持続力
レベル			
理由			
【出会い】 自分のうちに閉じこもらず、自分を超え てひとに出会い、出会いをはぐくみ、つ ながりを築きます。	親和力	協働力	統率力
レベル			
理由			
【夢】 過去を受け継ぎ、現実をみずえながら、 夢を発見し、夢をはぐくみ、夢をかたち にします。	課題発見力	計画立案力	実践力
レベル			
理由			

図Ⅳ-1 『山口大学教育理念』とリテラシー・コンピテンシー ワークシート

2 学修到達度調査及び学修行動調査の実施状況

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、本学の教育理念に基づく山口大学生に期待される汎用的能力の達成状況を正課教育だけでなく、正課外教育も含む幅広い学生の学びを対象にして学修到達度調査（PROG）や学修行動調査（JSAAP）などを通して能力の測定を行っている。表3は、2015年度の学修到達度調査（PROG）及び学修行動調査（JSAAP）の受験者データ一覧である。2015年度より本格的な実施となり、ほぼすべての1年生と3年生の学修成果を可視化する学修到達度調査（PROG）及び学修行動調査（JSAAP）が実施されている。

2015年度の学修到達度調査（PROG）及び学修行動調査（JSAAP）の実施状況については、学部ごとに開催されている『教育改善FD研修会』にて報告されている。学生の汎用的能力（山口大学生に期待される汎用的能力）の測定にこうした調査が実施されていることが広く理解されており、学生個別の結果データを学修指導等に活用したいなどの要望があるとおり、学修成果の可視化によるデータのさらなる活用に期待が寄せられている。

表Ⅳ-1 2015年度学修到達度調査（PROG）及び学修行動調査（JSAAP）の受験者データ

学部・学科	1年	2年	3年	4年	合計
人文学部	190	0	172	0	362
教育学部	0	10	235	0	245
経済学部	352	0	366	0	718
理学部	211	0	212	0	423
医学部保健学科	120	0	39	0	159
工学部	512	0	81	0	593
農学部	95	0	96	0	191
共同獣医学部	30	0	28	0	58
国際総合科学部	103	---	---	---	103
合計	1,613	10	1,229	0	2,852

3 学修到達度の可視化

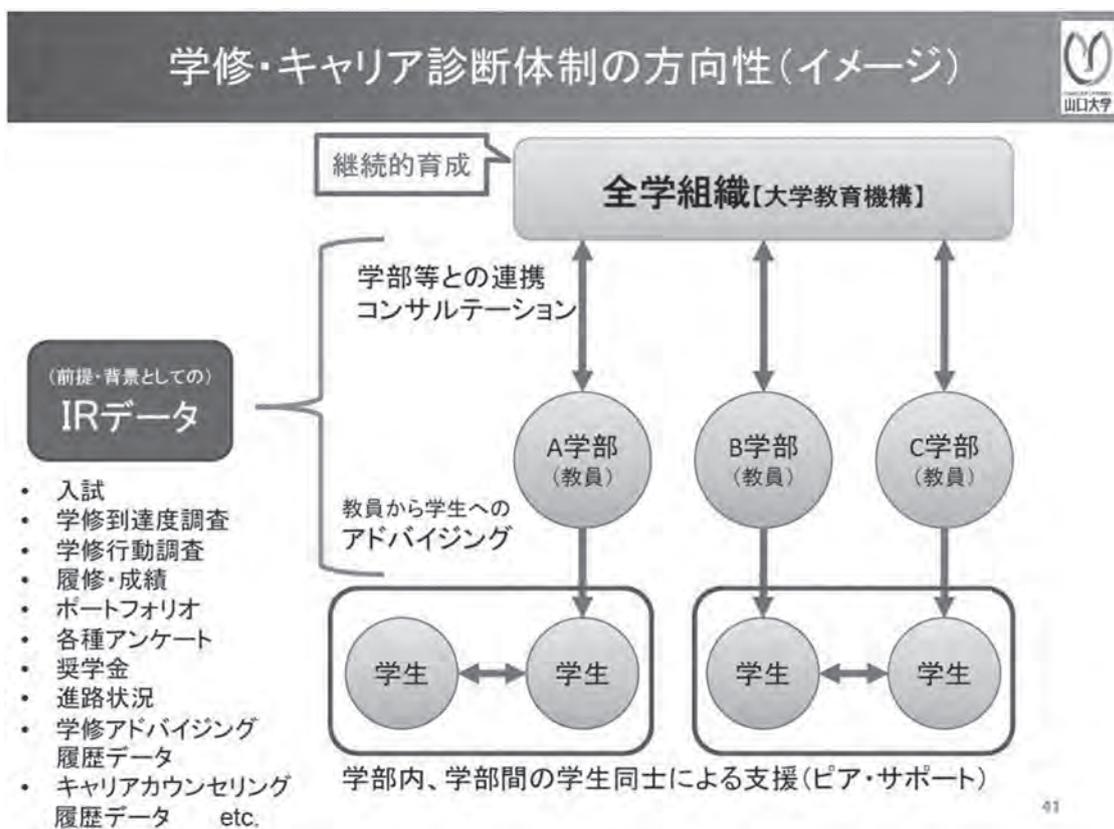
本学では、全学の教育理念に基づく正課・正課外教育双方を包含する幅広い学びの成果としての、山口大学生が卒業時に求められる汎用的能力（ジェネリックスキル）を示している。全学の教育理念に基づく汎用的能力（ジェネリックスキル）の達成度を測定するために、学修到達度調査及び学修行動調査を実施し、多角的に到達目標の達成状況についてアセスメントが試みられており、本学におけるアセスメントポリシーの方向性として進めている。

学生に対しては、DPへの到達状況を示すYU CoB CuSに基づいたレーダーチャートと、学修到達度調査の結果を山口大学生が卒業時に身に付けていることが期待される汎用的能力（ジェネリックスキル）として同じくレーダーチャートを用いて明示する方向性で進めている。

また、本学において先進的な取組を進めている国際総合科学部では YU CoB CuS の導入により、各科目がどのように DP に貢献しているか、またその過程（学士課程）について可視化されており、ポートフォリオやリフレクション・シートを用いて学修支援に活用されている。これにより目標達成の度合いを見ると同時に卒業時の要件としての DP の達成が明示されることになり教育質保証としても機能している。

4 学修・キャリア診断の方向性

学修到達度調査と学修行動調査によって可視化された学生の学修成果は、学生自身の主体的な学びを促進するためのリフレクションとして有効であるだけでなく、重要な学生情報として各種の学生支援に活用されることが期待できる。学修成果や学修履歴を蓄積したポートフォリオ（eポートフォリオ）、成績（GPA）、各種のアンケートのデータは、学修アドバイスやキャリアアカウンセリングの際に、支援を行うための重要なエビデンスとして使用されることが期待されている。今後の方向性として、学生データとその他のデータを総合的に収集・分析する IR（Institutional Research）機能をさらに強化し、学部等との連携とコンサルテーション、教員から学生へのアドバイジング、さらに学生同士の学修支援であるピアサポートなど学生の多方面からサポートする体制の充実化が検討されている。



図IV-2 学修・キャリア診断の方向性（イメージ）

5 正課教育及び正課外教育におけるルーブリックの開発と活用

山口大学では、大学教育学会における課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」との連携により、「新しい共通教育」における課題探求型アクティブ・ラーニング科目である『山口と世界』を対象として、新たな学修成果測定の開発を進めることとした。『山口と世界』は全学部1年次必修科目（工学部のみ2年次開講）として設定され、所属組織が異なる30名以上の教員が担当している。開設当初の課題として、全学必修科目として、学生に保証すべき評価基準の明示が不可欠であり、各授業担当者の教育内容・手法を尊重しながら、共通化すべき規準の抽出と共有が必要であるという認識のもと『山口と世界』についてコモンルーブリックを開発することが効果的であると考えられた。

『山口と世界』コモンルーブリックは、大学教育学会課題研究へのフィールド提供を通して、コモンルーブリック開発に関するコンサルテーションを受け、『山口と世界』授業担当者を中心としたFDワークショップによって開発が進められた。『山口と世界』コモンルーブリックは、授業初回のオリエンテーションなどで学修目標やタスクの確認のために活用されるほか、担当教員の授業内容・手法にあわせてローカライズがなされ、ルーブリックで示された各目標に対する学生自身の省察や学生同士の評価に活用されている。

さらに、学生参画型FDの一環として学生がFD・SDワークショップへ積極的に参加し、2015年9月に開催されたルーブリック作成ワークショップでは、自身の活動（正課外教育プログラム）を通して育成する汎用的能力のルーブリックを作成するなど、学修意識を向上させている。山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、アクティブ・ラーニングの推進、学修成果の可視化、eポートフォリオ等のシステムの充実に学生参画を積極的に実施することで「教育」から「学修」へとシフトし、「学びの好循環」を創出している。



表Ⅳ-2 『山口と世界』 コモンルーブリック

チームで、山口に関連する課題・テーマを設定し、情報を収集し、分析し、解決策や企画をまとめ、口頭や紙媒体(もしくは映像やWeb)で発表し、地域や国際的環境で活かす力を養う授業。アクティブ・ラーニングを通して、研究や社会実践の基本的なプロセスについて、学習の仕方やリサーチリテラシーの基本を学習することが目的である。

「山口と世界」コモンルーブリック

規準	内容	レベル3	レベル2	レベル1	レベル0
発見する	山口に関連するテーマ設定、企画立案	山口に関連する課題に応じて、十分な下調べにもとづき、適切かつ独創的なテーマ設定、企画立案ができる	山口に関連する課題に応じて、下調べをした上で、テーマ設定ができる	山口に関連する課題に応じてテーマ設定ができる	レベル1に満たない
はぐくむ	テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーション	課題、テーマ設定、企画に必要な情報を最大限に収集した上で、他者との協働作業を通して、学術的に適切な方法でプロダクツの作成につなげられる	課題、テーマ設定、企画に応じて情報収集ができ、それらを分析・考察した上で、他者との協働作業を通して、プロダクツの作成に発展させられる	課題、テーマ設定、企画に応じて情報収集ができ、他者とコミュニケーションを図りながら、プロダクツの作成につなげることができる	レベル1に満たない
かたちにする	編集、作品化、発表資料、レポート等、プロダクツの作成	収集した情報の分析・考察に基づき、独創性を備え、かつ、地域や国際的観点に立って説得性を伴ったプロダクツを作成できる	収集した情報の分析・考察にもとづき、プロダクツを作成できる	期日までにプロダクツを完成することができる	レベル1に満たない
分かちあう	公開、プレゼンテーション、チームワーク	プロダクツを効果的に他者と共有するための戦略を立て、チームワークを発揮して展開し、認知・評価をえることができる	プロダクツに説得力をもたせるため、グループ内での役割分担を明確化して取り組むことができる	グループの活動に参加し、課題の求める形でプロダクツを公表できる	レベル1に満たない
振り返る	他者および自分(たち)の企画およびプロダクツの評価。今後の地域や国際的環境でのく発見する>につながる。	他者および自分(たち)の企画・活動・プロダクツを評価し、その評価をチームで共有し、地域や国際的観点に立った企画・実践にその評価を活かせる	他者および自分(たち)の企画・活動・プロダクツを評価し、その評価をチームで共有できる	他者および自分(たち)の企画・活動・プロダクツについてよかった点、悪かった点をあげられる	レベル1に満たない

表Ⅳ-3 正課外教育プログラムのルーブリック

YC.CAMの活動を通して育成する汎用的能力のルーブリック

標準	内容	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
コミュニケーション	プレゼンテーション チームワーク 交渉力	自分が満足し、他者も同様に満足する合意形成を前提としたコミュニケーションができる。	自身を見つめ直し、本当に自身自身を理解した状態になること。(例: 自分のしたい、したくない、出来る、出来ないことなど)	グループの活動に参加し、どんな立場の人とも話すことができ、考えや意見を発表できる。	身近な立場の人であれば意思疎通を図ることができる。
考える力	趣旨に基づいた発案、企画力、及び前例の反省を活かす能力。	様々な視点から考え、趣旨、ターゲットに基づいた柔軟な企画を考えられ、前例より得た反省点をしっかりと活かす事ができる。	趣旨、ターゲットに基づいた企画を考えられ、前例の反省点がある程度活かす事ができる。	趣旨、ターゲットに基づいた企画を考えられることができる。	企画に対して簡単なアイデアを出すことができる。
カリスマ性	リーダーシップを発揮し、組織をまとめ上げる。加えて、他人にうまく説明する。	自らが考えたビジョンを掲げ、それを他人を巻き込みながら説明することができる。また、他人の意見にも耳を傾け、組織をまとめ上げ、組織を先導していくことができる。	自分の意見、ビジョンを他人にうまく説明することができる。また組織のなかでリーダーシップを発揮でき、組織をうまくめ上げる事ができる。	他人の意見を理解し、組織をうまく調整することができる。	他人の意見を組織調整に活用しようとする事ができる。
組織運営	活動理念の理解 組織への積極性 持続的なモチベーション	YC.CAMのために、多角的・総合的な考察を試み、理念を完全に理解した上で、自らが考え、行動を起こすことができる。さらに、得られた結果を反省・分析し、持続的に活動することができる。	理念を説明することはできないが、知っている。自身の意見を明確に持ち、他者との協力の結果、行動を起こすことができる。	誰かに指示を受けて、考え、行動することができる。	誰かの指示に応えようとする事ができる。
記録・データ	活動内容を記録・継承する。活動に必要な情報を収集・発信する。	適切な方法で自身と組織の活動内容を記録することができる。それを後継へ継承することができる。また、活動に必要な情報の収集・発信を効果的に行うことができる。	自身と組織の活動内容を記録・継承することができる。活動に必要な情報の収集・発信を効果的に行うことができる。	自身と組織の活動内容を記録することができる。活動に必要な情報の収集・発信ができる。	自身と組織の活動内容を記録することができる。

**V . 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP)
事業関連イベント報告**

1. 山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) &
KEEPAD JAPAN アクティブ・ラーニング研究会 共同企画 FD・SD ワークショップ
『アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう！
—大人数授業、理系基礎科目を事例にして—』

日 時：平成 27 年 7 月 9 日（木） 16:10～18:00

場 所：山口大学総合図書館アカデミックフォレスト（吉田キャンパス内）

参加者：57 名（学内 41 名（教職員 27 名、学生 14 名）、学外 16 名（教職員 16 名））

共同企画：山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP） &
KEEPAD JAPAN アクティブ・ラーニング研究会

概 要：

16：10～16：20 開会の挨拶・趣旨説明

山口大学 理事・副学長（教育学生担当） 瀬戸 厚

16：20～17：20 《第一部 事例報告》

（1）「やればできる、大人数による双方向型授業」

山口大学 経済学部教授 鍋山 祥子

（2）「理系基礎科目におけるアクティブ・ラーニング

～クリッカー活用によるピア・インストラクション～」

東京学芸大学 自然科学系教授 新田 英雄

（3）「今すぐ始められるクリッカー利用方法」

KEEPAD JAPAN ICT&テクニカルサポートマネージャー 山口 達也

17：20～17：55 《第二部 グループワークセッション》

「学生の学びを促進するアクティブ・ラーニングであるために！」

ファシリテーター：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

17：55～18：00 クロージング・閉会の挨拶

山口大学 大学教育機構 大学教育センター長 朝日 孝尚

[総合司会：山口大学大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) & KEEPAD JAPAN アクティブ・ラーニング研究会 共同企画FD・SDワークショップ

アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう！ —大人数授業、理系基礎科目を事例にして—

【趣 旨】
中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』（2012年8月）を前後して、大学教育におけるアクティブ・ラーニングへの関心が急激に高まり、各大学では授業方法や教室環境の改善充実が進められています。しかし、大学教育の現場では、「アクティブ・ラーニングをどのように取り入れたらよいのか」、「自分の授業にはアクティブ・ラーニングは向きではないか」、「アクティブ・ラーニングを通して学生の学びが本当に促進されているのか」といった声をよく耳にします。

今回のワークショップでは、現場の先生方からの関心が高い「大人数授業、理系基礎科目」の事例紹介を通して、アクティブ・ラーニングのコツを学び、実践に活かす機会としたいと思います。なお、本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)事業及びKEEPAD JAPAN アクティブ・ラーニング研究会の一環として開催いたします。



日時:	2015年7月9日(木) 16:10～18:00
場所:	山口大学総合図書館 アカデミックフォレスト (吉田キャンパス内)
対象:	学内外の教職員・学生

【申込方法・問合せ先】
 申込: FD・SDワークショップ申込は、「①氏名、②所属、③学年」をEメール添付の上、E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp (担当: YU-AP推進室)宛にて、7月3日(金)までご返信ください。
 山口大学 大学教育振興 大学教育センター(YU-AP推進室)
 E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

Active Learning



【概要】
 16:10～16:20 開会挨拶・趣旨説明
 瀧 厚 山口大学理事・副学長(教育学生担当)

16:20～17:20 <第一部 事例報告>
 (1)「やればできる、大人数による双方向型授業」
 鍋山 祥子 山口大学経済学部教授
 (2)「理系基礎科目におけるアクティブ・ラーニング～クリッカー活用によるピア・インストラクション～」
 新田 英雄 東京学芸大学自然科学系教授
 (3)「今すぐ始められるクリッカー利用方法」
 山口 達也 KEEPAD JAPAN ICT&テクニカルサポートマネージャー

17:20～17:55 <第二部 グループワークセッション>
 「学生の学びを促進するアクティブ・ラーニングであるために！」
 (1)事例報告を踏まえ、教職員・学生による意見交換
 (2)全体共有及び質疑応答

17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶
 朝日 幸尚 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

本学におけるアクティブ・ラーニングとは、1 教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るため、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法(発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等のほか、教室内でのプレゼンテーション、グループワーク等)を指し、その対象として、授業科目による正課教育だけでなく、授業外学習である正課外教育を含む。なお、授業科目において少なくとも1コマ以上行うものとする。』とされています。



内 容 :

平成 27 年 7 月 9 日 (木) に、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) & KEEPAD JAPAN アクティブ・ラーニング研究会 共同企画 FD・SD ワークショップ『アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう！—大人数授業、理系基礎科目を事例にして—』が、学内外から合計 57 名 (学内教職員 27 名、学生 14 名、学外教職員 16 名) の参加者を集めて、本学吉田キャンパス総合図書館アカデミックフォレストにて開催された。本ワークショップは山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム (AP) におけるアクティブ・ラーニング推進のための取り組みの一環として実施された。

冒頭、瀧 厚 山口大学理事・副学長 (教育学生担当) より開会挨拶と趣旨説明があり、AL ポイント認定制度をはじめとして山口大学がアクティブ・ラーニングの推進に力を入れていることが述べられた。最後に、本ワークショップで得た成果を大いに活用して、さらなるアクティブ・ラーニングの推進への期待感が述べられた。

第一部では事例報告が行われた。まずは、山口大学経済学部 鍋山祥子 教授より、「やればできる、大人数による双方向型授業」と題して報告があり、200 名の受講者を超える学部専門教育での実践について紹介があった。この大人数授業では、「アクティブ・ラーニングシート」の活用を通して、学生同士のグループワークそして、教員と学生の双方向での講義が可能になっている。こうした、双方向型での学びが学生の学習意欲を高める効果があることが実践を通して感じられていることが述べられた。

次に、東京学芸大学自然科学系 新田英雄 教授より、「理系基礎科目におけるアクティブ・ラーニング～クリッカー活用によるピア・インストラクション～」と題して、事例報告があった。はじめに相互作用型授業や教



育効果の定量的比較、またアクティブ・ラーニングの優位性について話があった。続いて、ピア・インストラクションについてクリッカーの実演を通して紹介があった。クリッカーを活用した講師と参加者とのコミュニケーションの効果は高く、会場の参加者が身を乗り出して、本報告に集中している姿をみることができた。

最後に、KEEPAD JAPAN 山口達也 ICT&テクニカルサポートマネージャーより、「今すぐ始められるクリッカー利用方法」と題して報告があった。報告では、実演を通して、パソコンとクリッカーさえあれば簡単にクリッカーを活用した講義を行うことができる方法について紹介があった。



第二部のグループワークセッションでは、大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授のファシリテーションにより、「学生の学びを促進するアクティブ・ラーニングであるために！」というテーマでグループワークを行った。グループワークでは、参加者の気付きや講師への質問など、意見交換が活発に行われた。最後に各グループでまとめた意見を林准教授により全体での共有がなされた。

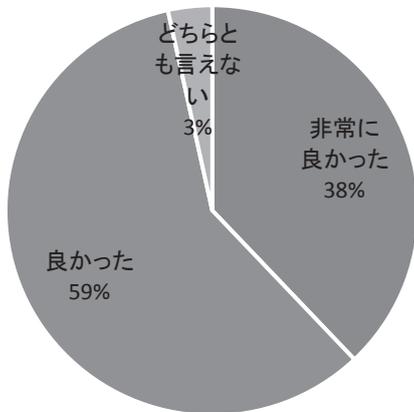
まとめ：

近年、大学において学生の汎用的能力が涵養されることが社会的にも求められており、アクティブ・ラーニングへの関心と期待が高まっている。本ワークショップでも多くの参加者がアクティブ・ラーニングに対して高い関心を持っていることが伺われた。さらに、クリッカーを活用した講師と参加者のコミュニケーションは非常に効果的（象徴的）であった。本ワークショップには、学生も参加しており、学生ならではの視点で、アクティブ・ラーニングについて意見が述べられていた。こうした学生もクリッカーの実演を通して、聞く（学ぶ）態度が能動的（アクティブ）に変わっていく姿をみることができた。

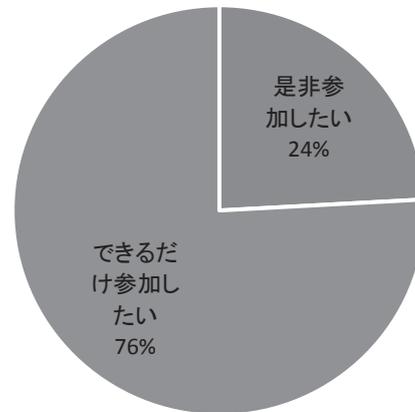
クリッカーの活用はアクティブ・ラーニングの一手法であるものの、学習者の学びの態度をアクティブ・ラーニングへと転換するには効果的であることが参加者同士（教員・職員・学生）でも確認しあえるワークショップとなった。今後も山口大学におけるクリッカー活用の普及を進めることで、アクティブ・ラーニングがさらに推進されることが期待される。



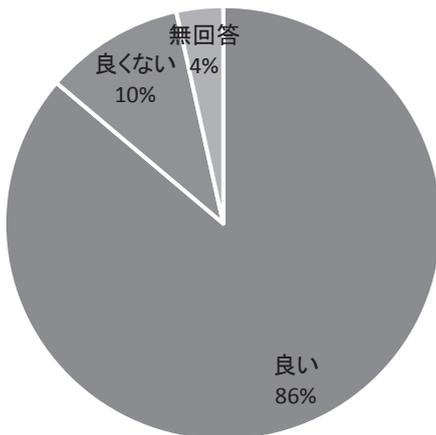
研修会に参加した感想はいかがでしたか？



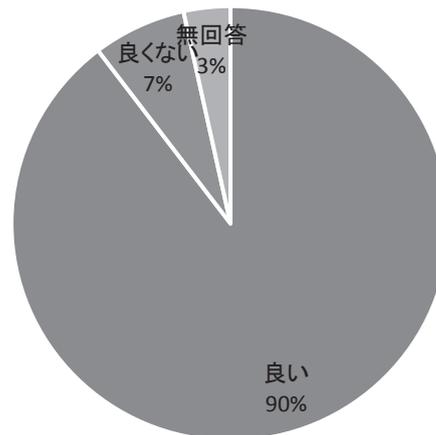
興味のある内容の研修会があれば、今後も参加したいとお考えですか？



実施時期



実施場所



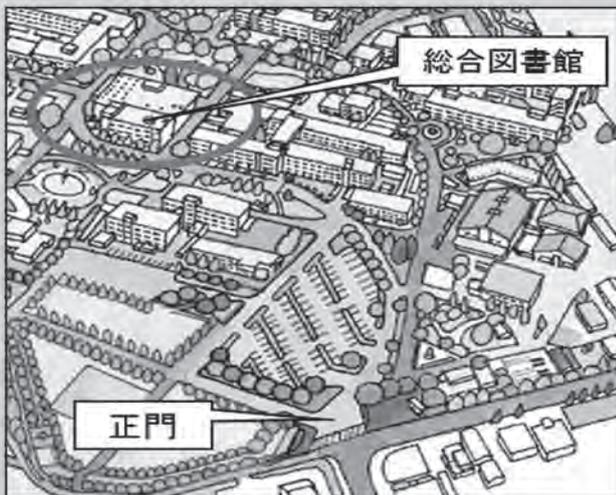
山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) &
KEEPAD JAPANアクティブ・ラーニング研究会 共同企画FD・SDワークショップ

アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう！ —大人数授業、理系基礎科目を事例にして—

【趣 旨】

中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』(2012年8月)を前後して、大学教育におけるアクティブ・ラーニングへの関心が急激に高まり、各大学では授業方法や教室環境の改善充実が進められています。しかし、大学教育の現場では、「アクティブ・ラーニングをどのように取り入れたらよいのか」、「自分の授業にはアクティブ・ラーニングは不向きではないか」、「アクティブ・ラーニングを通して学生の学びが本当に促進されているのか」、といった声をよく耳にします。

今回のワークショップでは、現場の先生方からの関心が高い「大人数授業、理系基礎科目」の事例紹介を通して、アクティブ・ラーニングのコツを学び、実践に活かす機会としたいと思います。なお、本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)事業及びKEEPAD JAPANアクティブ・ラーニング研究会の一環として開催いたします。



日時:	2015年7月9日(木) 16:10～18:00
場所:	山口大学総合図書館 アカデミックフォレスト (吉田キャンパス内)
対象:	学内外の教職員・学生

【申込方法・問合せ先】

件名「FD・SDワークショップ申込」とし、「①氏名、②所属・職名(学年)、③e-mail」を記入の上、
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp (担当: YU-AP推進室)あてに、7月3日(金)までに送信願います。

山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室)
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp



Active Learning



【概要】

16:10～16:20 開会挨拶・趣旨説明

瀬瀬 厚 山口大学理事・副学長(教育学生担当)

16:20～17:20《第一部 事例報告》

(1)「やればできる、大人数による双方向型授業」

鍋山 祥子 山口大学経済学部教授

(2)「理系基礎科目におけるアクティブ・ラーニング

～クリッカー活用によるピア・インストラクション～」

新田 英雄 東京学芸大学自然科学系教授

(3)「今すぐ始められるクリッカー利用方法」

山口 達也 KEEPAD JAPAN ICT&テクニカルサポートマネジャー

17:20～17:55《第二部 グループワークセッション》

「学生の学びを促進するアクティブ・ラーニングであるために！」

(1)事例報告を踏まえ、教職員・学生による意見交換

(2)全体共有及び質疑応答

17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

朝日 孝尚 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

本学におけるアクティブ・ラーニングとは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るため、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法(発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等のほか、教室内でのプレゼンテーション、グループワーク等)を指し、その対象として、授業科目による正課教育だけでなく、授業外学修である正課外教育を含む。なお、授業科目においては少なくとも1コマ以上行うものとする。」としています。



大学教育再生加速プログラム

やればできる、 大人数による双方向型授業

経済学部 綱山 祥子

アクティブラーニング

- 教員による一方的な講義形式ではなく、
学生の能動的な学習への参加を取り入れた
教授・学習法
- 発見学習、問題解決学習、体験学習、
調査学習、プレゼン、グループワーク

実施の方法

- ① 3、4人のグループを作る
- ② プリントに従ってグループで議論をする

注意点

- 必ず、一人ひとりが、能動的に発言する
機会を設ける
- 必ず、全員が話し合う機会を設ける

Case 1 ジェンダー論

経済学部専門科目
受講者数250人
経済学部2年～4年

実施のタイミング

- ① こちらから伝えたい知識（現状や問題点）をある程度伝え終えた後
- ② その現状や問題点についての解決方法を伝える前

アクティブ・ラーニングカード
ジェンダー論

参加者：A B C D
① 4人か5人のグループを作る（自分の名前を記入してください）

①-1 Aさん：男性が楽らしく生きることのマイナスイメージを説明してください。
Aさんの主張：

疑問、確認ポイント：

①-2 Bさん：女性が女性らしく生きることのマイナスイメージを説明してください。
Bさんの主張：

疑問、確認ポイント：

①-3 Cさん：ジェンダーを尊重しつつ性別役割分担をなくすことについて、難しいところを説明してください。
Cさんの主張：

疑問、確認ポイント：

①-4 Dさん：（男性が性別に押し付けられず生きられるようになるには、どうすればいいのだろうか？）についてアイデアを出し合ってください。
Dさんが、(心構え)は、Dさんの主張：

みんなでのした感想：

Case 2 地域福祉社会学

経済学部専門科目
受講者数200人
経済学部2年～4年



学生の感想

- いざ、主張や説明をすとうまくできないし、わかっているつもりが全然わかっていなかったことに気づき、もっと勉強しなければと思いました。
- すごく面白かったです。今まで話を聞いて理解したつもりだったけど、人に話すことによって、頭が整理されて、さらに理解が深まった。

一人で勉強するよりも考えと意見がまとまりました。自分たちで話し合えたので集中できたし、いろんな考えを聞くことができ、勉強になりました。

ありがとうございました

理系基礎科目におけるアクティブ・ラーニング ～クリッカー活用によるピア・インストラクション～

東京学芸大学
新田英雄



内容

- 理系基礎科目にアクティブ・ラーニングは必要か
- ピア・インストラクションとは何か
- 授業の定量的な評価
- まとめ



理系科目にアクティブ・ラーニング は必要か



『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた
高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的
改革について』(答申)

平成26年12月中央教育審議会

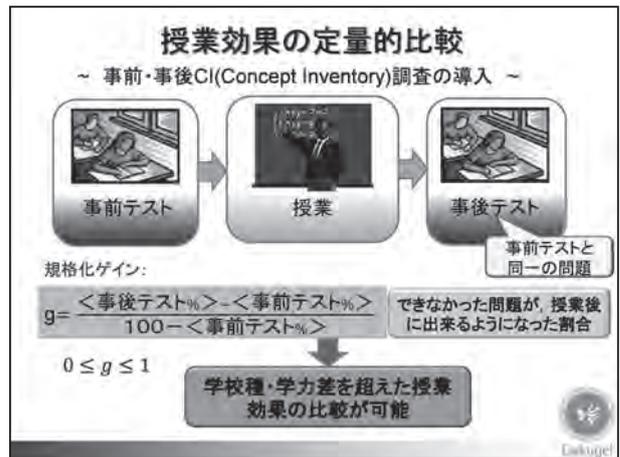
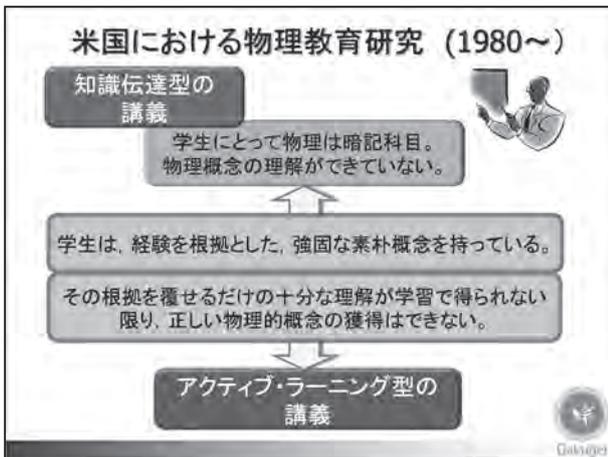
2. (3)大学教育の質的転換の断行 (p.20)

「主体性・多様性・協働性」を育成する観点からは、
大学教育を、従来のような知識の伝達・注入を中心
とした授業から、学生が主体性を持って多様な人々
と協力して問題を発見し解を見いだしていくアクティ
ブ・ラーニングに転換



相互作用型授業





FCI(Force Concept Inventory): 力の概念診断テスト

Hestenes, et al. Phys.Teach. 30 (1992) 141

問14. 水平方向に飛んでいる飛行機から、ボーリングの球が落ちてしまった。地上に立っている人から見たとき、落ちていく球の軌跡は図の1~5のどれになるか。

FCI 第14問

アクティブ・ラーニングの優位性の根拠

Hakeの調査 Hake: Am. J. Phys. 66 (1998) 64

対象: 62の高・大授業, 総計6542人の学生

講義の形式	gの平均
伝統的な講義	0.23
相互作用型授業	0.48

規格化ゲインの比較

伝統的な講義では、力学基礎概念を獲得させることが困難
→ 相互作用型(interactive)な授業への転換が進む

ピア・インストラクションとは何か

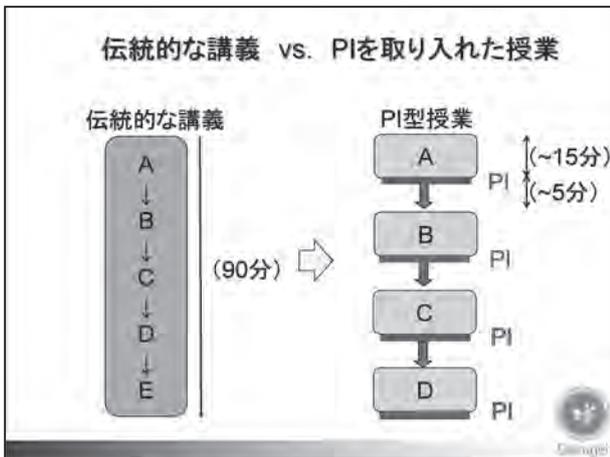
ピア・インストラクション

E.Mazur: Peer Instruction: A user's manual(Pearson-Prentice Hall, 1997)

大人数でも実施できる「グループ学習」

↓

近隣の学生と議論させる



PIの手順



一定の速度で、クルマが走っているとき、見通し距離(前方の目に見える距離)の何割程度は?

1. 視速の半分程度
2. 視速の半分程度
3. 視速の半分程度
4. 視速の半分程度

- ① 選択肢問題を出題する。
- ② 学生に(クリッカーで)回答させる。
- ③ 付近の学生同士で議論させる。
答えが異なる相手に対しては自分の答えの論拠を述べ、説得を試みさせる。
- ④ 同じ問題に対してもう一度回答させる。
- ⑤ 正解を示し、解説する。



PI(演示実験型)の実例: Redishの講義より



「科学をどう教えるか」
物理教育学会監訳(丸善)

- Lectures: 月・水・金の週3回、約50分
- Homework: 月、金(4~6時間を想定)
- Tutorials: 週1回、約50分
- Labs: 週1回、約110分
- Exams: 3回(1時間、1時間、4時間)

新田, 寛具: 物理教育 56-2(2008) 132.



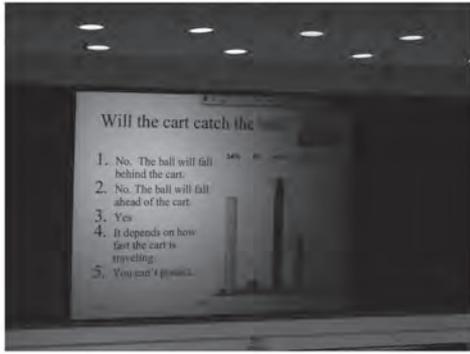
① 実験結果を予測させる選択肢問題

Will the cart catch the ball?

1. No. The ball will fall behind the cart.
2. No. The ball will fall ahead of the cart.
3. Yes.
4. It depends on how fast the cart is moving.
5. You can't predict.



解答分布の表示

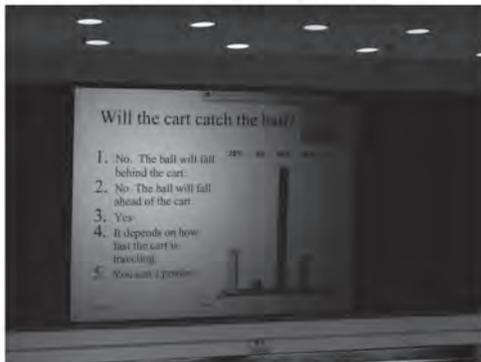


③ 近くの学生同士での議論

「自分の考えを相手に納得させてみよ」



④ 学生はクリックカーで再回答



⑤ 実験結果を示す(解答と解説)



PIの効果

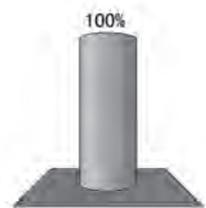


	実験前 (96)	実験後 (96)
ボールは台車の後方に落ちる	34	20
ボールは台車の前方に落ちる	4	4
受け取れる	40	58
台車の速さによって異なる	20	16
予言できない	2	1



ピア・インストラクションの実演

- まずはスライドのつくりかたから



まずはスライドのつくりかたから



授業の定量的な評価

PIの効果を測る

新しい教育方法の提案→教育効果の評価が必要

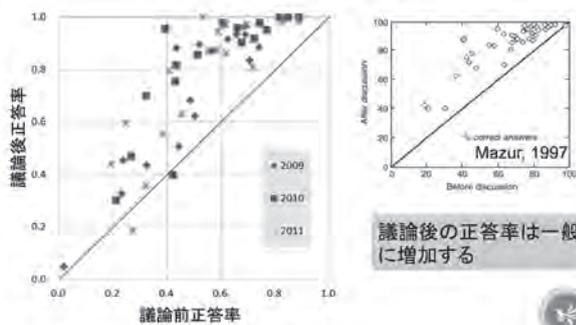
よくある“評価”
「学生アンケートの結果では、好評だった」

教育効果の測定とは？

数値で測る
共通の尺度で測る
レベルや環境の差を揃えて測る

- (1) 講義全体の測定 → (1) 規格化ゲイン
(2) PIの効果の測定 → (2) PI効率

議論の効果の数値化



ピア・インストラクション効率(PI効率)

ピア・インストラクションの効果を評価するための指標

$$\text{PI効率} = \frac{(\text{議論後正答率}\%) - (\text{議論前正答率}\%)}{100\% - (\text{議論前正答率}\%)}$$

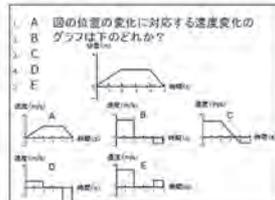
- PI効率データからできること:
1) PI問題の改善
2) 学生が理解し難い概念の抽出

cf. Hakeの規格化ゲイン

PI問題とPI効率の例

テニスボールをラケットで打ち返すとき、ラケットがボールに及ぼす力は、ボールがラケットに及ぼす力に比べて

- 大きい
- 同じ
- 小さい
- 大小関係は、条件によって異なる

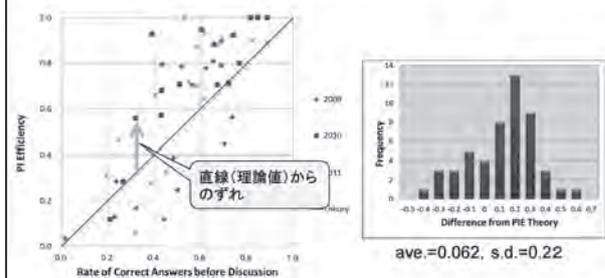


PI問題	n_b	n_a	PI効率
テニス (作用・反作用)	0.738	0.885	0.56
x-t, v-t (グラフ問題)	0.694	0.972	0.92

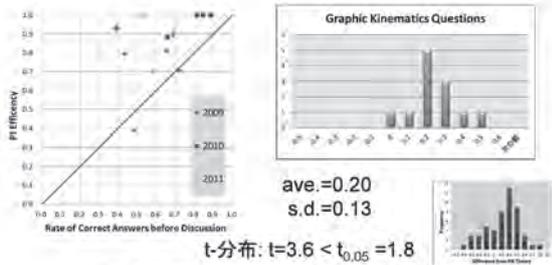
議論前正答率

議論後正答率

ピア・インストラクション 効率 (PI効率)



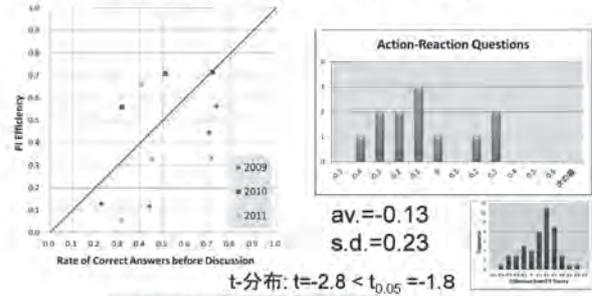
「運動学的グラフ問題」のPI効率



「運動学的グラフ問題」のPI効率は他のPI問題よりも高い



「作用反作用問題」のPI効率



「作用反作用問題」のPI効率は他の問題よりも低い



PIから見る'gender gap'

高校生2012

問題に示された条件から、物体の運動の軌跡を求めよ。

1. 物体の運動の軌跡を求めよ。
2. 物体の運動の軌跡を求めよ。
3. 物体の運動の軌跡を求めよ。
4. 物体の運動の軌跡を求めよ。
5. 物体の運動の軌跡を求めよ。

2012年度	議論前 正答率 (%)	議論後 正答率 (%)	PI効率
男子	90.22	95.00	0.49
女子	70.05	90.03	0.66

高校生2013

問題に示された条件から、物体の運動の軌跡を求めよ。

1. 物体の運動の軌跡を求めよ。
2. 物体の運動の軌跡を求めよ。
3. 物体の運動の軌跡を求めよ。
4. 物体の運動の軌跡を求めよ。
5. 物体の運動の軌跡を求めよ。

2013年度	議論前 正答率 (%)	議論後 正答率 (%)	PI効率
男子	71.11	79.04	0.27
女子	33.06	61.06	0.72

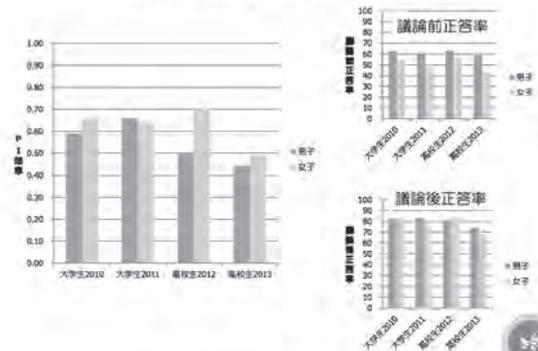
水平投射と斜方投射の問題



FCIでも'gender gap'が見られ、女子の正答率が低い



PI効率の'gender gap'



まとめ



PIの効果: 教員側 学生の理解度の「その場把握」

- 学生の議論を聞くことにより、理解度や考え方を詳細に知ることができる
- 予測しなかった未習熟状態が発見でき、すみやかに対処できる
- 学生の理解度を数値化できる

学生が理解していないことを知らないまま、授業を進めてしまうことがなくなる

カリキュラム改善などの全体的な教育改善に波及



PI型授業の問題点

教えられる内容の減少

→宿題, eラーニングによる補い

議論が不活発になりがち

→習慣化を目指す

PIに適した問題を精選

PIに適した問題の蓄積がない

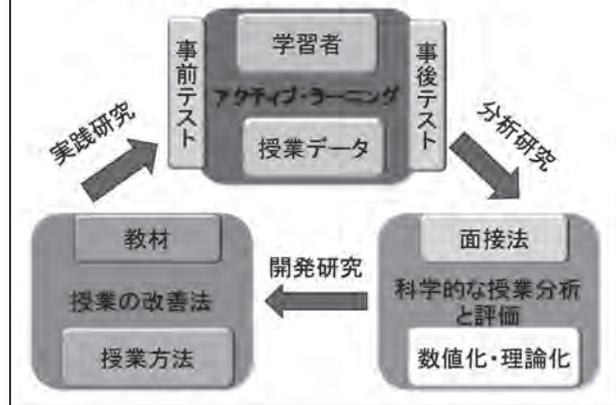
→多くの実践を積み重ね, 結果を共有する

システムが高価

→普及による低価格化, フラッシュカードの使用



終わりに: 授業研究と改善のループ



ご清聴ありがとうございました。



「今すぐ始められるクリッカー利用方法」

KEEPAD JAPAN
ICT&テクニカルサポートマネジャー
山口達也



KEEPAD JAPANとは？

- KEEPAD = 講義・講演コンサルタント
(社長:「よきteacher, adviser, consultantであれ」)
 - 我々のゴール=ユーザーの問題を解決する
つまり...
 - 問題の核心を一緒に見極め、
 - 最善の対処方法を模索し、
 - TurningPointを含め、種々の具体的な解決手段をご提供する=ノウハウこそが最大の商品
- 例) 各種講習、トレーニング、スライドのチェック、作成、同席サポート等



発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場
YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

WASEDA University 千葉大学 慶應義塾
東京学芸大学 東京農業大学 電気通信大学
広島大学 新潟大学 名古屋工業大学

株式会社JTBコミュニケーションズ
Bloomberg Boehringer Ingelheim
NOMURA HARLEY-DAVIDSON McKinsey & Company RICOH

Q)「クリッカー」って、何？

A) コミュニケーションツールです。

1対Nのための。



RemotePoll



TurningPoint
Anywhere



TurningPoint



TurningPoint AnyWhere とは？

レスポンスカードで
投票します

レスポンスカードが投票を受け付け、
スライドショーでは投票結果が
表示されます



質問や問題をスライドショー
で表示します



デスクトップ・アイコンを
ダブルクリックして…



投票を開始するだけ！



KEEPAD JAPAN

さっそく体験してみましょう！

KEEPAD JAPAN

レスポンス・カード (RF)



液晶画面には回答した番号が表示されます。該当以外のボタンを押した場合は○マークが表示されます。

数字キーで答えを選択。ランプが緑に光れば、投票が無事受信。

集計中何度も押しなおせます。

注意：
押さないで下さい。
(投票する時は
使用しません。)

KEEPAD JAPAN

この花の名前を知っていますか？



- 1) 知っている
- 2) 知らない
- 3) 忘れた

KEEPAD JAPAN

なんかカンタンそうですね。でも…



大丈夫、
楽勝です！！

KEEPAD JAPAN

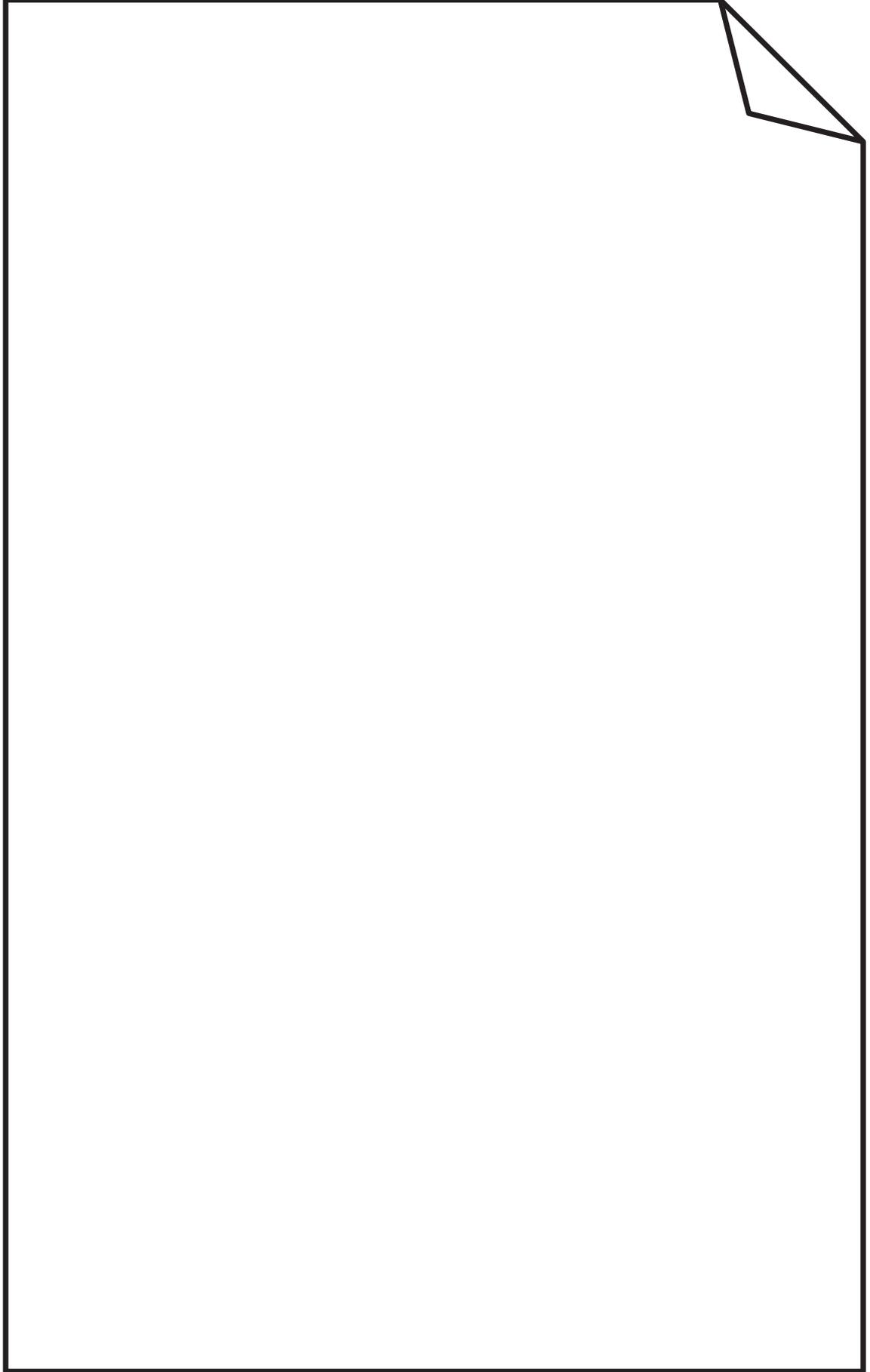
お問い合わせ連絡先

- KEEPAD Japan 東京支社
 - TEL: (03) 6206 1172
 - MAIL: sales_jp@keepad.com
担当者 または
tyamaguchi@keepad.com
 - Office hrs: 月-金: 9:00 ~ 18:00
休: 土日祝日

KEEPAD JAPAN

●グループワークシート

グループ名



◆参加者シート（個人用）

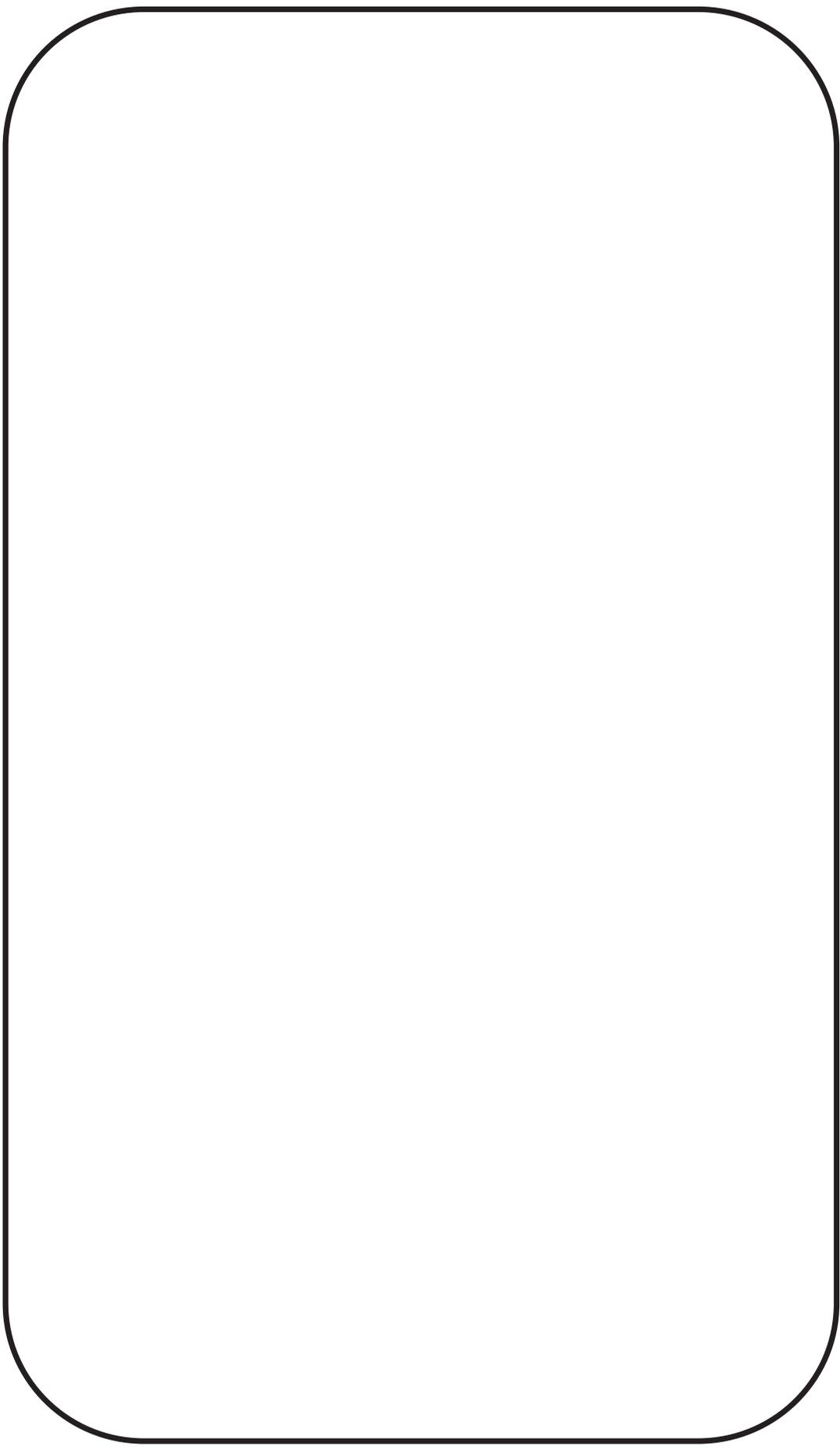
所属・氏名

【気づき・意見】

ウラ

★リフレクションシート（今日の振り返りと明日からのアクション）

※記入例： 今日学んだ〇〇を活かして、授業にアクティブ・ラーニングを取り入れたい！
今日学んだ〇〇を活かして、自分の学びを主体的なものにしたい！



2. 山口大学・創基 200 周年記念 共育ワークショップ 2015 『みんなで山大の教育(共育)について語ろう!』

日 時 : 9 月 28 日 (月) 13:30~17:30

場 所 : 吉田キャンパス・総合図書館アカデミックフォレスト

参加者 : 教員 16 名、職員 12 名、学生 36 名、その他 2 名 計 66 名

概 要 :

13 : 30~13 : 40 開会挨拶 山口大学長 岡 正朗
趣旨説明 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

13 : 40~14 : 10 基調講演「大学での学びを変える、学生が変わる」
横浜国立大学 大学教育総合センター助手 曾根 健吾
(元・東洋大学学生 FD チーム代表)

14 : 10~14 : 30 グループワーク・オリエンテーション
「シラバス設計の事始め」

14 : 30~16 : 30 グループワーク 『あったらいいな、こんな授業』
「みんなでシラバスを作成してみよう！」

[(15 : 30~15 : 40 休 憩を含む)]

16 : 30~17 : 20 全体発表

17 : 20~17 : 30 クロージング・閉会挨拶

山口大学理事・副学長(教育学生担当) 瀨 厚

[総合司会 : 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容 :

9 月 28 日 (月) 午後、創基 200 周年記念・共育ワークショップ 2015「みんなで山大の教育(共育)について語ろう!」は、同大学の教員・職員・学生 66 名を集め、総合図書館・アカデミックフォレストにて開催された。冒頭、岡 正朗 学長より開会挨拶があり、会場一杯に集まった参加者に向けてエールを送り、教職学協働によるシラバス提案への期待を述べられた。また、林 透 大学教育機構大学教育センター准教授より、本ワークショップは教員・職員・学生による共育の場づくりを目的としていること、さらには、本学の教育理念である「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」に基づいたシラバス提案を狙いとしていることについて趣旨説明があった。

前半では、曾根健吾 横浜国立大学 大学教育総合センター助手より、『大学での学びを変える、学生が変わる』と題して基調講演があり、参加者同士のアイスブレイクを挟みながら、授業に関心を持ってない学生が相当数存在する現状の中で、学ぶことにより関心を持つことで、大学生活そのものが充実し、自らの成長に繋がることを伝えるとともに、学生時代を過ごした東洋大学での学修支援、現在の横浜国立大学での学生発案型授業を紹介しながら、学生と教職員が協働して教育改善を行うことで大学教育を変えられると訴えた。その後、グループワークセッションに移り、林 透 大学教育機構大学教育センター准教授



による「シラバス設計の事始め」と題したオリエンテーションを経て、グループワーク『あったらいいな、こんな授業』『みんなでシラバスを作成してみよう!』では、教員・職員・学生協働の10チームがシラバス作成とグラフィック・デザインに挑んだ。

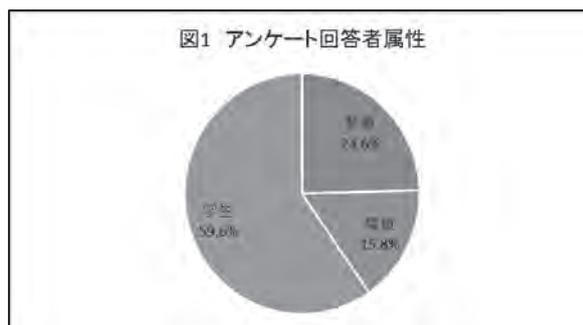


後半のポスターセッションでは、5グループごとの2班に分かれ、班ごとに各グループがシラバス及びグラフィック・デザインの内容を発表し、各班でのベストシラバスを選んだ。その後、各班から選ばれたベストシラバスの2グループが全体発表を行った。今回は、教職学協働チームが一緒になって発表する風景が印象的であり、「山口探検し隊」「コミュニケーションが世界を変える!」「タメグチ〇〇検定」「空き家政策学」など、学生自らが関心テーマを設定するオーダーメイド型、地域をフィールドとした実地型の授業科目が目立ち、共通点が感じられた。最後に、額 厚 理事・副学長より閉会挨拶があり、「共育」の言葉が定着したことに触れながら、本ワークショップで試みられた学生発案を取り入れた授業設計・実践への期待が述べられた。

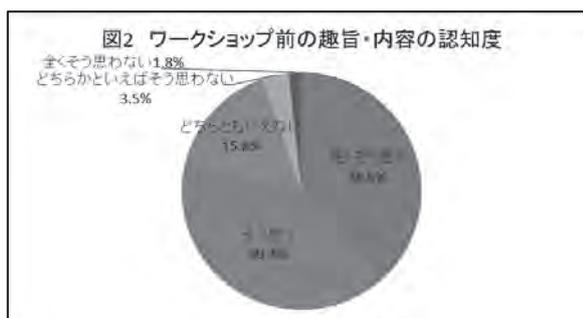


アンケート結果：

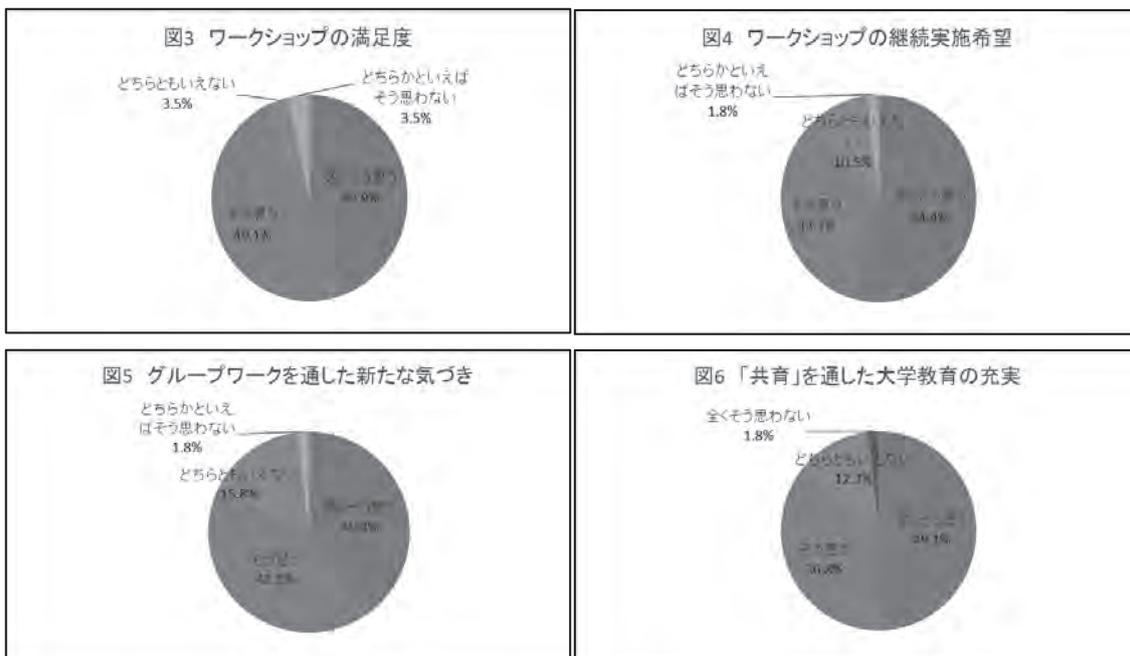
ワークショップ参加者によるアンケートについて、57名（回収率86.4%）から回答を得た（図1）。共育ワークショップ自体が3回目の開催となり、「ワークショップの趣旨や内容についてある程度知った上で参加したか」という設問では、8割近く（昨年度は7割近く）の参加者が趣旨や内容を把握した上で参加する状況となり、認知度が高まった（図2）。また、実際に参加した上での理解度、満足度については、「強くそう思う・そう思う」が9割を超え（図3）、今後も継続していくべきであるという意見が9割近くとなった（図4）。



グループワークそのものに関連して、「グループワークを通して新しい気づきがあったか」という設問では、8割以上の参加者が新しい気づきを感じており（図5）、ワークショップ自体のコンセプトである、「共育を通して大学教育がより良くなると思うか」という設問でも9割近くの賛同が得られた（図6）。



今回のグループワークは、同一グループでのシラバス作成であったが、ほとんどの設問において、昨年度同様の高い理解度・満足度を得る数値となっており、組織開発（OD）プログラムとしての共育ワークショップの有効性が改めて窺える結果となった。



まとめ：

山口大学憲章が掲げる「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造を目指して、山口大学を構成する教員・職員・学生が理解を深め、共有することが求められている。今年度のワークショップでは、「あったらいいな、こんな授業」をテーマに、教員・職員・学生の学習経験や授業イメージを基に対話を行い、グループとしての理想の授業シラバス及びグラフィック・デザインを行うワークに取り組んだ。

大学教育の現場において日常的に接しているシラバスの意義や構造について認識し直しながら、教える立場や学ぶ立場からのアイデア提案を行うことで、「授業とは何か」、「学習者はどうあるべきか」という原点を見つめることができたのではなかろうか。学生発案を通じた授業設計の充実という新たな視点に気づくワークショップとなった。

この共育ワークショップという場は、山口大学の組織力の向上、引いては、山口大学の教育力の向上を図るための組織開発プログラムであるだけでなく、教員・職員・学生個々に気づきを与え、新しいチャレンジ精神を培う人材育成の機能を果たすものであると考えたい。

今回のワークショップでの新たなアイデアや出会いを大切に、今後の山口大学の教育課程・学習支援の充実、教職学協働の強化に一層努めていきたい。



(参考資料) 共育ワークショップ2015 チーム発表シラバス概要一覧

チーム名	シラバス内容
A チーム「AM-TNT」	<p>【授業科目名】:「山大検定」</p> <p>【授業概要】:</p> <ul style="list-style-type: none"> ●山口大学の様々な側面について知る授業 ●まず知ることによって「きっかけ」を作る。 <p>【授業形態・授業規模】:主に演習+講義、最大60、70名</p> <p>【到達目標】:</p> <p>《何を発見できるか》●山口大学で学ぶ意義 《何をはぐくむことができるのか》●交渉力や創造力 《何をカタチにできるのか》●検定問題と解答、プレゼン</p> <p>【授業計画】:</p> <p>初回:山口大学概要、第2回:交渉計画、第3~6回:2学部ずつブースを作り、交渉相手を呼んで話を聞く。第7~9回:サークル、団体、残りの学部の話をする。第10~12回:検定問題作成、第13~15回:解答、解説</p> <p>【AL(アクティブ・ラーニング)ポイント】9.0</p> <p>【授業時間外の学習方法】:交渉、検定問題を考えてくる。</p> <p>【成績評価方法】:</p> <ul style="list-style-type: none"> ●AL(交渉、グループワーク)が基本 ●学生同士の相互評価
B チーム「探検隊」	<p>【授業科目名】:「山口探検し隊」</p> <p>【授業概要】:</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自らが山口の現場に赴き、人々と関わり、山口を知る。 <p>【授業形態・授業規模】:演習、30名</p> <p>【到達目標】:</p> <p>《何を発見できるか》●第2のふるさと、良きふるさとを発見する。 《何をはぐくむことができるのか》●「歩く」「触れる」「見る」「聞く」「語る」力をはぐくむ。 《何をカタチにできるのか》●山口の人々との「つながり」と「未来」をカタチにする。</p> <p>【授業計画】:</p> <p>前半:オリエンテーション、企画会議、情報収集 中間:現場とつながりをつくる、中間報告 後半:つながりをカタチにする、振り返り</p> <p>【AL(アクティブ・ラーニング)ポイント】12.0</p> <p>【授業時間外の学習方法】:情報収集、現場に赴き探検する。</p> <p>【成績評価方法】:</p> <ul style="list-style-type: none"> ●プレゼンテーション(中間・振り返り)20%、●提言書60%、●振り返りシート20%
C チーム「C」	<p>【授業科目名】:「学びたいものを学びましょう!」</p> <p>【授業概要】:</p> <ul style="list-style-type: none"> ●興味のあるテーマを選択し、調査、発表! <p>【授業形態・授業規模】:グループワーク、30名</p> <p>【到達目標】:</p> <p>《何を発見できるか》●自分の知らない世界・分野、未境地、情報の取得・選定・活用方法 《何をはぐくむことができるのか》●追求心、探究心、他人に伝える力、コミュニケーション力 《何をカタチにできるのか》●一つの分野の調査過程・結果</p> <p>【授業計画】:</p> <p>前半:課題設定・グループ分け、中間:調査・資料作り、後半:まとめ・発表</p> <p>【AL(アクティブ・ラーニング)ポイント】4.0</p> <p>【授業時間外の学習方法】:個人(グループ)調査</p> <p>【成績評価方法】:</p> <ul style="list-style-type: none"> ●学生同士の評価 × 加点方式(よくできた、できた、もう少し)

<p>D チーム「カンバック ヤーさん！」</p>	<p>【授業科目名】：「すこやかライフ in 山口」</p> <p>【授業概要】： ●健康で長く働くためにはどうすればよいか、実践を通して考える。 ●自分が何をしたいかを知る。 ●実践を通して、自分の将来を考え、生きていく上での力を考察する。</p> <p>【授業形態・授業規模】：講義&実習、30名程度</p> <p>【到達目標】： <何を発見できるか>●人生をどう生きたいのか、どう働きたいのか等を自覚する。願望のようなもの。 <何をはぐくむことができるのか>●健康に過ごすには、何が必要かを考えることができる。 <何をカタチにできるのか>●多様な生き方、価値観を共有することができる。</p> <p>【授業計画】： 前半：テーマ選び、テーマに応じた講師選定と講義 中間：フィールド選びとフィールドワーク、アンケート実施 後半：プレゼンテーション・まとめ</p> <p>【AL（アクティブ・ラーニング）ポイント】8.0</p> <p>【授業時間外の学習方法】：テーマ選びのための自学自習、フィールド予習</p> <p>【成績評価方法】：●小テスト、●プレゼンテーション、●次の行動計画を提出</p>
<p>E チーム「ため口を探せ！」</p>	<p>【授業科目名】：「タメグチ〇〇演習」</p> <p>【授業概要】： ●教職員・学生から学長まで全員「タメグチ」で進行するよ。教壇に立つのは教員だけでなく学生、職員も。テーマは担当者ごとに毎回変更しよう！</p> <p>【授業形態・授業規模】：オムニバス形式、50名（5人班×10）</p> <p>【到達目標】： <何を発見できるか>●多分野の基礎知識を得ることができるよ。 <何をはぐくむことができるのか>●基礎知識を深めることができるよ。コミュニケーション能力を向上させることができるよ。 <何をカタチにできるのか>●講義前後の違いを映像に残せるよ。</p> <p>【授業計画】： 第1回目・第2回目の講義では説明等 第3回目以降から各議題についてディベート、質疑応答等（3回目「稲作体験」、4回目「空想上の科学」、5回目「安保」、6回目「人文 減らされるのはなぜ？」、7回目「課外活動支援」、8回目「総括」）</p> <p>【AL（アクティブ・ラーニング）ポイント】1.5</p> <p>【授業時間外の学習方法】：基礎知識の予習復習、文献リストの作成</p> <p>【成績評価方法】：事前課題</p>
<p>F チーム「Fun」</p>	<p>【授業科目名】：「得ダネ」</p> <p>【授業概要】： ●時事ネタを持ち寄って話しあう。テーマは学生自身が決める！</p> <p>【授業形態・授業規模】：グループワーク⇒ディスカッション・プレゼン、4グループ（1グループ4名）</p> <p>【到達目標】： <何を発見できるか>●新たな価値観、将来（明日・就活）に役立つ、友人に語れる、世の中に詳しくなれる。 <何をはぐくむことができるのか>●コミュニケーション、プレゼン能力 <何をカタチにできるのか>●自分で新聞記事が書ける、日経テスト高得点</p> <p>【授業計画】：初回 オリエンテーション、2回 事例紹介、3回～8回 プレゼン・ディスカッション、評価・総評</p> <p>【AL（アクティブ・ラーニング）ポイント】7.5</p> <p>【授業時間外の学習方法】：プレゼンテーション作成、テーマに関する自己調査</p> <p>【成績評価方法】： ●プレゼンテーション担当者がディベートを評価 ●ディベート担当者がプレゼンテーションを評価</p>

<p>G チーム「Burning Fire!</p>	<p>【授業科目名】:「コミュニケーションが世界を変える！」</p> <p>【授業概要】:</p> <p>●山大学生のコミュニティを広げる ⇒山大学生のコミュニティと地域社会の間にギャップが見られるため。</p> <p>【授業形態・授業規模】: 演習・チームディスカッション・プレゼンテーション・インターンシップ、50名(1チーム4~5名)</p> <p>【到達目標】:</p> <p>《何を発見できるか》●山大学生の考え方の実態(限られた世界で生活している)を客観的に捉えることができる。</p> <p>《何をはぐくむことができるのか》●幅広い視野、コミュニケーション能力(伝える力・聞く力)、人脈、積極性をはぐくむことができる。</p> <p>《何をカタチにできるのか》●自分が卒業後にどのように人や社会に貢献していくか、キャリアプランを作り説明することができる。</p> <p>【授業計画】:</p> <p>前半: マナー研修、企業へのアポ取り、仮テーマ決め 中間: 仮テーマを企業の方にプレゼン、企業内でインターンシップ 後半: 設定したテーマを企業の方にプレゼン、授業内の成果発表</p> <p>【AL(アクティブ・ラーニング)ポイント】6.0~10.0</p> <p>【授業時間外の学習方法】: 班で集まり、プレゼンの方法やテーマを詰めていく。</p> <p>【成績評価方法】: 最終プレゼンと企業の担当者の評価</p>
<p>H チーム「NYUNBA!</p>	<p>【授業科目名】:「空き家政策学」</p> <p>【授業概要】:</p> <p>●山口県内の空き家を有効活用する方法を考える。</p> <p>【授業形態・授業規模】: グループワーク・ディスカッション・フィールドワーク・プレゼンテーション・振り返り、30名(5人×6グループ)</p> <p>【到達目標】:</p> <p>《何を発見できるか》●地域の人の知恵に触れることができる。</p> <p>《何をはぐくむことができるのか》●学生が地域に入ることによって地域の人と交流をすることができる、課題発見能力、計画性。</p> <p>《何をカタチにできるのか》●これまで自分が学んできたことを計画に反映する。</p> <p>【授業計画】:</p> <p>①オリエンテーション・グループ決め、②テーマ決定・調査準備、③④調査、⑤プレゼン準備、⑥中間発表1、⑦グループワーク1、⑧グループワーク2、⑨中間発表2、⑩~⑬調査、⑭発表1、⑮発表2 ※発表ごとに外部関係者に参加してもらい、コメントをもらう。</p> <p>【AL(アクティブ・ラーニング)ポイント】13.0</p> <p>【授業時間外の学習方法】: 適宜設定</p> <p>【成績評価方法】: プレゼンテーション70%、授業態度30%</p>
<p>I チーム「Identity」</p>	<p>【授業科目名】:「自分らしさ入門」</p> <p>【授業概要】:</p> <p>●今の自分を見つめ直すことで、将来(社会)を見据え、大学時代の主体的な学びに結び付ける。</p> <p>【授業形態・授業規模】: 講義・演習、60名(6名/班×10班)</p> <p>【到達目標】:</p> <p>《何を発見できるか》●自分の特徴を発見できる。</p> <p>《何をはぐくむことができるのか》●自分の特徴を発見することで、自らの夢、幸せ、希望を実現するプロセスを他人に説明できる。</p> <p>《何をカタチにできるのか》●現在から未来に向けての自分の将来設計を文章化できる。</p> <p>【授業計画】:</p> <p>前半: グループ決め、しゃべり場(夢を語る) 中間: フィールドワーク、ライフプランの作成 後半: 大学時代で学びたいことを文章化、授業ごとにリフレクションシートを書く。</p> <p>【AL(アクティブ・ラーニング)ポイント】12.0</p> <p>【授業時間外の学習方法】:</p> <p>自分の特徴を発見するためのフィールドバック⇒家族、友人へのヒアリング 自らの夢・幸せ・希望を実現するためのフィールドワーク⇒自分の夢や幸せ観・希望を実現していると思う人へのヒアリング</p> <p>【成績評価方法】: リフレクションシート40%、中間レポート30%、期末レポート30%</p>

<p>Jチーム「キャサリン」</p>	<p>【授業科目名】：「知っちょる？ やまぐち県」</p> <p>【授業概要】：</p> <ul style="list-style-type: none"> ●山口県のことについてグループに分かれて調べる。 ●テーマについては各自で決めてもよいが、下記から選択してもよい。 (災害、公害、歴史、方言、企業、農産業、生態系) <p>【授業形態・授業規模】：グループワーク、発表（ポスター・プレゼン）、フィールドワーク（任意）、60名程度（4～7名を1グループとする）</p> <p>【到達目標】：</p> <p>《何を発見できるか》●山口県の魅力発見</p> <p>《何をはぐくむことができるのか》●知見を広げる（他グループの発表を聞いて）、計画性を身に付ける、発信力・プレゼンテーション能力の向上</p> <p>《何をカタチにできるのか》●コミュニケーション能力、情報収集能力</p> <p>【授業計画】：</p> <p>前半：グループに分かれ、テーマを決める（1回目～2回目）</p> <p>中間：調査・フィールドワーク及び中間発表（3回目～12回目）</p> <p>後半：グループ発表・総括（13回目～15回目）</p> <p>【AL（アクティブ・ラーニング）ポイント】 8.0</p> <p>【授業時間外の学習方法】：取材をする（フィールドワーク）、ポスター・パワーポイントの作成、調査の集計や結果のまとめ</p> <p>【成績評価方法】：発表（授業内）50%、発表（授業外：オープンキャンパス・学園祭など）10%、授業への積極性 40%</p>
--------------------	---

山口大学 共育ワークショップ 2015 「みんなで山大的教育（共育）について語ろう！」

●コンセプト

山口大学の教育（共育）について、教員、職員、学生が一緒になり、様々な観点から語り合い、考えてみよう。

大学というコミュニティでは、本来、教員、職員、学生が等しく市民権を有していると考えられるべきではないでしょうか。教員が学生を教えるという場面もあれば、教員が学生から教えられる場面があるというのが大学というコミュニティの醍醐味でしょう。大学教育とは、教員、職員、学生が共に創り上げるもの（共創）であり、かつ、共に育み合うもの（共育）です。

●アプローチ

山口大学は、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」を教育理念に掲げ、次の時代を切り拓く人材育成に取り組んでいます。

今回は、「あったらいいな、こんな授業」と題して、教員、職員、学生が一緒になって、理想の授業について考えてみたいと思います。知識創造の技法を使ったグループワークを通して、「シラバス作成」を行います。

所属や立場を超えた参加者同士の対話を通して、アイデアフルな授業デザインを楽しんでみませんか。教員、職員、学生の共創を通して、山大的教育（共育）をより豊かなものにしていきましょう。

●開催日時

9月28日（月） 13:30～17:30

※ワークショップの詳細は裏面参照

（終了後に情報交換会（懇親会）を行います）

●場 所

総合図書館アカデミック・フォレスト

●対象及び定員規模

本学の教員、職員、学生（学部生・大学院生） 60名程度



●内容構成

13:30～13:40 開会挨拶・趣旨説明

13:40～14:10 基調講演「大学での学びを変える、学生が変わる」
横浜国立大学 大学教育総合センター助手
(元・東洋大学学生 FD チーム代表)
曾根 健吾

14:10～14:30 グループワーク・オリエンテーション
「シラバス設計の事始め」

14:30～16:30 グループワーク 『あったらいいな、こんな授業』
「みんなでシラバスを作成してみよう！」

[(15:30～15:40 休憩を含む)]

16:30～17:20 全体発表

17:20～17:30 クロージング・閉会挨拶

[17:40～18:30 情報交換会(懇親会) ※会費:教職員 1,000円、学生 500円]

【申込方法】

申込は、件名「共育ワークショップ申込」とし、「①氏名、②所属・職名(学生の場合は学年)、③e-mail、④情報交換会(懇親会)参加希望の有無」を記入の上、E-mail: ga115@yamaguchi-u.ac.jp (担当:教育支援課教育企画係)あてに送信願います(なお、情報交換会(懇親会)参加希望の方は、当日受付にて会費を徴収いたします)。

【申込締切】

8月7日(金)までとします。

ただし、定員となり次第、申込を締め切らせていただきます。

【問合せ先】

大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

E-mail: toru-h@yamaguchi-u.ac.jp TEL:5067(内線)



YNU YOKOHAMA
National University

共育ワークショップ2015 基調講演 (山口大学)
平成27 (2015) 年9月28日 (月)

**大学での学びを変える,
学生が変わる**

曾根 健吾
横浜国立大学 大学教育総合センター



1

YNU YOKOHAMA
National University

アウトライン

1. 僭越ながら少し自己紹介します。
2. 大学での「あるある」を考えます。
3. アイスブレイク：みんなで自己紹介します。
入学前と入学後を振り返ります。
4. 学びの主権者としての学生について考えます。
5. まとめ：大学での学びを学生が変わる！

2

YNU YOKOHAMA
National University

1. 僭越ながら自己紹介



3

YNU YOKOHAMA
National University

僭越ながらちょっと自己紹介

曾根 健吾 (そねけんご)

横浜国立大学 大学教育総合センター助手

- ・ 東洋大学文学部教育学科, 大学院教育学専攻出身
- ・ 2010年9月～2012年3月
東洋大学学生FDチームリーダー
- ・ 2011年9月～2013年3月
関東圏FD学生連絡会学生代表
- ・ 2013年4月～2015年3月
川崎市立中学校講師 (社会科)
- ・ 研究対象は高等教育論, 学習論, 教育工学



4

東洋大学教育学科に入学

5年間、教職員とともに大学での教育、学び
をよりよくする活動に取り組みました。

TOYO UNIVERSITY
The basis of all learning lies in philosophy.



5

YNU YOKOHAMA
National University

2. 大学での「あるある」?



6

YNU YOKOHAMA National University

大学の授業「あるある」

- ★ 教員が、自分の研究内容を語り続ける
- ★ レポートを一生懸命書いて提出したのに、返却されない。
- ★ ゼミ以外は、ほとんど大人数講義！100人以上！
- ★ 教員はマイクを使ってしゃべっているのに、声が聞こえない。
- ★ 教室の後ろは、寝ているかスマホをいじっている学生が多い。
- ★ 教室内の私語がうるさくて集中できない。

大学の授業ってこれでいいの？

定員：350名

机・いすは固定

教室の環境も悪い！

教室内に窓はなし。

YNU YOKOHAMA National University

ここでワークに向けて アイスブレイク

— 大学入学前と入学後を振り返る —

9

YNU YOKOHAMA National University

アイスブレイクの流れ

1. 自己紹介シートを記入してください。
(見やすいようにペンで書きましょう)
2. 自己紹介シートの内容を共有します。
氏名、所属、趣味、大学入学前と入学後に感じたギャップを書いてみてください。
3. 気になった点は遠慮なくツツコミましょう！

時間は約5分です！

10

YNU YOKOHAMA National University

入学前と入学後のギャップを考える

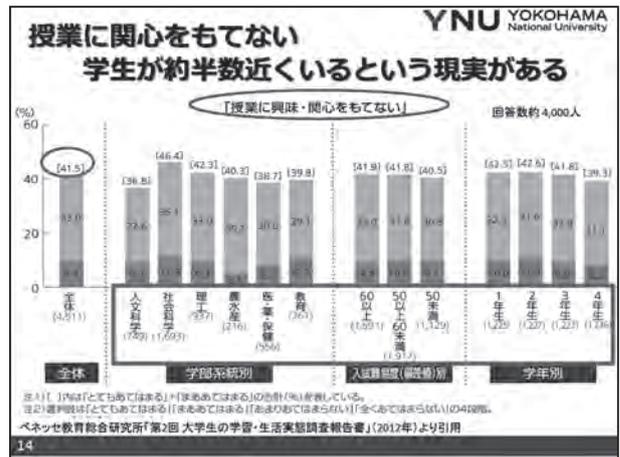
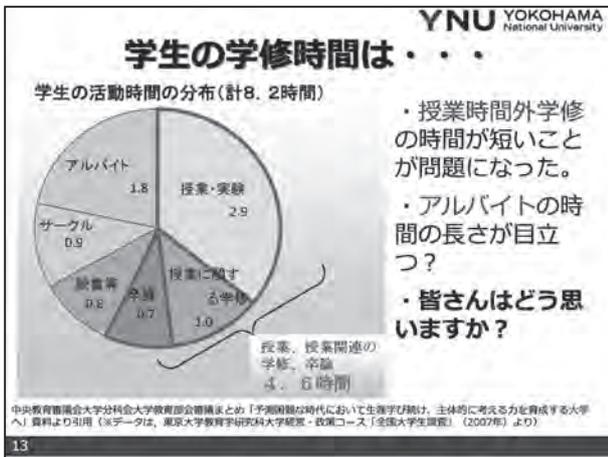
大学入学前のイメージ	大学入学後に感じたギャップ
<ul style="list-style-type: none"> ・教授はとっても偉い存在で近寄りがたい。 ・みんなが学びに燃えている！ ・授業が自由に自分で履修できる！ ・大学の試験はとっても難しい！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生と教員の距離は思ったより近かった。 ・授業中に寝ている人も。。。 ・思ったより必修の授業が多かった。。。 ・意外に試験は楽にパスできる？

11

YNU YOKOHAMA National University

3. 学びの主権者としての学生

12



YNU YOKOHAMA National University

なぜだろう？

- そもそも大学に目的をもって入学していない？
- 大学入学後に学びたいこと、やりたいことが変わった？
- 友人などの人間関係がうまくいっていない？
- 授業が思ったよりつまらない？

YNU YOKOHAMA National University

でももったいない！

学生生活の1日の大半を占めるのは、授業

「学ぶこと」こそ、大学での大きな目的

学びの充実 = 大学生生活の充実 → 成長

YNU YOKOHAMA National University

そして立ち向かわなければならない

- グローバル化の波と国際化
- 少子高齢化社会
- フラック化した労働市場
- 熾烈な就活戦線

YNU YOKOHAMA National University

学生は「学びの主権者」

学生は大学の主役、学びの主権者として

「生徒」から「学生」へ

- ・学生の意識が変わらなければ、学びは変わらない！
- ・受け身でも何も変わらない！
- ・学び、授業に真摯に向き合う！
- ・教職員の意識も変わる！

YNU YOKOHAMA National University

4. 【まとめ】
大学での学びを変える、
学生が変える



19

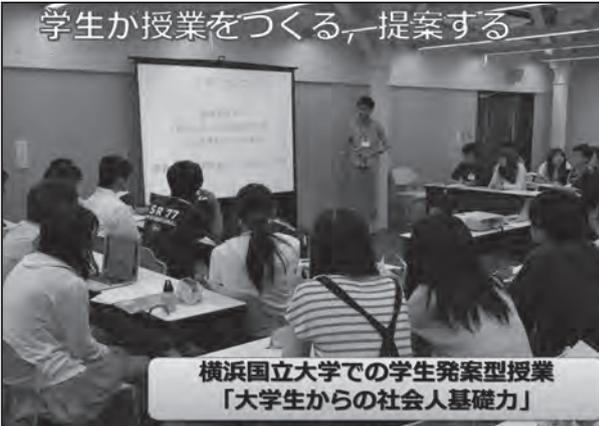
YNU YOKOHAMA National University

例えばこんなことができる！

- 学生が授業をつくる，提案する。
- 学生の授業，学びについての声，思いを集める。教職員に提案する。
- 学生同士でお互いの学びを支援する。
- 教職員と協働して授業，教育システムのあり方を考え，行動する。

20

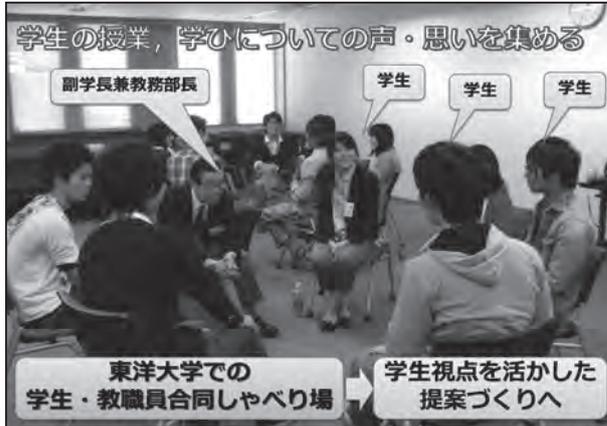
学生が授業をつくる，提案する



横浜国立大学での学生発案型授業
「大学生からの社会人基礎力」

21

学生の授業，学びについての声・思いを集める



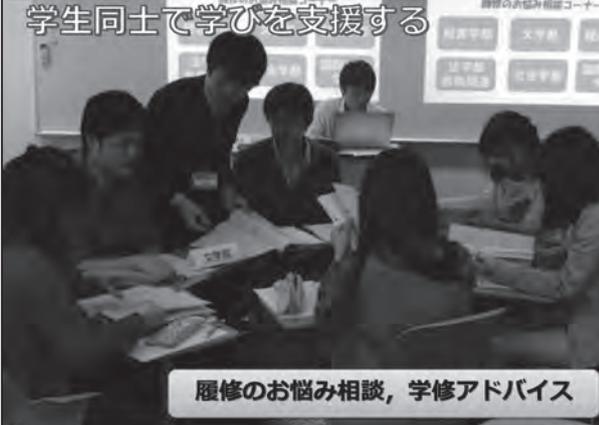
副学長兼教務部長
学生
学生
学生

東洋大学での
学生・教職員合同しゃべり場

学生視点を活かした
提案づくりへ

22

学生同士で学びを支援する



履修のお悩み相談，学修アドバイス

23

YNU YOKOHAMA National University

新入生対象
4月7日(月)4限 11:10-12:00
二学期の学びのしるし
「学びのしるし」を
集めてください

北方大学のための
**学び
セミナー
2014 春**
大学での「学び」を
楽しむコツを知らそう

会場：3号館1階
ナレッジスクエアセミナー室
※事前登録申し込み・参加費不要
お気遣いご祈願下さい！

2～4年生対象
4月8日(火) 5限 16:30-17:20
F101 大学での学びを充実させる
「学びのしるし」を
集めてください

主催：FD推進センター・学生FDチーム
E-mail: shikunishi@ynu.jp

学びを充実させる
イベントの開催など
(学生企画！)

24

学生同士で学びを支援する

①、教養教育科目に際してお話しします。あてはまるものを○

授業科目名	理系的	文系的	教員名
授業形態	講義形式	ゼミ形式	
	グループワーク	ディベート	

授業の特徴
 わかりやすい 難さずに受けられる
 資料がわかりやすい 授業の雰囲気がいい
 学生の意見を引き出してくれる
 その他

特徴やオススメの点をさらに詳しく教えてください

家族社会学 AB

西野 理子 先生

社会学の観点で家族を学べる講義

家族のあり方、それぞれの個人のライフスタイルなどを社会学の視点から学ぶ授業。
 ・家族の定義、各世代での家族の個人差がわかる。
 ・家族を通して、家族のあり方、役割を学ぶ。

担当する科目名
 ・社会学の観点から、家族のあり方を知る。また、社会学の視点から、家族のあり方を知る。また、社会学の視点から、家族のあり方を知る。

授業科目名
 理系的 文系的 教員名
 授業形態 講義形式 ゼミ形式
 グループワーク ディベート

授業の特徴
 わかりやすい 難さずに受けられる
 資料がわかりやすい 授業の雰囲気がいい
 学生の意見を引き出してくれる
 その他

特徴やオススメの点をさらに詳しく教えてください

学生自線のシラバス

学生がおもしろい！よい！と思う授業を紹介しあう

教職員と協働して大学での教育、学びのあり方を考え改善する

日々の授業、キャンパスライフ、授業アンケート、履修制度などなど

学生と教員、職員との協働が重要 —学生が「文句屋」にならないために—

輪をつくり

**共に一つになって
考え行動する**

お互いに向き合う

YNU YOKOHAMA
National University

大学での学びを変え、充実させることは、 「楽しい活動」

- ① 自分の大学の「よさ」を見つめる機会
→自分の大学が好きになる！
- ② 自分自身の成長の機会
- ③ 自分の属する学部とは違う方たちとの交流の機会
- ④ 自分の視野、知見を広げる機会

※ 時には失敗することもある！
 →失敗を楽しむ勇気とユーモアが必要
 「失敗」したときの振り返り、自己省察が次の「楽しみ」のエネルギー源
 →実はやってみると楽しい。

この大学で学んでよかった！と
1人でも多くの学生が思えるように

大学での時間を無駄にしない
学生自身が変わる、教職員も変わる、大学での学びが変わる

学生の力は無限大∞

理念の共有
と理解

楽しさの
追及

学生、教員、職員の協働が大学教育を変える！

YNU YOKOHAMA
National University

ご清聴ありがとうございました。
 大学での学びと一緒に
 よりよいものにしていきましょう！

曾根 健吾
 k-sone@ynu.ac.jp
 (質問等は遠慮なくご連絡を！)



～シラバスとは？～

- ①授業選択ガイドとしてのシラバス
- ②契約書としてのシラバス
- ③学習効果を高める文書としてのシラバス
- ④教員と学生の人間関係づくりのツールとしてのシラバス
- ⑤授業の雰囲気伝える文書としてのシラバス
- ⑥授業全体をデザインする文書としてのシラバス
- ⑦カリキュラムに一貫性を持たせるツールとしてのシラバス
- ⑧教員の教育業績記録の証拠としてのシラバス

出典：佐藤浩章編(2010)『大学教員のための授業方法とデザイン』玉川大学出版部

シラバスづくりのストーリー

- 本日の共有ワークショップでは教員・職員・学生が協働でシラバスを作成します。
- それぞれの立場を超えた同じグループの仲間と共に“あったらいいな、こんな授業”のアイデアを考えていただき、実現します。
- 本学の教育理念である「発見し・はぐくみ・かたちにする」を念頭に置きながら、(知の)発見・(知の)はぐくみ・(学修成果を)かたちにする授業をイメージし、シラバスを創り上げてみましょう！

山口大学憲章

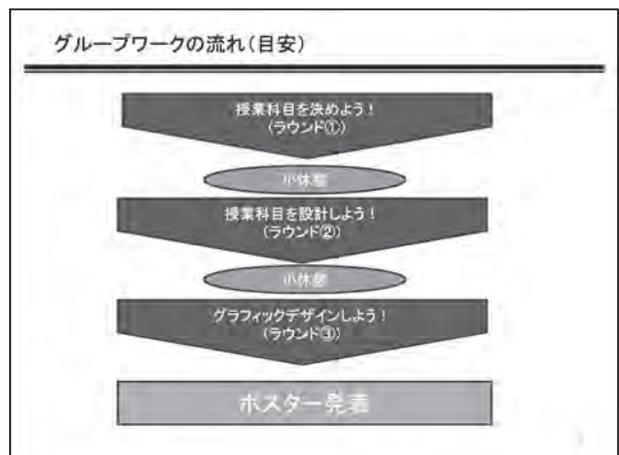
1 「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造

私たち山口大学は、21世紀の多様な課題を「発見し・はぐくみ・かたちにする」、豊かな「知の広場」を創り出します。

私たち山口大学は、この「知の広場」において、自らの役割と実績とを不断に評価しつつ英知の創造をめざします。

2 共同・共育・共有精神の涵養

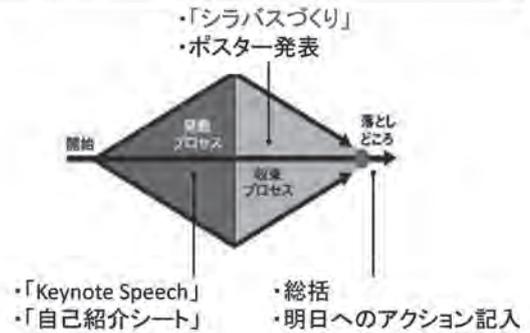
3 公正・平等・友愛の尊重



グループワーク・エチケット

- ◆ **話をよく聴く**
話すばかりではなく、他のメンバーの話によく耳を傾けてみよう。
- ◆ **否定しないで、受け止める**
議論の場ではありません。多様な意見を受け入れ、それにワクワクする自分自身を楽しみましょう。
- ◆ **アイデアフルを楽しむ**
メンバーとの対話を通して、アイデアの広がりを楽しみましょう。
- ◆ **テーマにフォーカスする**
時間配分を考えながら、メンバー全員で、テーマをフォーカスしていきましょう。そうすることで、チームのエネルギーが高まります。

【全体の流れイメージ】



**Let's start
group work!**

ラウンド①「授業科目を決めよう！」

★授業科目名、授業のキーワード設定(30分)

1. それぞれの【自己紹介シート】を参考にしながら、授業科目名と授業のキーワードを設定してください。
2. アイデアの広げ方、収束の仕方などを工夫して時間内に作業を終えてください。
3. 30以内に授業科目名を決めて、シラバス(模造紙)に書き込んでください。

- ※すでに皆さんの手元(自己紹介シート)には、授業科目のアイデアがあります。
- ※一人のアイデアを採用するの、グループ全体のアイデアをまとめるのも皆さんの自由です。
- ※グループの仲間と一緒に実現したいと思える授業科目を設定しましょう。

ラウンド②「授業科目を設計しよう！」

★シラバス作成(40分)

1. 授業概要、対象者(学部・学年)、受講者属性を記入してください。
2. 本学の教育理念である「発見・はぐくみ・かたちにする」のために、みんなで作る授業科目では、どんな(知の)発見・(知の)はぐくみ・(学修成果の)かたちがあるのでしょうか。このことをイメージしながら、到達目標の3要素(「発見」「はぐくみ」「かたちにする」)を記入してください。
3. 授業計画について、上記の1・2に基づき、授業全体のプロセスが分かるように詳細に記入してください。また、AIポイントも記入してください。
4. 授業時間外学習では、予習・復習はもちろんのこと、より積極的な学びを引き出せるような工夫をお願いします。
5. 成績評価方法では、どんな課題を出すのか、何を評価するのかを示してください。また、総合評価に対する割合などを示すとわかりやすくなります。例: レポート課題(25%)

- ※グループの仲間と一緒に決めた授業科目の骨組みを立てる場面です。
- ※授業をする立場、授業を受ける立場、授業を支える立場、それぞれの立場を入れ替えてみることで違った景色が見えてくるでしょう。



ラウンド③「シラバスをグラフィックデザインしよう！」

グラフィックデザインとチーム編成(40分)

1. テキストでまとめたシラバスをベースに、授業設計のコンセプトや概念をグラフィックデザインしてみましょう！表シートで一例を示していますが、グラフィックデザイン化の仕方は、各チームにお任せします。
2. このあとのポスター発表を想定して、シラバス内容をグラフィックデザイン化することで発表内容を分かりやすくすることに役立ててください。
3. チーム名を記入してください。
4. メンバーの名前(ニックネームでも可)を記入するとともに、設計した授業を実際に運営上での役割分担(例) 教員、TA・SA、ピアサポーター、ICT技術職員など)について記入してください。

※シラバスを視覚化し、チーム編成を具体化することで、シラバスの向こう側にある理想を仲間と体現・共有することで、チーム全体の一体感を感じましょう。

【グラフィック・イメージ(一例)】

振り返りと発表準備

【チームによる発表】

1. チームメンバーの全員が発表者です。
2. チームの役割分担により、教員・職員・学生が仲良く発表してください。

【①フリータイム】(10分)

【②組別チーム発表】
(30分)

1. 1組10分程度でポスター発表を担当し、次の組と交代してください、ポスターセッションは3ラウンド行います。(30分)

10分経過したら、、、

シラバス
あつらいいなこんな
授業

同じグループの別の組と交代して

他のグループの発表を見に行きましょう！

【③投票&表彰&講評】
(10分)

1. いいなと思ったグループのシラバスにシールを貼ります。(5分)

2. 表彰(3分)

3. 講評(2分)



THANK YOU !

「志」つなぎ 伝える
二百年

創設 200周年
山口大学

共育WS2015準備委員会一同



共育ワークショップ2015

グループワーク用参照資料



シラバスづくりの注意点

- ✓ シラバスは授業の設計図です。しばしばブラックボックスになりがちな授業をシラバスによって明瞭・明快なものにしてください。
- ✓ 学習目標は、知識・技能・態度の「三領域の行為動詞」を参考にして「何ができるようにするのか」を明確にしてください。
- ✓ 本資料に「学び」のあり方も載せておりますので参考にしてください。



2

大学教育の質的な転換



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY (MEXT)

平成24年度 中央教育審議会
新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～
(答申)

学士課程教育はキャンパスの中だけで完結するものではなく、サービス・ラーニング、インターンシップ、社会体験活動や留学経験等は、学生の学修への動機付けを強め、成熟社会における社会的自立や職業生活に必要な能力の育成に大きな効果を持つ(p. 24.)。

4

アクティブ・ラーニング

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれる。教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である(p. 37.)。

5

アクティブ・ラーニング



可動式の机、イスが整備されているアクティブ・ラーニング教室
(共通教育棟演習室、15番、26番教室など)。

6

- コーオプ教育 (Cooperative Education)**
 インターンシップ発祥の地・米国では、発展型インターンシップのコーオプ教育 (CO-OP Education) を「特定の専門職の分野と関連付けられている専攻分野で、既に相当な準備 (所定の単位取得等) をした学生に、カリキュラムの仕上げとして行われる一回限りの仕事もしくはサービスの体験」としています。
 就職協定協議会特別委員会 (1997) 「米国における就職・採用事情調査報告書」

13

▶ サンドイッチ方式教育 (O/O/CF) 自己形成・進路実現

※ OCF Off Campus (企業や団体での就業)
 ※ O On Campus (学内での教育)

14
<http://www.kyoto-su.ac.jp/entry/education/coop.html>

- Problem-Based Learning (PBL)**
 学習者自らが答えの無い問題を自分で考え、他者との関わりを通して何か新しいものを生み出していく積極的な学習。
 安西裕一郎 (2013) 『主体性を身に付ける』 『大学時報』349, pp. 30-37
- Project-Based Learning**
 企業や団体、その他個人などと共同で開発された授業。学習者は、自身のコミュニケーション、チームワーク、社会性に関する能力の伸長を実感することができる。
 東山高久 (2013) 「企業と大学が協同し、学びに関わることで学生の主体性は引き出されたか」 『Future Skills Project』の取り組み』 『大学時報』349, pp. 38-45。
 山田和人 (2013) 「PBLの学びを最大限にするために」 同志社大学プロジェクト科目の場合に即して』 『大学時報』349, pp. 46-51。

15

企業と大学 (学生) で取り組んだプロジェクトの例

サントリーホールディングス (株)	あなたは人事部から「人材育成革新プロジェクト」のメンバーとして指名されました。社会人・企業人に求められるものを考察し、新入社員の育成について、具体的な施策を提案下さい。
(株) 資生堂	あなたは、SEA BREEZEの担当者です。競合ブランドから首位を奪い、NO.1のポジションを盤石化するためのブランド育成戦略を提案下さい。
野村證券 (株)	あなたは野村證券の社員です。より良い社会を実現するために魅力的と考える投資対象を決め、その根拠を示して下さい。

東山高久 (2013) 「企業と大学が協同し、学びに関わることで学生の主体性は引き出されたか」 『Future Skills Project』の取り組み』 『大学時報』349, pp. 38-45。

16

F S P 課程の概要

以上のような議論を経て「各授業を担当する」として役割に組み立てられた F S P 課程は、以下の中で「協働的学習」の場を設けている。協働的学習の場は「協働的学習」を指す。

表 1: F S P 課程の協働的学習の場

授業科目	内容	協働的学習の場
プロジェクトマネジメント	プロジェクトマネジメントの重要性を認識し、協働的学習の場を設ける。	協働的学習の場を設ける。
グループワーク (協働的学習)	グループワークを通じて、協働的学習の場を設ける。	協働的学習の場を設ける。
中間発表	中間発表を通じて、協働的学習の場を設ける。	協働的学習の場を設ける。
グループワーク (協働的学習)	グループワークを通じて、協働的学習の場を設ける。	協働的学習の場を設ける。
プレゼンテーション (協働的学習)	プレゼンテーションを通じて、協働的学習の場を設ける。	協働的学習の場を設ける。
協働的学習 (協働的学習)	協働的学習を通じて、協働的学習の場を設ける。	協働的学習の場を設ける。
グループワーク (協働的学習)	グループワークを通じて、協働的学習の場を設ける。	協働的学習の場を設ける。
プレゼンテーション (協働的学習)	プレゼンテーションを通じて、協働的学習の場を設ける。	協働的学習の場を設ける。
協働的学習 (協働的学習)	協働的学習を通じて、協働的学習の場を設ける。	協働的学習の場を設ける。

17
<http://www.bessan.co.jp/entry/education/coop.html>

山口大学 共通教育科目 知財展開科目

- 反転授業**
 講義ビデオを事前に視聴しておき、教室内では、質問や討議、課題・問題の解決を行う。予習とアクティブ・ラーニング (能動的学習) に重きを置いた学習法。

18
<http://ipc.nikkeip.co.jp/article/news/2014/20141149263/>

- MOOCs(大規模オープン・オンライン・コース) オンラインで大学の講義が受けられるサービスで、Coursera、Edx、Udacityが有名。ハーバード大学などの有名大学の講義を受講でき、修了証が発行される。一部の大学(海外)では修了証を単位として認める動きが出てきている。



- JMOOC(日本オープンオンライン教育推進協議会) 日本における大規模オープン・オンライン・コース。



19

世界に通じる汎用的な能力、
リーダーシップ、
起業家精神(アントレプレナーシップ)

●山口大学 国際総合科学部

本年度よりスタートした新学部。英語による授業や留学制度のほかに、先進的なカリキュラムシステムと学修支援、アクティブ・ラーニングなどで注目されている。

- 英語で行う授業。
- 1ヶ月間のフィリピン語学研修と1年間の留学が必須となっている。
- 幅広い知識とその活用能力。
- デザイン思考による課題解決能力。
- コミュニケーションと協働能力。



<http://gai.yamaguchi-u.ac.jp/index.html>

●ビジネスリーダーシップ、アントレプレナーシップ
立教大学経営学部経営学科
コア・カリキュラム
BLP
ビジネス・リーダーシップ・プログラム



【BLPについて】

BLPは、グローバル社会で活躍できる人材の養成を目的に作られた、経営学部経営学科のコア・カリキュラムです。
チームでのプロジェクト実行やスキル強化を通して、ビジネス・リーダーシップを体験的かつ段階的に身につけていきます。

<http://icob.nhkyo.ac.jp/bs/about.html>

立教大学BLPの卒業生による起業

立教大学経営学部では、専任ゼミ指導で、講師・メンター代表教員との協働による実践型ゼミを実施しています。
7月13日(日)経営学部関係者ゼミ研修と協働で、講師・メンター代表教員との協働型実践型ゼミを実施しました。
*協働型ゼミとは、立教大学経営学部卒業生による「innovst」の事例を、現職の立教大学関係者(経営学部関係者)と、講師・メンター代表教員、経営学部関係者(立教大学関係者)と、協働型ゼミ形式で実施しています。
*協働型ゼミとは、立教大学経営学部卒業生による「innovst」の事例を、現職の立教大学関係者(経営学部関係者)と、講師・メンター代表教員、経営学部関係者(立教大学関係者)と、協働型ゼミ形式で実施しています。



<https://www.facebook.com/MonoyamaGakuenUniversity?ref=if>

innovst
立教大学経営学部卒業生による起業

会社名 株式会社innovst
業種 教育・人材サービス
所在地 東京都中央区銀座5-1-1
設立 2014年10月
代表者 佐藤 隆
従業員 10名(立教大学経営学部関係者 1名)
連絡先 info@innovst.com
<http://innovst.com/company.html>

21

自己紹介シート

名前：

ニックネーム：

所属・学部：

出身：

趣味：

大学入学前

大学入学後

シラバスデザイン（様式）

【チーム名

授業科目名	※教える立場から授業概要（メインテーマ）を記述します。
授業概要	※授業形態（講義・演習・実験実習の別）、授業規模（受講者数など）を記述します。 【授業形態】 ・・・ 【授業規模】 ・・・
到達目標	※授業終了時に、できるようになってほしい行動を「○○できる」という形式で書きます。 ※学生を主語として書きます。「理解する」のような概念的言葉でなく、観察可能な行動で表現します。動詞は、知識・技能・態度の三領域に分けて記述すると分かりやすいです。 【何を発見できるか】 ・・・ 【何をくぐくむことができるのか】 ・・・ 【何をカタチにできるのか】 ・・・
授業計画	※「授業の主題」「学習目標」に対応させてデザインします。分かりやすい授業科目の流れ、要素を選択・配列します。8回又は15回の授業について、ある程度大きくくりこりにまとめていただいで結構です（例 前半・中間・後半など）。
AL(7/8/9/10/11)ポイント	※授業におけるアクティブ・ラーニングの割合を数値化します（0～14ポイント）。
授業時間外の学習方法	※授業時間外の学習方法（予習・復習）について分かりやすく書きます。
成績評価方法	※評価方法とその基準を分かりやすく書きます。 ※出席そのものは評価の要素に入れないのが一般的です。

グラフィック・デザイン
(授業イメージのイラスト化)

授業担当チーム（役割分担表）

ワークシート ニックネーム：

お題 “あったらいいなこんな授業”

[]

(1) なぜ“あったらいいな”と思うのかその理由をキーワードで書いてください。



(2) これまでの経験から強く印象に残っている「学び」(大学での授業に限らない)について教えてください。



リフレクシヨンシート

- 今日の気づき
- 明日からの教えること、学ぶことへの誓い

シラバスプランニング (様式) [チーム名 AM-TMT]

授業科目名	山大検定
授業概要	山口大学の様々な側面について知ることが出来る授業 まず知ることから「きっかけ」を作る
授業形態 授業規模	【授業形態】 主に演習 + 講義 【授業規模】 最大 60, 70人
到達目標	【何を発見できるか】 山口大学で学ぶ意義 【何を学ぶことができるのか】 交渉力や創造力 【何をカタチにできるのか】 検定問題と解答 プレゼン
授業計画	初回: 山口大学概要 第二回: 交渉計画 第三~六回: 2学評 ナップスを作り、交渉相手と呼んで話を聞く。第七~九回: サークル、団体、残りの学部の話を聞く。 第十~十二回: 検定問題作成 第十三~十四回: 解答、解説
ALの学びのポイント	9.0
授業時間外の学習方法	交渉, 検定問題を考えてみる。
成績評価方法	AL(交渉, グループワーク)が基本 + 学生同士の相互評価

[チーム名 AM-TMT]

グラフィック・デザイン
(授業イメージのイラスト化)

山大検定



授業担当チーム (役割分担表)

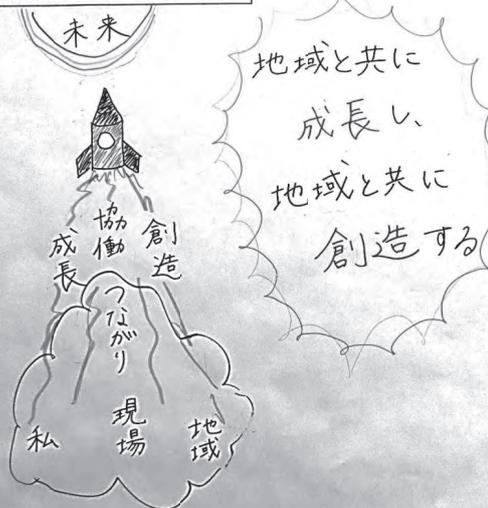
講師は毎回招く。
メンバーはサポート役。

シラバスプランニング (様式) [チーム名 探険隊]

授業科目名	山口探険し隊
授業概要	自らが山口の現場に赴き、人々と関わり、山口を知る
授業形態 授業規模	【授業形態】 演習 【授業規模】 30人
到達目標	【何を発見できるか】 第2のふるさと、良きふるさとを発見する。 【何を学ぶことができるのか】 「歩く」「触れる」「見る」「聞く」「語る」力をはぐくむ。 【何をカタチにできるのか】 山口の人々との「つながり」と「未来」をカタチにする。
授業計画	前半: オリエンテーション企画会議、情報収集 中間: 現場とつながりをつくる、中間報告 後半: つながりをつくる、振り返り
ALの学びのポイント	12
授業時間外の学習方法	情報収集 現場に赴き探険する
成績評価方法	プレゼンテーション(中間、振り返り) 20% 提言書 60%、振り返りシート 20%

[チーム名 探険隊]

グラフィック・デザイン
(授業イメージのイラスト化)



授業担当チーム (役割分担表)

教員、学生、地域住民
状況に応じて皆が教え学ぶ

シラバスプランニング (様式) [チーム名 C 集団]

授業科目名	学びたい F 学びましょ!		
授業概要	興味あるテーマを自由に調査発表! 一履修者		
授業形態	グループワーク		
授業規模	30人〜		
到達目標	【何を発見できるか】 - 自分の中から世界分野 - 未知地 - 情報の取得・整理・活用 【何を学ぶことができるのか】 - (好奇心) (探索心), 他人に伝える力 - コミュニケーション力 【何をカタチにできるのか】 - 1つの分野の調査過程・結果		
授業計画	1. 問題設定 グループワーク	2. 調査 資料作り	3. 発表 まとめ
ALのポイント	4		
授業時間外の学習方法	個人 (グループ)	調査	
成績評価方法	学生 同士の評価	よみかた できた おもしろ	加点方式

報酬: 発表の発表表彰, 総合評価, コンテスト, 優秀賞, 発表賞

[チーム名 C]

グラフィック・デザイン (授業イメージのイラスト化)

一般に....

入学 卒業

...直線的

〜学びたいものを学ばせよ〜 じゃあ...

入学 卒業

コンテストの
学長表彰

授業担当チーム (役割分担表)

・学生の相互評価

シラバスプランニング (様式) [チーム名 カムバック ヤーさん]

授業科目名	すこやかライフ in 山口		
授業概要	健康に 長く生きて いくには 何をしたら いいかな を学ぶ	自分が 何したいか を学ぶ	実践には脚 指すもよし 生きたい生活 を学ぶ
授業形態	講義&実習		
授業規模	30人程		
到達目標	【何を発見できるか】 人生の楽しみ 何をしたら いいかなを 学ぶ 【何を学ぶことができるのか】 実践力と 自己表現 力 【何をカタチにできるのか】 健康に 長く生きて いくこと		
授業計画	1. 健康と ライフスタイル	2. 実践 力	3. 自己表現 力
ALのポイント	8		
授業時間外の学習方法	予習 ノート	8	
成績評価方法	前 テスト	8	次の行動 計画を提出

カムバック
[チーム名 ヤーさん]

グラフィック・デザイン (授業イメージのイラスト化)

すこやかライフ in やまぐち

次行動を
描く!

何しよう?

健康と長
く生きて
いけるか?

実践を通して
自身の将来を
考える。

山口という
地域とは?

自己表現

実践力

自己表現

健康と長
く生きて
いけるか?

実践を通して
自身の将来を
考える。

授業担当チーム (役割分担表)

統括: ヤーさん
教員: ちーの, こいち
コーディネーター: とだち

チームリーダー: たっしー
TA: TORU
SA: ぐえだ

シラバスプランニング (様式) [チーム名 *たけのこ* を探せ!]

授業科目名	タメグチの演習
授業概要	教職員・学生から専らで全員「タメグチ」で進行する。デパート 教壇に立つのは教員だけでなく学生職員も。 テーマは担当者が毎週毎回変更しよう!
授業形態 授業規模	【授業形態】 オムニバス形式 【授業規模】 50人 (5人班 × 10)
到達目標	【何を発見できるか】 多分野の基礎知識を得ることが出来るよ。 【何をほぐすことができるのか】 基礎知識を深めることが出来るよ。 コミュニケーション能力を向上させることが出来るよ。 【何をカタチにできるのか】 講義前後の違いを映像に残せるよ。
授業計画	第1回目・第2回目の講義では説明等 第3回目以降から各議題についてデパート、質疑応答等「タメグチ」で 進行しよう。2回目「稲作体験」、4回目「空想上の科学」 5回目「空想」、6回目「人文 減らしたのになぜ?」 7回目「課外活動支援」、8回目「総括」。
ALの到達ポイント	1.5
授業時間外の 学習方法	基礎知識の学習復習 文献リサーチ作成
成績評価方法	事前課題

【チーム名 *たけのこ* を探せ!]

グラフィック・デザイン
(授業イメージのイラスト化)

タメグチの演習

稲作 空想 空想科学
デパート 空想上の科学
質疑応答

ファミリーも
たけのこ

授業担当チーム (役割分担表)

第3回 教員: 七か
第4回 教員: リーダ
第5回 教員: まる
第6回 教員: くさ
第7回 教員: たけのこ

担当回以外は
参加者として
授業を受けるよ!

Thank you!

スペシャルサンクス: タメグチさん

シラバスプランニング (様式) [チーム名 *Fun*]

授業科目名	得ダネ
授業概要	時事ネタを持ち寄り話しあおう。 テーマは学生自身が決める!
授業形態 授業規模	【授業形態】 グループワーク → ディスカッション、プレゼン 【授業規模】 4グループ (1グループ 4人)
到達目標	【何を発見できるか】 ・新には価値観・将来(明日・祝法)に役に立つ。 ・友人に話せる・世の中に詳しく分かる 【何をほぐすことができるのか】 (コミュニケーション能力 プレゼン) 【何をカタチにできるのか】 ・自分と新聞記事が書ける ・日程テスト高得点
授業計画	初回 オリエンテーション (アイスブレイクあり) 2回 事例紹介 3回 ~ 8回 プレゼン、ディスカッション 評価、総括
ALの到達ポイント	7.5
授業時間外の 学習方法	プレゼンテーション作成 テーマに関する自己調査
成績評価方法	プレゼンテーション担当者がデパートを評価。 デパート担当者がプレゼンテーションを評価。

【チーム名 *Fun*]

グラフィック・デザイン
(授業イメージのイラスト化)

次の週

①プレゼン A ②プレゼン B ①プレゼン C ②プレゼン D

③ C & D が ディスカッション

③ A & B が ディスカッション

授業担当チーム (役割分担表)

・第2回 (事例紹介)
タメ
・第3回 ~ 第5回
(同会進行)

シラバスプランニング (様式) [チーム名 *Bunny fire*]

授業科目名	コミュニケーションが世界を変える!		
授業概要	大学生のコミュニケーションを広げる → 大学生のコミュニケーションと地域社会の関わりをテーマにするため。		
授業形態 授業規模	【授業形態】 演習・ゲーム・ディスカッション・プレゼンテーション・インターネット 【授業規模】 50人(1チーム4~5人)		
到達目標	【何を発見できるか】 大学生の考え方の実態(限られた世界で生活している)を客観的にとらえることができる。 【何をはぐくむことができるのか】 幅広い視野、コミュニケーション能力(伝える力、聞く力)、人脈、積極性をはぐくむことができる。 【何をカタチにできるのか】 自分が卒業後どのように人と社会に貢献していくか、キャリアプランを作り説明することができる。		
授業計画	<前半> マナー講習 企業へのアポ取り テーマ決め (仮テーマ) 1. 何が問題として企業に 起るか	<中間> 仮テーマを企業方針(コアコンセプト)に 企業内でイシューをソート 2. 企業の現状を説明 仮テーマを再設定	<後半> 再設定したテーマで企業の 仮にプレゼン (プレゼンした企業の実態) 授業内の成果発表
ALの学習ポイント	6~10		
授業時間外の学習方法	別途集まり、プレゼンの方法やテーマを詰めていく。		
成績評価方法	最終プレゼンと企業の担当者の評価。		

[チーム名 *Bunny fire*]

グラフィック・デザイン
(授業イメージのイラスト化)

授業担当チーム (役割分担表)

マナー講師: マッピョー 企業の調整: ふくだらっしゅ、ジャンペル
 プレゼン講師:)ムン
 グループ管理: しんべえ、あり

シラバスプランニング (様式) [チーム名 *NYUNBA!!*]

授業科目名	空き家政策学		
授業概要	山口県内の空き家を有効活用する方法を考える		
授業形態 授業規模	【授業形態】 グループワーク フィールドワーク ディスカッション プレゼンテーション ふり返り 【授業規模】 30人(5人×6グループ)		
到達目標	【何を発見できるか】 ・地域の人の矢口悪に話せることができる。 【何をはぐくむことができるのか】 ・学生が地域に入ること、地域の人と交流をすることができる。 ・課題発見能力 ・計画性 【何をカタチにできるのか】 ・これまで自分が学んできたことを計画に反映する 地域の人 の知識に 対して 話せる 学生が 地域 に入る こと 地域 と交流 を できる 課題 発見 能力 計画性		
授業計画	① 空き家・活用 ② 調査 ③ 計画 ④ 発表	① 空き家・活用 ② 調査 ③ 計画 ④ 発表	① 空き家・活用 ② 調査 ③ 計画 ④ 発表
ALの学習ポイント	おそく... (3)		
授業時間外の学習方法	適宜		
成績評価方法	プレゼンテーション 70%	授業態度 30%	

[チーム名 *NYUNBA!!*]

グラフィック・デザイン
(授業イメージのイラスト化)

授業担当チーム (役割分担表)

フィールドワーク・プランニング・プレゼンテーション・アレンジ:
 ・学生(レオ、まほみ)
 コメンテーター: 外部関係者(ぶくさん、さかぼん)
 担当教員: JLA

シラバスプランニング (様式) [チーム名 Identity]

授業科目名	自分らしさ入門
授業概要	今の自分を「見つめ直すこと」で「将来(社会)を見据え、大学時代の主体的な学びに結び付ける。
授業形態 授業規模	【授業形態】 講義・演習 【授業規模】 60名(6名/班 × 10班)
到達目標	【何を発見できるか】 自分の特徴を発見できる。 【何をほぐすことができるのか】 自分の特徴を発見することで、自らの夢や希望を実現するプロセスを他人に説明できる。 【何をカタチにできるのか】 現在から未来に向けての自分の将来設計を文章化できる。
授業計画	〈前半〉グループ決め、しゃべり場(夢を語る) 〈中間〉フィールドワーク、ライフプランの作成 〈後半〉大学時代で学びたいことを文章化、授業毎にリフレクションシートを書く。
ALの学習ポイント	12
授業時間外の学習方法	自分の特徴を発見するためのフィールドワーク、家族や友人へのインタビュー、自らの夢や幸せを見、希望を実現していると思う人へのインタビュー。
成績評価方法	リフレクションシート 40% 中間レポート 30% 期末レポート 30%

自分らしさ入門

[チーム名 Identity]

グラフィック・デザイン (授業イメージのイラスト化)

自分らしさの発見

・グループワーク
・フィールドワーク(ヒアリング)
・ライフプラン

現在の自分

未来の自分

・リフレクションシート
・しゃべり場
・ふりかえりの共有

大学時代の主体的な学び

授業担当チーム (役割分担表)

担当教員: 葦ちゃん(小川先生)
アドバイザー: 学生(いもちゃん、たぶん、うみ、あつせ)
コーディネーター: げん

シラバスプランニング (様式) [チーム名 キャサリン]

授業科目名	県、ちよる? やまぐち県
授業概要	山口県の魅力についてグループに分かれて調べる。 チーム内では各自で決めたいテーマ、下記から選択して発表。 (災害、公害について、歴史、方言、企業、農産物、自然系)
授業形態 授業規模	【授業形態】 グループワーク(発表・発表)、フィールドワーク(発表) 【授業規模】 60人程度(4~7人1グループとする)
到達目標	【何を発見できるか】 ・山口県の魅力発見 【何をほぐすことができるのか】 ・県見直し(他グループの発表も聞いて) ・計画性を身に付ける ・発信力・プレゼンテーション能力向上 【何をカタチにできるのか】 ・コミュニケーション能力 ・情報収集能力
授業計画	前半... グループ分け発表決め(1回目-2回目) 中間... 調査、フィールドワーク及び中間発表(3回目-12回目) 後半... グループ発表・総括(13回目-15回目)
ALの学習ポイント	8.0ポイント
授業時間外の学習方法	・取材(発表内) ・ポスター発表ポイント作成 ・調査・集計や結果のまとめ
成績評価方法	・発表(発表内) [50%] ・発表(ポスター発表ポイント作成) [10%] ・発表の積極性 [40%]

[チーム名 キャサリン]

グラフィック・デザイン (授業イメージのイラスト化)

発見

歴史 企業 方言 生態系

山口県の魅力発見

積極性

かたちにする

はぐくみ

・コミュニケーション能力
・情報収集能力

・知見を広げる
・計画性を身につける
・発信力の向上(プレゼン能力)

授業担当チーム (役割分担表)

教員: あいろせん
アドバイザー: その他全員

3. 山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)FD・SD ワークショップ 「授業科目シラバスから作成するルーブリック—観点別到達目標を活かして—」

日 時：平成 27 年 9 月 30 日（水） 13:30～15:30

場 所：吉田キャンパス・共通教育棟 15 番教室（アクティブ・ラーニング教室）

参加者：18 名（教員：14 名、学生：4 名）

概 要：

13：30～13：35 開会挨拶

山口大学 大学教育機構 大学教育センター長 朝日 孝尚

13：35～13：50《第一部 イン트로ダクション》

(1) 「授業設計を助けるルーブリックの特徴と効果」

山口大学 国際総合科学部 講師（大学教育センター主事） 星野 晋

13：50～15：10《第二部 グループワーク》

(2) 「ルーブリック作成のファシリテーション」

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

(3) グループ対話

15:10～15：25《第三部 リフレクション》

(4) 「コメント（シラバス充実・教員授業自己評価入力を含めて）」

山口大学 教育学部 教授（大学教育センター主事） 野村 厚志

15：25～15：30 クロージング・閉会の挨拶

[総合司会：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容：

9 月 30 日（水）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）FD・SD ワークショップ「授業科目シラバスから作成するルーブリック—観点別到達目標を活かして—」を、教員・学生の合同にてアクティブ・ラーニング教室（共通教育棟 15 番教室）を活用して開催された。アンケート結果によれば、9 割以上の参加者が「非常に良かった」「良かった」と回答しており、満足感の高いワークショップとなった。なお、本ワークショップは、文部科学省・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環として開催されている。

冒頭、朝日孝尚 大学教育センター長より開会の挨拶として本ワークショップの趣旨説明があり、ルーブリックの作成と実際のルーブリック活用を通して、よりよくルーブリックの効果を実感できるワークショップ体験であるとの説明があった。

第一部 イン트로ダクションとして、星野 晋 国際総合科学部 講師（大学教育センター主事）より、「授業設計を助けるルーブリックの特徴と効果」と題して報告があった。近年の大学教育改革にともない授業の再設計が求められ、より有効な授業設

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	27.8%
良かった	12	66.7%
どちらとも言えない	1	5.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	18	100.0%

計のツール、または、成績評価のツールとしてルーブリックが挙げられることが述べられた。続けて、山口と世界を事例として、コモンルーブリックとそれを学部、授業に対応させるローカライズについて説明があった。本ケースのコモンルーブリックでは「発見する」「はぐくむ」「かたちにする」「分かちあう」「振り返る」の5つの規準と国際総合科学部のDP（ディプロマ・ポリシー）との擦り合わせについても紹介があり、最後に、ツールとしてのルーブリック活用の範囲について言及があった。

次に、第二部 グループワークとして、林 透 大学教育センター 准教授のファシリテーションのもとルーブリック、ルーブリックを成績評価に活用するまでの手順などについて説明があり、参加者のセルフワークとしてレポート採点のためのルーブリック作成を行った。続いて、作成したルーブリックをレポート採点に活用し、他の参加者との違いや共通点などについて共有が行われ、ルーブリックの効用について参加者が実感している姿を見ることができた。また、本ワークショップに参加した学生は、自身の正課外教育活動を通して得られる能力、育成したい観点などを挙げてルーブリックを作成し、全体に発表を行った。続いて、第三部 リフレクションとして、野村 厚 教育学部 教授（大学教育センター主事）よりシラバス充実・教員授業自己評価を含めた本ワークショップへのコメントが述べられた。

最後に、朝日孝尚 大学教育センター長より閉会の挨拶として、さらなる大学教育改善の一步としてルーブリックが活用されることの期待感が述べられた。

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)
FD・SDワークショップ
授業科目シラバスから作成するルーブリック
—観点別到達目標を活かして—

【趣 旨】
本学では、2013年度から大学教育学会課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」との連携により、初年次教育科目「山口と世界」におけるコモンルーブリック開発及び実践を進めてまいりました。
今回のワークショップでは、授業科目シラバスに明記された観点別到達目標に基づきながら、授業科目の到達目標を規準とした科目ルーブリックの作成を体験していただきます。学生の到達目標の達成度を可視化し、自らの授業設計・成績評価の点検・充実にかつキッカケづくりを提供します。併せて、シラバス充実や教員授業自己評価入力を働きかける機会としたいと思います。
なお、本ワークショップは、文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)の一環として開催いたします。

【申込み方法】 科目「ルーブリックWS申込」とし、「氏名、所属、E-mail」を記入の上、E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp までYU-AP事務局まで、9月28日(月)までに送信願います。

【問合せ先】 山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室) E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

日時
2015年
9月30日(水)
13:30~15:30

場所
西田キャンパス
共通教育棟15階教室

対象
学内の教職員・学生
(教員の方は、担当の授業科目シラバスを持参すること)



ワークショップ及び全体発表の様子



山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)

FD・SDワークショップ

授業科目シラバスから作成するルーブリック — 観点別到達目標を活かして —



【趣 旨】

本学では、2013年度から大学教育学会課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」との連携により、初年次教育科目『山口と世界』におけるコモン・ルーブリック開発及び実践を進めてまいりました。

今回のワークショップでは、授業科目シラバスに明記された観点別到達目標に基づきながら、授業科目の到達目標を規準とした科目ルーブリックの作成を体験していただきます。学生の到達目標の達成度を可視化し、自らの授業設計・成績評価の点検・充実に活かすキッカケづくりを提供します。併せて、シラバス充実や教員授業自己評価入力を働きかける機会としたいと思います。

なお、本ワークショップは、文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)の一環として開催いたします。

日時

2015年

9月30日(水)

13:30~15:30

場所

吉田キャンパス

共通教育棟15番教室

対象

学内の教職員・学生

(教員の方は、担当の授業科目シラバスを持参すること)

【申込方法】 件名「ルーブリックWS申込」とし、「①氏名、②所属・職名、③e-mail」を記入の上、
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp (担当: YU-AP推進室) へてに、9月28日(月)までに送信願います。

【問合せ先】

山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室) E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp



【概要】

13:30～13:35 開会挨拶

大学教育機構 大学教育センター長 朝日 孝尚

13:35～13:50《第一部 イン트로ダクション》

(1)「授業設計を助けるルーブリックの特徴と効果」

国際総合科学部 講師(大学教育センター主事) 星野 晋

13:50～15:10《第二部 グループワーク》

(2)「ルーブリック作成のファシリテーション」

大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

(3)グループ対話

15:10～15:25《第三部 リフレクション》

(4)「コメント(シラバス充実・教員授業自己評価入力を含めて)」

教育学部 教授(大学教育センター主事) 野村 厚志

15:25～15:30 クロージング・閉会の挨拶

★参考文献:

- 沖裕貴(2014)「大学におけるルーブリック評価導入の実際 ―公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して―」立命館大学教育開発推進機構『立命館高等教育研究』第14号、pp.71-90
- 林透・星野晋(2015)「ルーブリック開発に関する実践的研究 ―初年次教育科目『山口と世界』を中心に―」山口大学大学教育機構『大学教育』第12号、pp.10-21

【用語解説】ルーブリックってなに？

学修評価の基準の作成方法の一つであり、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成されます。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難なパフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがあります(中教審答申・用語集より)。

授業設計を助けるルーブリックの特徴と効果

国際総合科学部
星野 晋

迫られる授業の再設計

- ディプロマ・ポリシー (DP) にもとづくカリキュラムの部分としての授業
- コンピテンス/アウトカム基盤型学習
- コンパクト化
 - 通年 ⇒ セメスター ⇒ クォーター
- 自己学習の支援: 学習の仕方の学習
- 評価の可視化
- アクティブ・ラーニング

ツールとしてのルーブリック

- 共通フォーマット
 - コモン・ルーブリック
 - 学部統一フォーマット
 - FDのツール
- 授業設計のツール
- 成績評価のツール
 - 評価の可視化と説明責任
 - 質的評価・パフォーマンス評価の指標

山口と世界のケース

- コモンルーブリックとして
 - ＜学習目標＞
 - チームで、山口に関連する課題・テーマを設定し、情報を収集し、分析し、解決策や企画をまとめ、口頭や紙媒体(もしくは映像やWeb)で発表し、地域や国際的職場で活かす力を養う授業。
 - アクティブ・ラーニングを通して、研究や社会実践の基本的なプロセスについて、学習の仕方やリサーチ・リテラシーの基本を学習することが目的である。
- ローカライズ(学部)
 - 自学自習(介入は最低限に)
 - チームづくり・チームワーク
 - インタビュー取材を含む
- ローカライズ(授業担当者)

規準	内容	レベル3
発見する	山口に関連するテーマ設定、企画立案	山口に関連する課題に応じて、十分な下調べにもとづき、適切かつ独創的なテーマ設定、企画立案ができる
はぐくむ	テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーション	課題、テーマ設定、企画に必要な情報を最大限に収集した上で、他者との協働作業を通して、学術的に適切な方法でプロダクツの作成につなげられる
かたちにする	編集、作品化、発表資料、レポート等、プロダクツの作成	収集した情報の分析・考察に基づき、独創性を備え、かつ、地域や国際的観点に立って説得性を伴ったプロダクツを作成できる
分かちあう	公開、プレゼンテーション、チームワーク	プロダクツを効果的に他者と共有するための戦略を立て、チームワークを発揮して展開し、認知・評価をえることができる
振り返る	他者および自分(たち)の企画およびプロダクツの評価。今後の地域や国際的職場での「発見する」につながる。	他者および自分(たち)の企画・活動・プロダクツを評価し、その評価をチームで共有し、地域や国際的観点に立った企画・実践にその評価を活かせる

授業のデザイン

(1) ミッション: 「山口のことを知らない人に、山口を知ってもらおう」

網羅的な情報提示ではなく、くらしや人生やできごとの一コマを紹介することで、山口を身近に感じてもらう ※自治体広報でもwikiでも旅行ガイドでもなく
※家族に乾杯

(2) 方法: 取材にもとづくリーフレットの作成およびプレゼンテーション

情報収集 ⇒ 企画(予備的) ⇒ 取材 ⇒ 整理・分析 ⇒ 企画・編集・構成
⇒ 成果のシェア(リーフレットとプレゼンテーション)

コモンブリックの項目との 擦り合わせ

連携	内容
発見する	予備調査(ネタ探し、既存のリーフレットの分析) 山口に関連するテーマ設定、企画立案
はぐくむ	取材・取材結果の整理・編集
かたちにする	リーフレット、スライド、発表原稿の作成 作業シートへの記録
分かちあう	リーフレットの公開、プレゼンテーション
振り返る	他班のリーフレット、プレゼンテーションの評価 自班のリーフレット、プレゼンテーションの改善点について話し合い

7

国際総合科学部のDP

基準	レベル3
1. 幅広い学識とその活用能力	1-1 科学技術に関する知識・理解 1-2 思想・文化に関する知識・理解 1-3 政治・経済に関する知識・理解 1-4 知識の活用能力
2. コミュニケーション能力と共働力	2-1 情報収集・処理能力 2-2 多文化理解能力 2-3 コミュニケーション能力 2-4 自己省察能力 2-5 共働力
3. デザイン思考と課題解決能力	3-1 深層ニーズ把握能力 3-2 課題設定能力 3-3 着想練り上げ能力 3-4 着想具現化能力 3-5 着想検証能力
4. 科学的思考とコーディネート能力	+1 科学的思考・推論力 +2 科学技術・社会洞察力 +3 触媒能力 +4 調整・統合能力

8

国際総合科学部DPとコモンブリック

科学技術ならびに文化・社会に関する基礎的な知識ならびに高いコミュニケーション能力と課題解決能力を有し、課題解決のためのチームにおいて様々な分野や国籍の人々の多様なアイデアや意見、考えを調整し、一つにまとめ上げることができる。

基準	レベル3
幅広い学識とその活用能力	科学技術や思想・文化、政治・経済のいずれの軍域に開いても幅広い学識を有し、多様な状況に応じて、その学識を十分かつ有効に活用することができる。
コミュニケーション能力と共働力	優れたコミュニケーション能力を有するとともに、困難な状況においても、多様な文化的背景を持つ人々の相互理解を促進し、国際舞台で彼ら/彼女らと共働することができる。
デザイン思考と課題解決能力	山口大学の教育理想である「発見し・はぐくみかたちにする」というデザイン思考のプロセスを、自発的かつ主体的に適切なやり方で実践することができる。
科学的思考とコーディネート能力	科学技術が関与する唯一解が存在しない現代的課題に対して最善解を見出すために、自発的かつ適切なやり方で、様々な分野の人々の意見や考えを調整し、ひとつにまとめ上げることができる。

9

YU CoB CuSと「山口と世界」

科目名	担当教員	科目概要		到達目標		評価方法		履修条件		備考	
		単位数	単位数	到達目標	評価方法	履修条件	備考	履修条件	備考		
英語	英語	1	1	英語の基礎知識・技能を身に付け、国際社会で通用する英語力を身に付ける。	筆記試験	英語					
国際総合科学部DP	国際総合科学部DP	1	1	科学技術ならびに文化・社会に関する基礎的な知識ならびに高いコミュニケーション能力と課題解決能力を有し、課題解決のためのチームにおいて様々な分野や国籍の人々の多様なアイデアや意見、考えを調整し、一つにまとめ上げることができる。	課題解決能力	国際総合科学部DP					
デザイン思考	デザイン思考	1	1	山口大学の教育理想である「発見し・はぐくみかたちにする」というデザイン思考のプロセスを、自発的かつ主体的に適切なやり方で実践することができる。	デザイン思考	デザイン思考					
科学技術と社会	科学技術と社会	1	1	科学技術が関与する唯一解が存在しない現代的課題に対して最善解を見出すために、自発的かつ適切なやり方で、様々な分野の人々の意見や考えを調整し、ひとつにまとめ上げることができる。	科学的思考	科学技術と社会					

注：各履修科目内、科目への履修条件の欄を付したとき
 履修条件を有する (DP・到達目標)
 履修条件を有しない (DP・到達目標)
 履修条件を有しない (DP・到達目標)

山口と世界とDP

- YU CoB CuS 10ポイント
 - 1-4 知識の活用能力
 - 2-1 情報収集・処理能力
 - 2-5 共働力
 - 4-4 調整・統合能力
- YU CoB CuS 5ポイント
 - 1-1 科学技術に関する知識・理解
 - 1-2 思想・文化に関する知識・理解
 - 1-3 政治・経済に関する知識・理解
 - 2-2 多文化理解能力
 - 2-3 コミュニケーション能力
 - 3-1 深層ニーズ把握能力
 - 3-2 課題設定能力
 - 3-3 着想練り上げ能力
 - 3-4 着想具現化能力
 - 3-5 着想検証能力
 - 4-3 触媒能力

12

コモンブリックの項目とDPの擦り合わせ

連携	内容	DP
発見する	予備調査(ネタ探し、既存のリーフレットの分析) 山口に関連するテーマ設定、企画立案	1-4 知識の活用能力 2-1 情報収集・処理能力 2-5 共働力
はぐくむ	取材・取材結果の整理・編集	1-4 知識の活用能力 2-1 情報収集・処理能力 2-5 共働力
かたちにする	リーフレット、スライド、発表原稿の作成 作業シートへの記録	2-5 共働力 4-4 調整・統合能力
分かちあう	リーフレットの公開、プレゼンテーション	2-5 共働力 4-4 調整・統合能力
振り返る	他班のリーフレット、プレゼンテーションの評価 自班のリーフレット、プレゼンテーションの改善点について話し合い	2-5 共働力 4-4 調整・統合能力

12

コモンルーブリックの項目と評価の目安

段階	内容	評価(目安)
発見する	予備調査(ネタ探し、既存のリーフレットの分析) 山口に関連するテーマ設定、企画立案	評価シート:テーマ設定・着眼点
はぐくむ	取材・取材結果の整理・編集	評価シート:取材力
かたちにする	リーフレット、スライド、発表原稿の作成 作業シートへの記録	評価シート:内容の親密度、魅力
分かちあう	リーフレットの公開、プレゼンテーション	評価シート:工夫・説得力
振り返る	他班のリーフレット、プレゼンテーションの評価 自班のリーフレット、プレゼンテーションの改善点についての話し合い	作業記録

13

ツールとしてのルーブリック その限界から見えてくること

- 授業設計ツールとして
 - 能力の総和ではなく総合であり、センスと経験が求められる科目には不向き
 - 記述語に落とし込む:達成目標・評価項目の無限増殖
- 評価ツールとして
 - 直接点数化することの難しさ
 - 可視化しえないこと、可視化しない方がいいこと
 - 経験と直感にもとづく総合的評価の方が現実にフィットする(新任教員にはいいかもしれない) ※EBMと臨床
- あくまでも目安！
 - 授業設計の目安(とりわけ新任教員やカリキュラム再編時)
 - DPとの整合性、DPにおける当該授業の位置づけの確認
 - 他の授業との関係(共通フォーマット)
 - FDに活用(可視化すべきことと可視化しない方がいいこと)
 - 評価に関する説明責任

YAMAGUCHI UNIVERSITY

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)
FD・SDワークショップ
授業科目シラバスから作成するルーブリック
—観点別到達目標を活かして—

グループワーク資料(学生用)
正課外活動(YC.CAM)を通した汎用的能力の
ルーブリックの作成

4

YAMAGUCHI UNIVERSITY

WHATルーブリック？

■評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される達成水準などを明確化する手法です。

学修評価の
規準

観点	内容	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
知識	基礎的な知識を習得し、その知識を応用して問題を解決できる。	基礎的な知識を習得し、その知識を応用して問題を解決できる。	基礎的な知識を習得し、その知識を応用して問題を解決できる。	基礎的な知識を習得し、その知識を応用して問題を解決できる。	基礎的な知識を習得し、その知識を応用して問題を解決できる。
技能	基礎的な技能を習得し、その技能を応用して問題を解決できる。	基礎的な技能を習得し、その技能を応用して問題を解決できる。	基礎的な技能を習得し、その技能を応用して問題を解決できる。	基礎的な技能を習得し、その技能を応用して問題を解決できる。	基礎的な技能を習得し、その技能を応用して問題を解決できる。
態度	基礎的な態度を習得し、その態度を応用して問題を解決できる。	基礎的な態度を習得し、その態度を応用して問題を解決できる。	基礎的な態度を習得し、その態度を応用して問題を解決できる。	基礎的な態度を習得し、その態度を応用して問題を解決できる。	基礎的な態度を習得し、その態度を応用して問題を解決できる。

尺度と
特徴の記述

2

YAMAGUCHI UNIVERSITY

WHYルーブリック？

■記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難なパフォーマンス等の定性的な評価に向いています。

■つまり、達成すべき規準(観点・能力)が誰の目にも明らかになり、多くのメリットを得ることができます。

例えば・・・

- ✓ 評価する人(教員)、される人(学生)の認識が共有される。
- ✓ 複数の評価者による評価の標準化が可能になる。
- ✓ 学生自身が明確な達成目標に向かって主体的になれる。
- ✓ 各規準について段階的なリフレクションをすることができるなど。

3

YAMAGUCHI UNIVERSITY

自分たちの活動に則した
ルーブリックを作成してみましょう！



4

YAMAGUCHI UNIVERSITY

規準(観点・能力)の設定

■ルーブリックの土台となる規準を設定しましょう。

■規準は『山口と世界共通ルーブリック』や『山口大学教育理念』などを参考にしましょう。

■文部科学省が示す「学士力」も規準の能力的な範囲を考えるうえで参考にしましょう。

1. 知識・理解(文化、社会、自然等)
2. 汎用的技能(コミュニケーションスキル、数論的スキル、問題解決能力等)
3. 態度・志向性(自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任等)
4. 総合的な学習経験と創造的思考力

5

YAMAGUCHI UNIVERSITY

規準(観点・能力)の設定(20分)

1. どのような規準を正課外活動を通して獲得したい(すべき)か考えましょう。
2. 模造紙の上にドンドン付箋を貼ります。
3. たくさんの付箋を4～5つの島にまとめます。
4. それぞれのまとまりに対して、規準として記述します。
5. それぞれの規準の内容を明確にします。

6

各段階の特徴の設定

- 各規準に対して尺度を決めましょう。
- 尺度は『山口と世界コモンプリック』を参考にしましょう。
- 尺度は「〇〇できる」という表現で記述しましょう。
- 理想的な達成水準と最低限の水準を想定しながら記述しましょう。

例えば・・・

- ✓【理想的】:多くの学生に慕われ、学生間のネットワークを十分に活用でき、複雑な行事などの企画・運営を成功させることができる。
- ✓【最低限】:仲の良い友人の協力を得ることができ、簡単な行事などの企画・運営をすることができる。

7

各段階の特徴の設定(30分)

1. 各規準の「理想的な達成水準」のアイデアを付箋に書いて模造紙に貼りましょう。
2. 各規準の「理想的な達成水準」を『「〇〇」できる』のかたちで記述しましょう。
3. 「理想的な達成水準」を段階的に下げていく記述をして、4段階程度で示しましょう。

8

修正と振り返り(10分)

1. 再度、全体を把握しながら修正すべき記述がないか再確認しましょう。
2. 正課外活動(YC.CAM)を通して、どのような汎用的な能力を獲得してゆくのか明確になっているか再確認しましょう。
3. 自分たちで設定した各規準と内容、その段階的な達成水準の特徴を他の人にも説明できるようにしましょう。

9

お疲れ様でした！！

本日作成したループリックについて
いつでも発表できるように
心の準備をお願いします！！



10

コメント(シラバス充実・教員授業自己評価入力を含めて)
 大学教育センター主事・野村厚志

- ・ 大学教育センター・YU-AP推進室提供の情報システムや研修メニュー
 - ・ 修学支援システム(授業シラバス、ALポイント)
 - ・ 出席確認システム
 - ・ 成績分布共有システム
 - ・ 学生授業評価・教員授業自己評価のシステム(IYOCAN2)
 - ・ 教員授業自己評価の間30の自由記述は学内に公開、学生も閲覧可能
 - ・ 授業改善のためのアラカルト型研修(キーワードのみ)
 - ・ 双方向授業、アクティブラーニング、反転授業
 - ・ ルーブリック、パフォーマンス評価
 - ・ 障がい学生の支援

ところで、ある授業評価に関するFDワークショップで
 学生授業評価アンケートの質問項目についてコメントがあった。

■ 共通教育の学生授業評価アンケート(講義)の一部を抜粋

8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか? 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも思えない 4. あまりそう思わない 5. さりげない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか? 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも思えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足いくものでしたか? 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも思えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

■ ある教員からのコメント:

「8. あなたはシラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか?」
 とあるが、学習目標を学期末まで覚えている学生はいるか?

■ そのコメントに対して(その場では回答できなかったが):

先生方は学生に対して、授業の初めにシラバスを説明されていると思う。最後の授業まで、学生が目標を見失わず、目標の理解が深まるよう、ご指導を頂ければと思う。シラバスやルーブリックの作成、学生授業評価・教員授業自己評価等を通じて、再度これらを考える機会としていただければと思う。

4. 山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) & SCSK(株)共同企画 FD・SD ワークショップ
『アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう Part2
—アクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器を中心に—』

日 時：平成 27 年 10 月 29 日（木） 16:10～18:00

場 所：吉田キャンパス・共通教育棟 15 番教室（アクティブ・ラーニング教室）

参加者：49 名（学内教職員：22 名、学生：9 名、学外教職員等：18 名）

概 要：

16：10～16：20 開会挨拶

山口大学 大学教育機構 大学教育センター長 朝日 孝尚

16：20～17：10《第一部 事例報告》

(1) 「初等中等教育におけるタブレット端末の活用実践経験から」

山口大学 教育学部 教授 鷹岡 亮

(2) 「タブレット端末を活用したアクティブ・ラーニング

～外国語科目における実践事例を通して～」

大阪大学 全学教育推進機構 教授 岩居 弘樹

17：10～17：55《第二部 デモンストレーション》

「タブレット端末を活用したアクティブ・ラーニングを体感しよう！」

(1) SCSK(株)による BeeDance デモ演出

(2) ミニグループ対話及び質疑応答

17：55～18：00 クロージング・閉会の挨拶

[総合司会：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容：

平成 27 年 10 月 29 日（木）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）&SCSK(株)共同企画 FD・SD ワークショップ「アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう Part2—アクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器を中心に—」を、学内外の教職員と学内学生の合同にてアクティブ・ラーニング教室（共通教育棟 15 番教室）を活用して開催された。本ワークショップは、定員を大幅に超える 49 名（学内教職員：22 名、学生：9 名、学外教職員等：18 名）の参加者

を集めて、林 透 大学教育センター准教授の総合司会のもと熱気に溢れるワークショップとなった。アンケート回答者のすべてが「非常に良かった」「良かった」と回答しており、非常に満足度が高いことがわかるワークショップとなった。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	22	59.5%
良かった	15	40.5%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	37	100.0%

また、「アクティブ・ラーニングに伴う教室環境と ICT 活用に関するアンケート」では、過半数の意見としてアクティブ・ラーニング教室がほとんど使用されていないことがわかったが、参加者のうち 5 割がアクティブ・ラーニング教室には教育・学習に効果があると考えており、3 割以上がアクティブ・ラーニング教室を更に増やすべきだと考えていることが明らかになった。この結果から参加者のうち 8 割以上がアクティブ・ラーニング教室に肯定的な見解をもっていることがわかった。

設問3 アクティブ・ラーニング教室についてどのようにお考えですか(複数回答)

選択肢	人数	割合(%)
教育・学習に効果がある	25	50.0%
教育・学習に効果があるとは思わない	1	2.0%
アクティブ・ラーニング教室を更に増やすべきである	17	34.0%
教室整備は現状で十分である	4	8.0%
アクティブ・ラーニング教室は必要ない	0	0.0%
無回答	3	6.0%
合計	50	100.0%

冒頭、朝日 孝尚 大学教育センター長より開会の挨拶があり、本ワークショップを機会として、アクティブ・ラーニング教室の利用拡大と ICT を活用したアクティブ・ラーニング促進への期待が述べられた。

第一部では、鷹岡 亮 教育学部 教授より「初等中等教育におけるタブレット端末の活用実践経験から」と題して事例報告が行われた。事例報告では、報告のまとめ(30秒で話すためのまとめ)を参加者が作成するという課題を提示することからはじめられ、最初の段階からアクティブ・ラーニングを意識した報告となった。このまとめ作成は、情報を構造化することにより、ただ聞くのではなくアクティブに聞くことで知識のよりよい定着をねらいとしている。本事例報告では、タブレット機器ならではの特徴としてデータの保存や他者との共有、また、他者間との比較が容易にできることであると述べられた。また、タブレットを活かした授業実践としてのビデオ撮影について、実際に撮影された動画を通じた紹介があり、動画を用いた振り返りや指導・アドバイスについて述べられた。最後に学生参加者より本報告のまとめが発表されアクティブ・ラーニングの実践をみる事ができた。



続いて、岩居 弘樹 大阪大学 全学教育推進機構 教授より、「タブレット端末を活用したアクティブ・ラーニング～外国語科目における実践事例を通して～」と題して事例報告が行われた。冒頭から参加者とのインタラクティブなやり取りがあり、非常にアクティブな学びの場となった。本事例報告で紹介された授業実践のポイントはビデオ撮影であり、タブレット端末を用いた動画を活用したアクティブ・ラーニングであると強調された。岩居 教授が

担当される授業（ドイツ語）の流れは、①発音練習、②対話練習、シナリオ作成、③ビデオ撮影、④レビューのサイクルを回すかたちになっており、すべての場面でタブレット端末が活用されている。特に、シナリオを作成してドイツ語会話の実演をビデオ撮影する動画活用については、非常に高い教育効果が確認できており、ビデオ撮影の 2 ヶ月後でも学生たちは当時の会話をほぼ再現することができることが報告された。事例報告後の質疑応答でも活発な議論がなされ、このドイツ語の授業では、単にドイツ語を修得するだけでなく、Learn how to learn（学び方を学ぶ）ということを授業目標にしていることが述べられた。



第二部では、SCSK(株河内 崇氏によるデモンストレーション「タブレット端末を活用したアクティブ・ラーニングを体感しよう！」が行われた。本学が導入している、BeeDanceを用いて、クリッカー機能（集計機能）、描画ツール（直接画面への書き込み）や文書作成など様々な機能の紹介が行われた。授業中における課題の提供・共有、そして提出をスムーズに行うことができ、タブレット端末の活用の幅がより広くなることが述べられた。

最後に、朝日孝尚 大学教育センター長より閉会の挨拶があり、本ワークショップでのアクティブ・ラーニング体験を通して、その教育効果の高さを実感していただいたのではないかと趣旨の話があり、これを踏まえて本学のアクティブ・ラーニング教室及び ICT ツールがさらに活用されるよう推進していく旨述べられた。



山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) &
SCSK(株) 共同企画FD・SDワークショップ

アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう Part2 ーアクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器を中心にー

【趣 旨】

中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』(2012年8月)を前後して、大学教育におけるアクティブ・ラーニングへの関心が急激に高まり、各大学では授業方法や教室環境の改善充実が進められています。

本学では、平成26年度文部科学省・大学教育再生加速プログラム及び国立大学改革基盤強化促進費の採択を受けて、共通教育棟におけるアクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器の整備を進めてまいりました。今回のワークショップでは、新しい教室環境において、タブレット端末(iPad)利用を通じたアクティブ・ラーニングのコツを学び、実践に活かす機会としたいと思います。

なお、本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)事業及びSCSK(株)の共同企画イベントとして開催いたします。



日時:	2015年10月29日(木) 16:10~18:00
場所:	山口大学吉田キャンパス 共通教育棟15番教室 (アクティブ・ラーニング教室)
対象:	学内外の教職員・学生 (定員 40名)

【申込方法・問合せ先】

件名「FD・SDワークショップ申込」とし、「①氏名、②所属・職名(学年)、③E-mail」を記入の上、
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp(担当:YU-AP推進室)あてに、10月26日(月)までに送信願います。なお、定員に達し次第、申込を締め切らせていただきます。

山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室)
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp



Active Learning



【概要】

16:10～16:20 開会挨拶・趣旨説明

朝日 孝尚 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

16:20～17:10《第一部 事例報告》

(1)「初等中等教育におけるタブレット端末の活用実践経験から」

鷹岡 亮 山口大学 教育学部 教授

(2)「タブレット端末を活用したアクティブ・ラーニング

～外国語科目における実践事例を通して～」

岩居 弘樹 大阪大学 全学教育推進機構 教授

17:10～17:55《第二部 デモンストレーション》

「タブレット端末を活用したアクティブ・ラーニングを体感しよう！」

(1)SCSK(株)によるBeeDanceデモ演出

(2)ミニグループ対話及び質疑応答

17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

本学におけるアクティブ・ラーニングとは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るため、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法(発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等のほか、教室内でのプレゼンテーション、グループワーク等)を指し、その対象として、授業科目による正課教育だけでなく、授業外学修である正課外教育を含む。なお、授業科目においては少なくとも1コマ以上行うものとする。」としています。



大学教育再生加速プログラム

山形大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)
 & 種SCSK共同企画 FD・SDワークショップ
 アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しようPart2
 —アクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器を中心に—

初等中等教育における タブレット端末の活用実践経験から

鷹岡 亮

(教育学部附属教育実践総合センター)

ryo@yamaguchi-u.ac.jp

そもそも...ですが... 時間がないのに脱線...

主体的でない 能動的でない「学び」があるのか？

大学で延々と話し続ける教員がいるではないか...

昔

- ◇ 先生の話聞きながら、頭のなかで、まとめてみたり、質問を唱えていたりしたかも...
- ◇ 夜飲み屋で仲間と、あ〜じゃないこ〜じゃないと、逆反転学習してたかも...

今

- ◇ 先生の話聞きながら、考えてくれる学生が減ったかも... → 意図的にALが必要！
- ◇ 飲み屋で話さないか... → 意図的に反転学習！

コンピュータが得意とするところは...

- 単純計算は、人間よりダントツに速い...
⇒ 人間のように曖昧に考えるのは苦手！
- データを限りなく保存できる...決して忘れない...
⇒ 学習活動(履歴)のデータが記録(保存)できる
- ネットワークを利用してデータを運べる...
⇒ どこからでもデータにアクセスできる
⇒ 学習活動の記録(データ)を他者と共有できる
⇒ 他者と「つながる」ことができる
- 書いたモノを削除、移動、コピー、戻すのが簡単...

タブレット型情報端末の特徴と言えば...

- タッチパネルを利用した直接的操作性
マルチタッチ機能(複数の指による操作)
⇒ タッチの仕方の組合せの増加
⇒ 人間の感覚的操作に近い入力方法
⇒ [例] 漢字などの空書行動が意味記憶からの漢字想起を促進
- 携帯性かつ視認性に優れた学習端末
携帯性(PCより優位) ⇔ 視認性(携帯端末より優位)
- 機能間のシームレスな接続性
ネットワーク機能やマルチメディア情報の統合的な処理機能
⇒ ビデオ機能で撮影したデータを機器間で移動することなく視認性のよいスクリーン上で投影

タブレットをどう利用するのか？

コミュニケーション



タブレットでなくても...WSIによる授業まとめ

① 今日の全授業の概要を整理して、半ばで書いたことを隅隅のながら、書き下してまとめる。ただし、まとめる「今日の授業を振り返る」を最後に、どんな授業だったかをまとめて読んで、理解できるようにデザイン(作成)

② 今日の全授業の概要を整理して、半ばで書いたことを隅隅のながら、書き下してまとめる。ただし、まとめる「今日の授業を振り返る」を最後に、どんな授業だったかをまとめて読んで、理解できるようにデザイン(作成)

タブレットでなくても...PPの授業まとめノート

基本は実施。やらなくて良い日は指示します！

■作業内容

- 1日分の授業を3分間で説明できる(理解できる)ように、PowerPoint 1ページに図や表などを利用して授業内容の要点をまとめる。
- その際、二兎を追って申し訳ないが、今日休んでいる仲間にもノートを書いて、あなたの解説なしで3分で読んで理解できるようにノートを作成することを心がける。

■授業内での活用

- 「授業最後のまとめ」もしくは「授業最初の復習」として、1~数名を指名して、3分間で発表(説明)してもらうことを目指す。

■出欠・作業点への活用

[提出期限]
指定された日は、原則、翌日の24:00までに提出すること。

[提出方法]

- ・ryo@yamaguchi-u.ac.jp宛に送付すること。
- ・PowerPointのファイル名は、氏名(学部).ppt とすること。
- ・出席メールは、PowerPointファイルを送付して送信すること。
- ・メールの件名は、「情報科教育法」○月○日出席【氏名(学部)】とすること。



「授業まとめノート」の書き方例:その1

11月8日

千葉の進も一歩から
・小学、中学、高校と進級させながらICTを段階的に載せていく
・押し付けず、共有しながら
情報教育と教育の情報化に関するこれまでの流れ(沿革史)

★昭和60年(1985年)
臨時教育審議会 第1次答申
情報化への対応を指す
(情報を使いこなす能力の重要性)
⇒ 教育方法開発特別整備補助
教材の一般財源化(地方交付税交付金)

★昭和61年(1986)
臨時教育審議会 第2次答申
★昭和62年(1987)
教育課程協議会 幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改訂について
⇒ 情報活用力の育成はすべての教科で
⇒ コンピューターを使って

★平成元年(1989年)
臨時教育審議会 学習指導要領 改訂「新しい学力観」
①自ら学び意欲の育成 ②基礎基本の徹底
③社会の変化に主体的 ④個性を生かすに対応できる能力の育成

★平成2年(1990年)
文部省「コンピューター整備5か年計画」
高価を使って学校へのコンピューター整備が開始
文部省「情報教育に関する手引き」
活用力4つを「コンピューター」という言葉を使わずに「基本的な操作能力」という言葉を使用している

★平成6年(1994年)
文科省「コンピューター整備2次5か年計画」
100校プロジェクトの開始
⇒ 情報の未来を考える
⇒ 教材
⇒ 学習指導をサポートし、教育効果を高めるための教育上の機能を教材という

まとめノートの書き方例:その2

1966年
中央教育審議会 第一次答申
「21世紀を展望したわが国の教育の在り方について」
⇒「自ら学び自ら考える力」の育成
・教育内容の精選と基礎・基本の徹底を図る。
・一人一人の個性を生かすための教育を推進する。
・他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性や、たくましく生きるための健康や体力をはぐくむための教育を改善する
・「総合的な学習の時間」を設ける
・課題発見、解決
⇒ 身近な発見から得る知を広げていく
・完全学校5日制を導入する。

1994年(アメリカ)
・テクノロジーコーディネーター(調剤) 教員研修、資金調達
⇒ 日本は未だに出来ていない。
・企業と協力していた。
・教員研修
○コンピュータは「ツール(道具)」
⇒ 使うかどうかは選定される。
○楽しいと言う感覚
○同僚コンピュータが必要か?

1997年「体系的な情報教育の実施に向けて」
・情報活用能力を定義

小一高等学校の横の連携と情報活用能力の横の関係

情報化
情報教育の体系的な実施の必要性
小学校で出来ること、中学校で出来ることを考える。
情報機器、情報通信ネットワークの活用による学校教育の質的改善
高度情報通信社会に対応する「新しい学校」の情報化の「画」の部分への対応

11月15日

タブレットによる知識/理解の構造化・診断

■キットビルド方式概念マップ作成支援システム:Kit-Build Map (広島大学平嶋研究室)

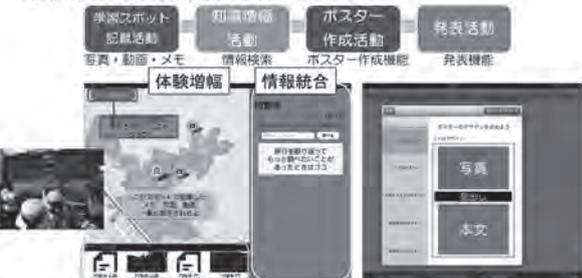
- 教授者が用意した概念マップの構成要素(キット)を学習者に提供
- 学習者はそれらを組み立てる作業(ビルド)として概念マップを作成
- 知識/理解の外化・整理活動としての学習効果(知識の再現・保持・拡張)
- 学習者の理解を共有
- システムが自動的に診断してフィードバック



[引用文献] 平嶋 博司, 宇崎 浩. キットビルド方式概念マップ作成支援システム: 知識の構造化と診断的支援. 教育システム情報学会誌, vol. 32, no. 3, pp. 203-211, 2015.

タブレットによる体験増幅・ポスター作成・発表

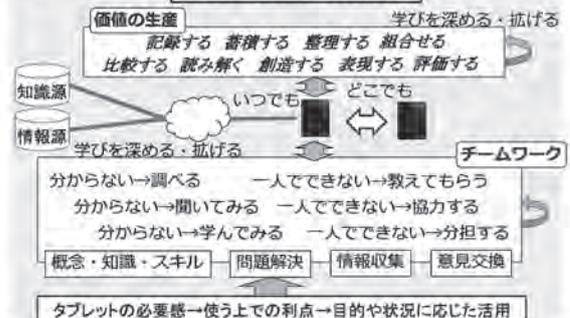
- 体験増幅探究ソフト「Retrip」(電気通信大学柏原研究室)
- 体験学習における体験自身を増幅し、知識構築・整理が行え、最後の学習成果発表も支援できるアプリケーション



[引用文献] 金子拓司 他. フォールディング型体験学習における知識構築・学習成果発表支援. JSSE全国大会, pp. 407-408, 2013.

タブレット型情報端末が生み出す新しい学び

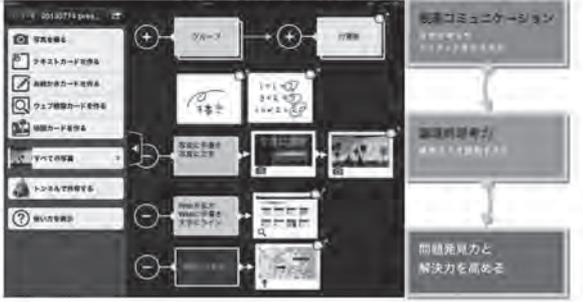
実践を通じた思考力の育成



12

「教えること」「学ぶこと」の深化を目指して①

- 未来の文房具：ロイロノートの機能
 - 「カード」単位で情報を簡単にまとめ、直感的に並び替え！



問題発見力と解決力を高める

13

「教えること」「学ぶこと」の深化を目指して②

- 単文統合型作問学習支援環境「モンサケンTouch」(広島大学平嶋研究室)
 - 問題が与えられるものから作るものへ(作問学習)
 - 作れるから面白くなり意味が分かる(問題構造の意味理解)
 - ソフトウェアによる正誤診断、間違いの場合には正解へのヒント提示
 - 診断結果のサーバ収集・集計、リアルタイムの作問演習状況の把握



14

「教えること」「学ぶこと」の深化を目指して③

- 疑似力覚呈示による知識構築支援(電気通信大学柏原研究室)
 - 学習プロセスに対する学習者の主体的・積極的関与(Engagement)を促す
 - 学習者自らが考えようとする「きっかけ」を意図的に作り出し関与を高める
 - 「指によるタブレット操作」に重さや張力などの疑似力覚を提示
 - 「指」の操作を介して学習者自らその「ノード」や「リンク」の大切さに気づく！

疑似力覚

- 視覚から力覚が生じる錯覚のこと
- オブジェクトの視覚的動きが主体の感覚に整合せず違和感を感じることで起こる

操作	疑似力覚	効果		
ノードの移動	ドラッグ	移動が遅れる	重さ	重要な概念の示唆
リンクの伸長	ドラッグ ピンチアウト	伸長後元に戻る	張力	重要な関係の示唆
リンクのふるい落とし	シェイク	大きく動く	軽さ	弱った関係の示唆

15

初等中等教育におけるICT活用の段階

児童生徒が、学習の場で、ICTの必要感をいだいていく、ICT活用の段階が必要！

必要感 ← 学習力

目的に応じてメタ的にICT活用

学習者がICT活用の利点を踏まえながら学習課題に対するICT活用のプランを作成していく

必要感 ↑

目的・状況に応じたICT活用

文脈に依存・限定されるが、学習者がICT活用の利点を踏まえながら目的や状況に応じたICTを活用することができる

↑

仕組まれたICT活用

教員や支援者に仕組まれた学習の場で、ICT活用を経験する(教員等が、利用目的・状況、ICT活用の利点を説明)

16

タブレット型情報端末で何ができるのか？①

- 学習に対する意欲・関心・態度の向上
- 学習に困難さを感じている児童生徒への支援(アクセシビリティの設定+アプリの活用)
 - 書く、読む(DAISY図書、項目読み上げ、文字に変換)
 - 聞く、話す
 - 記憶する(ボイスレコーダー、カメラ機能、ビデオ機能)
 - 文字入力する、クリックする、ページをめくる
- 知識獲得・定着・共有
 - 学習履歴の利用した個に応じた獲得・定着
 - 獲得した知識の共有・比較
- スキル習得・習熟・共有
 - 学習履歴を利用した個に応じた習得・習熟
 - プロセスの可視化による習得(自己の比較、他者との比較)
 - 自己評価、他者評価(他者との共有)
- 知識の構造化・考え方の構築
 - 知識構造への関連付け、他者との比較・検討
 - 思考の可視化、他者との比較・検討

17

タブレット型情報端末で何ができるのか？②

- コミュニケーション支援
 - アイデアや意見の交換・集約・共有
 - 考え方の共有・比較・評価
- プレゼンテーション支援
 - 根拠に基づいた発表、発表の焦点化
 - 活動経過の報告・共有
 - 作品の比較・評価
- メタ認知の獲得・定着
 - 問題解決過程の見える化
 - 問題解決のコントロール
 - 意思決定・判断
- 学習の振り返り
 - 学び(情報や知識、学びのプロセス)の蓄積・整理
 - 気づきの入力・共有・評価

18

最後に...三言！

- 「ICTの教育利用ってこんなものね…」が一番怖い。
- 5年後に教育市場に出てくるツール・アプリが心配。
- 学習・教育モデルに基づいたツール・アプリの研究開発をしっかりせねば…

拙い発表に、
ご清聴頂きありがとうございました。

タブレット端末を活用したアクティブラーニング ～外国語科目における実践事例を通して～

岩居弘樹 @ 大阪大学全学教育推進機構

外国語学習支援ツール

(iOSアプリ&Webサービス)

表現データベース

Tatoeba Project / imiwa?
Glosbe / Linguee

合成音声

Word Wizard
acapelabox / SitePal
iSpeech

音声認識

Dragon Dictation
Google 音声認識

文法・語彙練習

Quizlet

ビデオ撮影

iPad 標準カメラ
YouTube Capture
ロイロノートスクール



German for Beginners

ドイツ語でのビデオ制作を目標にグループでシナリオ作り、発音練習、ビデオ撮影を行う。役割を交代して撮影し3本提出する。

- ・Project1：口頭練習&ビデオ撮影
- ・Project2：発音練習・シナリオ作成&ビデオ撮影（60秒/本）
- ・Project3：Project2のシナリオをベースに拡張（90秒/本）



授業支援システム (Blackboard) の活用

- ・日誌「今日のひとこと」による学生との交流
- ・シナリオ作成&修正・授業記録の共有
- ・ビデオの公開・共有

BeeDanceの活用

- ・教材提示のためのプラットフォーム(URL・PDF)
- ・クラス全体での理解度チェック (Image Board)
- ・出席確認 (Google Form へのリンク)



発音練習

WordWizard でドイツ語の音声
を聴き、Dragon Dictationで実際
に声を出して発音を確かめる。

毎回10センテンス程度の発音練習
課題を提示し、Dragon Dictation
で練習。練習結果を提出する。

授業で扱うドイツ語は Quizlet で
教材化している。Quizlet は合成
音声や録音機能があり、音声教材
としても活用できる。

シナリオ作成

授業で提示したドイツ語を用いて
グループで独自のシナリオを作成
する。

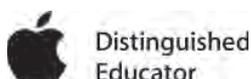
まだ習っていない表現は、imiwa?
や tatoeba.org など調べ、必要
に応じて単語を入れ替える。（こ
こで文法の知識が活きる!）

作成したシナリオは、グループご
とに授業支援システムの掲示板に
アップし、教師がチェック。

ビデオ撮影

カメラアプリで撮影し、YouTube
Captureを使ってアップロード。
YouTube Captureでトリミング
やビデオの追加などの簡単な編集
ができる。絵や写真、文字を入れ
たい場合はロイロノートを使う。

振り返り活動として、YouTubeの
アノテーション機能を使って自分
が話したドイツ語に字幕（フキダ
シ）をつける。



<学生の声>

声に出すこと

“声に出して覚える”ことの大切さを学びました。僕自身、暗記
が大の苦手なのですが、なぜか先生の授業で習ったことは次の
週にも覚えているという現象が起こりました。それはやはり、
声に出していたからでした。家での学習で暗記科目をする場合
も、声に出していきたいと思います(笑) (工学部・1年・男)

何よりも僕がこの授業で一番実感したことは、「声に出す回数
の多さ」です。やはりこれがこの授業の一番の魅力なんではない
かと思います。(工学部・1年・男)

グループでの学習

発音を確認したり質疑の練習したりする時、グループで協力し合
える環境がとてもよかったです。一人で勉強するより断然楽し
くできました！(工学部・1年・女)

ビデオで振り返り

ビデオを撮ってそれを見直すことによってどういうことが出来て
ないのかなどがわかった……。ドイツ語の発音が出来ていな
いとか、声がちっちゃいとかなどのこともわかって良かったです。
(工学部・1年・男)

学び方を学ぶ

… 特定の言語そのものの習熟を目指すというよりは、未知の言
語に出会ったとき（急にその言語の必要に迫られたとき）に、
いかに要領よくそれを習得するかという、ある種の「学び方」
を学ぶことに主眼を置いているのだと感じた。(未来共生・修士1
年・男)

参考

<ドイツ語授業を紹介している書籍>

吉田・野澤編著「最新ICTを活用した私の外国語授業」丸善プラネット
「iPad教育活用7つの秘訣」 ウィネット出版

<Web記事>

TechTarget Japan:

- ・大阪大学がiPadで語学学習、「発音の個別指導」を講'で実現
- ・さよなら“静かな講義室”—iPadで実現した「会話が生まれる講義」とは？

MacFan.jp:

【教育とApple】ドイツ語学習の教具・大阪大学授業見学レポート

SCSK
夢ある未来を、共に創る。

アクティブラーニングシステムのご提案

SCSK株式会社

アクティブラーニングシステムのご提案 **SCSK**
MAGAZINE HOUSE

ソリューションコンセプト

「ICT活用による21世紀にふさわしい教育環境の提供へ」

↓

- ・双方向学習による教育現場の活性化
⇒ 学び(新しい知識の習得、思考プロセス)の楽しさを与えるシステム
- ・授業のリフレクションが可能なデータ収集・蓄積
⇒ レスポンスの結果や各種履歴から適切な授業進行を実現
- ・タブレット、電子黒板、無線LAN、インターネット・・・
⇒ 21世紀型ハードウェアを積極利用したシステム構成


Copyright © SCSK Corporation

Page 1

21世紀型学習スタイルを実現するために **SCSK**
MAGAZINE HOUSE

・タブレット
・サーバ
・電子黒板 / プロジェクタ
※その他、NW環境(有線、無線等)が必要となります。

ハードウェア

・教材ランチャー
・端末モニタリング
・ホワイトボード
・ファイル連携/共有...

アプリケーション

・教材・資料
・クイズ・アンケート
・テーマ・題材

ソフトウェア 教員のアイデア

BeeDance 21世紀型学習スタイルを実現!

Page 2 Copyright © SCSK Corporation

アクティブラーニングルーム 構成イメージ **SCSK**
MAGAZINE HOUSE



電卓スクリーン
電子黒板
プロジェクタ
無線LAN
タブレット
ホワイトボード
学生
教員
ディスプレイ用PC
マトリックススイッチャー
AppleTV
BDプレーヤー

Page 3 Copyright © SCSK Corporation

アクティブラーニングルームイメージ(Nodeチェア) **SCSK**
MAGAZINE HOUSE

利用イメージ



ラーニングシーンに応じた柔軟なレイアウト変更を実現

Page 4 Copyright © SCSK Corporation

アクティブラーニングルームイメージ(インタラクティブホワイトボード) **SCSK**
MAGAZINE HOUSE

利用イメージ

BrainStorming



Discussion → **Presentation**

Page 5 Copyright © SCSK Corporation

「BeeDance」の特徴

SCSK

操作をスマートに、授業をアクティブに。新しい教育スタイル、誕生！

これからの教育は、教員と生徒、あるいは生徒同士のコミュニケーションの中で進められ、協働学習が重要となります。このBeeDance®は、その課題をデジタル技術を使ったシンプルで解決します。

教材のデジタル化

授業の双方向化

協働学習

教材のデジタル化

教材ランチャーでデジタル教材配布
教材ナビで学生のデジタル教材を操作

授業の双方向化と協働学習

レスポンスでリアルタイムに理解度確認
イメージボードでリアルタイムにイメージ共有
テキストボードでリアルタイムにテキスト共有

Page 5

Copyright © SCSK Corporation

BeeDanceの基本機能

SCSK

機能名	概要
教材ランチャー 教材ナビ モニタリング	教材ランチャー：デジタル教材の一覧表示／紹介／操作を行うことができます。 教材ナビ：学生端末のデジタル教材を操作（表示／詳表示、移動／終了）を行うことができます。 モニタリング：学生の進捗のモニタリングや進捗ロックを行うことができます。
レスポンス （小テスト、クイズ）	選択問題、記述問題を一斉配信し、リアルタイムに集計／電子黒板へ投影することができます。 その場で学生の理解度をその場で把握することができます。 小テストやクイズおよびアンケートの集計にも利用することができます。
イメージボード	イメージ問題を一斉配信し、手書き入力による回答をリアルタイムに見ることができ、また、教員端末から回答の集計、電子黒板への投影を行うことができます。
テキストボード	テキスト問題を一斉配信し、キーボード入力による回答をリアルタイムに見ることができ、また、教員端末から回答の集計、電子黒板への投影を行うことができます。 授業には、画像／動画／音声ファイルを利用することができます。
ファイル共有	教員学生間および学生間でのファイルの共有が行えます。 ファイルをメールに添付して送信したり、タブレットで撮影した写真ファイルと連携することができます。
管理機能	BeeDanceで利用するアカウントや課金（授業）などの管理が行えます。教員は自分が担当する授業（授業）に利用する教材を管理し、レスポンスやイメージボードで利用する問題の登録を行うことができます。

Page 7

Copyright © SCSK Corporation

基本機能 ～教材ランチャー／ナビ・モニタリング～

SCSK

教材ランチャーは、事前登録した教材（電子教材、アプリ教材、Webコンテンツ教材）を教員端末から学生端末に表示・移動・モニタリングすることができます。

教材ランチャー／ナビ機能

教員端末から学生端末を簡単に制御！

表示制御
自動制御

モニタリング機能

学生端末の進捗をモニタリング！

教材の登録

教材には電子教材、アプリ教材、Webコンテンツ教材の3種類を行うことができます。

電子教材

電子ファイル
画像、音声、動画ファイル

アプリ教材

標準で用意されているアプリケーション教材を扱うことができます。また、独自のアプリケーションも連携することができます。

イメージボード
テキストボード
レスポンス
ファイル共有

Webコンテンツ教材

WordPress、Youtube、Google等のWebコンテンツ(URL)を教材として利用することができます。

Google先生
Wikipedia先生
Youtube

Page 8

Copyright © SCSK Corporation

基本機能 ～レスポンス～

SCSK

レスポンスは、択一式の問題および記述式の問題を作成・配布することができます。
小テストやクイズ、アンケートの集計に利用することができます。

レスポンスの機能

問題配信

タブレット上で問題を配信！

問題

回答

学生

択一式問題

記述式問題

集計表示

回答を振り分けて集計を表示！

電子黒板への共有

電子黒板に投影して皆で共有！

統計表示

グラフ表示

学生進捗表示

電子黒板

Page 9

Copyright © SCSK Corporation

基本機能 ～イメージボード～

SCSK

イメージボードは、タブレット上で手書き入力することにより、絵や文字を記録することができます。そのイメージを共有、電子黒板に投影することができます。また教員は学生の回答内容をリアルタイムでモニタリングすることやその場で問題を作成・配布することができます。

イメージボードの機能

問題配信

タブレット上で問題を配信！

手書きで回答を入力！

集計

最新内容はリアルタイムに学生端末に表示！

リアルタイムモニタリング

リアルタイムで回答をモニタリング！

電子黒板への共有

電子黒板に投影して皆で共有！

電子黒板

Page 10

Copyright © SCSK Corporation

基本機能 ～テキストボード～

SCSK

テキストボードは、イメージボードのテキストバージョンです。タブレットのソフトウェアキーボードを用いて、テキストの回答を入力することができます。

テキストボードの機能

問題配信

タブレット上で問題を配信！

ソフトウェアキーボードで回答を入力！

集計

最新内容はリアルタイムに学生端末に表示！

リアルタイムモニタリング

リアルタイムで回答をモニタリング！

電子黒板への共有

電子黒板に投影して皆で共有！

電子黒板

Page 11

Copyright © SCSK Corporation

基本機能 ~ファイル共有~

SCSK
SYSTEMS CORP.

ファイル共有は、教員と学生、学生と学生がファイルの共有を行うことができます。タブレットのカメラで撮影した写真ファイルを共有したり、メールに添付して送信することができます。

ファイル共有の概要

※タブレットでファイル共有！

共有ファイルの送信 タブレットのカメラで撮影した写真も共有することができます。

ファイルの共有 ファイルの共有先は専用のメニューで選択することができます。

共有履歴 サーバ上に格納された共有履歴ファイルを確認することができます。

共有履歴 画面上で確認している学生、教員間でファイルを確認することができます。

共有履歴 ローカルのPCに上に表示し、目でファイルを確認することができます。

共有履歴 教員にファイルを送信することができます。詳細の送信履歴のみ閲覧・操作することができます。

Page 12

機能説明 ~管理機能~

SCSK
SYSTEMS CORP.

BeeDance管理機能はPCからWebを通して利用します。管理者が講師やユーザー情報を登録管理し、教員は講師に教材を登録およびアプリ教材に問題を簡単に登録することができます。

BeeDance管理機能

教材ナビ管理 講師ごとに教員、学生の教材を登録することができます。

レスポンス履歴管理 レスポンス(小テスト、アンケート等)に必要な各種質問票、記述問題を簡単に登録することができます。

学習ログ管理 アプリ教材の利用履歴の学習ログをグラフ表示することができます。

イメージボード・テキストボード管理 イメージボード、テキストボードのアウトボード系の質問を簡単に登録することができます。

Page 13

システム構成(最小構成)

SCSK
SYSTEMS CORP.

※iPad、新採用PC、校内サーバの同一セグメントであることが前提
無線LANのアクセスポイントはPoE50台程度でのご利用の場合、最低2台、
推奨3台は必要となります。

無線LANアクセスポイント (無線LAN)

電子黒板 (またはプロジェクター) 及び新採用PC (OS: Windows)

教員用端末

院内サーバルーム

学生

職員

教室

アクセスポイント (無線LAN)

無線LAN

院内LAN

Internet

サーバスペック

OS : LinuxまたはCentOS6程度もしくは以上
CPU : Intel社Xeonプロセッサ-2.4GHz程度以上で
利得性能に合わせたサイジング。
メモリ : 8GB以上
HDD : BeeDanceシステム領域に500GB程度必要。
対応書体は特許ファイル、フォント共 (WebDAV) に格納するファイルの容量と書体 (各書体、
学生数、保存期間、等々) から個別に算出。

Page 14

語学学習でのBeeDance活用事例(1)

SCSK
SYSTEMS CORP.

利用機能 : 教材ナビ + テキストボード + 音声メモ + ファイル共有

学生に教材を配布

教員

教材ナビ

学生

回答を録音

他の学生の回答を参考に再度回答

話す

音声メモ

他の学生の回答をクラス全員で共有

共有

ファイル共有

学生は回答を共有フォルダに提出

学生A

学生B

学生C

利用効果
学生の音声・レポートを学生間で共有することで、お互いに参考や刺激になり学習効果が上がっている。

Page 15

語学学習でのBeeDance活用事例(2)

SCSK
SYSTEMS CORP.

利用機能 : レスポンス (記述式)

ワンクリックで投影可能

教材

教員

ワンクリックで投影可能

回答結果

教員

回答をキーボード入力

読む

プロジェクタ投影

書く

レスポンス(記述)

確認

プロジェクタ投影

利用効果
学生の回答一覧をプロジェクターに投影する事で、理解度を教員だけでなく学生も確認でき、細かな指導をすることができる。

Page 16

グループディスカッション学習でのBeeDance活用事例

SCSK
SYSTEMS CORP.

利用機能 : レスポンス (択一) + イメージボード + 教材ナビ

確認

レスポンス(択一)

回答結果

共有

プロジェクタ投影

ディスカッション

イメージボード

教材ナビ

レスポンスの
回答結果から
グループ分け

Webページを教材として登録

プレゼンテーション

プロジェクタ投影

確認

レスポンス(択一)

利用効果
グループディスカッションを行う上での「共有」「調べ学習」「プレゼンテーション」などをスムーズに行うことができ、授業時間の効率化につながる。

Page 17

5. 山口大学・大学コンソーシアムやまぐち SD セミナー2015 『大学職員の専門性について考えてみよう!』開催報告

日 時：平成 27 年 12 月 18 日（金） 13:30～17:15

場 所：吉田キャンパス・大学会館 2 階会議室

参加者：第一部 129 名（うち学外 49 名）、第二部 90 名（うち学外 46 名）

主 催：山口大学、大学コンソーシアムやまぐち

共 催：大学マネジメント研究会

概 要：

13:30～13:40 開会の挨拶・趣旨説明

山口大学 理事・副学長（創基 200 周年記念事業担当・人事労務担当） 田中 和広

13:40～14:50 第一部《基調講演&ショートトーク》

1. 「大学職員に期待される専門性とは」

筑波大学 ビジネスサイエンス系 教授 吉武 博通
（お茶の水女子大学 監事、元筑波大学 理事・副学長）

2. 「教育・研究支援に発揮できる大学職員の専門性」

山口県立大学 経営企画部 財務グループ 中村 早苗 氏

3. 「ダブルアドバイザー制度に発揮できる大学職員の専門性」

徳山大学 学生支援センター入試室 中嶋 智久 氏

15:00～17:10 第二部《グループワークセッション》

「Let's Challenge ー大学職員の専門性について考えてみよう!ー」

ファシリテーター

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

山口大学 大学教育機構 大学教育センター助教（特命） 河島 広幸

山口大学 総務部創基 200 周年事業推進課主任 河崎 雅彦

17:10～17:15 クロージング・閉会の挨拶

山口大学 理事・副学長（財務施設担当） 吉岡 富雄

[総合司会：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容：

平成 27 年 12 月 18 日（金）に、山口大学・大学コンソーシアムやまぐち SD セミナー 2015『大学職員の専門性について考えてみよう!』を、県内大学はもとより岩手県立大学や関西大学からの参加を含め総勢 130 名近くの参加者を集め、吉田キャンパスにて開催した。本セミナーは、山口大学・大学コンソーシアムやまぐちの共同主催、大学マネジメント研究会の共催で、山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として実施された。

冒頭、田中和広 山口大学理事・副学長より開会挨拶及び趣旨説明があり、SD セミナーの開催は 3 年目となるが、例年同様、大勢の参加者が集まり、所属大学を超えた大学職員同士の議論や情報交流に期待が寄せられた。

第一部の基調講演&ショートトークでは、まず、吉武博通 筑波大学ビジネスサイエンス系教授より、「大学職員に期待される専門性とは」と題して講演があった。昨今の中央教育審議会での大学職員の専門性の議論を紹介した後、大学改革を阻む構造的課題を言及しながら、分業と協働のシステムである「組織」と「個人」との関係を自律的に捉え、大学職員として取り組むべき業務遂行のステップを具体的に提示した。次に、中村早苗 山口県立大学 経営企画部 財務グループ職員より「教育・研究支援に発揮できる大学職員の専門性」、中嶋智久 徳山大学学生支援センター入試室職員より「ダブルアドバイザー制度に発揮できる大学職員の専門性」と題して話題提供があり、若手職員の立場から、職場での経験学習を通じた大学職員としての専門性の具体について言及があった。

第二部のグループワークセッションでは、林 透 大学教育センター准教授、河島広幸 大学教育センター助教 (特命)、河崎雅彦 総務部創基 200 周年事業推進課主任のファシリテーションにより、「Let's Challenge ～大学職員の専門性について考えてみよう!～」というテーマでグループワークを行った。分野別分科会 (①教務・学生支援・就職支援、②学生募集・広報、③研究支援・外部資金獲得・産学連携、④国際交流・留学 (生) 支援、⑤大学経営・企画戦略・IR、⑥人事・研修・SD) に分かれ、マインドマップ作成により、分科会テーマに応じた日常的課題の抽出と解決策の提案を行った。後半の全体発表では、「プロフェッショナル～大学職員の流儀～」と称した指定様式に基づきプレゼンが行われ、ステークホルダーとのネットワークづくりを基礎とした学生募集戦略、大学の組織構造や意思決定プロセスを理解した上での教員への研究支援など、積極的かつ重要な提案が行われた。

最後に、吉岡富雄 山口大学理事・副学長より閉会挨拶があり、学内外の大学職員が交流する素晴らしい機会となり、今後もこのような場づくりを行っていくこととした。



第一部 基調講演&ショートトークの様子

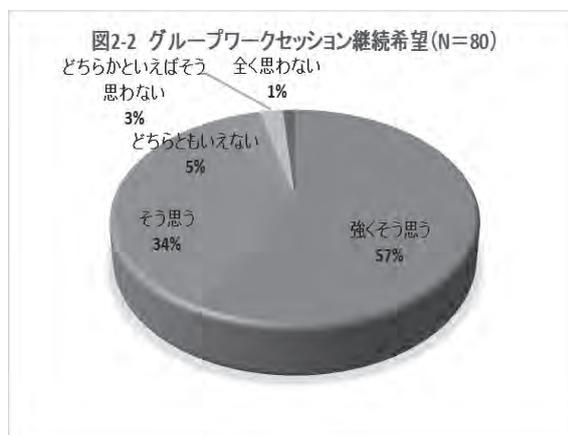
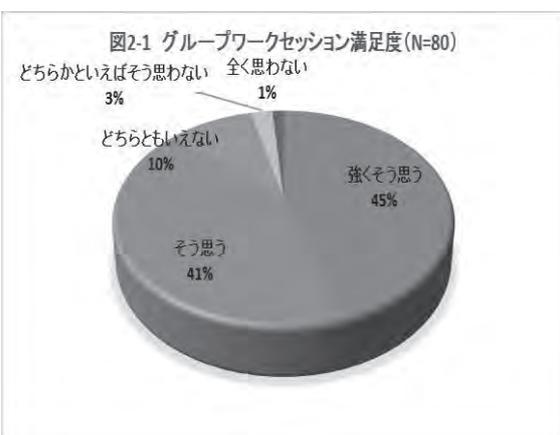
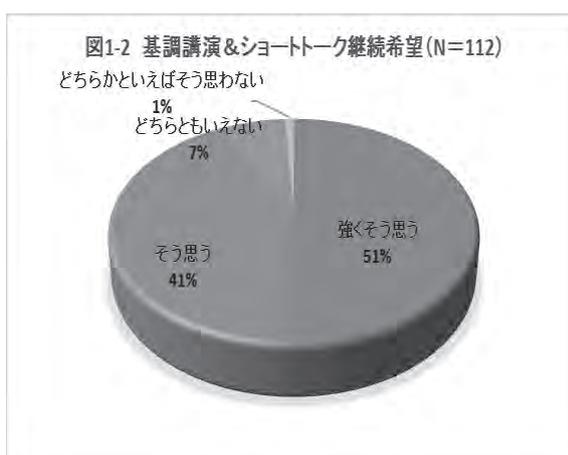
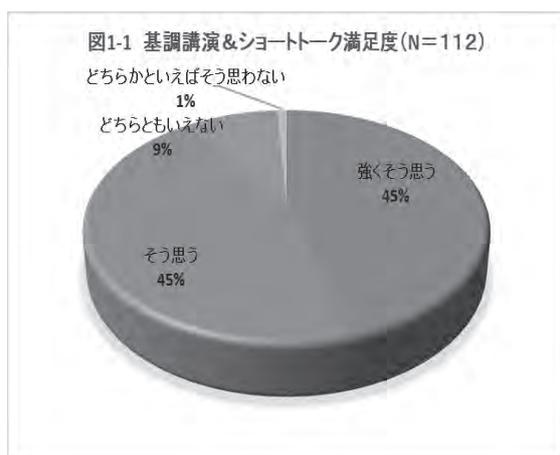


第二部 グループワークセッションの様子

成果及び今後の方向性：

当日の参加者の視線や発言から、大学職員の専門性、というテーマについて真剣に聴き取り、考えようとする前向きな姿勢が強く感じられ、参加者アンケートからは、第一部・基調講演、第二部・グループワークセッションともに、満足度が高く、かつ、継続的な開催を望む回答が多数を占めた（図 1-1～2-2 参照）。また、地域ネットワーク（コンソーシアム等）を活用した SD 活動（セミナー、勉強会等）に関する要望を聞いた設問では、「継続的に開催してほしい」「グループワークを通して出てきた課題等をもとに、セミナーや勉強会ができれば良いと思う」など、今後の活動の継続や更なる展開を希望する前向きな意見が寄せられた。当該アンケート結果を踏まえながら、来年度以降の FD・SD 企画の充実を図っていく必要がある。

大学コンソーシアムやまぐち運営委員会の下に「FD・SD 部会」を設置して 2 年目の企画イベントであり、今回は、大学間のネットワークを活かして、山口県立大学と徳山大学の若手職員に登壇いただいた。この企画は、基調講演者の吉武先生からもお褒めの言葉をいただくなど、非常に効果的なものであった。また、文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）の一環として、教学マネジメント強化の観点から、大学職員の専門性を意識付ける有意義な機会となった。



『大学職員の専門性について考えてみよう!』

平成27年12月18日(金)

13:30~17:15

山口大学 大学会館2階会議室
(山口大学吉田キャンパス内)



【参加費】無料

【主催】国立大学法人山口大学、大学コンソーシアムやまぐち

【共催】大学マネジメント研究会

【趣旨】「大学のガバナンス改革の推進について」(審議まとめ)(平成26年2月12日中央教育審議会大学分科会)を踏まえながら、大学職員としての専門性をテーマに、専門家を招へいた基調講演を行うほか、業務分野別の分科会形式でのグループワークを通して、各大学共通のテーマやノウハウの共有を図りながら、やまぐち地域の大学職員の人的ネットワークづくりの強化を促進することを目的とします。

なお、本セミナーは、文部科学省・大学教育再生加速プログラムにおける教学マネジメント強化のための取組を兼ねて開催させていただきます。

【概要】

【総合司会:山口大学大学教育機構大学教育センター准教授 林 透】

13:30~13:40	開会の挨拶・趣旨説明 山口大学理事・副学長 田中 和広
13:40~14:50	第一部 基調講演&ショートトーク
13:40~14:20	「大学職員に期待される専門性とは」 筑波大学ビジネスサイエンス系教授 (お茶の水女子大学監事、元筑波大学理事・副学長) 吉武 博通 氏
14:20~14:35	「教育・研究支援に発揮できる大学職員の専門性」 山口県立大学 経営企画部 財務グループ 中村 早苗 氏
14:35~14:50	「ダブルアドバイザー制度に発揮できる大学職員の専門性」 徳山大学 学生支援センター入試室 中嶋 智久 氏
14:50~15:00	[休憩]
15:00~17:10	第二部 グループワークセッション 「Let's Challenge -大学職員の専門性について考えてみよう!-」 分野別分科会(①教務・学生支援・就職支援、②学生募集・広報、③研究支援・外部資金獲得・産学連携、④国際交流・留学(生)支援、⑤大学経営・企画戦略・IR、⑥人事・研修・SD)から選択、グループワーク。
17:10~17:15	クロージング・閉会の挨拶 山口大学理事・副学長 吉岡 富雄

(17:30~18:30 情報交換会(場所:総合図書館1階 りぶカフェ、会費制:1,000円・ノンアルコール))

【参加申し込み・問い合わせ先】

参加ご希望の方は、12月7日(月)までに、別紙「山口大学・大学コンソーシアムやまぐちSDセミナー2015申込」に必要事項をご記入の上、郵送若しくはFAXにより、又は、件名を「SDセミナー2015申込」として、①所属・職名、②氏名、③第二部グループワークセッションの分科会希望(第一希望・第二希望)、④情報交換会参加の有無、⑤連絡先をご記入の上、E-mailにより、下記宛てにお申し込みください。

〒753-8511 山口市吉田1677-1

山口大学総務部人事課服務管理係 (担当:森本)

E-mail: sh029@yamaguchi-u.ac.jp tel: 083-933-5028 fax: 083-933-5024



山口大学・大学コンソーシアムやまぐち SDセミナー2015申込

ふりがな			
氏名			
職業	機関/大学名	部署名	役職名
TEL	() -	メール	@
第二部グループワークセッション 分科会希望		第一希望・・・ 第二希望・・・ <small>※分野別分科会(①教務・学生支援・就職支援、②学生募集・広報、③研究支援・外部資金獲得・産学連携、④国際交流・留学(生)支援、⑤大学経営・企画戦略・IR、⑥人事・研修・SD)から選択し、該当番号を記入ください。</small>	
情報交換会参加の有無について、 ○をつけてください		<input type="checkbox"/> 参加する <input type="checkbox"/> 参加しない	
ふりがな			
氏名			
職業	機関/大学名	部署名	役職名
TEL	() -	メール	@
第二部グループワークセッション 分科会希望		第一希望・・・ 第二希望・・・ <small>※分野別分科会(①教務・学生支援・就職支援、②学生募集・広報、③研究支援・外部資金獲得・産学連携、④国際交流・留学(生)支援、⑤大学経営・企画戦略・IR、⑥人事・研修・SD)から選択し、該当番号を記入ください。</small>	
情報交換会参加の有無について、 ○をつけてください		<input type="checkbox"/> 参加する <input type="checkbox"/> 参加しない	

※ 情報交換会は、会費制 (@1,000円)、ノンアルコールで行いますので、ぜひ参加してください。

【山口大学へのアクセス】



国立大学法人 **山口大学** sh029@yamaguchi-u.ac.jp
 〒753-8511 山口市吉田1677-1
 TEL 083-933-5028
 FAX 083-933-5024

山口大学・大学コンソーシアムやまぐちSDセミナー2015

大学職員に期待される専門性とは —地域の自立に貢献できる大学に向けて—

筑波大学ビジネスサイエンス系
吉武 博通
yoshitake@ira.fwll.u.tsukuba.ac.jp

講演のストーリー

1. 大学職員や事務組織の在り方に関する政策議論のレビュー
2. 大学を取り巻く状況と課題認識
3. 大学改革を阻む構造的問題とその解決に向けた道筋
4. 企業との比較における大学職員
5. 「高度専門職」の意義と育成
6. 大学職員に期待される専門性とは
7. 体系的な人材育成(Staff Development)の体系
8. 組織と職場と個人の関係、リーダーシップを育む組織文化の醸成
9. 社会に支持される大学であり続けるために

中央教育審議会大学分科会大学教育部会における審議の状況
平成27年7月8日大学分科会(第123回)配布資料より

(検討の趣旨)

中央教育審議会大学分科会「大学のガバナンス改革の推進について(審議まとめ)」(平成26年2月12日)において、以下のとおり指摘。

○学長がリーダーシップを発揮していくためには、大学執行部が、各学部・学科の教育研究の状況を的確に把握した上で、必要な支援を行ったり、あるいは、大学執行部自らが、全学的な具体的な方針を打ち出したりしていくことが前提となる。そのためには、例えば、前者の例として、リサーチ・アドミニストレーター(URA)やインスティテューショナル(IRer)、産学官連携コーディネーター等を、後者の例として、アドミッション・オフィサーやカリキュラム・コーディネーター等の人材を、大学本部が配置することが考えられる。また、その他にも、弁護士・弁理士等の資格保有者、広報人材、翻訳者等、高度な専門性を有する人材(高度専門職)を各大学がその実情に応じて活用し、全学的な支援体制を構築していくことが重要。

(検討の趣旨) つづき

○各大学による一層の改革が求められる中、事務職員が教員と対等な立場での「教職協働」によって大学運営に参画することが重要であり、企画力・コミュニケーション力・語学力の向上、人事評価に応じた処遇、キャリアパスの構築等についてより組織的・計画的に実行していくことが求められている。

○高度の専門性を有する職種や、事務職員等の経営参画能力を向上させるため、大学が組織的な研修・研究(スタッフ・ディベロップメント(SD))を実施することも重要である。

○学長がリーダーシップを発揮していくためには、補佐体制の充実が必要であることから、IRや入学者選抜、教務、学生支援、人事や財務、広報等各分野に精通した「高度専門職」の設置や恒常的な大学事務職員のスキル向上のためのSDの義務化等、今後、必要な制度の整備について、法令改正を含めて検討すべき。

中央教育審議会大学分科会大学教育部会における審議の状況
平成27年7月8日大学分科会(第123回)配布資料より

1. 「専門的職員」の設置 ～ 今後の検討の方向(案)

- ◆ 学長が適切なリーダーシップを発揮できるような大学運営体制を構築する上で、また、大学の教育研究機能の一層の高度化を図る上で、専門的職員は極めて重要な役割を果たすものである。
- ◆ 一方、我が国においては、大学の専門的職員に求められる職務、資格(求められる能力)等が明確でないとの指摘や、大学における専門的職員の養成の場が不十分であるとの指摘、高度な専門性を有する者であっても、一般的な職員と同様の取扱とされてしまうことによる課題についての指摘などがある。
- ◆ これらを踏まえ、今後、大学における専門的職員の活用を促進するため、専門的職員に関する活用の事例を収集しつつ、専門的職員に関する職務等を、例えば、管理運営、教育研究活動の支援、学生支援などの観点から整理すること、あわせて、大学に、専門的知見を有する職員を置くことができることを、法令等において明確にすることが考えられる。

中央教育審議会大学分科会大学教育部会における審議の状況
平成27年7月8日大学分科会(第123回)配布資料より

2. 大学職員の資質向上(FD・SD) ～ 今後の検討の方向(案)

◆ 今後、大学運営の一層の改善・充実に図るためには、大学職員を対象として、計画的な資質向上策を推進することが重要であると考えられる。このため、大学が、その運営の一層の改善・充実に、現行のFDだけでなく、大学職員の資質向上のための研修についての計画を企画し、実施することについて、法令等において明確にすることが考えられる。

3. 「事務組織」の見直し

①事務組織に関する現状

- 学校教育法第92条には、大学には、学長、教授、准教授、助教、助手及び事務職員を置かなければならないと規定している。
- また、事務組織については、大学設置基準第41条において、大学は、その業務を処理するため、専任の職員を置く適當な事務組織を設けることが規定されている。なお、本規定は、大学設置基準が設けられら昭和31年から改正はされていない。

3 「事務組織」の見直し つづき

②事務組織に関するこれまでの主な指摘等

- 事務組織は、大学における様々な政策決定に関与し、また、これまで以上の奉命が望まれている実情がある。
- 調査では、各大学における政策決定に対する事務局の影響度合いについて、(多い順に)「就職支援」「学生募集」「学生支援」「施設計画」「財政計画」「事業計画」などの項目で、「かなりある」との回答が多くなっている。
- また、別の調査では、「職員を学内委員会の正式委員にするなど、発言の機会を増やす」ことについて、「望ましい」と回答した大学は41.3%、「ある程度望ましい」と回答した大学は51.0%である。また、「企画立案に関わる職員を計画的に養成すること」について、「望ましい」と回答した大学は47.1%、「ある程度望ましい」と回答した大学は47.0%となっている。

3 「事務組織」の見直し つづき

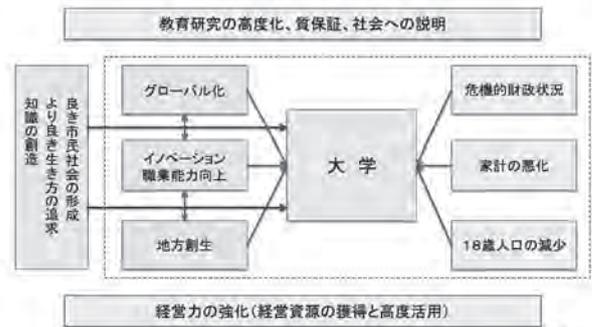
③今後の検討の方向(案)

- ◆事務組織については、その人事や組織や職務等の在り方について、国が一律に定めることは適当でなく、各大学が、それぞれの実情を十分に踏まえ、自主的・自律的に判断し、組織の在り方を決定することが重要である。
- ◆一方、現行の事務組織については、大学設置基準上、単に事務を処理することを目的としており、事務組織に対する期待の高まりやその役割の重要性等の実情を考慮すれば、より積極的な位置付けにすべきではないかとの意見がある。
- ◆このため、事務組織の実情を踏まえ、大学運営の一翼を担う組織としての機能をより一層発揮できるよう、大学の事務組織は、学長、学部長その他の組織の長を補佐し、当該大学の管理運営、教育研究活動の支援、学生支援その他の業務を行うことを目的とした組織であるとの趣旨を、法令等において明確にすることが考えられる。

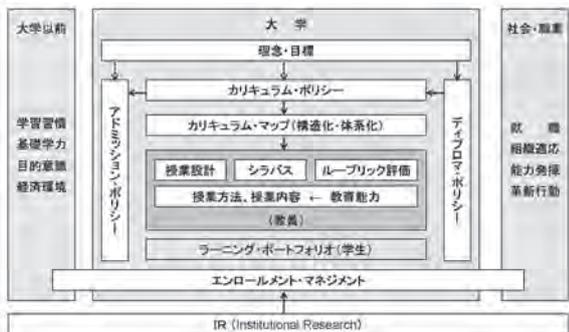
これらの政策議論に対して考えること

- 大学職員や事務組織の役割を重視し、その位置付けを法令等で明確化することの意義は大きい
- その一方で、大学の諸機能を担う人的資源が、質と量の両面において充足されているのか、不足しているならば、どのように確保または育成すべきなのかは、一義的に各大学の責任で考え、対処すべき問題ではないか
- 近年の大学のガバナンス改革の主題は、学長のリーダーシップの発揮にあり、それを支える存在としての大学職員や事務組織という面が強調されているように思われるが、その考え方は正しいのだろうか
- 加えて、「リーダーシップ=トップダウン」的な発想でトップが決定・指示し、「民主的プロセス」を重視する教員に反発や戸惑いが広がるという状況が生じていないだろうか

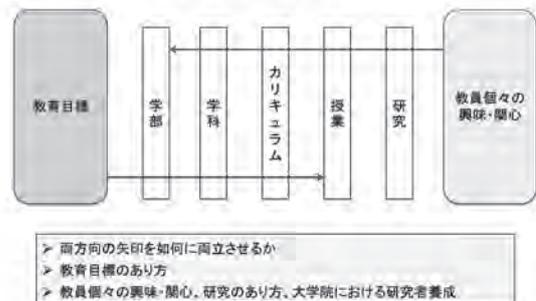
大学を取り巻く状況と課題認識



大学教育改革に関する諸概念の関係～実現のためには高度な組織的営みが必要



教育改革の構造と課題を考える



大学改革を阻む構造的問題

- 大学は、自立した個である教員を構成員とする「共同体的組織」として発展し、それを補充する形で「経営体的組織」が発達。その重要性が増しつつあるが、二つの要素をどう組み合わせる機関として最適な組織設計を行うか、その弊が見出せていない
 - ・ 共同体的組織：構成員の責任で自らの組織を規律づける。～ 教員組織
 - ・ 経営体的組織：共通目的、指揮命令系統。～ 法人組織、事務組織
- 権限を巡る議論は盛んだったが、個々の組織や教員・職員に期待する役割、個々の組織や教員・職員が負うべき責任が曖昧なままであった
- 共同体的組織であっても経営体的組織であっても、それを運営する能力を持った人材の育成システムが確立できておらず、運営方法自体も未成熟
- 組織の複雑化、課題の高度化に対応したシステム(業務プロセス)が未確立
- 「組織」は分業と協働のシステムだが、教員間、職員間、教員・職員間で協働が行われにくい風土が残る

大学に相応しいガバナンスとマネジメントの確立に向けて

1. 組織・職位の機能・役割を明確にし、権限とともに、負うべき責任を明確にした組織設計
2. 効率的で分かり易い業務プロセス、「見える化」の徹底と確かな事実に基づく解決・改善
3. 学長、副学長、学部長及び幹部職員に登用すべき人材の発掘と育成の仕組み
4. リーダーシップを育む組織文化の醸成
5. 教員個々の興味・関心と組織としての教育の質保証を両立させる仕組み
 - ・ 大学と学部、学部と学科、学科と教員の間でのグリップ(=コミットメント)
 - ・ 教員による教育改善の後押し(社会的要請、国の政策・大学の方針等の情報共有、教育能力開発の機会、意欲のある教員へのサポート 等)
 - ・ 長期的には配置方針と採用基準を明確化にし、戦略的な教員人事を推進
6. 求める職員優及び配置・育成方針の明確化、学習(仕事、職場、研修)環境の点検と整備
7. 大学自身の五感でステークホルダーの真のニーズを感じ、深く未来を洞察することが大切

大学マネジメントを担う人材が成長する場づくり

【組織の設計】

- 組織の役割・機能の再設計・明確化
- 意思決定と業務プロセスの再設計・明確化
- 個々に期待する役割と責任・権限の明確化～ヨコの役割分担、タテの役割分担
- 仕事にあたって重視すべき価値の共有
- ICT(情報通信技術)の高度利用

【組織における個人の理解】

- 個々人が大学で働くことに何を求めているのか、何を重視して働いているのかを理解することがすべての出発点
- 能力(知識、スキル、態度)の見極め
- 対話(コミュニケーション)の重視

【自校に相応しい人事管理の確立】

- 求める職員像の明確化(期待する役割、組織として重視する価値)
- キャリアパスの明示、ダイバーシティ・マネジメント
- 公平な評価と処遇。～ 貢献と処遇の均衡を見極める冷静さも必要
- 体系的な人材育成システム
 - JTとOff-JT、特に、課長層以上に対する研修機会、中小規模校における研修機会の確保
- HRM(Human Resource Management)部署または担当者の役割の再認識と意識改革

企業との比較における大学職員

吉武博通(2015)「企業との比較における大学職員」『IDE 現代の高等教育』No.508,民主教育協会,pp.23-28

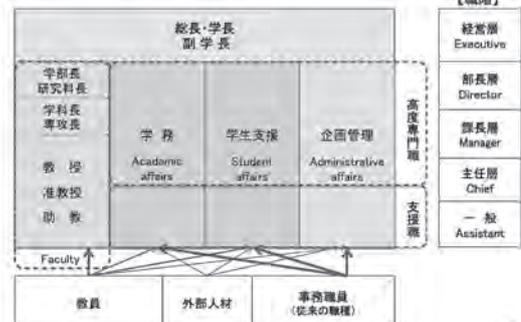
1. 「公の性質」の大学と厳しい環境を生き強い企業
2. 職員の役割に関する認識の統一と定着が課題
 - ・ 職員の役割を事務や支援として限定的に捉える体質が色濃く残っている面もある
3. 一貫した方針に基づく人事マネジメントの重要性
 - ・ 期待する人材像の明確化、それに基づく配置・育成、公平な評価・処遇
4. 人事に関する信頼なしに能力を引き出すことはできない
5. 求められる革新的・自発的行動
 - ・ 基本に忠実という大学の職員組織の良さを維持した上で、多様化する課題に能動的に取り組み、新たな仕組みや方式を創造し、絶えず改善を重ねながら質の高度化を効率化を追求する、という状態に組織全体を引き上げていく必要がある
6. 磨り下げて筋道立てて考える力を身につける
7. 大学が職員の成長を促す学習の場となり得ているか

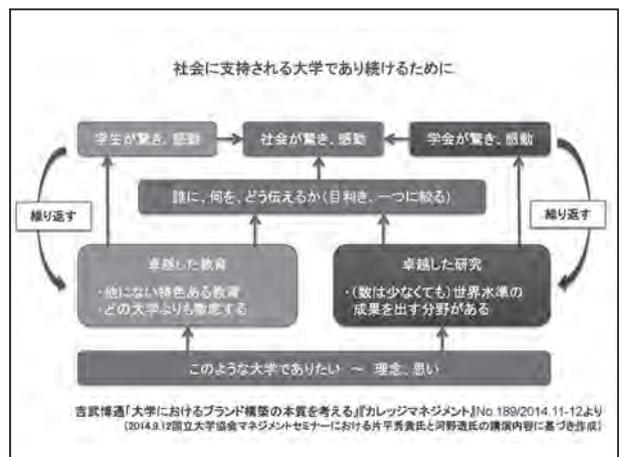
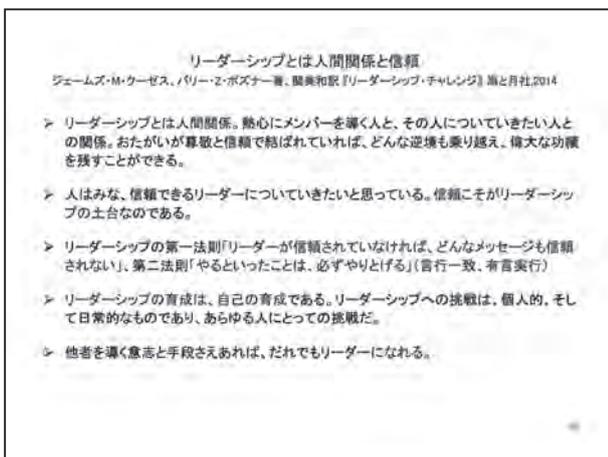
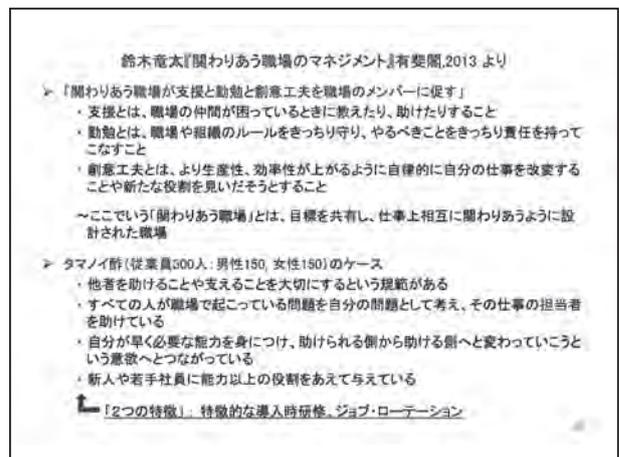
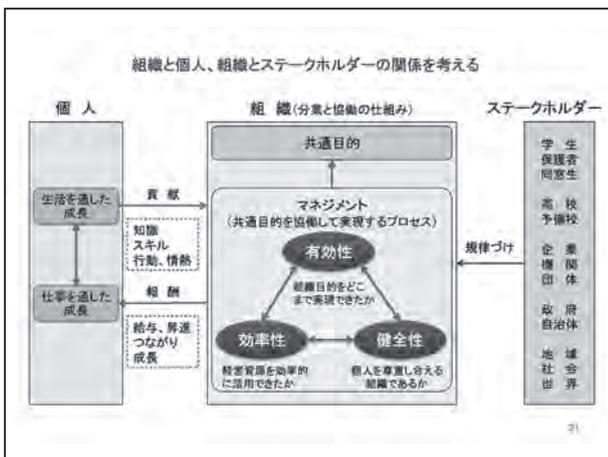
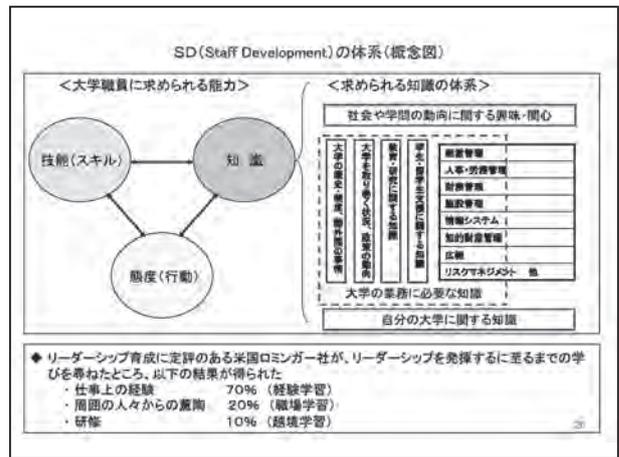
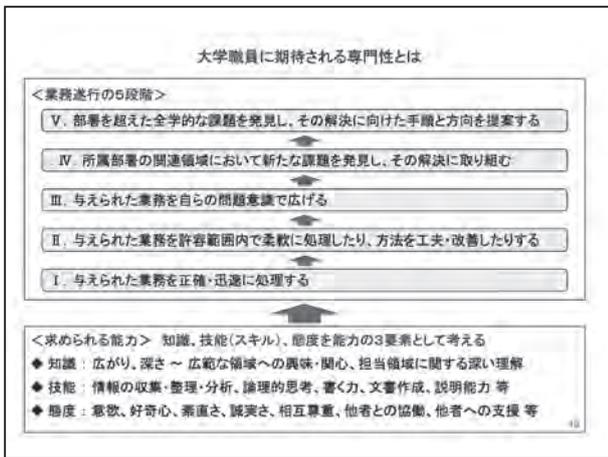
「高度専門職」の意義と育成

吉武博通(2015)「大学における「高度専門職」の意義と育成について考える」『カレッジマネジメント』No.181,リクルート,pp.54-57

- 高度専門職の設置と事務職員の高度化
- 法令上「職員」は教員を包摂する最も広い概念
- 高度専門職を組織・人事管理上どう位置付けるか
- 急速に増加するURAも試行錯誤の段階
- 長期雇用が中心の日本の大学に専門職は根付くのか
- 基幹的業務を担う社員の多くは高度専門職
- 強化すべき機能とその方法を筋道立てて検討
- 「職種」中心から脱却し、「機能本位」の枠組みへ

大学の組織・人事管理の枠組みに関する試案(イメージ)







私が考える
教育・研究支援に発揮できる
職員の専門性とは？

1. 関係法令、学内規程等を熟知し活用できる
2. できることを考え実行する
3. 教職協働
4. 業務の標準化（マニュアル化）

本日の内容

1. 自己紹介
2. 教育研究推進室の業務
3. 主な担当業務(教育・研究支援業務)
4. 具体的な取組内容
5. 教育・研究支援に発揮できる大学職員の専門性とは？
6. これから(今後の目標)

自己紹介

2003年 山口県立大学 生活科学部生活環境学科 卒業
 2005年 財団法人防長青年館に入職
 2007年 公立大学法人山口県立大学プロジェクト支援室 嘱託職員
現代GPFやまぐち多世代交流・地域共生授業の展開」地域コーディネーター
 2010年 公立大学法人山口県立大学に入職 教育研究推進室
 2015年 経営企画部財務グループ(9月から)

教育研究推進室の業務

(所掌事務)
 第2条 教育研究推進室は、次の事務を処理する。
 (1) 教職員の組織的な研修に関すること
 (2) 教育改革に関すること
 (3) 教育評価に関すること
 (4) 教育の質の向上に係る長期展望に関すること
 (5) その他教育企画に関すること
 (6) 研究推進体制の整備に係る企画及び調整に関すること
 (7) 科学研究費補助金申請の支援及び調整に関すること
 (8) 生命倫理委員会及び動物実験委員会の庶務に関すること
 (9) その他研究活動の活性化に関すること

(山口県立大学教育研究推進室規程より抜粋)

主な担当業務(教育・研究支援業務)

【教育】

- ① 文部科学省大学教育再生戦略推進費（GP等）に係る業務
- ② FD・SDの企画運営
- ③ 「地域に関わる『マインド』の育成」（第2期中期計画）に係る業務

【研究】

- ① 科研費に係る業務
- ② 研究倫理に係る業務（研究活動における不正行為、生命倫理、動物実験など）

具体的な取組内容①

【教育】

- ① 文部科学省大学教育再生戦略推進費（GP等）に係る業務
＜補助金申請業務＞
 - 2010年度補助金業務を担当
 - 2012年度「経済社会の発展を牽引（けんいん）するグローバル人材育成支援」採択

具体的な取組内容②

【教育】

- ② FD・SDの企画運営
 - 2010年度SDの企画及びFD（参加型FD）運営を担当
 - 2014年度全学FD・SDの企画・運営を担当
 - ・教育、研究、地域貢献、学生支援、国際化、大学運営を柱に、学内のニーズを調査した上で、プログラムを企画

具体的な取組内容③

【教育】

- ③ 「地域に関わる「マインド」の育成」（第2期中期計画）に係る業務
＜該当プログラムの調査＞
 - ・学生向けパンフレットの作成（平成26年度版、27年度版）
＜学生の参画状況の把握＞
 - ・4年生向けにアンケートを実施
 - ・ウェブ入力システムの導入と入力マニュアルの作成

具体的な取組内容④

【研究】

- ① 科研費に係る業務
＜申請支援業務＞
 - 2013年度科研費業務を担当
 - 採択率向上に向けた取組の企画（2014）
 - ・科研費『Try again!!』プロジェクト（2014）企画・運営
 - ・科研費申請に関する学内版WEBページの作成
 - ・採択調査閲覧サービス開始
 - ・科研費申請チェックリストの作成
 - ・英語論文投稿支援（助成金）の企画

具体的な取組内容⑤

【研究】

- ② 研究倫理に係る業務（研究の不正行為、生命倫理、動物実験など）
＜機関内規程・マニュアルの整備等＞
 - ・「人を対象とする研究」の規程・各種様式、審査手順等の整備
 - ・「人を対象とする研究」チェックリスト・記入例の作成
 - ・研究活動の不正行為の防止等に関する規程の改正
 - ・動物実験の相互検証プログラムへの対応（体制整備等）

教育・研究支援に発揮できる 職員の専門性とは？①

1. 関係法令、学内規程等を熟知し、活用できる

- ・法令・規程等を確認し、裏付け・根拠に基づき説明ができる。
- ・担当業務に責任を持つ。
- ・法令で教員の柔軟な発想を縛り付けるのではなく、教員の発想を実現するために、関係法令・規程等を活用する。

2. できることを考え実行する

- ・今持っている能力を最大限活かして業務に取り組む。
- ・現状に満足しない。
- ・学内の資源を有効活用する。

教育・研究支援に発揮できる 職員の専門性とは？②

3. 教職協働

- ・相談によってくれる教員・職員がいる。(信頼関係の構築)
- ・自分自身に求められている役割を理解している。
- ・個々の個性を理解し、円滑なコミュニケーションをとることができる。
- ・教員の教育・研究に興味・関心を持つ。

4. 業務の標準化(マニュアル化)

- ・業務の中で培った専門性を自分のものだけにしない。
- ・異動やジョブ・ローテーションに備えて、マニュアルを整備する。
(担当者が代わると業務の水準が低下するのでは意味がない。)

Yamaguchi Prefectural University

11

これから(今後の目標)

(短期目標)

- ・担当業務を迅速かつ正確に処理できる。
- ・財務の関係法令・規程に関する知識、会計に関する知識の習得。
- ・商業簿記3級合格。

(中期目標)

- ・決算書のしくみと読み方を知る。
- ・管理会計の基本的な知識を習得する。

(長期目標)

- ・スペシャリスト&ゼネラリスト→プロフェッショナル
担当業務のスペシャリストを目指しつつ、様々な業務を経験し、多角的な視野と幅広い知識を持った上で、本学の教育研究の発展に貢献できる職員へ。

Yamaguchi Prefectural University

11



平成 26 年度山口県立大学 F D / S D プログラム

No		内容	講師	日時	備考
1		【FD/S D】英語研修 ① 自分自身や自分の仕事について ② YPU に海外からのゲストを迎えるための英会話術 ③ 海外からのゲストや留学生に対応するための英会話術 ④ 山口の歴史と文化の紹介の仕方について	Jim・Rebstock 氏 (本学非常勤講師)	① 8月19日(火) 10:00-12:00 または 13:00-15:00 ② 8月22日(金) 10:00-12:00 または 13:00-15:00 ③ 8月26日(火) 10:00-12:00 または 13:00-15:00 ④ 8月29日(金) 10:00-12:00 または 13:00-15:00	国際化推進室主催として事務職員向けのSDプログラムですが、教員の方も参加できます。
2	☆	【FD】科研費研究計画調書の書き方 外部有識者をお招きし、研究計画書の書き方をおさらいした後、研究計画を立てる上で必要なロジックの組み立てを中心にお話しをいただき、採択される研究計画調書について学びます。(事前登録者数が20名に満たない場合は中止とします。)	外部有識者(本人の希望により公表をしないこととしています。)	9月8日(月) 10:00-15:00(12:00-13:00 お昼休憩)	
3		【SD】全学SD(事務職員全員参加) 学長が掲げるスローガン「誰もが成長を実感できる大学へ」の実現に向けて、午前中は公立大学及び本学の課題、他大学の事務職員事例を学び、午後は事務職員全員で、大学職員としてどのように成長していくか、学生、大学の成長のために何をすべきか、そのために職務の効率化をいかに図るかについてグループワークで検討します。	中田 晃氏(一般社団法人公立大学協会 事務局長) 吉崎 誠氏(関西外国語大学 事務局長)	9月12日(金) 9:00-17:00	※事務職員限定
4		【FD/S D】学生の主体的な学びに なげる: WEBかるちゃーを使いこなそう!! 「WEBかるちゃー」をご存知ですか? すでに、共通教育機構や3学部63名の先生方が使われています。LMS(Learning Management System)の授業活用例を紹介し、実際にWEBかるちゃーを使った事前資料の提示や小テストの作成、課題の提出やコミュニケーションボード等を使っていただきます。	宇田川 暢特任職員(情報化推進室) 吉兼 伸子講師(看護栄養学部) 吉岡 一志講師(共通教育機構)	9月18日(木) 13:00-15:00	情報化推進室 & 教育研究推進室共催
5		【FD】地域志向教育研究助成プロジェクトの可能性について COC事業「地域志向教育研究助成プロジェクト」の平成27年度応募チーム結成の機運を高めることを目的に実施するものです。内容は、参加者人数等によって再調整したいと思います。が、現時点では、①プロジェクトリーダーからの研究事例報告、②プロジェクト支援者を交えた研究実施過程の裏話、③FD参加者との意見交換、④新規研究チーム結成過程における支援内容説明、⑤応募に関する個別相談、等を予定しています。	平成24年度~26年度の研究プロジェクト代表者、横山 正博教授(健康福祉学研究所)ほか。	9月25日(木) 12:50-16:10	地域共生センター & 教育研究推進室共催
6	☆	【FD】学術図書の出版について(出版の仕方、電子書籍の作り方) 大学の教育研究を外部に発信するための学術図書の出版について、出版社と連携した取り組みについて学びます。本の出版について考えてみたい方にお勧めです。学術出版を手掛けてこられた編集者の視点から出版のノウハウや可能性についてお話を伺い、また比較的簡易に発行できる電子書籍の作り方についても合わせて説明していただきます。	九州大学出版会 株式会社梓書院	9月11日(木) 13:00-16:00	

No		内容	講師	日時	備考
7		<p>【SD】事務職員のキャリアパスについて 組織の目標と個人の目標を明確にし、個々の能力開発を組織の成長につなげるための研修内容・方法等について考えます。</p>	川村 和弘主査（人事グループ）	12月11日（木）13:30-17:00	※事務職員限定
8		<p>【FD/SD】学生支援について（カルトから学生を守る） ※三大学連携事業 日本全国の大学で、カルトによる学生への勧誘活動が行われています。本学においても実際に学生がカルト問題に巻き込まれるという事例があります。カルトのマインドコントロール研究や詐欺・悪質商法の心理学研究を行っている西田教授をお招きして、三大学での事例についての紹介及びその対応策について学びます。</p>	西田 公昭氏（立正大学 教授）	12月25日（木）14:00～16:00	三大学連携推進オフィス&教育研究推進室共催 ※三大学 山口県立大学 山口東京理科大学 山口学芸大学
9	☆	<p>【FD】ティーチングポートフォリオ 看護栄養学部で3年間行ってきたFDを全学展開します。教員としての教育歴をふりかえり、教員である意味やこれからを考えるTP、そのステップアップとして研究者としての研究歴を振り返り、これからを考えるTPについて理解を深め、TPの作成を通じて大学教員としてのキャリア形成を行い、大学教員としての経歴づくりや教育研究活動の改善につなげます。（定員：10名以内、応募者多数の場合は抽選となります。）</p>	北野 健一氏（大阪府立大学高専 教授）ほか	ミニワークショップ 2015年2月27日（金）10:00～12:00 ワークショップ 2015年3月15日（日）13:00～17日（火）17:00	
10	☆	<p>【FD】授業デザインワークショップ 様々な大学で、授業デザインワークショップを実施している愛媛大学教育企画室から講師をお招きし、学士課程・学生が身に付ける力をふまえた教育目的・目標の設定のしかた、目的・目標を達成するための15回の授業をどのようにデザインするのか、またその中にグループワーク等学生が主体的に学ぶための手法をどう取り入れたらよいかをワークショップ形式で学びます。</p>	愛媛大学教育企画室 清水 栄子氏	2015年2月20日（金）10:00～16:00	
11	☆	<p>【FD/SD】ハラスメントについて 実際に起こった裁判事例に基づき、ハラスメントが起こるポイントや未然に防ぐためにどう対処すべきか等について、参加者同士が議論しながら学びます。</p>	藪本 知二 准教授 （アンチハラスメント委員会委員長）	2015年2月12日（木）9:00～12:00	アンチハラスメント委員会&教育研究推進室共催
12		<p>【FD/SD】英語研修 I 英語による論文作成について ①英語による論文作成 個人指導（予約制） ②英語による論文作成 個人指導（予約制） II 英語によるアカデミックプレゼンテーションについて ①英語によるプレゼンテーション 個人指導（予約制） ②英語によるプレゼンテーション 個人指導（予約制）</p>	I Simon Fraser, Ph.D.（広島大学外国語教育研究センター准教授） II Ian Nakamura, Ph.D.（岡山大学言語教育センター教授）	①2月17日（火）10:30～12:00 13:00～14:30 ②2月20日（金）10:30～12:00 13:30～14:30 ①3月24日（火）10:30～12:00 13:00～14:30 ②3月25日（水）10:30～12:00 13:00～14:30	国際化推進室主催

No		内容	講師	日時	備考
13		<p>【FD】主体的な学びを促進するアクティブラーニング</p> <p>教員がファシリテーターの役目を担い、事前に学習してきたことを授業時間中にワークショップや討論といった形で内容を深める授業方法について、Y-ACTで行っているグローバル事業を事例に紹介します。新カリで共通教育科目として開設される「域学共創ワークショップ」を例に、4回の授業を1サイクルで回し、学生が自らの学びのスタイルを獲得する手法について紹介しつつ、アクティブラーニングの意味や方法、効果について議論します。また、語学学習のe-learningについて、LaLaboでの取り組み事例を使って、すべての学部生が学ぶ英語について主体的な学びの効果についても考えます。</p>	<p>齊藤理准教授（文化創造学科）</p> <p>杉澤経子氏（東京外国語大学）</p>	<p>2015年2月26日（木）14:00</p> <p>～</p>	<p>グローバルオフィス&共通教育機構&教育研究推進室共催</p>
14	☆	<p>【FD/SD】著作権に関する問題について</p> <p>本学でも昨年度イラスト等の著作物の使用等において問題がありました。著作権について教職員が理解を深め、学生に対する著作権の指導等教育研究活動の充実を図ります。</p>	<p>大谷卓史氏（吉備国際大学アニメーション文化学部）</p>	<p>9月9日（火）13:00～15:30</p>	<p>情報化推進室&教育研究推進室共催</p>
15		<p>【FD/SD】次世代プレゼンテーションについて（仮）</p> <p>人々の記憶にのこるプレゼンテーションを体験してみませんか？</p> <p>Zooming可能な「Prezi」に代表されるプレゼンテーションの使い方の紹介等を行います。次世代プレゼンテーションを使うことで、学生の授業への集中力向上につながるかもしれません！！</p>	<p>吉永 敦征 准教授（情報化推進室）ほか</p>	<p>2015年2月18日（水）10:00</p> <p>～</p>	<p>情報化推進室&教育研究推進室共催</p>

<その他>任意参加プログラム

【FD公開講演】平成26年度第4回健康福祉学研究会

日時：平成26年11月26日（水）18:00～19:00

場所：4号館D-14教室

講演タイトル「研究倫理について～問題の所在と解決への糸口～」

講演者 谷田憲敏先生（前山口大学大学院医学系研究科 教授）

【FD/SD】平成26年度山口大学全学FD・SD講演会「障害者差別解消法施行向け、大学としての対応を考える」

日時 平成26年8月6日（水）13:30～16:00

場所 山口大学 共通教育メディア講義室

①全学 F D / S D (全員参加となります)

日時 平成 27 年 9 月 7 日 (月) 10 時 ~ 17 時 00 分 場所 6 号館 F204 講義室

時間	内容	講師 (予定)	備考
I. 午前の部 10:00~11:30	(1) 研究倫理について 講演「研究活動における不正行為とは何か」 * 研究倫理教育はすべての教員が受けなければならないことになっていますので、受講の出欠を取り、記録として保管することになっています。	池田 光穂氏 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授)	教員
11:30~12:00	(2) 研究費の適正執行について * コンプライアンス教育の受講後、誓約書にサインをいただくことになっております。(未提出者のみ) (3) 平成 28 年度科研費公募について	総務グループ 教育研究推進室	教員
II. 午後の部 13:00~14:20	(1) 講演「大学教員・職員の役割とキャリアステージ」 専門職としての大学教員ならびに大学職員は、それぞれの専門性をもちつつ、一つの大学組織という文化的風土のなかで役割分担を行い、大学独自のミッションのもとで学生を育てて社会に出していくという共通の人材育成目標を有しています。大学教員・職員のもつべき知識・技能・態度の枠組みや、資格・キャリア育成プログラムといった考え方も検討されている今日、本学での教員・職員のキャリアについて考えます。	吉武 博通氏 (筑波大学 大学研究センター長)	教職員
14:20~15:20	(2) ワークショップ「山口県立大学教員・職員の行動指針をつくる」 以下のような観点や資料をもとに、本学の大学教育や教職員のキャリア構築にむけて共有できる行動指針・行動規範・クレドといったものについて話し合います。 (観点例) ・ 山口県立大学の社会的存在意義と将来ビジョン ・ 教育の質の向上のための教職協働 ・ 山口県及び近県の少子高齢化の現状をふまえた学生募集のあり方 ・ 地域の自立に対する大学の貢献 ・ 教員・職員の役割分担を活かす業務環境のあり方等 (参考資料例) ・ 山口県立大学の理念、目的 ・ 就業規則、教員や職員に求める人材像 ・ 山口県立大学人事評価に関する資料 ・ 他大学の教員・職員行動指針・規範例等	教育研究推進室・人事 G	教職員
15:30~16:30	(3) 松本大学の挑戦 長野県、長野市が出資して公私協力方式で設立され、わずか 10 年間で「松本大学のミラクル」とまで称されるようになったのはなぜか。専任職員 32 名、教員約 60 名で 2 学部 4 学科・1 研究科からなる「地域立大学」を動かした力についての話を伺い、バリアフリーの考え方、GP 獲得、出版会、地域ニーズに応える学生プロジェクトなどを参考に、本学の地域貢献大学としての立ち位置や教職員力について考えます	赤羽 研太氏 (松本大学 総務課長)	教職員
16:30~17:00	(4) 上記ワークショップ(2)に対する講師からのコメント、質疑、まとめ等	教育研究推進室・人事 G	教職員

②選択型FD/SD

※日時・会場が未定のプログラムは追って連絡します。

No	内容	講師(予定)	日時・会場	備考
1	<p>【FD】 科研費研究計画調書の書き方</p> <p>「科研費獲得の方法とコツ」の著者である児島将康先生をお招きして、採択される科研費研究計画調書の書き方のコツについてお話していただきます。本年度の科研費申請に関して早めに計画書案を作成され、相談されることをお勧めします。事前予約受付開始します。</p>	<p>児島将康氏(久留米大学分子生命科学研究所遺伝情報研究部門教授)</p>	<p>8月31日(月)13:30~16:30 4号館D-24教室(Y-ACT) 13:30~15:30講演 15:30~16:30申請書個別相談(※) ※事前予約制(先着順)</p>	
2	<p>【FD/SD】 ICTを活用した教育の改善</p> <p>本学でもLMSやアクティブラーニングといった学生の主体的な学びを取り入れた授業が増えてきました。今回は講義編集機器を使って事前に講義や講義資料の一部を学生に学ばせ、授業では学生の参画を促す反転授業の例や、課題やレポート、試験の解答用紙を学生に反してフィードバックを行う機器等を使う教育改善について紹介します。</p>	<p>本学教員等</p>	<p>9月10日(木)13:00~ 4号館D-24教室(Y-ACT)</p>	<p>情報化推進室・グローバル人材育成支援チーム&教育研究推進室共催</p>
3	<p>【FD】(仮題) 地域課題・県政課題について</p> <p>COOの地域共生研究や学内研究創作助成における県政課題・地域課題解決型の研究のテーマの設定の仕方について参考となる視点や領域、アプローチの仕方などについて紹介します。</p>	<p>山口県商工労働部 新産業振興課 調整監 小関氏</p>	<p>9月8日(火)13:30~</p>	<p>附属地域共生センター&教育研究推進室共催</p>
4	<p>【FD】 学術図書の出版について(出版の仕方)</p> <p>研究・教育業績として学術図書の刊行及び教科書の出版は重要視されています。本学教員の事例を紹介した後、昨年度より入会している九州大学出版会を通じて図書及び教科書の出版を行うための手続きや、他の学術出版助成等を活用する際の支援内容等についてお話していただきます。</p>	<p>九州大学出版会</p>	<p>9月2日(水)10:00~12:00(予定) 4号館D-24教室(Y-ACT)</p>	
5	<p>【FD】 ティーチング・ポートフォリオ(TP)</p> <p>本学ではすでに24名の教職員がティーチング・ポートフォリオ修了証を、また4名の教員がアドミナティブ・ポートフォリオ修了証を受けています。教員としての教育歴をふりかえり、自らのキャリアとこれからの考えるTP、そのステップアップとして研究者としての研究歴の上に積み上げるものを考えるTPの作成を通じて、大学教員としての経歴づくりや教育研究活動の改善につなげます。 *まだ受けておられない方、新規採用された方には、ぜひ受講をお勧めします。</p>	<p>北野 健一氏(大阪府立大学高専教授)ほか</p>	<p>ミニワークショップ 8月31日(月)10:00~12:00 4号館D-24教室(Y-ACT) 定員40名程度 作成ワークショップ 平成28年2月13日(土)~15日(月) 定員10名程度</p> <p>※どちらか一方の参加も可能です。</p>	
6	<p>【FD】 授業デザインワークショップ</p> <p>学士課程において学生が身に付ける力をふまえた教育目的・目標の設定のしかた、目的・目標を達成するための15回の授業をどのようにデザインするのか、学生の学修意欲に結び付ける授業のデザインや評価についてお話していただきます。基本は昨年度と同じですが、昨年度は授業の中で使うアクティブラーニングの手法に特化しましたが、今年度は事前事後学習時間を確保するための課題の出し方を中心にお話します。</p>	<p>清水栄子氏(愛媛大学教育企画室講師)</p>	<p>9月14日(月)10:00~16:00 4号館D-24教室(Y-ACT)</p>	
7	<p>【FD/SD】 ハラスメントについて</p> <p>実際に起こった裁判事例に基づき、ハラスメントが起こるポイントや未然に防ぐためにどう対処すべきか等について、参加者同士が議論しながら学びます。</p>	<p>藪本 知二 准教授(アンチハラスメント委員会委員長)</p>	<p>平成28年2月16日(火)13:00~16:00</p>	<p>アンチハラスメント委員会&教育研究推進室共催</p>

③その他のプログラムのご案内（任意参加です。）

No	内容	講師（予定）	日時・会場	備考
1	文献管理・論文作成支援ソフト EndNote※について 論文作成支援ソフトとして世界中の研究者に使われているソフトの使い方について、昨年度の健康福祉学研究科の研修に引き続き、まだ使っていない方、使い方を知りたい方に向けた研修を行います。	ユサコ株式会社	9月18日（金）13:00～16:00（予定）	
2	コピペルナーについて（仮） 学生がレポートや論文などを作成する際、インターネットや知人の文章から不正な引用（コピペ）を行うことが社会問題となっています。レポートや論文チェックの際に使用するコピペ判定支援ソフト「コピペルナー」の使い方に関する研修会です。		10月予定	大学院主催
3	英語で開講する科目担当者を対象とした授業改善 英語で開講する科目を担当される教員に、後日、担当者から案内がいきます。		11月予定	グローバル人材育成支援プロジェクトチーム
4	PROG テストについて PROG とは、専攻・専門に関わらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向—ジェネリックスキルを育成するためのプログラムです。 今年度から「キャンパスライフ」入門において、1年生を対象に実施している PROG テストに関する研修会です。	株式会社リアセック	9月2日（水）13:00～	共通教育機構

※EndNote は論文作成支援ソフトとして、世界中で約 20 万人の研究者に愛用されています。

ダブルアドバイザー制度に 発揮できる大学職員の専門性

徳山大学
学生支援センター 入試室
中嶋 智久

自己紹介

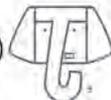
- ・山口県宇部市出身
- ・昭和60年生まれ(30歳)
- ・人材サービス企業、就労支援機関での
経歴を経て、現在徳山大学で勤務
- ・教務課2年、入試室2年の経験



Wアドバイザー制度とは？

教員と職員がペアとなって、
1学年数人の学生を担当し、卒業
までの4年間を通じて、学生生活や
履修に関する相談をはじめ、
キャリア設計や就職などあらゆる
相談に応じる制度

(2002年度～)



徳山大学のスペック

- ・学部: 経済学部、福祉情報学部
- ・学生数: **957**名(5/1時点)
- ・教員数(専任): **43**名
- ・職員数: **37**名
- ・Wアドバイザーペア数: **31**組
- ・1ペアあたりの学生数: **約30**名



制度が生まれた経緯①

- ・退学率を減少させたい。(課題)
- ・もともと「アドバイザー制度」があった。



教養ゼミⅠ(1年次・必修科目)の
担当教員が、履修方法、学修に関する
こと等、円滑に学生生活を送れるよう
助言を行う制度



制度が生まれた経緯②

アドバイザー制度の課題

- ①「ゼミ」の授業時間に個人的な相談をする
訳にはいかない
- ②学修以外の個人的な相談をするには教員
は少し数居の高い存在
- ③相談のために訪問しても教員が研究室に
いないことも多い

制度が生まれた経緯③

☆アドバイザーとしての職員

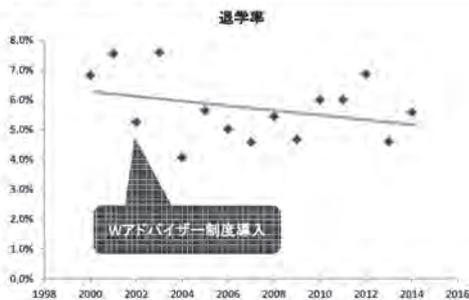
- 学生にとって身近な存在
- 窓口に行くと、大体いる
- 履修、成績、奨学生等の制度に詳しい
- 日々、学生の成績や進路状況などの情報に触れているため、全体の情報、傾向の把握に長けている



制度が生まれた経緯④



退学率の推移



Wアドバイザー制度アンケート(教職員対象)

Wアドバイザー制度の良いと思うところ(学生に対して)

- ・以前はあまり接点のない学生との接点できた。
- ・春假学生と接する機会が少ない部署でも、学生と話し、話すことができる。
- ・気軽に相談できる窓口がたくさんあるのは良いと思う。
- ・1人の学生に対して複数の教職員がアプローチしている点。
- ・手厚い学生指導ができる。
- ・日頃、接することがない学生の悩みから、対応策を多種に考慮でき、アドバイスすることができる。
- ・指導することで出席に繋がる学生もいる。
- ・教員にはなかなか相談しにくい事も、職員に対してなら相談しやすい場合もあり、多少は学生の役にたっているのではないかなと思う。
- ・学生がゼミ以外の教員、職員で頼れる存在がいるということ。
- ・学生に色々な立場の人間が関わるのが良いと感じている。
- ・どこに相談すればよいのか、誰に相談すればよいのか、分りかねる相談事の窓口として活用できる。
- ・この制度を利用して、教職員と学生の距離が近くなっている。
- ・職員にとって、学生と密に真剣に接する機会ができる。
- ・異なる立場(教員と職員等)とペアになることで、多角的な指導ができる。



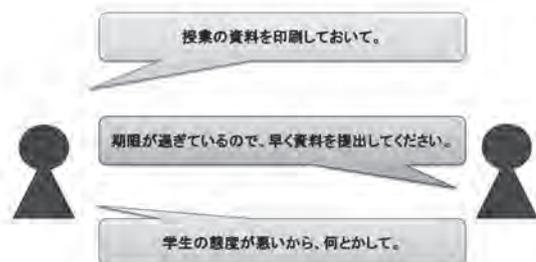
Wアドバイザー制度アンケート(教職員対象)

Wアドバイザー制度の良いと思うところ(教職員の関係について)

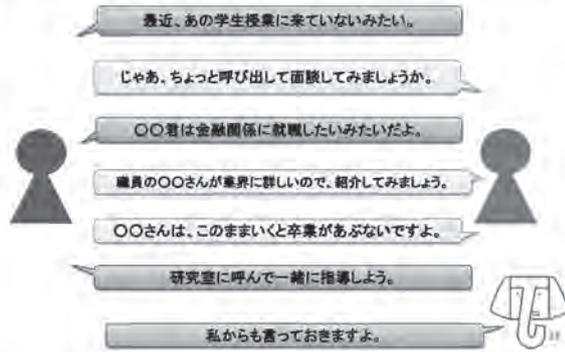
- ・教職員間で学生の情報を共有できる。
- ・事務担当の職員と教員が協力して実施している点。
- ・学生を見る目が増えることで、学業不振になりそうな学生、退学しそうな学生を早い段階で気付き、対応することができる。
- ・大学全体で、学生支援の意識をもつことができている。



教員と職員の会話(制度導入前)



教員と職員の会話(制度導入後)



Wアドバイザー制度の課題

- ① Wアドバイザー、ゼミ教員、教務課、学生支援室、進路支援室等、それぞれの情報、指導が独立しており、連携面での弱さがある。
- ② 部署や時期によっては、学生と関わる時間が取りにくく、業務負担が大きい。

CASKの導入(2011年度～)

CASK・・・(CAREER Student Karte: キャスク)

- ① 学生カルテ
- ② ポートフォリオ
- ③ 学生と教職員の双方向コミュニケーション

Wアドバイザーによっておこなわれる生活指導・キャリア形成支援から、ゼミ等の教員による学習指導、キャリア教育、そして進路支援部による就職指導まで、各学生のキャリア形成過程のデータを一元管理し、学内共有することができる。

CASKの導入(2011年度～)



教学IRに基づいた制度の見直し(2014年度～)

退学者を減らすためには

- ① 退学者の動向(理由・傾向)を知り、それに合わせた対策を講じる
- ② できるだけ早い段階で退学の危険がある学生を察知し、手遅れになる前に学生のフォローをする

→早い段階で退学の危険がある学生を知るには?

教学IRに基づいた制度の見直し(2014年度～)

出席調査

学籍番号	氏名(漢字)	PracEng A	修験リテラシー I	職業科(E)
E44-001	徳山 悠輝	3/5	2/5	2/5
E44-002	徳山 晋次	5/5	5/5	5/5
E44-003	徳山 光輝	6/5	6/5	4/5
E44-004	徳山 晋次	6/5	2/5	1/5

- ・1年次の前後期各2回、必修科目に対して実施
- ・1回目の出席調査の集計結果がでるのが6月末

→これまでのデータから、1年次前期での出席不良が、その後の退学・除籍・留年にどれほど関与しているか分析

教学IRに基づいた制度の見直し(2014年度～)

出席不良者の傾向

1年次前期の必修科目で1/3以上欠席している学生は、

- ・ その半数以上が、退学・除籍・留年になっている。
- ・ 全体の退学者数の約60%を占めている。
- ・ そのほとんどが、成績不良が関係して退学・除籍に至っている。



出席状況を見ることで、
退学危険者を早期発見することができ、
対象を絞ることで、業務負担を減らしながら、
早い段階でのフォローができる！

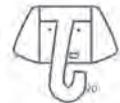


教学IRに基づいた制度の見直し(2014年度～)

学アドバイザー	教務課	教養ゼミ(担当)
1月10日 調査結果を基に集まりのことに関する Wアドバイザーの活用について ・Wアドバイザーの活用について ・Wアドバイザーの活用について ・Wアドバイザーの活用について	出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について	出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について
2月10日 出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について	出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について	出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について
3月10日 出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について	出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について	出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について
4月10日 出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について	出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について	出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について
5月10日 出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について	出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について	出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について ・出席不良の発生している 対象者の把握について

出席不良学生に対しての、
Wアドバイザー、教務課、教養ゼミ
担当者の三位一体となったフォロー
制度を策定

職員が調査、分析、提案に
大きく関与した



まとめ ~Wアドバイザー制度を通して学んだこと~

各部署の業務

- ・ 成績・履修状況の把握
- ・ 進路状況の把握
- ・ 入試状況の把握
- ・ 学生支援の対応事例

Wアドバイザー制度

- ・ 学生との関わりによる気づき
- ・ 教職協働による連携、知識の深化

職員にしかない着眼点と、
職員にしかできない提案



ご静聴ありがとうございました





第二部
Let's Challenge
-大学職員の専門性について考えてみよう-

2015.12.18

山口大学 大学教育機構 大学教育センター
林 透、河島広幸

会議室

A C D
E J L

第2集会室

B H
K

セミナー室

F G
I

※ B・H・Kグループは第2集会室に移動してください。
※ F・G・Iグループはセミナー室に移動してください。

タイムライン

第二部 15:00-17:10

1. オリエンテーション・自己紹介(15分) 15:00-15:15
2. マインドマップ作成(課題提示)(25分) 15:15-15:40
3. マインドマップ作成(解決策提案)(20分) 15:40-16:00
4. 課題と解決策のまとめ作成(20分) 16:00-16:20

《移動時間》5分

6. 全体共有(15分+15分) 16:25-16:55
7. 総評(15分) 16:55-17:10

グループワークセッションの目標

- 大学を取り巻く複雑化・高度化する諸課題の対処のため、これまで以上に、大学職員の専門性が求められています。
- 組織や部署を超えて、「大学職員の専門性」をテーマとした対話を通して新たなアイデアを創造しましょう！
- 今、現場にどんな課題があるか、どんなアイデアを持って対応すれば、課題解決や成果を得ることができるのでしょうか？

自己紹介

仲間のことを知ろう！

レッツ自己紹介

- ①名前、②所属、③趣味、④今の気持ちを自己紹介シートに記入をしてください(2分程度)。
- 自己紹介シートを使い一人1分程度で自己紹介をしましょう。



自己紹介シート (例)	
(名前 (ニックネーム))	(所属)
山大 太郎 やまみー	人事課
部局を越えた交流に ワクワクしています。	読書 (幕末ものが好き)
(今の気持ち)	(趣味)

Mind Map I

中心テーマに関連して自由に発想しよう！

「マインドマップ」とは？

- 英国のトニー・ブザン(ジャーナリスト)が提唱したノート術・発想術です。
- ノートを放射状に記述することで視覚的に訴えることができ、豊かなアイデアを出すことができます。
- ボーイングやHPなどの大企業やオックスフォード、ケンブリッジといった英国名門大学でも採用されています。

「マインドマップ」とは？

「マインドマップ」とは？

ある対象について、関連するキーワードで想起されるイメージを放射状につなげながら、ついでにこまごまと分析・整理を行う。キーワードやイメージをつなげていく表現方法は人間の脳が物事を記憶/分析する方法に近い。概念的・視覚的・体系的。

【出所】<http://www.tbdsmkto.com/2011/04/mindmap-sakmai.html>

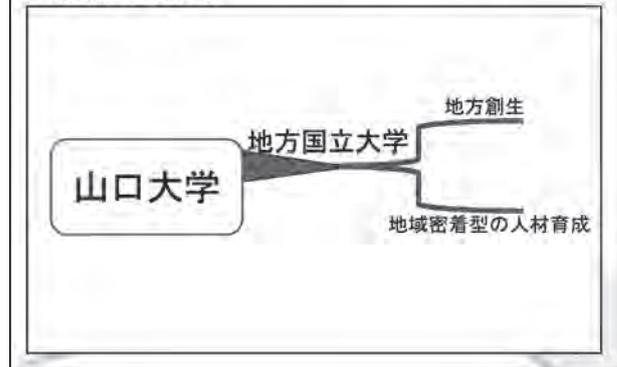
① 模造紙の中心にテーマを書きます。

山口大学

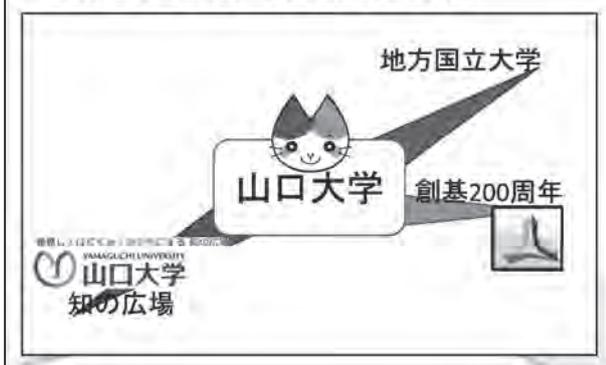
- ② テーマに関連した様々なキーワードを時計回りに周辺に配置して枝を伸ばします。



- ③ 各キーワードからさらに枝を伸ばして、マップを充実させます。



- ④ 色づかいやイラストを工夫することで、視覚的になり、より豊かなアイデアが出せます。



Mind Map II

中心テーマの課題についてマッピングしよう！

15

課題のマッピング

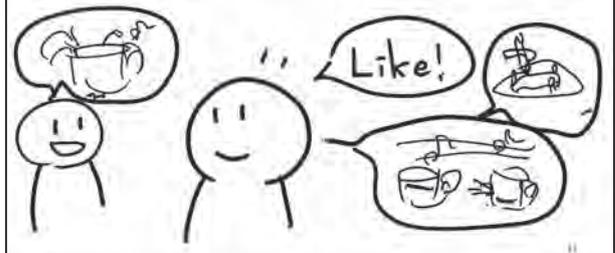
- 模造紙に中心テーマを記入してください。イラストでもOKです。
- 中心テーマについて日頃、切実に感じている現場の課題を提示し、中心テーマの周辺に枝を伸ばしてください。

➤ 約25分間。

16

Mind Mapの中心テーマは分科会テーマです。

分科会①なら「教務・学生支援・就職支援」



例えば・・・

- 「教務・学生支援・就職支援」が中心テーマの場合このテーマの課題として次の4点を挙げる⇒
 - 学生の多様化
 - 地元企業への就職
 - 情報発信
 - 窓口対応
- 次に、それぞれのキーワードに関連する課題を列挙して枝を伸ばし、マップを充実させる。

18

課題マッピングの記入例



Mind MapⅢ

大学職員の専門性を活かし解決策を提案しよう！

20

解決策の提案

- マッピングした課題に対する解決策を付箋(ポストイット)に記入してください。
- 付箋に記入する改善策は大学職員の専門性を意識したものにしてください。
- 解決策を記入した付箋をそれぞれの課題の横に貼りましょう。

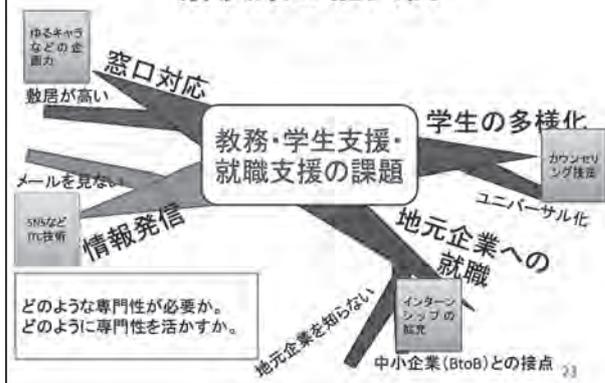
➢ 約20分間。

21

例えば・・・

- 「教務・学生支援・就職支援」の課題として次の4点が挙がっている場合、それぞれの課題に対応した解決策を提案する。
 - 学生の多様化に対応するための「カウンセリング技法」
 - 地元企業への就職率を改善するための「インターンシップ拡充」
 - 情報発信を円滑にするための「ICT技術」
 - 窓口対応を改善するための「企画力」

解決策の記入例



課題と解決策のまとめ

- マインドマップで出された課題の中から一つを選び、「課題と解決策のまとめシート」の「主な課題」に記入してください。
- 次に、選んだ課題に対応した「解決策の提案」を記入してください。
- 最後に、その課題に対応するために（解決策を実施するために）「必要な専門性」について説明してください。

24

課題と解決策のまとめ記入例

プロフェッショナル～大学職員の流儀～
グループ名【 】

主な課題 (Hot Topic)

高い進学率などにより学生が多様化している。

解決策 (Breakthrough)

学生が抱える多様で、複雑な問題の解決を支援するために個別対応などのきめ細かなサービスを行う。

大学職員の専門性 (Professionalism)

個別の学生に対応するためにカウンセリング技法や対話技法など心理学的な裏付けのある各種専門的スキルを身に付け、多様な学生のニーズに対応できるようにする。

全体共有

大学職員の専門性について考えよう！

26

全体共有

- 全グループを2つの「島」に分け、1グループ1分程度でショートプレゼンをしてください。
- 各グループで投票し、1グループ（「島」代表）を選びましょう。

➤ 約15分間で選出。

27

全体共有

- 選出された2グループが全体に共有し、質疑応答を行います。

➤ 約15分間。

28

総評

- 各グループの発表や質疑応答を受けて、講師の皆様より総評をいただきます。

➤ 約15分間。

29

クロージング

明日への一歩

30

THANK YOU !

Contact us

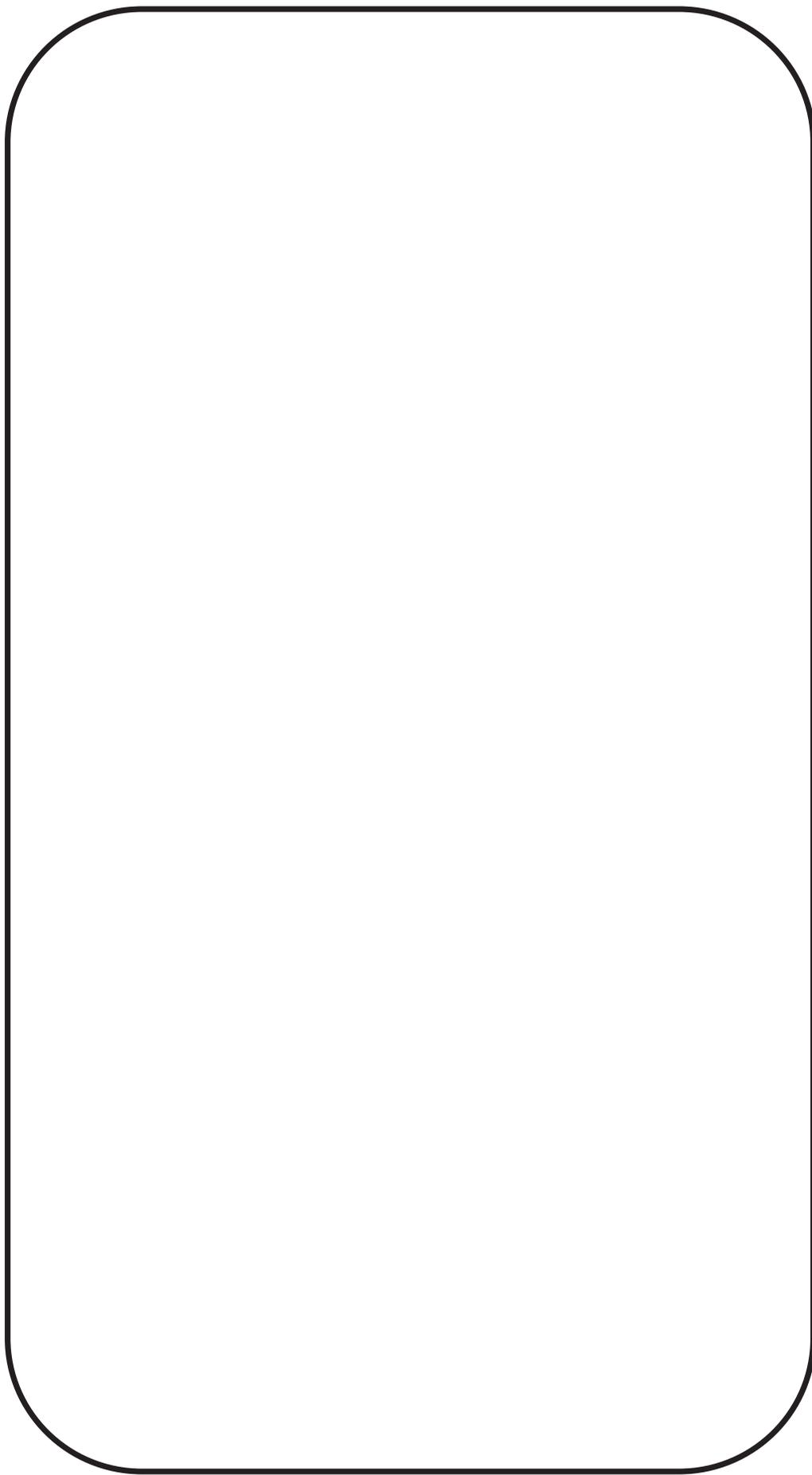
yuap@yamaguchi-u.ac.jp

自己紹介シート

<p>(名前 (ニックネーム))</p>	<p>(所属)</p>
<p>(今の気持ち)</p>	<p>(趣味)</p>

リフレクシヨンシート

※記入例：未来に向かって、明日から、私は○○に取り組みたい！



プロフェッショナル～大学職員の流儀へ
グループ名【

】

<p>主な課題 (Hot Topic)</p>	<p>解決策 (Breakthrough)</p>
<p>大学職員の専門性 (Professionalism)</p>	

6. 山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) & IR 室合同企画 FD・SD ワークショップ 『教学マネジメント強化のための IR とは—データ活用方策を理解し、実践に活かすために—』

日 時：平成 28 年 3 月 7 日（月） 13:30～16:30

場 所：吉田キャンパス・総合図書館アカデミックフォレスト

参加者：学内 24 名、学外 17 名 計 41 名

概 要：

13:30～13:40 開会の挨拶・趣旨説明

山口大学 理事・副学長（教育学生担当） 瀨 厚

13:40～14:15 第一部《基調講演》

「教育の質保証に向けた教学 IR のチャレンジ」

立命館大学 教育開発推進機構 教授 鳥居 朋子

15:00～17:10 第二部《グループワークセッション》

「データを活用するためのリサーチ・クエスチョンの作り方」

立命館大学 教育開発推進機構 准教授 川那部 隆司

（※途中 10 分間の休憩あり）

16:25～16:30 クロージング・閉会の挨拶

山口大学 大学教育機構 大学教育センター長 朝日 孝尚

[総合司会：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容：

平成 28 年 3 月 7 日（月）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）& IR 室合同企画 FD・SD ワークショップ『教学マネジメント強化のための IR とは—データ活用方策を理解し、実践に活かすために—』を学内から 24 名、学外から 17 名、合計 41 名を集めて、吉田キャンパス・総合図書館アカデミックフォレストにて開催した。本 FD・SD ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）と山口大学 IR 室との合同企画で、山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として実施された。

冒頭、瀨 厚 理事・副学長（教育学生担当）より開会挨拶及び趣旨説明があり、近年、特に注目されているインスティテューショナル・リサーチ（IR）の重要性について述べられ、本取組が教学マネジメント強化のための IR を機能させ、より良い学生の学びの創出につながることへの期待が寄せられた。

第一部の基調講演では、鳥居朋子 立命館大学 教授より、「教育の質保証に向けた教学 IR のチャレンジ」と題して講演があった。まず、山口大学における「リサーチのための問い」を立てることの必要性について述べられ、教育の質保証や学習成果への関心、日本における制度（質保証）および政策状況について説明があった。IR 実践のための 7 つの指針と 5 つのステップ、また、海外で





た。

次に、第二部（グループワーク）として、川那部隆司 立命館大学 准教授より、「データを活用するためのリサーチ・クエスチョンの作り方」と題して、ワークショップを行った。まず、点検と評価の違いについて述べられた後、リサーチ・クエスチョン（RQ）とクリニカルクエスチョン（CQ）について説明があった。グループワークでは、①テーマを選ぶ、②クリニカルクエスチョンを考え、共有する、③クリニカルクエスチョンをリサーチ・クエスチョンに作り変える、④必要なデータを考える、⑤仮説を立てる、以上の流れで行われた。グループごとにテーマを選び、そのテーマに沿ったクリニカルクエスチョンとリサーチ・クエスチョンが作られた。例えば、教学系のテーマとして、「学生の授業外学習時間を伸ばす」をテーマに選んだグループでは、RQ：「主体的な学びは、授業外学習時間と関連するか？」、RQ：「学生の経済的状況と授業外学習時間は関連するか？」、RQ：「シラバスなどにおいて示す事前・事後学習の指示の与え方が授業外学習に影響するか？」などのリサーチ・クエスチョンが作られた。最後に、各グループより全体に対して発表を行い、意見の共有を行った。教学系、経営系いずれのテーマにおいても、大学が直面する課題の解決のためのリサーチ・クエスチョンが作られていることが共有された。

まとめ：

本 FD・SD ワークショップでは、IR の基本的な概念を学びつつ、実際の IR を進めるうえで重要な、リサーチ・クエスチョンの作り方について体験型で研修を行うことができた。膨大なデータを処理するための知識や専門的な統計学、あるいはハードスキルとしての各種統計分析ソフトウェアの操作技術などが注目される IR であるが、IR を通した意思決定、組織を動かす IR を確実に実施するうえでも基本となるリサーチ・クエスチョンが重要であることが体験できる企画となった。本学において、IR マインド、IR カルチャーを醸成するためには、まずは素朴な疑問や予測からクリニカルクエスチョンを導き出すことから始めることが有効であると感じられる内容であった。

今後も積極的に教学マネジメント強化のための IR 研修を推進することで、身近な疑問を教育の質保証や大学改善につながるようなリサーチ・クエスチョンとして洗練化することができる人材の育成と、IR 実践の展開が進められることが期待されている。



山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) & IR室合同企画
FD・SDワークショップ

教学マネジメント強化のためのIRとは

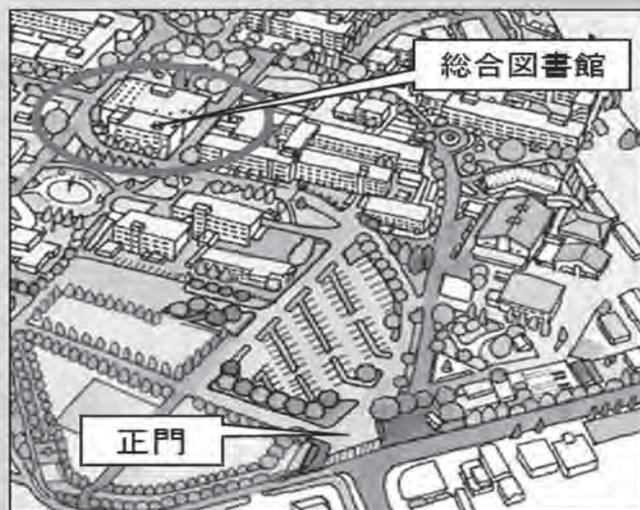
ーデータ活用方策を理解し、実践に活かすためにー

【趣旨】

中央教育審議会大学分科会『大学のガバナンス改革の推進について(審議まとめ)』(2014年2月)では、「大学自らの置かれている客観的な状況について調査研究するIR(インスティテューショナル・リサーチ)」の重要性が言及され、学内情報の集約と分析結果に基づいた意思決定や組織的取組の実施が期待されています。

本学では、2014年度文部科学省・大学教育再生加速プログラムの採択を受けて、教学マネジメント強化のためのIRを機能させ、学生の学びの振り返りや修学指導、さらにはカリキュラムの改善充実に資することを目標に掲げています。今回のワークショップでは、IRの意義を理解しながら、具体的なデータ活用方策のコツを学び、実践に活かす機会としたいと思います。

なお、本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)及びIR室合同企画イベントとして開催いたします。



日時:	2016年3月7日(月) 13:30~16:30
場所:	山口大学 総合図書館 アカデミックフォレスト (吉田キャンパス)
対象:	学内外の教職員

【申込方法・問合せ先】

件名「FD・SDワークショップ申込」とし、「①氏名、②所属・職名、③E-mail」を記入の上、E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp(担当: YU-AP推進室)あてに、3月4日(金)までに送信願います。

山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室)
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp



INSTITUTIONAL RESEARCH



【概要】

13:30～13:35 開会挨拶・趣旨説明

瀬瀬 厚 山口大学理事・副学長(教育学生担当)

13:35～14:15《第一部 基調講演》

「教育の質保証に向けた教学IRのチャレンジ」

鳥居 朋子 立命館大学 教育開発推進機構 教授

14:15～16:25《第二部 グループワークセッション》

「データを活用するためのリサーチ・クエスチョンの作り方」

川那部 隆司 立命館大学 教育開発推進機構 准教授

(※途中 10分間の休憩あり)

16:25～16:30 クロージング・閉会挨拶

朝日 孝尚 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

山口大学は、大学運営に必要なデータを適宜、収集・提供できる体制を整備することを目的に、2015年6月1日付けで学長直下にIR室を設置しました。IR室は、執行部の要望のもとに学内外の多様なデータを用いて計画立案、プロジェクト形成、意思決定を支援するためのデータ収集を行い、大学の戦略に資するデータとして整理・提供することとしています。

IR室の初期活動として、事務局各部・課が保有する業務情報・統計調査を一覧整理しデータマップ化を行うこととしています。



大学教育再生加速プログラム



山口大学 FD・SDワークショップ
「教学マネジメント強化のためのIRとはーデータ活用方を理解し、実践に活かすためにー」
2016年3月7日

教育の質保証に向けた教学IRのチャレンジ

鳥居 朋子
立命館大学教育開発推進機構



Key Questions

- ◆教育の質保証の方策を考える前に...
 - ▶いま一番知りたい「山口大学生」の学びの実態とは？
 - ▶また、いま重要だと感じている「山口大学の教授・学習」の問題とは？

⇒「リサーチのための問い」を立てながら、エビデンスに基づいて、学生の学びに科学的にアプローチするには



教育の質保証と学習成果への関心

- ▶ グローバル化、競争的な高等教育市場、国際ランキング、情報技術の進展、説明責任
- ▶ 国際的な課題：質保証 (Quality Assurance)
- ▶ 中心的課題：Learning Outcomes
 - ▶ 一連の学習が終わった時に学生が獲得した成果を目標に照らして測定
 - ▶ Learning Gainへの注目 (HEFCE 2015)
- ▶ 内部質保証システム
 - ▶ 高等教育の質のモニタリング (monitoring) と向上 (improvement) のための機関内部の営み (UNESCO-CEPES 2004)



日本における制度および政策状況

- ▶ 認証評価制度 (2004年～)
 - ▶ 第二期の大学基準に「内部質保証」、第三期でも強調 (大学基準協会)
 - ▶ 目標・計画に則した実行、結果 (アウトカム) の検証
- ▶ 説明責任の文脈におけるデータ重視
 - ▶ 大学における教育情報の公表 (2011年度～)
 - ▶ 大学ポートレートの運用 (2015年～)
- ▶ データに基づく教学マネジメントの要請
 - ▶ 「学士課程教育の構築に向けて」 (中教審答申 2008)
 - ▶ 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」 (中教審審議まとめ 2012)
 - ▶ 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」 (中教審答申 2012)
 - ▶ 「大学のガバナンス改革の推進について」 (中教審審議まとめ 2014)



学習成果とIRへの注目

- ▶ Institutional Research (機関調査)
 - ▶ 「機関の計画策定、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われるリサーチ」 (Saupe 1990)
 - ▶ 「リサーチ」と言えども、単なる学術研究や調査ではない⇒実践志向の強い組織的な調査分析活動
 - ▶ 米国のアクレディテーション：卒業率等の向上だけでなく、学習成果測定に対するIRの貢献
 - ▶ 日本の大学：IR機能が学内に分散し、組織化されていない傾向⇒専門の室を設ける機関増加



IR実践のための7つの指針 (中井他 2013)

- ◆7つの指針
 1. 大学の目標達成に資する活動を進める
 2. データを意味ある情報に変換する
 3. データに基づく判断の有効性と限界を理解する
 4. 客観性と中立性を重視する
 5. 調査と報告において倫理面に配慮する
 6. 学内外の多様な関係者と連携を進める
 7. 専門性を高める機会をつくる



IR実践のための5つのステップ (中井他 2013)

◆5つのステップ

1. 調査設計
2. データ収集
3. 分析前準備
4. 分析
5. 情報提供

⇒ステップ1の前に・・・「あるもの」が必要



リサーチ・クエスチョンの重要性

- ▶ 意思決定を支えるIRにはリサーチ・クエスチョン(RQ)が不可欠
 - ▶ 何らかの意思決定を念頭にデータや情報に向き合う時、RQが必要
 - ▶ やみくもにデータを集めても、結果的に使えない
 - ▶ "Institution" に固有の文脈に根差した問い
 - ⇒具体的な改善施策が導き出せるようなデータ
- ▶ RQの考え方
 - ▶ 目標・計画に照らしたひとまずの現状把握か？
 - ▶ 何らかの仮説に基づく結果の検証なのか？



RQの例① (Dooris 2009)

▶ 米国・ペンシルベニア州立大学

【アクセスおよび学位の取得しやすさ】異なった社会経済層の出身の学生たちは、入学から学位取得までの経路において、どれほど違いがあるのか？

【データ】世帯所得、第1セメスターのGPA、6年での学位取得率 等



RQの例② (Hwang and Wang 2013)

▶ 米国・テキサスA&M大学

【学位取得への歩み】どのような学生が、いかなる理由で早期に卒業しているのか？

【データ】民族、SAT(大学進学適性試験)得点、第一世代、高校卒業時成績 上位10%、GPA、性別、専攻 変更回数、科目不合格回数 etc.



RQの例③ (CSULB 2010)

▶ 米国・カリフォルニア州立大学ロングビーチ校

【卒業までの障壁】不合格率の高いコース等において、卒業率を改善する上での障壁は取り除かれてきているのか？

【データ】アドバイジング・サービスを受けた学生(学年、時期)の追跡データ、編入学生の追跡データ、6年での卒業率、アドバイジング・サービスに対する学生の満足度調査の結果 等



立命館大学のプロフィール

- ▶ キャンパス、構成、入試、カリキュラム
 - ▶ 衣笠、びわこくさつ、大阪いばらき、朱雀
 - ▶ 13学部：法、文、産業社会、政策、国際関係、映像、経済、経営、理工、情報理工、生命、薬、スポーツ健康(+総合心理)+20研究科
 - ▶ 学士課程学生 32,386人(2015.5.1現在)
 - ▶ 全国から学生が入学
 - ▶ 約半数の学生が課外自主活動に参加
 - ▶ 多様な入試方式：一般、特別、推薦
 - ⇒学業成績、学習意欲等のレンジが広い
 - ▶ 複雑で多彩なカリキュラム(共通学修経験としてのコアの不在)



ミッションとしての「立命館憲章」

(2006年7月21日制定)

立命館は、西園寺公望を学祖とし、1900年、中川小十郎によって京都法政学校として創設された。「立命」の名は、『孟子』の「尽心章句」に由来し、立命館は「学問を通じて、自らの人生を切り拓く修養の場」を意味する。立命館は、建学の精神を「自由と清新」とし、第2次世界大戦後、戦争の痛苦の体験を踏まえて、教学理念を「平和と民主主義」とした。立命館は、時代と社会に真摯に向き合い、自主性を貫き、幾多の困難を乗り越えながら、広く内外の協力和支援を得て私立総合学園への道を歩んできた。

(第2パラグラフ省略)

立命館は、人類の未来を切り拓くために、学問研究の自由に基づき普遍的な価値の創造と人類的諸課題の解明に邁進する。その教育にあたっては、建学の精神と教学理念に基づき、「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもって、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成に努める。立命館は、この憲章の本旨を踏まえ、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献する。

RITSUMONRI

学園ビジョンR2020 (2010年5月28日策定)

2020年における立命館の学園像

“Creating a Future Beyond Borders”(自分を超える、未来をつくる)

基本目標のひとつ：正課・課外の枠を超えた多様な「学びのコミュニティ」の形成

広義：正課と課外、学内と学外(地域、国内、世界)における学びと諸活動を推進

狭義：正課を中心にして、授業、および授業と連動して発展していく個と集団の学びを、学内外において推進

RITSUMONRI

教学IRの機能の位置付け (2016年3月現在)



教学IRの開発 (鳥居 2015a)

「IRプロジェクト」(2009年度～): 現「自己評価・教学改善支援プロジェクト」

教育の質保証を意識して立てた大きなRQ

立命館大生の学びは本当に「多様」なのか？

多様ならば「どのように」多様なのか？

多様性に「学習・教授の文脈は適合」しているのか？

「学びの実態調査」の開発と活用

学生ID記入方式：教務系データ、進路状況、各種テスト得点、課外活動等とクロス

RITSUMONRI

学びと成長を観測する総合的なシステム

入学前から卒業後まで、学生個人の成長を追跡



RITSUMONRI

訴求力のある企画提案

「学びの実態調査」のコンセプト (鳥居 2010; 宮浦他 2011)

間接的な、正課学習における学習成果の測定

教育改善にかかわる介入点を見出し、具体的な改善の道筋を描く

共通調査項目：授業外学習時間、授業経験、学習スタイル、成長感等 + 学部の独自調査項目

教育的はたらきかけ：設問に込めたメッセージ

□ 大学生としての「学びのモード」の自覚への期待

□ 学生自身のリフレクション：成長を振り返る機会

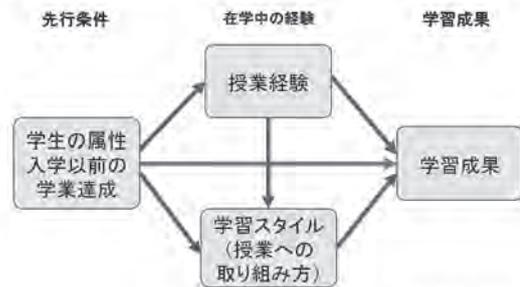
RITSUMONRI

学部の事情に合わせた調査としてのスタート

- ▶ 全学的な悉皆調査ではなく、学部支援の一環
回収データ活用のガイドライン
 - ▶ 立命館大学としての一体性を常に意識
実施における「共通性」と「特殊性」の調整
- ▶ 実施形態：各学部のニーズに対応
 - ▶ 実施の有無、対象学生、実施時期、方式（紙、Web）
- ▶ 2016年度から、全学部での実施を標準化する方向で検討中
 - ▶ 2018年度に第三期の認証評価の受審を予定



学習成果説明のための仮説モデル



岡田・鳥居(2011)



成長の可視化とカリキュラムの検証

- ・ 上級生の方が全体的に得点は高く、成長を実感している
 - ⇒ 授業(正課)のインパクトが存在するようだ
- ・ でも、外国語運用能力の成長感については3年生よりも1年生の方が高い・・・なぜ？
 - ⇒ 外国語のカリキュラムが影響している可能性
 - ⇒ カリキュラム・ツリーを用いたカリキュラムの順序性(Sequence)の点検へ



スポーツ健康科学部 履修スケジュール 伊坂(2011)を参照して作成

セメスター	科目区分	科目名	履修単位数	備考
1	リテラシー科目	基礎数学、日本語基礎法(漢語入門)	2	授業の出席、文章能力、複合的推理力
	基礎科目	スポーツ健康科学、スポーツマネジメント論	2	学部でのコアコースにつながる基礎
	外国語科目	英語I、英語II	2	履修できる英語能力、英語手法
2	小島出演	基礎英語	2	学びたい科目の必修
	キャリア形成科目	スポーツ健康科学セミナー1	1	スポーツ健康科学の専攻性の理解
	基礎科目	体育方法論、基礎理科	2	複合的推理力、体系的思考
3	外国語科目	英語III、英語IV	2	履修できる英語能力、英語手法
	小島出演	研究入門	2	履修の入門、学問的な学びへの理解
	キャリア形成科目	スポーツ健康科学セミナー2	1	第一線で活躍している人材の知識
4	基礎科目	ワーキング論	2	就職活動のノウハウにつながる知識
	外国語科目	英語V、英語VI	2	履修できる英語能力、英語手法
	小島出演	研究入門	2	履修の入門、学問的な学びへの理解
5-6	小島出演	卒業論文	2	履修での学びの成果
	専門科目	ゼミコース科目	2	履修できる英語能力、英語手法
	小島出演	専門論文	2	専門研究能力

卒業 ⇒ 就職・大学院進学



スポーツ健康科学部の3ポリシー

ディプロマ・ポリシー

1. スポーツ健康科学に関する科学的視点、基礎知識・基礎理論を総合的・学際的に理解することができる。
2. 幅広い職業と国際的な感覚を身に付け、グローバルな視野から分析・検討・実践していくことができる。
3. リーダーシップ、コーチング理論への深い理解に基づいた指導を行うことができる。
4. 豊かな倫理観および自らのキャリアに関する高い意識を持ち、社会の発展に自らの能力を役立てるといふ、強い使命感を持つことができる。
5. 社会貢献、地域貢献等を通じて、スポーツ健康科学を社会に広めて行くことができる。

カリキュラム・ポリシー

1. 総合的・学際的カリキュラム
2. 履修に学びを深める系統的カリキュラム
3. 進歩を重視した英語教育
4. 地域や企業と連携した実践的カリキュラム
5. 4年間を通じた小集団教育

アドミッション・ポリシー

1. 授業やクラブ活動等での実践を通じて、スポーツ活動における人体の仕組みやメカニズムについて興味関心を持ち、学びたいと考える者
2. 地域でのボランティア活動等を通じて、健康づくりなど、高齢化社会への興味関心を持ち、健康と運動の関係について学びたいと考える者
3. クラブ活動等を通じて、スポーツを人に伝えることに興味関心を持ち、スポーツと教育について学びたいと考える者
4. 多様なスポーツ活動やそのサポートを通じて、スポーツ活動を運営面から支える活動に興味関心を持ち、マネジメントについて学びたいと考える者



カリキュラム、その後

- ▶ 2014年度
 - ▶ 3回生、共通科目
 - ▶ 専門英語(スポーツ健康科学I)：1セメスター
 - ▶ 専門英語(スポーツ健康科学II)：2セメスター
- ▶ 外国語の科目配当が上回生まで拡張
フィードバックの影響：学部の意思決定の裏付け
⇒ IRプロジェクトのミッションを果たせたことに

参考：スポーツ健康科学部カリキュラム

<http://www.ritsumei.ac.jp/shs/education/curriculum.html/>



学習成果説明のための仮説モデル



岡田・鳥居(2011)

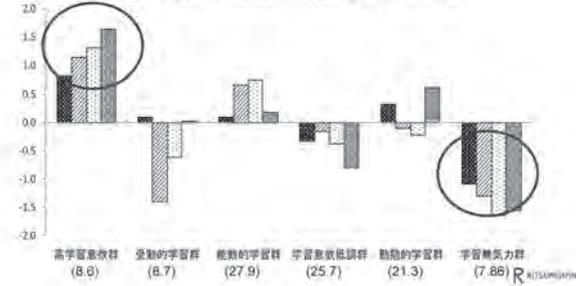


学びの実態の可視化：学習スタイル

多様な学習スタイルの存在 (岡田・鳥居他 2011)

N=1578 クラスタ分析(Ward法)により分類

■ 勤勉的受講態度 □ 積極的主張 □ 自発的学習 ■ 計画的学習



6つの学習スタイルの特徴 (岡田・鳥居他 2011)

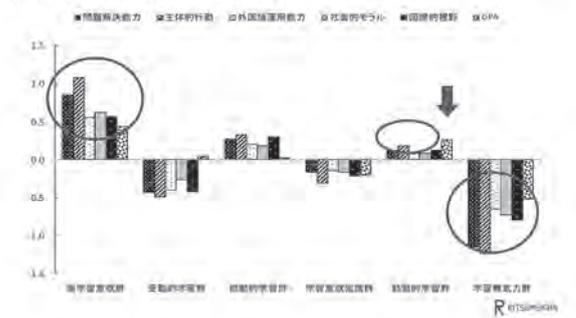
- ▶ 高学習意欲群: 勤勉的受講態度、積極的主張、自発的学習、計画的学習のすべての側面で最も得点が高い
- ▶ 受動的学習群: 勤勉的受講態度や計画的学習については中程度、積極的主張や自発的学習は相対的に低い
- ▶ 能動的学習群: 勤勉的受講態度や計画的学習の得点が中程度で、積極的主張や自発的学習が相対的に高い
- ▶ 学習意欲低調群: それぞれの側面の得点が全体的に低い
- ▶ 勤勉的学習群: 勤勉的受講態度や計画的学習が相対的に高く、積極的主張や自発的学習が中程度
- ▶ 学習無気力群: すべての側面で最も得点が高い



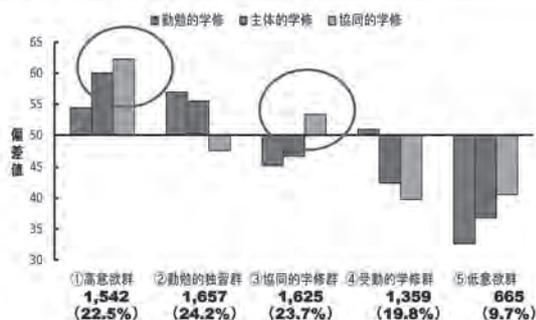
学びの実態の可視化：学習スタイルと学習成果

学習スタイルによる成長感・成果の違い (岡田・鳥居他 2011)

分析は一元配置の分散分析(多重比較はTukey法)



学園ビジョンに照らした学びの実態の可視化：学習スタイル (IRP 2015) N=6,848



学びの実態の可視化から得るFDへのヒント

授業経験が学習スタイルに与える影響 (岡田・鳥居他 2011)

重回帰分析

	勤勉的受講態度	積極的主張	自発的学習	計画的学習
グループワーク・プレゼンテーション	.05	.25 ***	.06 *	.10 ***
教員・学生間のコミュニケーション	.11 ***	.21 ***	.19 ***	.13 ***
期末以外のテストレポート	.12 ***	-.03	.03	.01
adjR ²	.04 ***	.15 ***	.05 ***	.04 ***

1) * 5%水準で有意 ** 1%水準で有意 *** 0.1%水準で有意

- ▶ 「教員・学生間のコミュニケーション」は全ての側面に対してポジティブな影響 ⇒ コミュニケーションを組み込んだ授業設計の提案、コミュニケーションのスキルアップ研修の企画・実施
- ▶ 「グループワーク・プレゼンテーション」と「期末以外のテスト・レポート」が影響を与える側面は対照的 ⇒ ディプロマ・ポリシーや授業目標等に照らし、意図的な学習活動や課題の選択、シラバス設計の研修(コンサルテーション等)

学生調査と教育改善のリンク

- ▶ カリキュラムの見直し=学びの文脈の「リデザイン」
 - ▶ 学部・学科とFDセンターの協働
 - ▶ 部局固有の文脈(目標、科目配列、教授方略等)に照らしたデータの解釈:学部教職員の視点と経験が不可欠
 - ▶ 学びの「不振」を抱えている学生の特定⇒支援へ
 - ▶ 教員からの意図的な「はたらきかけ」の効果検証:特定科目、学際科目、PBL等の試行的な指導法等
 - ▶ 教育改善活動(カリキュラム開発を含む)とIRの連動
 - ▶ データ・情報を媒介とした「対話」の機会:コンサルテーション、セミナー、ワークショップへの接合

R ITSUMORI

学生たちの関心の高さ(授業での紹介)



- ▶ IRは必要
- ▶ 在学中の調査だけではなく、卒業後も生涯にわたって調査するのがよい
- ▶ 結果のデータだけでなく、シラバスの見直しも併せて必要
- ▶ 学習ポートフォリオを学習成果の確認に活用すればよい

▶ 「単位取得が困難ないし習熟度が低い授業・科目では、他と比較してどのような授業が行われているのか」(学生が考えたRQのタネ)

▶ 「学生の学習意欲の上昇・下降の原因追究をしては?」



R ITSUMORI

教育改善のRQと活用データの広がり

IRとの連携部局	RQ	活用するデータ
学部・教学機関	学年進行にしたがってGPAが低下している学生は、基礎学力が低く、怠学傾向があるのか?	入試方式、学力に対する自己評価、基礎学力診断テスト得点、基礎GPA(経年)、授業外学習時間、将来の見通しの有無 等
課外自主活動支援部局	アスリート学生において、学生同士の交流の程度は学習成果にどのような影響を与えているのか?	友人(クラブ内外)の数、他者との交流頻度、GPA、取得単位数、成長感 等
キャリア形成支援部局	卒業時に自身の進路決定状況に満足している学生は、在学中にどのような学びを展開しているのか?	入試方式、取得単位数、GPA、留学経験の有無、就活開始時期、進路決定先、進路決定に対する満足度 等

R ITSUMORI

学生調査の可能性と限界

- ▶ 学習支援・教育改善に向けたいくつかの可能性
 - ▶ 「多様」で括られがちな学生実態をデータに基づき把握し、困難を抱える学生群を可視化する
 - ▶ 学びにポジティブ/ネガティブな影響を与える要因を可視化し、現行カリキュラム(目標、科目配列、教授方略、学習活動等)を見直す
 - ▶ 学びの主体としての学生個人のリフレクション機会
- ▶ 調査方法の問題点
 - ▶ そもそも回答した学生の実態しか掴めない
 - ▶ 未知の課題を調査に組み込むことが難しい
 - ▶ ダイナミックな成長のプロセスは捨象される

R ITSUMORI

インタビュー調査の併用(川那部他 2013)

- ▶ 量的データ(質問紙法)と、質的データ(面接法)を組み合わせた分析手法の開発
 - ▶ 調査対象となる集団の全体的な実態把握+変化のプロセスと変化の因果関係のダイナミックな把握(社会調査工房オンライン 2004; Beyer et al. 2007)
- ▶ カリキュラムを検討する学部教員からのRQ
 - ▶ 理系学部:学業成績の変化過程に影響を与える要因とは?
 - ▶ 入学時点での基礎学力テストと入学後のGPAの相関高
 - ▶ 入学時に低学力層にいた学生の学力を向上させられていないのでは?
 - ▶ 向上/低下している学生はどのような学生なのか?

R ITSUMORI

おわりに:質保証へのさらなる挑戦

- ▶ 大学(学部)として、どのような学生を育てるのかを議論、目標の合意と共有
- ▶ 目標と整合するようなカリキュラムやプログラムの設計と運営
- ▶ 実態に基づいた改善方策の検討
- ▶ 「印象」や「経験」のみに頼る意思決定からの脱却⇒教育改革等の合意形成において、客観的なデータや情報は不可欠
- ▶ エビデンスを軽視しない組織文化の醸成
 - ▶ 21世紀における大学のオートノミー(鳥居 2015b)

R ITSUMORI

おわりに：質保証への挑戦

- ▶ 当該大学にとって、より適切で妥当なRQの開発とデータ収集・分析
- ▶ 継続的なレビューを通じた教育の質保証
- ▶ 一機関で完結しない、他機関とのベンチマーク
- ▶ 学生の4(6)年間の成長に対する手ごたえや喜びの分かち合い
 - ▶ 卒後の成長も視野に入れた成果測定のある方の検討(教育の運動性)



RITSUMEIKAN

書籍もご参照下さい



中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百編著(2013)『大学のIR Q&A』玉川大学出版部。

※ IRの実践的な知識・技能をQ&Aによりわかりやすく解説。関連法令なども充実。

RITSUMEIKAN

R RITSUMEIKAN

ご清聴ありがとうございました。
続いてRQのワークショップに移ります。

torii@fc.ritsumei.ac.jp

主な参考文献

- ▶ Beyer et al. (2007). *Inside the undergraduate experience; the University of Washington's study of undergraduate learning*. San Francisco: Jossey-Bass.
- ▶ CSULB(2010). *Educational Effectiveness Review for Reaffirmation of Accreditation: submitted to the Western Association of Schools and Colleges*.
- ▶ Dooris, Michael J. (2009). Student Success -Quality Advocates Panel -Institutional Research Perspectives. Presentation to Quality Advocates session, December. http://www.psu.edu/president/cqi/planning_research/reports/QAStudentSuccess.pdf 2013.11.8
- ▶ Hwang, Li-Shyung, Wang Huiming (2013). Building a Longitudinal Database to Measure Student Performances. AIR 53rd Annual Forum, Concurrent Session, Long Beach, CA, USA, May 19.
- ▶ Okada, Yuji, Torii, Tomoko, and Yanagiura, Takeshi (2011). "Exploring Determinants of Learning Outcome in a Japanese Private University: Student Engagement and Learning" Association for Institutional Research 51st Forum, scholarly paper, May 23, Toronto.
- ▶ Saupe, Joe L. (1990). *The Functions of Institutional Research*, 2nd edition. Tallahassee, FL: Association for Institutional Research.
- ▶ UNESCO-CEPES(2004). *Quality Assurance and Accreditation: A Glossary of Basic Terms and Definitions*. <http://www.aic.lv/bologna/Bologna/contrib/UNESCO/QA&A%20Glossary.pdf> 2016.2.28
- ▶ 伊坂忠夫(2011)「スポーツ健康科学部における初年次教育の取り組み」立命館大学教育実践セミナー報告資料、10月28日。

主な参考文献

- ▶ 岡田有司・鳥居朋子(2011)「私立大学における大学生の学習成果の規定要因—ユニバーサル・アクセス時代における多様性と質保証の視点から—」『京都大学高等教育研究』第18号、19-31ページ。
- ▶ 岡田有司・鳥居朋子・宮浦崇・青山佳世・松村初・中野正也・吉岡路(2011)「大学生における学習スタイルの違いと学習成果の関連」『立命館高等教育研究』第11号、167-182ページ。
- ▶ 川部節雄・宮浦崇・鳥居朋子(2013)「教学IRにおける学生調査の手法開発—量的アプローチと質的アプローチを併用した学業成績変化過程の検討—」『立命館高等教育研究』第13号、61-74ページ。
- ▶ 社会調査工房オンライン(2004) <<http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/>> 2016.2.28
- ▶ 鳥居朋子(2010)「どうつくる？ 大学教育の質保証を支えるしくみ—教学領域のIRコトハジメ—」『ITL News』No.16 冬号、1-3ページ。
- ▶ 鳥居朋子(2015a)「立命館大学における教学IRの開発の現状と展望—IRプロジェクトの歩みとリサーチ・クエストを通して—」『立命館高等教育研究』第15号、37-53ページ。
- ▶ 鳥居朋子(2015b)「第3章第2節 内部質保証システムを支えるIR機能」『大学基準協会高等教育のあり方研究会編』『大学評価の体系化に向けて』大学基準協会、202-209ページ。
- ▶ 中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百編著(2013)『大学のIR Q&A』玉川大学出版部。
- ▶ 宮浦崇・山田勉・鳥居朋子・青山佳世(2011)「大学における内部質保証の実現に向けた取り組み—自己点検・評価活動および教学改善活動の現状と課題—」『立命館高等教育研究』第11号、151-166ページ。

データを活用するための リサーチ・クエスチョンの作り方



立命館大学 教育開発推進機構
川那部 隆司

ワークショップの流れ

1. 改善につながるリサーチとは？（15分）
 - ・点検・評価・意思決定・改善のプロセス
 - ・2つのリサーチ
2. リサーチ・クエスチョンを作る（80分）
 1. 改善点を選ぶ
 2. 知識と経験に基づき推測する
 3. リサーチ・クエスチョンを作る
 4. 必要なデータを考える
 5. 仮説を立てる
3. 全体共有と質疑応答（25分）

1. 改善につながるリサーチとは？

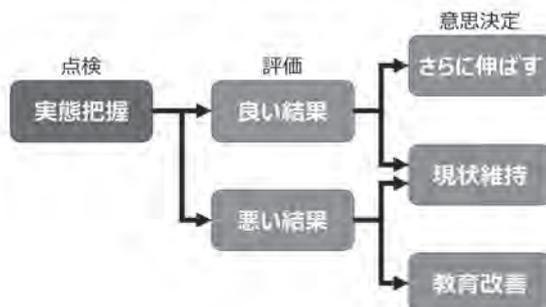
点検と評価

点検	学生の学習成果や学生の学びの実態の把握 「○○は怎么样了」を明らかにすること
評価	実態（点検結果）に対する価値づけ 「○○という状態の良し悪し」を判断すること

学生の授業外の学習時間の実態はどうなっているのだろう？
・「1週間で0分という学生が2割存在している」←点検

・「2割も存在するのは非常に良くない」←評価
※評価は「目標に照らして」行うことが重要。同じ結果でも、大学・学部、年度など状況によって異なってくる。

意思決定という段階



意思決定という段階（例）



意思決定を受けて

- 「改善しよう」「さらに伸ばそう」といった意思決定がなされた後…
 - 現場の教職員の困惑：「どうやって？」
- データに基づく意思決定がなされても、その後の具体的な取り組みにつながらない
- あるいは、具体的な取り組みが、組織的なものではなく、教職員個人の経験と努力に頼ったものになる

改善の具体的方法を考える

- 改善する（さらに伸ばす）ために必要な情報
 - 誰に対して
 - 何を
 - どのように
 - いつ、どこで
- これらについてもデータを用いて明らかにすることで、より精度の高い効果的な改善が実現できる

2つのリサーチ

原因を解明し、効果的な介入方法を見出す



計画・目標が達成できているか

- 学習成果測定を中心としたいわゆる教学IR
 - ○○は達成できているか？
 - ○○は実現できているか？
- 計画・目標を評価するための指標を設定することが重要となる
- 「自らの考えを論理的に他者に伝えることができる」
→ レポートや論文、プレゼンなどの成績 など
- 「他者と協調して問題解決することができる」
→ グループワークへの参加態度の自己評価 など

原因の探索と方法の開発

- 「実践」を視野に入れつつも、基礎的研究の側面が強い
 - うまくいっていない原因は何か？
 - どうすれば改善できるのか？
- リサーチ・クエスチョンを作ることが重要
 - 原因や改善方法は無数に考えられる
 - 焦点を絞り、コストパフォーマンスの高いリサーチを行う必要がある

リサーチ・クエスチョンとは？

リサーチ・クエスチョン	Research Question (RQ) 調査・研究で明らかにしたい問い
クリニカル・クエスチョン	Clinical Question (CQ) 経験に基づく素朴な疑問や予想

- さまざまな関係者が普段感じている疑問やなんとなく思っていること (CQ) を共有することが、RQを作り出す第一歩
- 「部活動に熱心に取り組んでいる学生は、勉強にも熱心に取り組んで成績も良いような気がする」
- 「自分の授業で、遊ぶ暇がないくらい課題をたくさん課すと、学習意欲が低い学生もがんばって勉強してくれたと思う」

CQを洗練化してRQにする

- CQは、個人的な経験に基づく個人的な感想
 - 「部活動に熱心に取り組んでいる学生は、勉強にも熱心に取り組んで成績も良いような気がする」
- CQが本当かどうかを確かめるために問いを洗練化
 - CQはあくまでも想定される調査結果の一つとして捉え、CQを大きくまとめるような表現に変える
 - 部活動への取り組み方は、正課への取り組み方や成績と関連しているか？

必要なデータと仮説を考える

- どのようなデータがあれば、RQに答えることができるか？
 - 部活動への取り組み方（自己評価）
 - 正課への取り組み方（自己評価）
 - 成績（教務データ）※「これらをどのように収集するか」は次の論点
- 仮説を立てる
 - CQに基づき、より具体的に結果を予想する
 - 「部活動に熱心に取り組んでいる」と答えた学生は、そうでない学生よりも「勤勉的に授業に組み」と回答する学生が多く、GPAも高い

教学分野と企画・経営分野

- 実態をデータで把握（点検）し、それを評価し、どうするか意思決定を行う
- （改善することになった場合）具体的に何をどうすれば良いかをデータに基づいて考える
- 2つのリサーチの考え方、リサーチ・クエスチョンの重要性自体は、教学IRと経営IRとで共通している

2. リサーチ・クエスチョンを作る

ワークショップの流れ

1. テーマを選ぶ
2. CQを考え、共有する
3. CQをRQに作り変える
4. 必要なデータを考える
5. 仮説を立てる

1. テーマを選ぶ

グループで、次の5つの意思決定から1つを選んでください。

- A) 学生の授業外学習時間を伸ばす
- B) 学生の学習意欲を向上させる
- C) 大学の志願者を増やす
- D) 大学のブランド力を向上させる
- E) その他（グループで決めてください）

2. CQを考え、共有する

- 選んだテーマについて、各自で直感的に思いつくことを挙げ、肯定文で表現してください。
- グループで共有し、共通しているものや重要だとみなが思ったものを2～3選んでください。
- CQが以下のような内容を含む具体的なものであれば、RQが考えやすくなります。
 - どのような学生が？
 - どの時期に？どこで？
 - なぜ？どのように？

3. CQをRQに作り変える

- 選んだCQを少し大きな問いに変えましょう。
 - CQはあくまでも「予想される結果」の一つ
- 「○○な学生は△△だと思う」
→「○○の要因は△△に影響している」
- 「□□の経験は学生の◇◇を高めるだろう」
→「□□は◇◇に影響している」

4. 必要なデータを考える

- RQに答えるためには、どのようなデータが必要かを考えましょう。
- どのようなデータが必要かを考えることで…
 - そもそも実際に調査を行うことが可能かどうか
 - どの程度のコストがかかりそうか
 - どの部署との連携が必要かわかる

5. 仮説を立てる（時間があれば）

- 収集したデータを分析すると、どのような結果になると思うかを具体的に考える
 - どの数値がどのようになっているか？
- 予想される結果を表やグラフで表してみると、仮説が考えやすい
 - 仮説を事前に考えておくことで、データ収集の後、効率的に分析ができる

3. 全体共有

まとめにかえて

- 点検・評価（あるいは意思決定）のためのリサーチと改善のためのリサーチを区別する
 - 一つの調査、一つの分析ですべてが解決するわけではない
- リサーチ・クエスチョンは、教職員の日々の業務・教育・指導の中から生まれる
- リサーチ・クエスチョンを明確にすることで、どのような調査をすべきか、どのような分析をすべきかが明確になる

グループのメンバー：

STEP1. テーマを選ぶ

グループで次の5つの意思決定から1つを選びましょう。Eを選んだ場合は、話し合って内容を決めてください。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| A. 学生の授業外学習時間を伸ばす | B. 学生の学習意欲を向上させる |
| C. 大学の志願者を増やす | D. 大学のブランド力を向上させる |
| E. その他（グループで決める） | |

STEP2. クリニカル・クエスチョンを考え、共有する

STEP1 で選んだテーマ（改善点）について選んだテーマについて、各自で直感的に思いつくことを挙げ、肯定文で表現してください。グループで共有し、共通しているものや重要だとみなが思ったものを2つか3つ選んでください。

※どのような学生が？どの時期に？どこで？なぜ？どのように？をヒントにする

「〇〇な学生は△△だと思う」など

STEP3. クリニカル・クエスチョンをリサーチ・クエスチョンに作り変える

選んだクリニカル・クエスチョンを少し大きな問いに変えましょう。

例) 「〇〇な学生は△△だと思う」→「〇〇の要因は△△に影響している」

STEP4. 必要なデータを考える

RQ に答えるためには、どのようなデータが必要かを考えましょう。また、それはどのようにすれば入手可能かも合わせて考えましょう。

※新規に調査が必要な場合もあれば、既存データで対応できる場合もある

データが入手できない場合は、リサーチ・クエスチョン自体を見直してみることも重要

どのようなデータが必要か？	どのようにすれば入手できるか？

STEP5. 仮説を立てる（時間があれば）

収集したデータを分析すると、どのような結果になると思うか、どのデータ（数値）がどのようになっていると予想されるかを考えてみましょう。

※予想される結果を表やグラフで表してみると、仮説が考えやすい

7. AP 事業成果発表ジョイントフォーラム 2016

～山口・広島地区大学教育再生加速プログラム(AP)採択校の成果発信～



専門学校 YIC グループ
【会場】 **YIC Studio 2 階講堂** (新山口駅新幹線口前) **参加無料**

山口県山口市小郡黄金町2番24号 <http://www.yic.ac.jp/go/about/access/>

●主催：山口大学 ●共催：徳山大学、県立広島大学、比治山大学・比治山大学短期大学部、宇部工業高等専門学校
プログラム

14:00～14:10 [開会挨拶] 岡 正朗 (山口大学長)

[来賓挨拶] 辻 邦章 (文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 専門官)

14:10～14:50 [基調講演] 「ラーニングコミュニティにおける学生の『学び』とは～アセスメント科目の設定と効果～」

関田 一彦 (創価大学 教育・学習支援センター長 教授)

14:50～16:00 [山口・広島地区大学教育再生加速プログラム (AP) 採択校の成果報告]

石川 英樹 (徳山大学経済学部長)

馬本 勉 (県立広島大学 学長補佐 (教育改革・大学連携))

林 透 (山口大学 大学教育機構 大学教育センター 准教授)

斉藤 克幸 (比治山大学・比治山大学短期大学部 質的転換加速化本部 AP ワーキンググループ座長)

武藤 義彦 (宇部工業高等専門学校 経営情報学科 教授)

16:00～16:10 休 憩

16:10～17:20 [協同学習ワークショップ]

「アクティブ・ラーナー、
リフレクティブ・ティーチャーであるために」

ファシリテーター：関田 一彦 (創価大学 教授)

河島 広幸 (山口大学 助教 (特命))

17:20～17:30 [クロージング・閉会挨拶] 朝日 孝尚 (山口大学 大学教育機構 大学教育センター長 教授)

(18:00～19:30 情報交換会 (会費：3,000円))

【お問い合わせ】



大学教育機構 大学教育センター (YU-AP 推進室)

TEL: 083-933-5261 E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

AP 事業成果発表ジョイントフォーラム 2016

～山口・広島地区大学教育再生加速プログラム (AP) 採択校の成果発信～

山口大学では、平成26年度文部科学省・大学教育再生加速プログラムのテーマⅠ・Ⅱ複合型に採択されました。山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)では、教職学協働を通じたラーニングコミュニティ(共育(共に育む))の充実を目指しています。本事業開始2年目にあたり、山口・広島地区の大学教育再生加速プログラム(AP)採択校とともに、事業成果を積極的に情報発信し、我が国の高等教育の発展に資することを目的としています。



関田 一彦 Kazuhiko Seira 創価大学 教育・学習支援センター長 教授

創価大学教育学部教授、教育・学習支援センター長、イリノイ大学博士 (Ph.D. in Education)。日本協同教育学会会長、初年次教育学会理事。専門は、教育心理、教育方法。特に協働をテーマに研究と実践を行っている。

〈主な著書等〉

『学生参加型の大学授業』(玉川大学出版部、2001、監訳)、『大学授業を活性化する方法』(玉川大学出版部、2004、共著)、
『はじめて学ぶ教育心理学』(ミネルヴァ書房、2010、編著)、『授業に生かすマインドマップ』(ナカニシヤ出版、2010、共著)、
『教育評価との付き合い方』(さくら社、2016、共著)など。



石川 英樹 Hidetaki Ishikawa 徳山大学 経済学部長

1989年、一橋大学経済学部を卒業後、三和銀行(現・三菱東京UFJ銀行)に入行。1992年、財団法人国民経済研究協会研究員、1999年より主任研究員。2004年、長岡大学産業経営学部専任講師、2005年4月より助教授。2010年、徳山大学経済学部教授、2012年より徳山大学経済学部長。専門は経済政策、マクロ経済予測、地域産業連関分析など。

〈主な著書等〉

『産業空洞化はどこまで進むのか』(日本評論社、2003、共著)、『年金改革の経済分析』(日本評論社、2006、共著)、
『Impediments to Trade in APEC: The Case of Japan』(アジア経済研究所、1998、共著)など。



馬本 勉 Tsuyumaru Umemoto 県立広島大学 学長補佐(教育改革・大学連携)

県立広島大学生命環境学部教授。博士(教育学)。広島大学大学院教育学研究科修了。日本英語教育史学会副会長。2011年度より、県立広島大学総合教育センター副センター長(教育担当)、2015年度から学長補佐(教育改革・大学連携担当)、AP事業推進部会長。授業では全学共通教育の英語、「広島と世界」枠の地域関連科目、大学院の英語教育学関連科目を担当。専門は英語教育。幕末明治期から続く英学の歴史と、現代のICT技術の両面から、英語の学び方を研究している。

〈主な著書等〉

『英語教科書の歴史的研究』(祥社、2004、共著)、『外国語活動から始まる英語教育』(あいり出版、2014、編著)。



林 透 Toru Hayashi 山口大学 大学教育機構 大学教育センター 准教授

京都大学卒業、名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程修了、博士(教育)。金沢大学職員、北陸先端科学技術大学院大学職員、北陸先端科学技術大学院大学特任准教授を経て現職。2015年6月より山口大学IR室長を兼務。専門は、大学組織研究、高等教育質保証研究、大学職員論、キャリア開発。

〈主な著書等〉

『高等教育における視学委員制度の研究－認証評価制度のルーツを探る－』(奥信堂、2013)、『大学における組織開発(OE)の
はみり課題～教職協働から教職学協働へ～』大学基準協会『大学職員論叢』第3号、pp.49-58(2015)
〈受賞歴〉北国新聞社第2回赤羽萬次郎賞最優秀賞



斉藤 克幸 Katsuyuki Saitou 比治山大学・比治山大学短期大学部 質的転換加速化本部 AP ワーキンググループ座長

比治山大学短期大学部美術科教授、比治山大学・比治山大学短期大学部APワーキンググループ座長。JAGDA公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会正会員、HADC広島アートディレクターズクラブ正会員、日本マンガ学会正会員。当初はシルクスクリーン版画による作品を制作していたが、近年はプリンター出力によるポスターを主に制作。

〈受賞歴〉

第20回ユーモアと風刺国際ビエンナーレ・ガブボロ入選(2010)
広島アートディレクターズクラブ主催第3回“H”ADC賞展グランプリ及び松永真真賞(2011)
広島アートディレクターズクラブ主催第4回“H”ADC賞入選(2009～2015)



武藤 義彦 Yoshitaka Mizuo 宇部工業高等専門学校 経営情報学科 教授

1991年、山口大学大学院理学研究科応用物理学専攻修士課程を修了後、日本デジタルイクイップメント株式会社ネットワーク技術センターにてDECnet対応アプリケーションをTCP/IPに適合させるミドルウェア開発に従事。1993年、宇部工業高等専門学校講師(数学・情報関連担当)。2003年、山口大学大学院理工学研究科システム工学専攻修士後期課程修了。宇部工業高等専門学校にてキャリア支援、業務関連業務に従事し、現職。専門は機械学習およびソーシャルデータ分析への応用。

ラーニングコミュニティにおける 学生の『学び』とは ～アセスメント科目の設定と効果～

2016. 3. 14

創価大学 教育・学習支援センター
センター長 関田一彦

創価大学

・創立：1971(昭和46)年 → 創立46周年

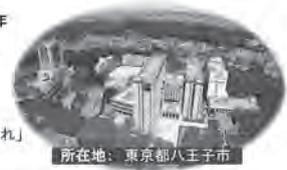
・創立者：池田 大作 創価学会名誉会長

・建学の精神：

「人間教育の最高学府たれ」

「新しい大文化建設の極進たれ」

「人類の平和を守るフォートレス(要塞)たれ」



・学生数：7973名

・設置学部：8学部+通信教育部

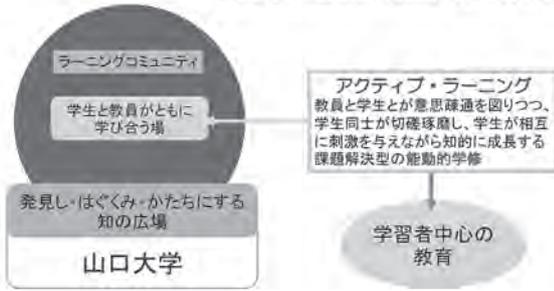
経済/経営/法/文/教育/工/看護/国際教養学部

・設置大学院

経済学研究科/法学研究科/文学研究科/工学研究科

法科大学院/教職大学院

ラーニングコミュニティにおける学生の学び



学習者中心の教育へ：創価大学の取組1

CETLと協同学習(協働・参加型の授業方法)導入の歩み

2001年1月

大人教授業での協同学習 杉江修治先生(中京大学)

2002年度 ネットワーク型学習支援センター(学習支援センター)の設置

2003年度 協働授業実践ワークショップ開催

2003年10月、2004年3月

LTD学習法 安永悟先生(久留米大学)

2004年度 ターゲット型授業実践ワークショップ開催

2004年度 協働授業実践ワークショップ開催

2004年度 ネットワーク型学習支援センター(学習支援センター)の設置

経済・経営学部の基礎演習の標
準的な授業方法としてLTDを導入

専任教員の約3割が協同学習の
ワークショップに参加

約8割の授業で能動的な学習が
認知されている

学習者中心の教育へ：創価大学の取組2

ラーニング commons

2007年 経済学部ラウンジFEEL設置

2010年4月 総合学習支援センター構想発表

2010年4月 オナーズプログラムGCPラウンジ設置

2013年3月 中央図書館1階にラーニング commons 開設

2013年6月 総合学習支援センター(Student Performance Acceleration Center)新設

2013年9月 "SPACE" 開所

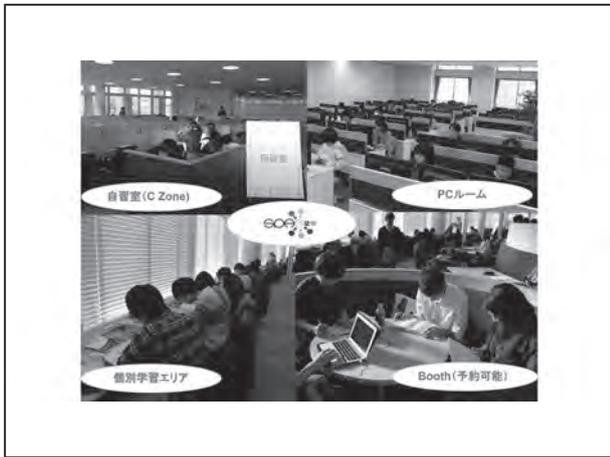
・約2000㎡の空間に、グループ学習・語学学習・自習・PC学習相談エリア、日本語・英語ラ
イティング支援・図書館サービスなど多くの機能を凝縮

・平日は2,000人超の利用者(学部生数7582人)

利用者が増加傾向(2015年度は月平均3万2千)

・事務体制である総合学習支援センターも同一空間内に配置し、教職員・大学院生・学部
学生・留学生スタッフが一体となって支援する体制を構築





学習者中心の教育へ: 創価大学の取組3

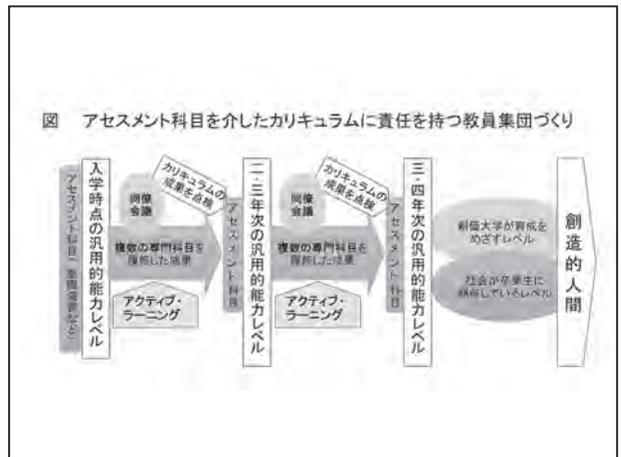
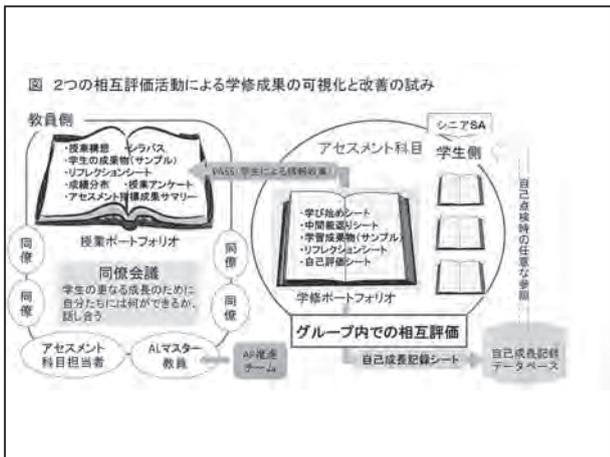
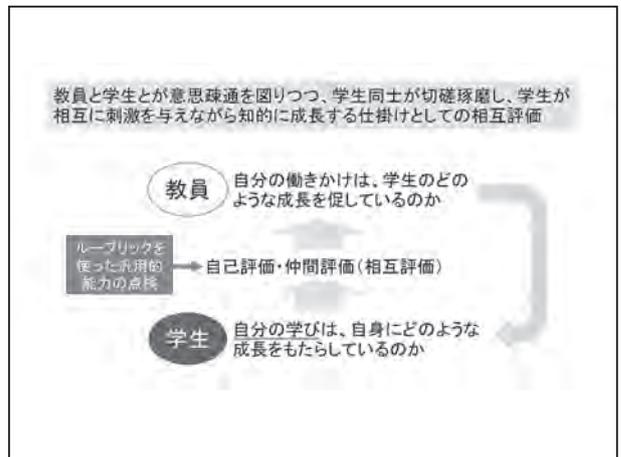
AP事業を通じた「励ましの相互評価文化」の醸成とアセスメント科目の設定

- 学生は、自己評価ルーブリックを使って自身の汎用的能力の伸長を点検する。
- 学生は、点検結果を共有し、互いの取り組みを認め、さらなる成長を励ます。

励ましの(成長志向の)相互評価文化の醸成

- 教員は、学生の振り返りに基づき、カリキュラムの効果を点検する。
- 教員は、点検結果を共有し、チームとして改善計画を策定・実行する。

創造的人間



AP事業成果発表 ジョイントフォーラム 2016
(平成28年 3月14日)

山口・広島地区大学教育再生加速プログラム (AP)
採択校の成果報告

**県立広島大学の教育改革と
アクティブ・ラーニング**

馬本 勉
県立広島大学 学長補佐 (教育改革・大学連携)
AP事業推進部会長

平成26年度「大学教育再生加速
プログラム (AP)」選定取組
テーマ I
(アクティブ・ラーニング)



大学教育再生加速プログラム

**県立広島大学型アクティブ・ラーニング
Campus Linkage Active Learning
CLAL (クラル)**

平成26年度「大学教育再生加速プログラム」選定取組

大学名: 県立広島大学
テーマ: テーマ I (アクティブ・ラーニング)

取組概要: 幅広い教養を身につけ、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かし深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせ、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたって学び続ける自律的な学習者(アクティブ・ラーナー)の育成を目指す。

県立広島大学型 アクティブ・ラーニング Campus Linkage Active Learning (CLAL)

行動型学修 | 学生の主体性を育む能動的学修 | 参加型学修

数授外での学びを取り入れる | 知的能動性を揺り動かす

学生間交流: カンパニオン制、地域との交流、異文化交流
学修支援: 学修環境の整備、交流をコーディネートする学生の育成、教職員研修の充実

行動型学修: フィールドワーク、グループワーク、インターシップ、卒業研究等
参加型学修: 協働学修、反転授業、プロジェクト学修、協働授業

学修方法の見直しと充実: 授業方法の見直し、授業方法の改善、改善

自己研鑽システム: 自主学習システム

生涯にわたる学び続ける学習者 (アクティブ・ラーナー)

学修者の一歩一歩の学びが、教育者にも伝わり、自身の学び続ける姿勢にも伝わり、学修者の成長にもつながる。

① 数授外での学びを取り入れ、学修者自ら主体的に学ぶ機会を創出し、自律的な学習者としての成長を促す。
② 知識を習得するだけでなく、知識を応用する能力を育成し、真の知識の習得を目指す。
③ PBL・反転授業の導入により、教職員の働きかたも変革し、自律的な学習者としての成長を促す。
④ 学修者が主体的に学び続けることで、学びを生涯にわたるものとする。

取組概要

地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かし深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせ、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたって学び続ける自律的な学習者(アクティブ・ラーナー)の育成を目指す。

県大型アクティブ・ラーニング

行動型学修: フィールドワーク・現地体験、実地調査等

参加型学修: グループワーク、ディスカッション・ディベート、PBL・TBL、反転授業等

課題解決型学修、対話を重視した学修の積極的導入

知的能動性を揺り動かし、深い学びを喚起する

自ら考え、課題に取り組み、解決に向けて行動する

生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーの育成

県立広島大学の教育改革とAP

- 三大学統合以降のFD活動, 高い授業満足度
- 主体的学修姿勢, 異分野間の協働機会
- ⇒ 組織的にアクティブ・ラーナーを育てる

教育改革の取組【第2期中期計画 H25-30】

- ・ 教学マネジメントの強化(H25)
- ・ 体系的な学士課程教育プログラム(H27~)
- ・ 教育方法の見直しと充実

教育方法の見直しと充実

能動的学修を引き出す仕組みと仕掛けが必要

能動的学修を促し、主体的な学びを育む

アクティブ・ラーナーの育成

そのために有効な
アクティブ・ラーニングの手法

全県域をフィールドとする県立広島大学の 特色を活かした教育の実践

距離をガラスにする仕組みづくり

それぞれ100km離れた
3つのキャンパスとサテライトキャンパス

遠隔講義

フィールドワーク
合同発表会など

キャンパス移動

広島キャンパス

三原キャンパス

能動的学修 組織的な取り組み

特色ある
4つの学部
教育効果を
さらに高める

体系的なカリキュラム

高い研究力に
基づく
確かな教育力を
さらに高める

授業内容の取り組み
教育方法の工夫

計画的
AL導入

行動型 参加型

幅広い教養と
高度な専門性に
支えられた
確かな実践力と
課題解決力を
身につける

アクティブ・
ラーナーの
育成

人材育成目標

- 県立広島大学は、主体的に考え、課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え、幅広い教養と高度な専門性に基づいて、高い志とたゆまぬ向上心をもって地域や国際社会で活躍できる人材を育成します。

全学共通教育科目の改革

専門教育の役割

高度な専門的知識・技能を身に付ける

全学共通教育の役割

専門分野の枠を越えて必要とされる知識やスキル、幅広い視野や教養を身に付ける

- 大学で学ぶ基礎・基盤
- 専門と並び立つ豊かな教養

全学共通教育 L(エル)字型モデル

豊かな教養

人文
社会
自然

キャリア

広島と世界

専門教育

初年次導入・外国語・情報・保健体育

大学で学ぶ基礎・基盤

新たな全学共通教育

教養

人文

自然

社会

キャリア

広島と世界

初年次導入

基礎

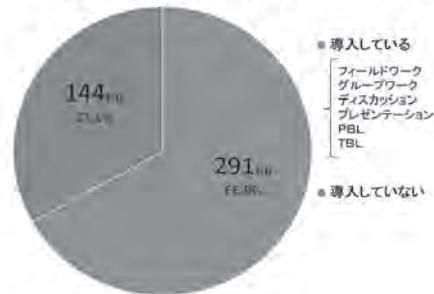
外国語 情報 保健体育

学士課程を通じて身に付けさせたい力

- 学問的成果を踏まえた幅広い知識を習得している。
- 物事を多面的に捉え、自らの考えを組み立て、伝える力を身につけている。
- 課題に気付き、その解決に向けて熟考し、行動を起こすことができる。
- 他者を理解・尊重し、ともに豊かな社会づくりに貢献できる。

平成26年度 AL導入状況

全回答435科目中のアクティブ・ラーニング導入率



文部科学省
大学教育再生加速プログラム
(平成26年度選定事業)

平成26年度 県立広島大学教育改訂フォーラム

学生の主体的な学びを 引き出す教育をめざして

—アクティブ・ラーニング実践事例—

平成27年

3/7 13:00~17:00

参加
無料

県立広島大学 広島キャンパス 大講義室
広島市南区宇品東一丁目1番71号

1年目 ⇨ 2年目: 課題の整理と展開

- 個別実践の積み重ね ⇨ 組織的対応へ

平成27年度 スタートした組織的取り組み

- 新しい全学共通教育プログラム
- ファカルティ・ディベロッパー(FDer)養成
- 学修支援アドバイザー(SA)養成

CLAL推進: 3つの柱

- 参加型、行動型学修によるAL推進
 - 100%の学生が受講(平成29年度)
- ファカルティ・ディベロッパー(FDer)の養成
 - 30名(平成29年度)
- 学修支援アドバイザー(SA)の養成
 - 55名(平成29年度)

FDer養成講座

- 第1回 深い学びへの過程を理解する「ICEモデル」を学び、FDerに期待される役割を検討 ⇨ FDerは自らAL実践者、同時に、組織的な浸透を図る
- 第2回・第3回 ALの手法をグループワークを通じて学ぶ ⇨ 自ら手法を学ぶとともに、遠隔で結んだ各キャンパス会場でのファシリテータの役割
- 第4回 教育改革フォーラムでの実践報告、運営サポート

学修支援アドバイザー養成のための研修会

- 第1回「学生による学修支援:大学教育における役割を考える」⇒ SAの重要性と他大学における実践例を学ぶ
- 第2回「教職協働で育てる学修支援アドバイザー」⇒ SAIに期待する役割や、その養成に必要な事柄を、教職員のグループワークで学ぶ
- 研修を踏まえ、学科推薦および自薦でSA候補となった学生に対する養成講座を開催予定(3月)

19

平成27年度 AL導入状況

- 行動型学修(フィールドワーク、他キャンパスとの交流を伴う学修、等)
- 参加型学修(グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション、等)
- 90分授業で20分相当の活動(学期中の合計300分以上)

20

平成27年度 AL導入状況

- グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションを中心に導入が進む
- 授業への参加度、理解度の向上
- 導入困難理由: 授業内容、説明時間減

21

実践と評価: 3年目へ向けて

参加型、行動型学修によるAL推進

- ⇒ 実践の共有、評価方法の検討
- ⇒ アクティブ・ラーナーとしての学生の意識

ファカルティ・ディベロッパー(FDer)の養成

- ⇒ FDerを中心とした組織的研修の企画運営

学修支援アドバイザー(SA)の養成

- ⇒ 教職協働でSAを育成

22

山口大学

文部科学省
大学教育再生加速プログラム
(平成26年度選定事業)

平成27年度 県立広島大学教育改善フォーラム

アクティブ・ラーニングの 導入と評価

平成28年
3/4 14:00~17:30

参加
無料

県立広島大学 広島キャンパス 大講義室
広島市南区宇品東一丁目1番71号

23

行動型, 参加型アクティブ・ラーニングとFD, SD

代表発表者：県立広島大学 総合教育センター 馬本勉
 共同発表者：県立広島大学 本部教学課 川口博之, 濱田縁, 伊藤俊



1 県立広島大学について

- 県立広島大学は2005年に、広島県内の3つの県立大学が統合し開学。
- 広島市, 庄原市, 三原市の3キャンパスに加え, 2013年にはサテライトキャンパスを開設。「地域に根ざした, 県民に信頼される大学」を目指す。
- これまで県立広島大学は「遠隔講義システムの導入」や「全学共通教育の見直し」といった, 3キャンパスが一体となった教育改善に取り組んできた。
- 一方で, 学生の授業外学修時間が伸びないこと^{※1}, 3キャンパス間での学生同士の交流が十分に図れていないこと等については, 長らく課題とされてきた。

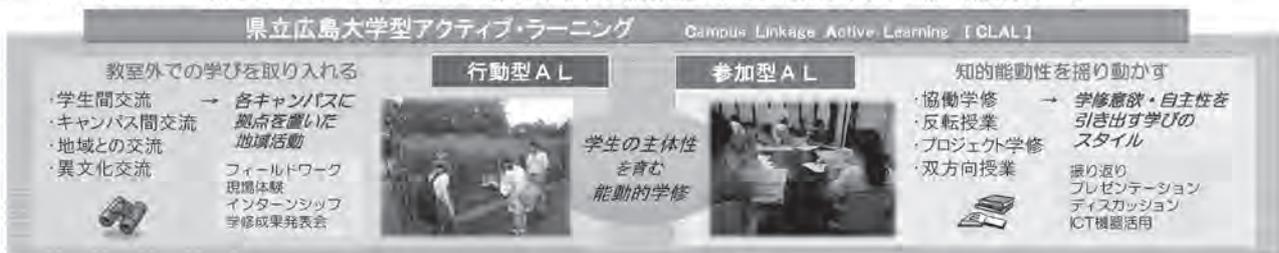
※1 新入生意識調査の結果より



2 行動型, 参加型アクティブ・ラーニングの推進

- 本学は平成26年度, 文部科学省「大学教育再生加速プログラム(AP)」事業の「テーマI: アクティブ・ラーニング」に採択され, 学生の主体的な学びを引き出す能動的学修の更なる推進に着手している。
- 本学が推進する県立広島大学型アクティブ・ラーニング(Campus Linkage Active Learning; CLAL)は, 広島県全域をフィールドとして教室外での学びを取り入れる「行動型アクティブ・ラーニング」, 新たな教授法の開発・導入により学生の知的能動性を揺り動かす「参加型アクティブ・ラーニング」を基盤としている。
- この2つのALを推進することで, キャンパスの枠を超え, 知的能動性にあふれた新たな学びの形を展開していく。

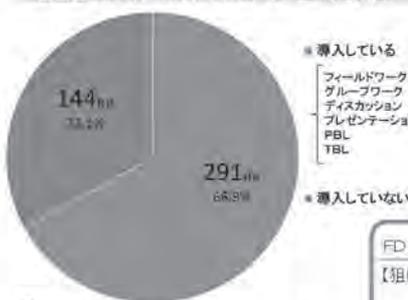
大学教育再生加速プログラム



3 CLALの実質化を加速するFD, SD

- 平成26年度に実施したAL導入状況に関する学内調査^{※2}では, 既に約7割の授業で導入済みという結果が得られた。
- 一方で, ALにより学生の自律性を高め, 授業外学修時間の増加へとつなげるには, ALの更なる質の向上が必要である。
- AP事業を通じて, 本学が実施してきたFD, SDを更に発展させ, CLALの実質化を加速させていく。

全回答435科目中のアクティブ・ラーニング導入率



CLALを実質化する
FD, SDの充実

FD事例 ファカルティ・ディベロッパー(FDer)の養成

【FDerの役割】
アクティブ・ラーニングを実践し, その波及・浸透に努める。最終的には, アクティブ・ラーニングの視点から学部・学科のカリキュラムへ提言を行うことを目指す。

【養成人数】各学科2人以上, 全学で30人以上

【養成方法】3つのプログラムを段階的に実施する。
入門編(H27) ⇒ 応用編(H28) ⇒ 実践編(H29)

FD・SD共通 学修アドバイザー養成に係る教職協働

【学修アドバイザーについて】
学修アドバイザーは学生同士の学修支援の充実を目的として養成する。主に各キャンパス図書館ラーニング・commonsで, 他学生の主体的な学びを支援する。

【学修アドバイザー養成に係る教職協働】
教員と職員との協働により, 学修アドバイザー養成講座の運営やラーニング・commonsの継続的な整備を行うことで, 学生同士がともに学び合う環境を構築していく。

FD・SD共通 先進事例調査・研修参加の促進と学内フィードバック

【狙い】FDや授業改善に係る先進事例調査や, 研修等への積極的な参加を支援し, 全学的に促進する。得られた知見や情報を学内で共有し, 情報の「収集」と「共有」の好循環を図る。

【学内フィードバック】教員…全学FD研究会やFDer養成講座等での報告を通じて, 全学へ情報を発信する。職員…課内で行う「フィードバック研修」にて報告し, 出席者と情報を共有する。
(本部教学課で先行実施)

※2 調査機関 平成26年12月16日 ~ 平成27年1月20日
対象 平成26年度授業担当教員(専任教員・非常勤教員)
調査方法 回答用紙およびGoogleアンケート

4 FD, SDの課題: 全学的な共有へ

CLALの推進に係る本学のFD, SDについて, 次の2点が課題として挙げられる。

- FDの課題…ALの導入状況やFD推進の意識について, 学部・学科間で差がみられる。全学的なつながり(Campus Linkage)を語る本学のAP事業においては, 学内でFDを推進する意義・目的を強く共有し, 合意形成を図っていくことが, 効果的なALの導入につながると考えられる。
- SDの課題…各種研修等で得られたALに関する情報やノウハウを事務局内で共有する機会について, 現状では本部教学課で行うフィードバック研修での報告に留まる。全学的な職員研修との連携等により, 先進的な情報を広く共有していく必要がある。

ALポイント認定制度スタート!

【共通教育科目】	平均値	入力率
全体	4.28	80.5%
講義科目	4.04	80.5%
実験・実習科目	6.95	80.0%
語学科目	4.43	70.4%

※平成27年度後期現在(速報値)

「基礎セミナー」 5.12	「情報リテラシー演習」 5.79
「山口と世界」 6.13	「English Speaking」 7.26
「英語ライティング」 5.75	「科学技術と社会」 6.48

【アプローチ②】
アクティブ・ラーニングの事例紹介・対話を通じたFD

★**アクティブ・ラーニングをテーマとしたFD・SDワークショップ開発**

(1)第1回FD・SDワークショップ(2015年7月)
大人教授業・理系基礎におけるALをテーマに、教員・職員・学生を交えたWS

(2)第2回FD・SDワークショップ(2015年10月)
ICT機器、AL教室環境を活かしたALをテーマに、教員・職員・学生を交えたWS

★**学内全部局での教育改善FD研修会(2015年10月～2016年2月)**
テーマは、AP事業報告と意見交換(アクティブ・ラーニングの組織的取組を中心)

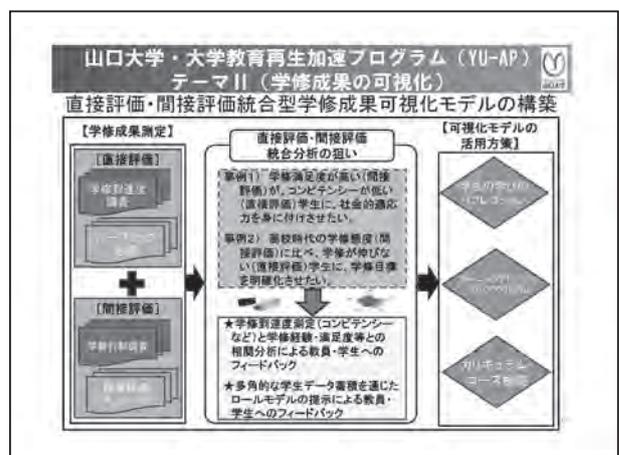
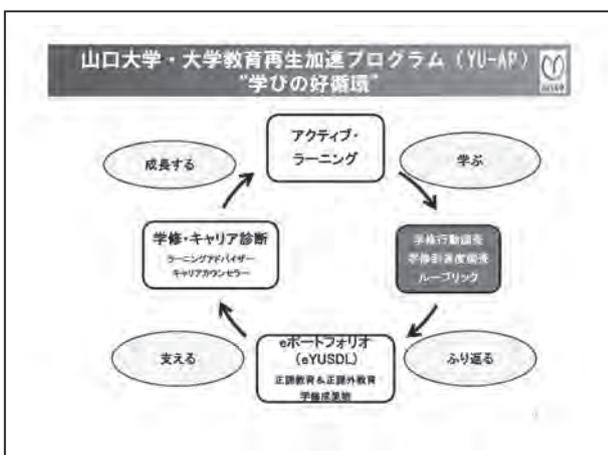
【アプローチ③】
アクティブ・ラーニングのための学習環境整備

★共通教育棟15番教室・26番教室、演習室A・演習室Bのアクティブ・ラーニング教室化(平成26年度改修)

★**クリックカー**
(今年度後期より貸出制度開始(吉田キャンパス))

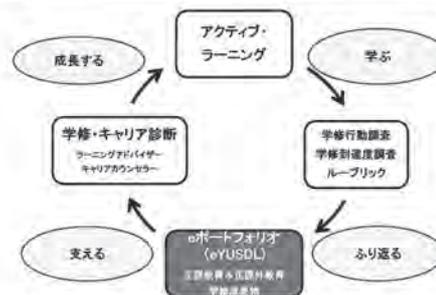
★**iPad50台と学習支援システム**
(共通教育棟26番教室)

テーマII(学修成果の可視化)
①学修到達度調査・学修行動調査



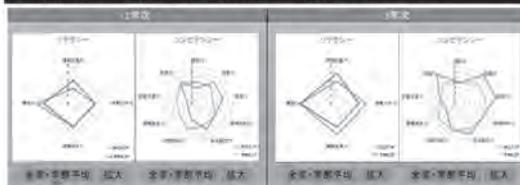
テーマII(学修成果の可視化) ③学生によるリフレクション

山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) “学びの好循環”



自己主導型学修総合電子システム (eYUSDL) における汎用的能力測定の可視化

汎用的能力測定(学修到達度調査)の可視化(イメージ図)

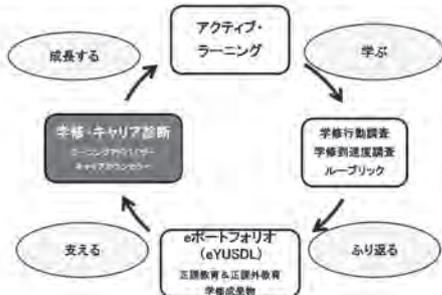


※ レーダーチャート下部のボタンをクリックするとリテラシー、コンピテンシーの全学・学部平均を示した表やPDF等の形式でダウンロードが可能です。自身のレベルが全学・学部平均とどこに位置づけられるかが把握できます。

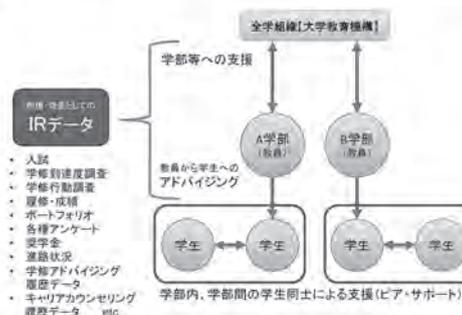
※ 1年次と2年次の結果をレーダーチャートで表示し、拡大ボタンをクリックするとチャートを拡大できます。また、チャート下部に一覧表も表示します。

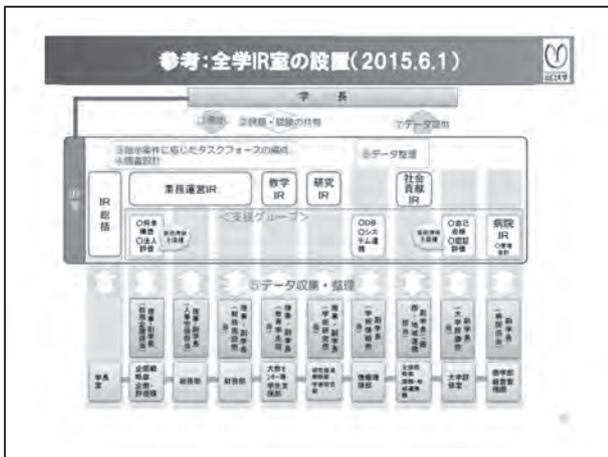
テーマII(学修成果の可視化) ④教員によるアドバイジング

山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) “学びの好循環”



学修・キャリア診断体制の方向性(イメージ)





おわりに

これまでの事業成果と今後の展望(1)

【テーマⅠ(AL)】
 ★ALポイント認定制度を通して、全学的なAL推進に関する理解浸透。
 ⇒ALベストティチャー表彰(2016年度～)、FD・SDワークショップ(専門適応型FD・SDなど)を通した一層の充実。

【テーマⅡ(Rubrics)】
 ★『山口と世界』コモンルーブリック開発をリーディングケースとして、ルーブリック活用に関する環境醸成。
 ⇒ルーブリックハンドブック、正課・正課外教育における作成・実践事例の蓄積を通した一層の充実。

これまでの事業成果と今後の展望(2)

【テーマⅡ(教学IR)】
 ★学修到達度調査・学修行動調査、YU CoB CuSの導入を通して、学修成果の可視化の組織的取組推進。
 ⇒アセスメント・ポリシーの明確化。
 ⇒委員会やFD・SD研修会等でのデータ提示を通した議論の更なる活性化。
 ⇒教学IRを活かした、学生のリフレクション、教職員によるアドバイジングの充実。



ご清聴いただきまして
 ありがとうございます

「志」つなぎ伝える
 二百年

山口大学

Contact me : toru-h@yamaguchi-u.ac.jp

平成26年度採択事業 比治山大学・比治山大学短期大学部AP事業成果報告

比治山大学・比治山大学短期大学部APWG座長 斉藤 克幸 2016. 3. 14

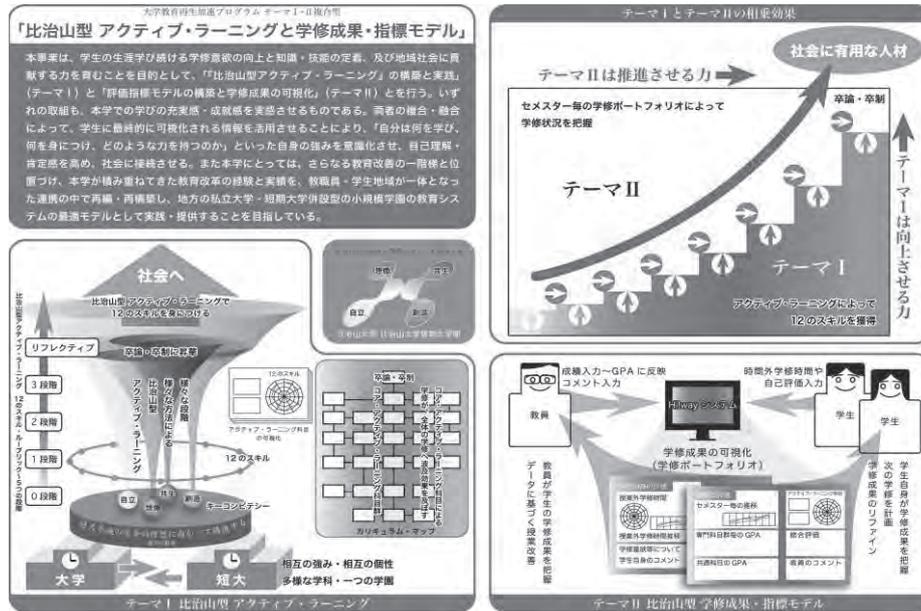


～ねらい～

事業の概要

■ 本事業は、学生の生涯学び続ける学修意欲の向上と知識・技能の定着、及び地域社会に貢献する力を育むことを目的として、「『比治山型アクティブ・ラーニング』の構築と実践」（テーマⅠ）と「評価指標モデルの構築と学修成果の可視化」（テーマⅡ）とを行う。いずれの取組も、本学での学びの充実感・成就感を実感させるものである。

両者の複合・融合によって、学生に最終的に可視化される情報を活用させることにより、「自分は何を学び、何を身につけ、どのような力を持つのか」といった自身の強みを意識化させ、自己理解・肯定感を高め、社会に接続させる。また本学にとっては、さらなる教育改善の一階梯と位置づけ、本学が積み重ねてきた教育改革の経験と実績を、教職員・学生・地域が一体となった連携の中で再編・再構築し、地方の私立大学・短期大学併設型の小規模学園の教育システムの最適モデルとして実践・提供することを目指している。



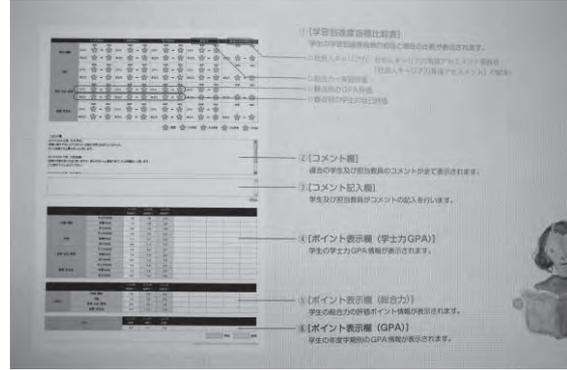
何を再生加速するのか? (Acceleration Program for University Education Rebuilding)

AP事業のポイントは、新しいことを始めるのではなく、再生加速すること

■ アクティブ・ラーニングの再生加速～これまでも個々の教員レベルにおいて、学生が能動的・積極的に授業に参加する方法を工夫し取り組んでいた。しかし組織としての取り組みはしておらず（短期大学部では授業アンケートの結果を受け「授業改善事例報告」を毎年度制作し配付している）、教員間の取り組み実態にはばらつきがあった。これを組織的に取り組み全学的に実施していくことで再生加速させる。

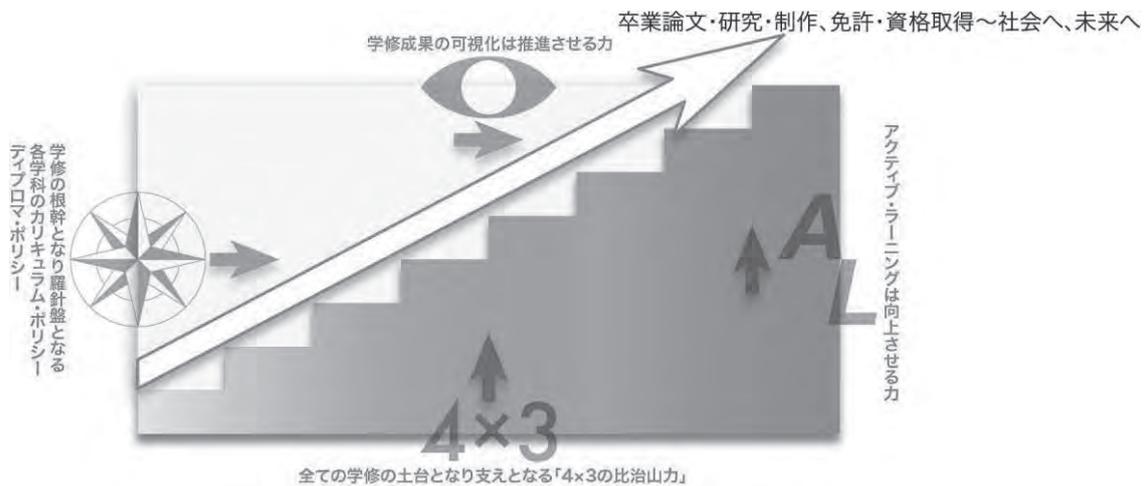
■ 学修成果の可視化の再生加速～H23年度大学教育推進プログラム（GP）にて「スキをスキルにする保育者養成プログラム」に採択され、幼児教育科が学修成果の可視化に取り組んできた。しかし資格取得

を目的とした学科に特化したものであったため、他学科への応用が効かなかった。この考え方を全学的に実施するために、既存の本学学生情報システムHi!way（ハイウェイ）を活用し、可視化を実現することで再生加速させる。



テーマⅠ・Ⅱ複合型の意味

■ アクティブ・ラーニングは、平坦ではない場所で少し力を入れて段を上るイメージ。学修成果の可視化は、学期毎の自分の学修状況を確認し学期毎のスタートラインを確認するイメージ。ALと可視化が相互に働くこと（両方のベクトル）で右肩上がりに進んでいく。



-アクティブ・ラーニングの取組-

アクティブ・ラーニングとは何か？

■ 比治山型アクティブ・ラーニングの定義

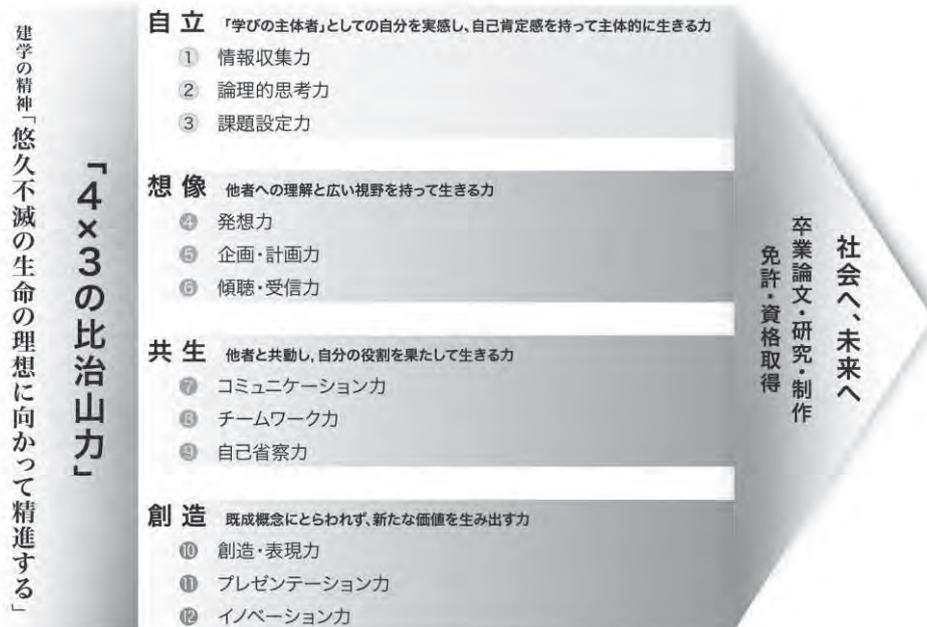
- 学生の学ぶ意欲を引き出すため、PBLやグループ・ディスカッション、フィールドワークや体験授業などの手法を中心に、体験や参加によって主体的に考えるきっかけをつくる授業展開
- 一方的な知識伝達型授業を聴くという受動的な学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習
- 15回のうち、3回以上「アクティブ・ラーニング」の技法を取り入れた授業

～聞いて帰るだけの「講義」からの脱却

比治山型アクティブ・ラーニングの特徴

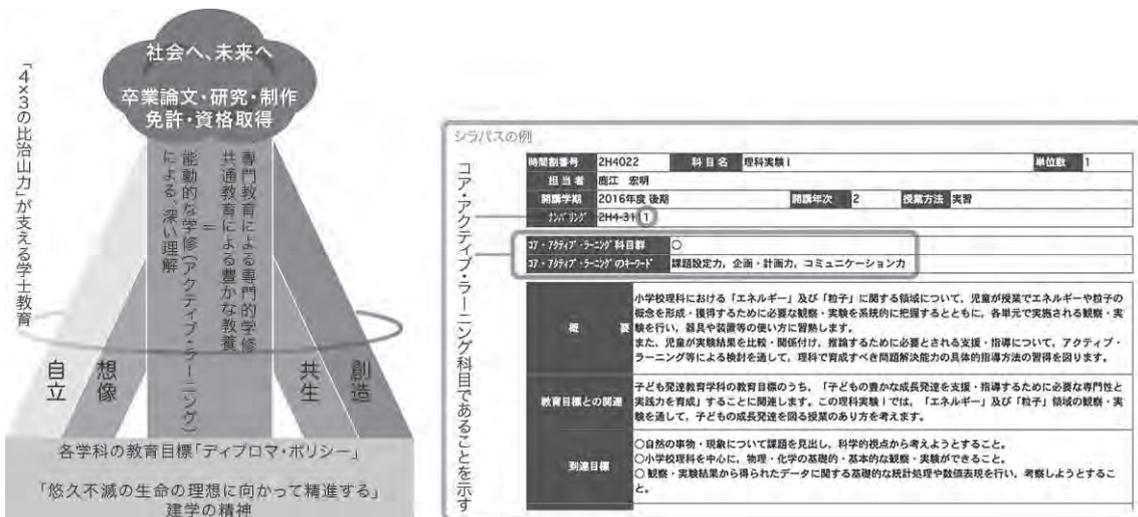
①「4×3の比治山力」の育成

＝建学の精神に基づく4つのキーコンピテンシー（自立・想像・共生・創造）からなる12のスキル（＝大学で学修するために必要な力）が、各科目における専門的学修と共に育まれていく、また身についた「4×3の比治山力」がさらに専門的学修を押し上げる。



②根幹となる「コア・アクティブ・ラーニング科目」での体系的な学び

＝そもそもALとは何か？＝能動的な学修＝学生が自分でテーマを見つけ、自分で調べ、自分で判断し、自分で結論づけること＝卒業論文・研究・制作に取り組む姿に他ならない＝ならばALにまず取り組むべきは、学科の柱となる科目である。（科目毎に、特に必要な「身に付けたい」スキルを決める）



③初年次セミナーから卒業研究までの丁寧できめ細かい指導

＝原則として「初年次セミナー」から「卒論・卒制」までがコアAL科目に入っている。

～比治山生は、一々指示されなくとも自らすすんで考え行動する・・・が理想。

④アクティブ・ラーニングの技法・方法を目的化しない

＝形だけALにすることは簡単であるが、魂の入っていないALは無意味＝ALによる副産物として「4×3の比治山力」が育まれていくが、「4×3の比治山力」育成が授業の目的ではない＝結果的に身に付

いた「4×3の比治山力」によって、その科目の理解が深まることが目的である。

～「4×3の比治山力」は、社会に出てからも大いに役立つ。

—学修成果の可視化の取組—

何をどう可視化するのか？

■ 本学学生情報システムHi!way（ハイウェイ）に新機能を追加し、ポートフォリオ機能の充実、4×3の比治山力や、成績（GPA）の推移の可視化、免許・資格を教職履修カルテの一部として可視化。



①新機能Hi!step

■ e-ポートフォリオ機能＝数字ではなく、目標や考え方や実際に体験したことなどを言葉で記録する。

チューターの入力欄もある。

- ①「マイストーリー」～入学時の思いや将来の自分を思い描いて、入学時に記録しておきましょう。学生生活を送る中で、思いが変化したり、膨らんだりすることがあれば、追記してください。
- ②「マイチャレンジ」～学生生活を有意義に過ごすために、年度当初に自分なりの目標を設定しましょう。学期終了後に結果を振り返り、記録して、次に活かしましょう。
- ③「マイレポート」～新入生対象の「大学生基礎力レポートⅠ」と2年次から4年次にかけての「大学生基礎力レポートⅡ」について、一人ひとりの調査結果です。
- ④「マイアプローチ」～卒業後の職業観・生き方を考え、社会に出て行くことを意識し、意欲的な学生生活を自ら計画し実践することを手助けします。また履歴書を書くためにも役立ちます。
- ⑤「マイアルバム」～学修活動、課外活動、ボランティア、就職活動、作品等、日々の活動記録をアルバムのように保存しておきましょう。

②新機能Hi!check

■ 学修成果の可視化＝GPA等による。

- ①「4×3の比治山力」（自分の成長）～コア・アクティブ・ラーニング科目のGPAの平均値を学期毎に加算し、その数値が、あらかじめ設定された「しきい値」を超えた分だけ、「四つ葉のクローバー」が開

いていく仕組みで、葉が縮むことはなく必ず開いていく。学期毎の結果に対する反省や次への目標などを記入する「コメント欄」もある。チューターの入力欄もある。クローバーの大小を比較するのではなく、学生個々の成長を応援しエールを送るための本学独自の学修指標（到達度評価）。しきい値計算式：コア科目の単位数×GPA／コア科目の単位数の和

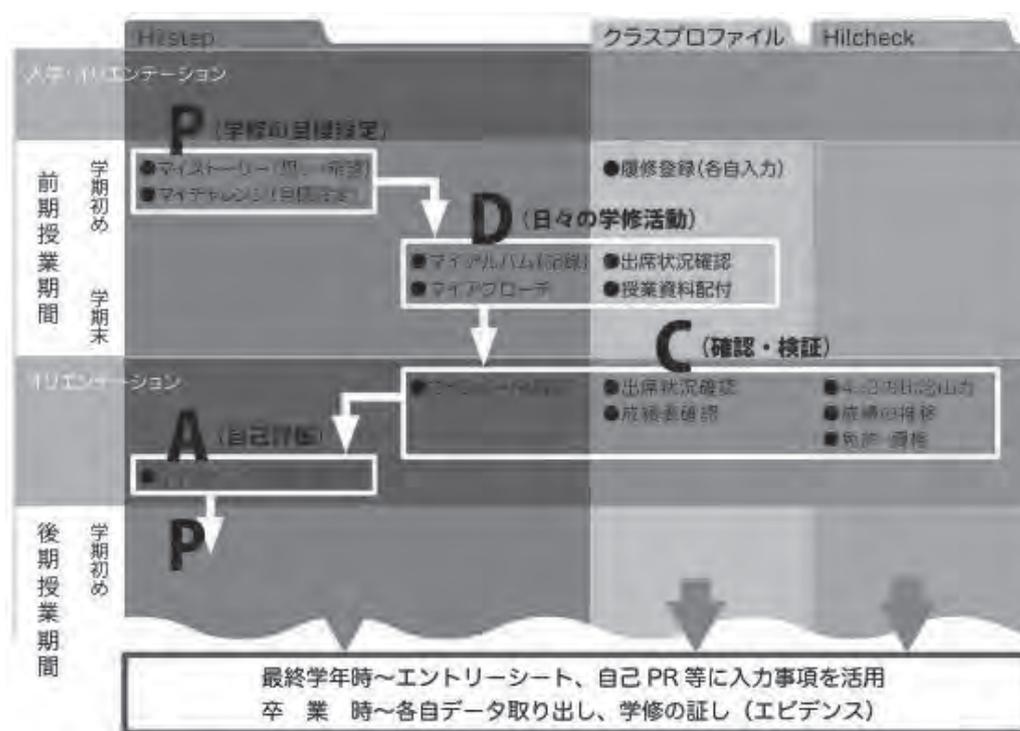
②成績の推移～学期毎のGPAの変化を、折れ線グラフで表示する。学期毎の結果に対する反省や次への目標を記入する「コメント欄」がある。チューターの入力欄もある。

- (1) その学期に履修した科目による総GPA
- (2) その学期に履修した共通教育科目のGPA
- (3) その学期に履修した専門科目のGPA
- (4) その学期に履修した科目のうち合格した科目のみのGPA

③免許・資格～学生便覧に記載されている免許・資格の取得に必要な科目の履修状況が一覧で表示される他、免許・資格取得にあたっての目標や取り組むべき課題を記入することができる。それぞれの科目の成績や成果と課題が表示され、免許・資格取得に向けて見通しを持つことができる。このページは印刷して、免許・資格申請時に教職カルテの一部として活用できる。

学修活動のPDCAサイクル

■ 学修活動のPDCAサイクルを、学生自身が意識し、成長への手助けとする。



AP事業の全学的取り組み

■ 運営体制：質的転換加速化本部～APWG、APAL部会、AP可視化部会、AP指標開発評価部会～各学科のファカルティ・ディベロッパー (F D e r) ～AL推進室等がプラットフォームとして常時機能し常駐スタッフを配置～従来の委員会及び事務局と連携～外部評価委員会

学生に向けて

- AL・可視化解説用冊子「4×3の比治山力 学修の手引き」の作成・配付し、オリエンテーション・初年次セミナー等を通じて学生に説明。丁寧なフォローアップ（コメント記入等）。
- レバスのフォーマットを修正し、ALを実施する科目であることを明示。
- AL活用型教室（05111）や図書館ラーニングcommons「Me+Library」の整備活用。
- Hi!way（ハイウェイ）にLMS（授業録画配信システム）機能を追加、試験運用開始。Wi-Fiスポット増設（26年度末）、タブレット端末iPad（予定）の準備。
- 大学生基礎力レポート、比治山力レポートの実施・分析。

教職員に向けて（FD・SD、自己点検、外部評価）他

- 本学教員に向け、AL実践マニュアル「アクティブ・ラーニングの技法集」の配付し、共通教育科目及び各学科専門科目からコアAL科目を選定し、重点的にALを実施。
- AL推進室を整備し常駐スタッフを配置し、ALに関する情報発信や相談に応じ、AL型授業用小道具・タブレット端末iPad（予定）の貸し出しの実施。
- 全学FD・SD・セミナーの開催や、学内授業の公開・参観の実施。
- 必要に応じ他大学を視察、他大学開催フォーラムやセミナーへの参加。また視察後は「示唆報告書」を提出し、情報の共有化を図る。
- コアAL科目を対象としたリフレクション・シートに各教員が回答し、実施状況を調査・分析。
- 自己点検、外部評価委員会の開催。次年度に向けた改善と実施計画の策定。

UBE KOSEN

宇部高専における 長期学外学修プログラムの展開

大学教育再生加速プログラム(AP)

AP事業成果発表ジョイントフォーラム2016
2016年3月14日

UBE KOSEN 宇部高専におけるAP事業の概要

養成する人材像
主体的に学ぶ / 未来志向性に優れた / グローバル社会で生き抜く学生

学外学修
長期インターンシップ
キャリアデザイン力の向上
および技術者像の確立を
目的とした事前・事後指導を
含む長期インターンシップ

海外体験プログラム
1ヶ月以上の海外研修・語学研修
海外協定校インターンシップ等の
海外体験プログラム

社会人基礎力、
コミュニケーション能力の修得

英語力および
異文化適応能力の向上

地域教育
現実に山積する課題を地域教育を通して認識し、
長期学外学修の機会にそれらの課題に対する
多様な視点を得る

地域の課題解決
／高齢者生活支援

近隣の小中学校への
教育コンテンツの提供

地域貢献活動
(ものづくり教育)

UBE KOSEN 宇部高専の目指すゴール

目標

- 主体的な学びを促し、グローバル社会で活躍できる「創造力と実践力を持つ人間性豊かな中核技術者」の育成
- 地域のニーズや動向を踏まえた「地域に役立つ宇部高専」の実現を加速

目標実現に向けた取組み

- 長期学外学修という機会・場の創出 (海外体験プログラム & 長期インターンシップ)
- そのための下地として、4学期制の導入および

UBE KOSEN クォーター制の導入

クォーター制：1年間を4期に分け、各期を約2か月とする

選択科目集中配置

1Q	2Q	夏季休業 (約15日)	3Q	4Q	冬季休業 (30日)
4/1～6/4	6/5～8/5	8/6～10/14	10/15～12/15	12/16～3/1	3/2～3/31

最大125日間

4学期制導入の目的

- 短期集中型学習による知識定着率向上
同時に学ぶ科目数を減らし、個々の科目を集中的に深く学ぶ
→ 記憶のあるうちに振り返り & 個々の科目へ深くアプローチ
- 長期学外学修への参加促進
→ 社会性・グローバルマインドの育成

UBE KOSEN 学修単位(大学単位)の導入

高専単位と大学単位の違い

- ・ 高専単位：30時間の授業＋自宅学習ゼロ
- ・ 大学単位：15時間の授業＋30時間の自宅学習 (1単位に相当する学習時間)

高専単位の考え方＝「教え込む」教育 → 受け身の学習
大学単位の考え方＝「学び取る」学習

学修単位導入の目的

- ・ 学生の学修に対する意識の転換
passive から active へ
- ・ 教員の研究時間の確保

UBE KOSEN 地域教育の拡充

地域ニーズ対応の実績

ものづくり教育 & 出前授業

スクールサポーター

地域の課題解決

高齢者生活支援

正解のない問題・制約条件下での問題解決

学生の有する工学の知識・技術および経験

地域教育拡充の目的

- 地域の課題解決・高齢者生活支援
地域・高齢者からのニーズ把握 & 具現化
→ 自ら課題を探る能力 & 多くの小さなイノベーション
→ エンジニアリングデザイン能力の醸成
- 従来型の地域教育・スクールサポーター
教学・理科への関心向上 → 教育・人材の育成

UBE KOSEN 長期インターンシップ

学生が学生を育てるサイクル

- 事前指導役:
教育CDから長期インターン経験者へ委譲
→ 学生が学生を育てるサイクルの実現
- 教育CDおよび地域企業の協力の下、
教員FDを実施
→ キャリアアドバイザー(常勤教員)の育成
- 受入先の開拓
宇部高専T&B加盟企業(40社)
北九州～周南にまたがる工業地帯
学術交流協定校との連携

参加学生数
H29 32%(70人/220人)
H31 55%(120人/220人)

長期インターンシップ実施の目的
1か月間にわたる業務との深い関わりによる企業活動理解
→ キャリアデザインの向上 & 技術習得の確立
→ 就職活動の円滑化 & 地域貢献の促進

UBE KOSEN 海外体験プログラムの拡充

海外体験プログラム参加者数
(海外留学生 + 海外インターンシップ参加者数)

派遣期間/派遣人数
2～3週間の短期が主流

4週間への派遣期間長期化 & 派遣学生数:100人/年

海外体験プログラム拡充の目的

- 英語を障壁と捉えない学生の増加
- 異文化適応能力の向上
- グローバル・エンジニアの育成
- 産業のグローバル化への対応

UBE KOSEN 海外体験プログラムの拡充に向けて

派遣先の開拓

学術交流協定校
台湾聯合大学 (台湾)
ニューカッスル大学 附属語学学校 (オーストラリア)
ハルビン工業大学 (中国)

今後、開拓対象の大学等
ニューカッスル大学および同高校 (オーストラリア)
香港VTC (中国)
ナンヤンポリテクニク (シンガポール)
マレーシア工科大学 (マレーシア)
永道専門大学 (韓国)

スタッフの充実
国際交流支援室の拡充(若手教員を中心に)
国際交流専任の特任教員を雇用

UBE KOSEN 学外学修プログラムを経た学生の成績評価

学外学修活動における目標到達度評価

学校側が設定する評価基準 + ルーブリック評価
個々の学生が「自身で設定した目標」

海外体験に関するルーブリック評価基準の例

評価	基準
可	海外体験を通して、生活習慣や文化の違いなど留学先国に関する知識を獲得できる
良	不十分な外国語力であっても、自分の意図を伝えようと積極的に発言し、外国人の仲間に働きかけて、問題点を一緒に改善するために行動できる
優	自分の意見を分かりやすく整理した上で相手に理解してもらえよう、英語または現地語で的確に伝えることができる
秀	外国人との協働作業において、その意思決定作業に参加し、自分の役割を果たすことができる



新教育プログラムへの取り組み 山大など成果発表

フォーラム参加
100人

新たな人材育成を目指す「大学教育再生加速プログラム」に取り組む山口大学など山口・広島地区の5校が、14日、山口市小郡黄金町のYIC Student Oであり、県内外の大学や企業関係者約100人が参加した。山口大主催。

育機関による成果発表フォーラムが14日、山口市小郡黄金町のYIC Student Oであり、県内外の大学や企業関係者約100人が参加した。山口大主催。

山口大は2014年9月に文科省に採択された「アクティブラーニング（A-L）」学修成果の可視化」を018年度までの予定で取り組んでいる。山口大や徳山大、宇部高専などの同プログラム担当者それぞれが取り組み結果と今後の展望などを発表。

山口大・大学教育センターの林透准教授は「採択から2年間で取り組みの基礎づくりができた。新年度からプログラムの実施をより深めたい」と話した。創備大学教育・学習支援センターの関田一彦センター長の基調講演もあった。学生に能動的な学修を促すアクティブラーニングの充実に向け、教員と学生、学生同士といった二つの相互評価活動による学修成果の見える化と改善の試みの実践などを紹介した。

学生が能動的に学ぶアクティブラーニングの実践事例を紹介する創備大の関田一彦教育・学習支援センター長は14日、山口市

出所：『山口新聞』2016年（平成28年）3月15日付け3面



先進事例を話す創備大の関田センター長
(山口市のYIC Studioで)

APの成果発表

学習者中心の教育法学ぶ

学生の主体的な学びを引き出す文部科学省の補助事業・大学教育再生加速プログラム（AP）に取り組む山口・広島地区の採択校が成果を発表するジョイントフォーラム2016は14日、山口市小郡黄金町のYIC Studioで関係者約100人が参加して開かれた。APは、大学改革の一つで、社会で求められる人材が高度化、多様化する中、主体的に学ぶ学習方法や環境を整備するのが狙い。

同フォーラムでは、基調講演で、2001年から協働・参加型の授業方法を導入している創備大（東京都八王子市）の教育・学習支援センター長の関田一彦さんが「ラーニングコミュニティにおける学生の学びとは」と題して話した。教員による一方的な講義ではなく、教員と学生、学生同士が能動的に課題解決に取り組む「学習者中心の教育」を紹介。2000平方メートルの空間に、グループ学習や語学学習、自習、学習相談エリア、パソコン環境、図書館などさまざまな機能を凝縮。課題を支援する専門員を常駐させたり、グループワークによる多彩なプログラムを開催したりして平日には2000人が利用するという。学生の主体的な学びを引き出し、その効果を「見える化」する自己点検シートを作成。仲間による励ましや助言のコメントも記入し、自己成長に気付かせる仕組みを話した。

この後、山口・広島地区の五つのAP大学採択校が取り組みを紹介。山口大は昨年度からの「YU-AP」プログラムを紹介。授業の中で「アクティブ・ラーニング」度をポイント化して認定するALポイント制度を紹介した。

宇部高専は、クオータ制（4学期）による長期外学修プログラムを紹介。集中的に深く学んだら、海外体験や長期インターンシップに取り組んでいるとした。（佐野）

出所：『宇部日報』2016年（平成28年）3月16日付け3面

**VI . 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP)
事業成果報告**

山口大学共通教育改革を通じた『山口と世界』コモンルーブリック開発と運用



山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 (IR室長) 林 透
Contact : toru-h@yamaguchi-u.ac.jp

組織的背景と戦略

2013年度の共通教育改革において、共通教育科目履修を全学部生統一にパッケージ化する「新しい共通教育」に衣替えしたことにより、特定科目におけるルーブリック開発・活用(直接評価)や初年次・高年次における学修行動調査(間接評価)を組織的に実施できる環境が整った。

中央教育審議会答申が求めるアセスメントポリシーの明確化と具体的な学修成果測定開発の必要性と絡めながら、学士課程教育における共通教育の再考の時機を捉え、「新しい共通教育」を内実化させるための評価ツールの導入と専門教育との接続性を意識付ける全学的な学習目標の設定に重点を置くことに取り組む戦略を描いた。

ルーブリック開発では、大学教育学会・課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」との連携により、新設のアクティブラーニング型科目『山口と世界』を対象に進めることとした。

この取組は、2014年度採択の文部科学省・大学教育再生加速プログラム(AP)の一環として発展することとなった。

共通教育のマネジメント

山口大学の共通教育の実施体制は、1996年の教養部廃止を機に共通教育を実施する全学的組織として設置された共通教育センターが担うこととなり、その後、2002年に大学教育センターに改組した。前後して、2001年には、大学教育機構が、山口大学の教育理念「発見し、はぐくみ、かたちにする 知の広場」を実現するために設置され、下図のとおり、現在の5つのセンターから構成し、総合的な観点から本学の教育環境の充実を図り、各センターの機能を活性化させ連携を深めるための中核的役割を担っている。



★【全教員出動体制】⇒【全部局責任体制】

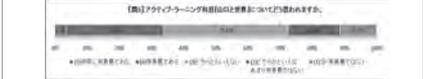
2013年度より「新しい共通教育」を導入し、教員の出動率を重視する全教員出動体制から特定科目のマネジメントを担当局部に委ねる全部局責任体制に移行したことで、下表のような業務分担と責任体制を取っている。

担当	役割
大学教育センター	教育の企画・推進全般の責任を担う。企画・調整・統括する。
大学教育センター	担当する領域、授業科目は11科目あり、「山口と世界」に特化した授業の企画・調整・統括を行う。担当教員も兼任する。担当教員は、担当領域の授業科目を担当する。また、「山口と世界」の授業の企画・調整・統括も担当する。
各学域	担当する領域、授業科目によって、「山口と世界」の授業の企画・調整・統括も担当する。担当教員も兼任する。担当教員は、担当領域の授業科目を担当する。

『山口と世界』とルーブリック

- 『山口と世界』のコース環境 (2015年度より一部変更あり)
 - 1) 全学必修・初年次教育のアクティブラーニング型科目
 - 2) 40名程度の中規模クラスサイズ (原則として複数学部混在)
 - 3) 30名以上の教員 (各学部等) が原則として単独担当
- 『山口と世界』のコースマネジメント
 - (1) 2013年度開設当初は一般目標 (地域理解と国際的視野) の共有のみ。
 - (2) 開設以降、授業担当者間の対話・調整の場が不在。
 - (3) 授業担当者の教育内容・手法を尊重しながら、共通化すべき規程 (観念) の抽出と共有が必要。⇒『山口と世界』コモンルーブリック開発 (2014年度)

★「新しい共通教育」に関する教員及び学生アンケート
実施時期: 2014年10月14日(金)～11月21日(金)
対象: 全教員及び2年次学生 (平成25年度に共通教育を履修した学生 (両学部学部を除く))
回答者数: 教員388名 (40.0%)、学生1,264名 (64.3%)



★成績評価との関係 [成績分布システムを参照]



開発プロセス

授業担当者中心のFDワークショップを【試作】⇒【開発】⇒【活用】⇒【検証】という4つのフェーズで、約1年の期間を通して、コモンルーブリック(右表)を開発・運用。

【フェーズ1: 試作】
2014年3月5日 FDワークショップ(WS)
『山口と世界』コモンルーブリック試作
※授業担当者同士がグループワークによりコモンルーブリックの試作品(5作品)を作成



【フェーズ2: 開発】
2014年7月31日 コモンルーブリック開発WS
『山口と世界』コモンルーブリック(案)の提示と意見交換

2014年9月上旬 『山口と世界』コモンルーブリック策定
※「発見する」「はぐくむ」「かたちにする」「分かちあう」「振り返る」の5つの基準からなる『山口と世界』コモンルーブリックを策定
※ルーブリック活用に向けた基本的考え方(規程追加のあり方やレベル0の扱いなど)を整理し、授業担当者に対して提示

【フェーズ3: 活用】
2014年9月24日 コモンルーブリック活用WS
『山口と世界』ルーブリック活用実践準備

2014年9月下旬 (後期授業開始)～
『山口と世界』コモンルーブリック活用

【フェーズ4: 検証】
2015年2月27日 ルーブリック事例報告WS
※実践報告を行い、今後のルーブリック活用・充実に向けた検証

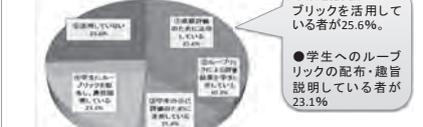


アンケート結果 (ルーブリック事例報告WS参加者対象)

Q ルーブリック活用についてどのようにお考えですか?
N=25(学外者を含む)

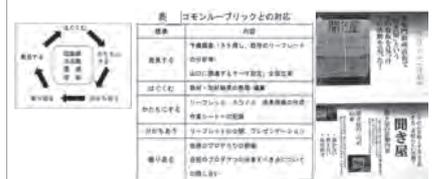


Q 授業科目においてルーブリックを活用されていますか?
(複数回答可) N=25(同上)



授業実践

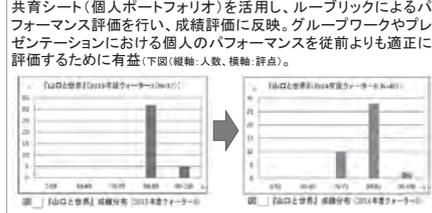
授業実践事例1 リーフレットづくり
「山口のことを知らない人に、山口を知ってもらうために、インタビュー取材に基づいてリーフレットを作成すること、加えて別途スライドを作成しプレゼンテーションをする」という課題設定。



授業実践事例2 山口大学創設200年の歴史をプレゼン
山口大学の歴史を学ぶ自校教育を通して、山口大学生としてのアイデンティティを高めるとともに、世界の大学システムと比較しながら、異文化の理解を深めることを目標設定。



★ルーブリックを活用した成績評価(一例)



得られた知見と今後の課題

★ルーブリック開発・活用・モデル化のプロセスそのものが、DeepなFDである(特に、コモンルーブリックにおいては、組織的なFDとなる)。



★コモンルーブリック開発・活用には時間的負担を要するため、組織的なFDの枠組で、当該組織の合意のもとに進めることが肝要。

★一般教員への理解浸透を図るには、授業科目の到達目標に応じた「科目ルーブリック」を作成することを前提とした取組が有効ではないかと考える。

研究成果(参考文献等)

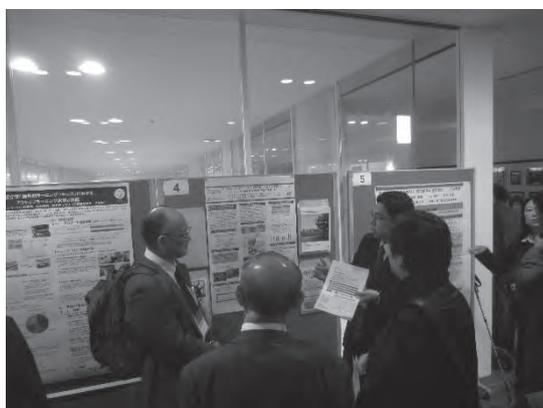
- 林透(2015)「山口大学におけるケース・スタディー質保証のためのマネジメントに着目して」『大学教育学会誌』37巻1号45頁～50頁
- 林透・星野晋(2015)「ルーブリック開発に関する実践的研究ー初年次教育科目『山口と世界』を中心にー」『山口大学大学教育機構『大学教育』第12号10頁～21頁
- 林透(2015)「学修成果アセスメントに向けた構造転換ー山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)を中心にー」平成27年度教育改革ICT戦略大資料集85頁～98頁

2. 大学教育学会2015年度課題研究集会 『「連携」から広がる新たな時代の大学教育』

日 時 : 平成27年11月28日(土)～29日(日)

場 所 : 岩手医科大学矢巾キャンパス・岩手大学

平成27年11月28日(土)・29日(日)には、大学教育学会2015年度課題研究集会『「連携」から広がる新たな時代の大学教育』が岩手医科大学、岩手大学で開催され、28日(土)のポスターセッションにて「アクティブ・ラーニング(AL)の可視化に関する考察(1)～ALポイント認定制度の設計と運用を通して～」と題して発表を行った。本発表では多くの参加者と活発な意見交換が行われた。ポスターでは、導入初年度となるALポイント認定制度に基づいたデータから、ALポイントと学生の授業理解度、満足度に相関があることがみることができるところなどについて掲載されており、他の研究者等の関心を引いた。



アクティブ・ラーニング(AL)の可視化に関する考察(1) ～ALポイント認定制度の設計と運用を通して～

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授(IR室長) 林 透
山口大学 大学教育機構 大学教育センター助教(特命) 河島 広幸
Contact : yuap@yamaguchi-u.ac.jp

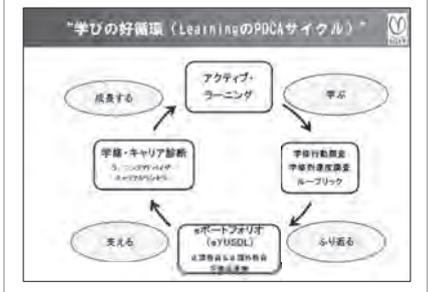


山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)のねらい

2014年度「文部科学省・大学教育再生加速プログラム(AP)」に採択された本学の取り組みは、正課教育と正課外教育の共創により、共通教育を中心としたアクティブ・ラーニングを組織的に推進し、次の時代を切り拓く人材として必要な力(山口大学教育理念に基づくコンピテンシー)の育成を保障するため、先導的な学修成果可視化モデルの構築を行い、学生の学びの好循環を創出します。

テーマⅠでは、シラバスの可視化を通じたALポイント認定制度導入、AL推進チームによるFD専門集団形成、教員にインセンティブを与えるALベスト・ティーチャー表彰を行います。

テーマⅡでは、学修到達度調査・学修行動調査・ルーブリック評価を全学的に推進し、各データを活かした直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルを構築します。教育機関、学協会等と連携し、学士課程教育の質保証の新しい「カタチ」を示すことは、本学の特色や強みの向上だけでなく、我が国高等教育全体に与える影響は大きいと考えます。



山口大学におけるALの定義

本学におけるアクティブ・ラーニングとは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、認知的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るため、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法(発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等)のほか、教室内外でのプレゼンテーション、グループワーク等)を指し、その対象として、授業科目による正課教育だけでなく、授業外学修である正課外教育を含む。なお、授業科目においては少なくとも1コマ以上行うものとする。」としています。

6つの形態
「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」
「フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)」「プレゼンテーション」
「振り返り」「宿題」

ALのニーズ把握(関心と実践)

★「新しい共通教育に関する教員及び学生アンケート」
実施時期: 2014年10月14日(火)～11月21日(金)
対象: 全教員及び2年次学生(平成25年度に共通教育を履修した学生(両群別詳細を後))
回答者数: 教員388名(40.0%)、学生1,264名(64.3%)

ALポイント認定制度の設計

ALの組織的推進を図るため、「ALポイント認定制度」を新たに導入し、教員と学生がアクティブ・ラーニングに関する認識を高め、主体的な学びの促進に役立てることを目的としています。

具体的な制度設計に当たっては、一般教員や学生に理解しやすい仕組みを目指し、授業時間内で該当するアクティブ・ラーニングの6つの形態(「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)」「プレゼンテーション」「振り返り」「宿題」)の割合をポイント表示することとしました。シラバスにおいて、授業各回で該当するアクティブ・ラーニング形態のすべてをチェックし、【授業各回のAL度の総和 / 授業回数】による平均値をALポイントとして学生に明示することとしました。

今年度、全教員・学部1年生全員に『ALマニュアル』を配布するとともに、全学部での教育改善FD研修会にて趣旨説明しています。



01 主体的な学びの促進に役立ちます。
02 ALポイントの活用方法について
03 これまでの学びの振り返りについて

FD・SDワークショップ

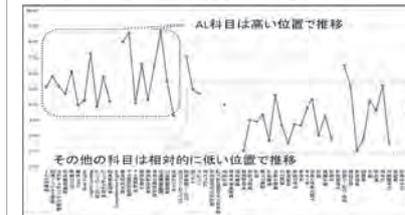
- 【アクティブ・ラーニングの事例紹介・対話を通じたFD】
- ① FD・SDワークショップ(2015年7月9日(木))
大人教習・理系基礎におけるALをテーマに、教員・職員・学生を交えたWS
⇒授業課題に応じ、教員と学生、学生と学生の対話を盛り込む。インタラクティブ + ピア・インストラクション
⇒授業時間内で、思考し、納得感を引き出す。
 - ② FD・SDワークショップ(2015年10月29日(木))
ICT機器、AL教室環境を活かしたALをテーマに、教員・職員・学生を交えたWS
 - ③ 共有ワークショップ2015(2015年9月28日(月))
シラバス作成を通じた、教員・職員・学生を交えたWS



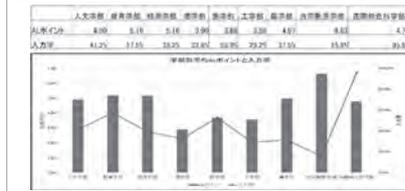
ALポイント入力状況(速報値)

★共通教育科目で80%以上入力、妥当なALポイント平均値!

【共通教育科目】	平均値	入力率
全体	4.28	80.5%
講義科目	4.04	80.5%
実験・実習科目	6.95	80.0%
語学科目	4.43	70.4%



★学部専門科目にALポイントが波及効果!



ALの効果検証(相関分析)

★2015年度前期の学生授業評価アンケートに基づき、ALポイントと授業時間外学習、授業理解度、授業満足度との相関分析を行いました。**ALの割合が高まると、授業理解度、授業満足度が増す傾向が見られます(=ALの効果)。**

- ①ALポイントと授業時間外学習
共通教育科目全体で、現時点では相関が見られない。
一部の学部において相関あり。
 - ②ALポイントと授業理解度
共通教育科目全体で、「弱い相関」
 - ③ALポイントと授業満足度
共通教育科目全体で、「弱い相関」
-

参考文献

- 1) 山口大学YU-AP推進室(2015)『山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)アニュアルレポート2014』
- 2) 山口大学YU-AP推進室(2015)『AL(アクティブ・ラーニング)ポイント認定制度マニュアル【教員用】【学生用】』

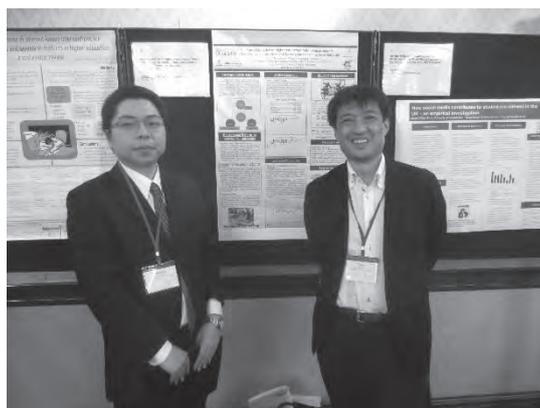
3. SRHE(Society for Research into Higher Education) Newer Researchers Conference2015

日 時 : 平成 27 年 12 月 8 日 (火)
場 所 : Celtic Manor, Newport, Wales, UK

イギリスの権威ある学会 SRHE(Society for Research into Higher Education)の Newer Researchers Conference2015 では、日本の大学教育改革とその実践事例としての山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) を紹介し、成果についての発表を行った。海外での発表では、国内的視野では気づかない示唆に富む視点を得ることができ、さらなる事業推進に役立てることができる。

こうした、事業の情報発信や成果発表の他にも、平成 27 年 10 月には、くらしき作陽大学と名城大学、11 月には県立広島大学の訪問調査を受け入れ各種の取組みに関する情報交換や意見交換を行った。積極的に本事業の成果発表を行い、また、他機関等の訪問調査を受け入れることで情報や意見の交換を行い、我が国の高等教育全体の発展に貢献している。

今後とも、国内外の学会等での成果発表、意見交換の他に、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 主催のフォーラム等の開催を通じて、積極的に情報を発信し、さらなる事業の展開を推進する。また、他機関等の訪問調査受け入れも進めることで建設的な情報交換を行い、相互の相乗効果を発揮して、事業の推進と改善を進めていく。

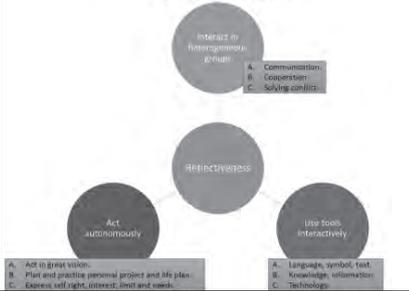




Background in Japan

In 2014, ministry of education, culture, sports, science and technology-japan (MEXT) started higher education rebuilding program "Acceleration Program for University Education Rebuilding: AP". In order to achieve acceleration of education rebuilding, we must first develop a critical understanding of the role that educational institutions play in the ultimate picture, which is where its students end up. A university education is the final checkpoint for students who are on their road to entering the working society, which therefore makes universities responsible for maximizing the quality of education it provides to its students.

Key Competencies



Educational Reform in Yamaguchi University

Reformation plan of Yamaguchi University

① Strengthen educational and research function of institution by utilizing its strength and speciality based on redefining mission of university, ② Implementation of arts and science synthesized education focusing on new department and promotion of globalization as a whole university, ③ Construction of educational and research institution which has no barriers between each departments and schools as flexible, ④ Reformation of education as a whole university is necessary for this reformation plans to be achieved and upholding practical strengthening of university governance based on utilization of specialists from other institutions.

Specification of ideal model to nurture and reformation of Undergraduate Program in University

Specify Yamaguchi University Student Competency which student should be achieved at their graduation based on Yamaguchi University educational objectives "Cultivate one who is able to Discover, Nourish and Realize Curiosity, Individuality, Encounters, Dreams". It is necessary to provide opportunities by curriculum in the broad sense of the term including extracurricular education so-called "hidden curriculum". Extracurricular education is an out-of-class education program for nurturing generic skills as organizationally provided by university. Promotion of active learning by all undergraduate students has to be registered type of general education reformation that has started in 2013 and we construct direct assessment & indirect assessment of integration-type of visualization model of learning outcomes that utilizes learning achievement research, learning behavior research, and rubric assessment as a forerunner.

Project objectives

In this project, Promotion of active learning and establishment of visualization model of learning outcomes focusing on general education is the main theme and this project's fundamental objectives are each students to feel their growth themselves through learning and assure quality of education that Yamaguchi University provides to student and society. Also, this project will spread its accomplishments to higher education of whole country through development of project.



Promotion of Active Learning

Active Learning

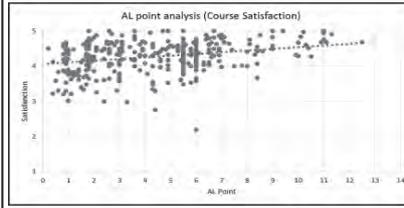
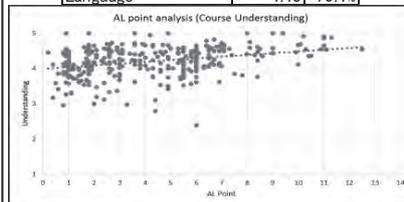
Theme I (active learning)

Organize learning environment where more students, faculty members and other staff could feel an effect of active learning, though an active learning (includes out-of-class learning that is to say extracurricular education) without limitation of target.

Implementation of AL(active learning) point authorization system in order to visualize curricular course and extracurricular education program by obligating to do specification of details active learning by utilizing Learning Pyramid that indicates stability of learning. Also, extracurricular education program syllabus frame which is able to visualize its learning outcomes will be arranged.

Active Learning Point(ALP)

	Average	Ratio
ALL	4.28	80.5%
Lecture	4.04	80.5%
Experimental	6.95	80.0%
Language	4.43	70.4%

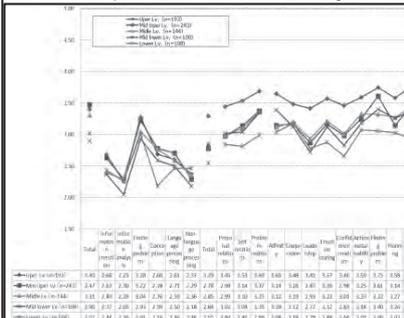


Learning Outcomes

Theme II (visualization of learning outcomes)

Applying organizational academic advising depends on each student's learning achievement and career mind is necessary because their objectives and minds are too diverse. Strengthen structure that utilizes multidimensional visualization of learning outcomes based on "Yamaguchi University Student's Competency" for academic advising and reformation of curriculum.

Promotion of rubric assessment as a whole university for equalization of grading standard between courses and learning achievement research of literacy & competency assessment and learning behavior research of learning engagement assessment. Establishment of visualization model of direct & indirect assessment integration-type learning outcomes that analyzes totally those data will be implemented. Student's data corrected from visualization model of learning outcomes will be anonymized with analysis of out-of-class learning time by course assessment questionnaire, alumni research, and student's vice from student participated workshop. And those are utilized for verification of educational process schematization as numbering.



Student Engagement



Yamaguchi University Coordinator on Campus

YC.CAM is a student organization which deserves well support by Center for The Promotion of Higher Education, Education Services Department. Their activities are basically cooperated with faculty and staff. One of their important role is to develop extracurricular program Student Leader Program: SLP.

Rubric of Generic Skills nourish through extracurricular program

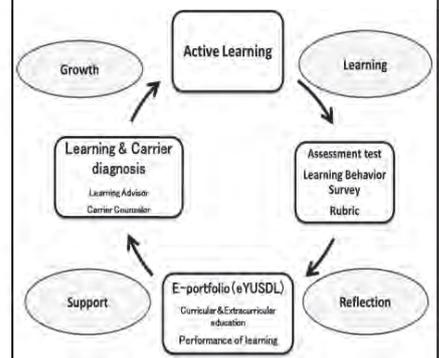
Category	Domain	Level 1	Level 2	Level 3	Level 4
Communication	Research Network negotiation	Student can create communication with others	Student can negotiate group	Student can attend group	Student can connect with others
	Problem and task resolution and an effective application of self	Student can make decision about the task and solve it	Student can make decision about the task and solve it	Student can make decision about the task and solve it	Student can make decision about the task and solve it
Leadership	Management strategy	Student can manage and plan	Student can execute and plan	Student can execute and plan	Student can execute and plan
	Understanding of group dynamics	Student can understand group dynamics	Student can understand group dynamics	Student can understand group dynamics	Student can understand group dynamics
Organizational management	Understanding of group dynamics	Student can understand group dynamics	Student can understand group dynamics	Student can understand group dynamics	Student can understand group dynamics
	Problem and task resolution and an effective application of self	Student can make decision about the task and solve it	Student can make decision about the task and solve it	Student can make decision about the task and solve it	Student can make decision about the task and solve it

ers ecti es

Positive circle of learning

Create positive circle of student's learning by theme I & II. Increase Out-of-class learning time and visualize learning outcomes by active learning effect. Assure student's growth through organizing suitable learning advise, career counseling, and individual optional support based on portfolio that accumulate learning records. In an educational system of view, acquire positive circle of learning through program coordinating curricular education & extracurricular education as bird's-eye view. Accomplish this project successfully, maximum utilizing merit of Theme I & II composite-type by approaches above.

Learning PDCA



Reference

- Center for The Promotion of Higher Education, Education Services Department, Yamaguchi University 2015 Yamaguchi University Acceleration Program for University Education Re-uilding: AP YU-AP Annual Report 2014
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-japan E T We site: URL: <http://www.mext.go.jp/english/highered/1303557.htm>

**Ⅶ. 山口大学・大学教育再生加速プログラム
(YU-AP) アドバイス会議**

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）アドバイス会議

【1】第4回アドバイス会議

日 時：2015年11月6日（金）12：00～13：30

場 所：Hyatt Regency San Francisco Airport, CA. USA

出席者：Mary D. Sorcinelli, Distinguished Scholar in Residence, Office of the Dean of the Faculty, Mount Holyoke College, Senior Scholar, Bay View Alliance for Reform of Undergraduate STEM Education Research Professor, Center for Teaching & Faculty Development, UMass Amherst（YU-AP アドバイザー）Andrea L. Beach, Director, Office of Faculty Development, Western Michigan University

林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授

深野政之 大阪府立大学 高等教育推進機構 高等教育開発センター准教授

山崎慎一 桜美林大学 グローバル高等教育研究所 助手

内容：

（1）山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の進捗状況に関する報告

山口大学における AP 事業の進捗状況を報告するとともに、Mary D. Sorcinelli 氏から日本の高等教育における FD のあり方や FDer の活動内容などについて質問があり、意見交換を行い、アドバイスを受けた。

（2）2016 年度以降の事業計画に関する説明

2016 年度以降の YU-AP 事業計画について報告を行い、事業 3 年目に差し掛かり、今後の成果発信において、Mary D. Sorcinelli 氏からの協力を得ながら、進めていくことを確認した。



【2】第5回アドバイス会議

日 時：2016年3月7日（月）12：00～13：00

場 所：山口大学共通教育棟2階会議室

出席者：鳥居 朋子 立命館大学 教育開発推進機構 教授

川那部 隆司 立命館大学 教育開発推進機構 准教授

瀬瀬 厚 理事・副学長（教育学生担当）

朝日 孝尚 大学教育機構 大学教育センター長・教授

林 透 大学教育機構 大学教育センター 准教授

内容：

（1）2015年度 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU・AP）取組概要について

林 准教授より、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の事業概要を説明した後、今年度の取組概要について具体的に説明を行った。

鳥居教授からは、ALポイント認定制度に関連し、学生にとってALポイントを累積して、恩恵を受けるなどのメリットがあるのかと質問があった。ALポイント認定制度自体については、各授業におけるアクティブ・ラーニングの度合を示す指標であることを説明し、学生に対する意味づけを丁寧に行うことを言及した。

川那部准教授からは、ALポイントを数値化していることは魅力的であり、今後の教学IRなどに活かす足がかりになるのではないかとのコメントがあった。学生の履修行動と学修成果との関連分析などに活かしてほしいとの期待が寄せられた。

（2）山口大学版IR体制の構築について

林 准教授より、今年度設置されたIR室の組織体制や取組内容について説明を行った。

業務運営IRを中心に、本学の組織文化に合ったIRを進めていくことを言及した。

【3】第6回アドバイス会議

日 時：2016年3月14日（月）11：00～13：00

場 所：専門学校グループ YIC Studio3 階 301 教室

出席者：関田 一彦 創価大学 教育・学習支援センター長・教授
石川 英樹 徳山大学 経済学部長
馬本 勉 県立広島大学 学長補佐（教育改革・大学連携）
武藤 義彦 宇部工業高等専門学校 経営情報学科 教授
朝日 孝尚 大学教育機構 大学教育センター長・教授
白澤 文吾 大学院医学系研究科（医）教授
川崎 勝 国際総合科学部 教授
林 透 大学教育機構 大学教育センター 准教授
三浦 勝弘 学生支援部教育支援課長
鷹岡 亮 教育学部 教授
星野 晋 国際総合科学部 講師
辻 多聞 大学教育機構 学生支援センター 講師
河島 広幸 大学教育機構 大学教育センター 助教（特命）
福田 孝 学生支援部教育支援課副課長

内容：

（1）山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業取組概要及び成果について

朝日 大学教育センター長より山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の事業概要及び成果について説明があった。

関田 創価大学 教育・支援センター長からは、AL ベストティーチャーと既存のベストティーチャーとの関係について質問があった。AL ベストティーチャー表彰は共通教育における AL 実践に焦点を当てており、従来の学部ごとで実施されているベストティーチャー表彰とは別に展開することができる旨説明があった。

（2）創価大学及び共催機関の大学教育再生加速プログラム（AP）事業取組概要について

関田 教育・学習支援センター長より、創価大学の大学教育再生加速プログラム（AP）事業取組概要について説明があった。続いて、石川 徳山大学 経済学部長、馬本 県立広島大学 学長補佐（教育改革・大学連携）、武藤 宇部工業高等専門学校 教授より、各機関の AP 事業取組概要について説明があった。

（3）大学教育再生加速プログラム（AP）事業取組に関する意見交換

各機関の AP 事業取組概要説明を踏まえながら、全体で質疑応答・意見交換を行った。

朝日 大学教育センター長より、遠隔講義でのアクティブ・ラーニングについて言及があった。

これについて、県立広島大学の例では座学を補う形で、フィールドワークを導入していることが紹介された。



VIII. 各種セミナー等参加及び訪問調査報告

1. 大学情報・機関調査研究集会 『大学 IR 人材育成カリキュラム岡山講習会』

日 時 : 平成 27 年 7 月 15 日 (水) 13 : 00~16 : 00
場 所 : 岡山コンベンションセンター・ママカリフォーラム
主 催 : 大学情報・機関調査研究集会

タイムスケジュール

13 : 00-13 : 05 オープニング
13 : 05-13 : 35 大学経営・大学評価と IR...大学評価の観点から見た IR の役割について
九州大学 准教授 高田 英一
13 : 45-14 : 45 IR データ収集・管理論...ウェブを用いたアンケート調査とその方法
九州大学 助教 大石 哲也
14 : 55-15 : 55 IR データ分析論...満足度や学習達成度を把握するための分析手法の紹介
IR マネジメント...IR データの収集方法、IR 組織の構成、
IR に関連した合意形成に関する実務的な知見
東京工業大学 教授 森 雅生
15 : 55-16 : 00 クロージング

はじめに

本講習会は、IR 実務人材の育成を目的として九州大学 大学評価情報室と東京工業大学 情報活用 IR 室の IR 実務担当者による講習会であり、約 40 名の参加者が集まった。主な内容は、上記のタイムスケジュールの通りである。IR の理論や概念について基礎的な知識を獲得することをねらいとすることと併せて、実務的な内容が充実しており、具体的な手法やツールについての紹介が行われた。

講義 1

本講義では基礎的な知識について獲得することをねらいとしており、IR の概念について事例を交えて述べられた。

IR の定義については、厳密なものが確定的に存在しているわけではなく、個別の大学の事情に合わせて、IR の意味・意義を捉えていくことが必要であることが説明された。一方で、IR が生まれた経緯・背景とこれまで蓄積されてきた理論と実践には十分考慮して個々の大学によって定義していくべきであると述べられた。

IR の重要な概念としては、IR の目的は良質な意思決定の支援を行うことである。IR は機関調査をすることそのものに意義があるのではなく、何らかの目的を達成するための手段 (ツール) の一つとして重要なものであるという認識のもと、目的達成のための意思決定を支援するようなデータの収集・管理・分析等を行い、執行部等にそれら情報の提供を



行うことである。

IRを行ううえで重要な目的・目標の明確化については、① 各大学（組織）の個別的・具体的な目的・目標、② 意思決定者・IR間における組織共有、③ 客観的な情報・データの提供、④ 教学改善からガバナンス強化のツールの色彩へ、以上の4要素がある。これらの要素を踏まえたうえで、学生の満足度調査の活用の具体例として、3大学の事例について言及された。また、IRを行ううえでの留意点として、個人的なリサーチクエスチョンにならないようにすることが必要であることも述べられた。

講義2

本講義では、アンケート調査についての基礎的な考え方を踏まえて、「Lime Survey（ライムサーベイ）」の活用について紹介があった。アンケート調査の実施手順として、① アンケートの内容を決定、② 準備、③ 配布、④ 回収、⑤ 集計・グラフ化が挙げられた。特に①については、5W1HにWhomとHow muchを加えた6W2Hの考え方について紹介があった。実際の調査には「Lime Survey（ライムサーベイ）」というオープンソースウェブアンケートシステムが有効であることが示され、その具体的な活用方法について説明があった。

講義3

本講義では、調査による可視化と統計解析について基礎的な知識や考え方を獲得することをねらいとし、統計解析ツール「R」の活用について紹介がされた後、IRデータマネジメントについてのフレームについて述べられた。

まず、基本的な分析の考え方として多変量解析について述べられ、多変量解析の目的として主に、1. 予測、2. 判別、3. 要約があることが説明された。ここでは、IRを行ううえで、優先度が高いと思われる要約について説明があり、その具体的な手法として主成分分析について述べられた。次に、これら統計分析に関する基礎概念を踏まえて、実際に分析するためのツールとして有効活用されている統計分析ツール「R」について説明があった。

続いて、IRデータマネジメントについては、システムの目的・意義を設定するフレームとして、① 誰が、② 何のために、③ 誰の協力で、④ 誰に向けて、⑤ 何を提供するのか、5つのフレームの要素を挙げて、マネジメントの考え方について述べられた。

まとめ

大学IR人材育成カリキュラム岡山講習会では、教員よりも職員の方の参加が多く、講義内容も理論や概念に関する説明に加えて、実務的な内容について具体的な事例やツールの活用方法などを紹介しながら、実際のIRをどのように進めていくかということに重きが置かれていたものであった。IRの基本的な概念を念頭に置きつつ、この度、紹介のあったツールも活用することで、APにとって重要な学修成果の可視化事業をさらに推進していけるのではないかと考える。

2. 大学コンソーシアム京都、㈱リアセック 教育 IR フォーラム

『変革する大学！「学修成果の可視化」から教育・授業を変える

—感覚的な議論から、エビデンスに基づいた改革の実践へ—』

日 時 : 平成 27 年 7 月 25 日 (土) 13 : 30~17 : 00
場 所 : キャンパスプラザ京都
主 催 : 大学コンソーシアム京都、株式会社 リアセック

タイムスケジュール

13 : 30-13 : 35 開会の挨拶 大学コンソーシアム京都

13 : 35-14 : 35 基調講演「学修成果の可視化による教学改革—その理想と課題—」

国立教育政策研究所 高等教育研究部 総括研究官 (命) 副部長 深堀 聡子

14 : 35-15 : 25 事例発表「教育 IR の実践—効果測定と改革のサイクルをいかに循環させるか—」

産業能率大学 経営学部 准教授 杉田 一真

～休憩～

15 : 40-16 : 30 事例発表「教学改革の PDCA 『A アクション』—EM・IR の更なる前進に向けて—」

京都光華女子大学 短期大学部 教授 相場 浩和

16 : 30-17 : 00 閉会の挨拶

はじめに

本フォーラムは、基調講演にて国立教育政策研究所より国内外の高等教育改革に関する調査研究結果を紹介するとともに、文部科学省・大学教育再生加速プログラム (AP) の採択校 2 大学より、IR の実践事例とその展開について紹介することで、全国の大学における教育改革の推進と教育 IR の更なる普及・定着をねらいとして開催された。

基調講演

国立教育政策研究所 深堀 聡子氏より、「学修成果の可視化による教学改革—その理想と課題—」と題して基調講演があった。日本においては学修成果を学修時間によって示しているが、学習時間を大学教育の質の指標とする考え方は、今後は国際通用性を失っていくのではないかという旨のことが述べられた。これらを前提として、いわゆるチューニング (大学教育のアウトカムについて合意を形成し、学位プログラムを設計する方法) について説明があった。

チューニングとは、大学としてどのような力を学生に身に付けさせたいかというアウトカムを形成し、それらと社会 (特に企業社会や雇用主) が高等教育を受けた学生たちにどのようなコンピテンスを期待しているかということとの刷り合わせを不断に行い、大学としての共通性など確保しつつ、個別の大学の多様性や自律性を確立する方法である。また、高等教育を受けた学生のコンピテンスを国際通用性のある方法で測定する取り組みについ



て紹介があった。ここでは、抽象的なコンピテンスを具体的な学習成果に落とし込むことで、例えば「技術者のように考える力」を測定する取組について説明があった。さいごに、大学に求められる取組みとして、学問分野、学問分野間、学位プログラム、そして学問分野と社会の間で高等教育をとおしたアウトカムをどのように考えるかという合意形成を進めることの重要性について述べられた。

事例発表 1

産業能率大学 経営学部 杉田一真 准教授より「教育 IR の実践—効果測定と改革のサイクルをいかに循環させるか—」と題して事例発表があり、教育・学習、学修成果の可視化、育成する人材像、これに加えて、社会からの養成としてのジェネリックスキルとその成果の可視化（学修成果の可視化）というフレームについて説明があった。まず、学修成果の可視化の手法として PROG（Progress Report on Generic Skills）テストについて述べられ、これを実施することによって、学生の現状を把握し、教育改善につなげたことが説明された。特に、基礎ゼミの設計をリテラシー能力に重点を置いたものにするすることで、1年生のリテラシースコアの向上がみられ、3年生に関しては全国平均を上回り、SPI テスト（就活生向けの適性検査）もスコアの向上がみられたと述べられた。また、初年次 PBL（Project Based Learning）では、動機づけ、ジェネリックスキル活用、専門知識活用と目的のことなる3回の PBL を導入することで、よりよい教育効果をあげていることが述べられた。

続いて、教育スタッツデータと呼ばれる、スポーツにおける選手のプレーやチームの成績に関する統計数値を

応用した、教員の教育データについて説明があった。教育スタッツデータは、ムービングデータという教員の教室内での動きを把握したもの、パフォーマンスデータと呼ばれる教員が授業中に何をしているかを可視化したもの、教室内の各エリアにおける学生の受講態度及び授業後の学生授業アンケートによって構成されている。これらのデータは、授業改善や学部長面談の資料として活用されており、成果をあげていることが述べられた。最後に、教育プログラム、教員の教育力、学生の学習力を改善し、大学の教育力を向上していくことについて述べられた。



事例発表 2

京都光華女子大学／京都光華女子大学短期大学部 EM・IR 部 相場浩和 部長補佐より「教学改革の PDCA『A アクション』—EM・IR の更なる前進に向けて—」と題して事例発表があり、スモールサイズ IR という特徴的な取り組みについて説明があった。まず、同大学の AP 事業の概要について説明があり、続いて、EM・IR の3つの時代区分について述べられた。まず、EM の基盤形成期に EM の理念と取り組みの体系化、組織体制の構築、そして、IR の機能強化を行ったことが説明され、続いて、同大学の IR の特色としてスモールサイズ IR について説明があった。

同大学では、大学の事情に合わせて IR の目的を明確に定めており、IR を大学としての戦略立案と実行マネジメント（EM のための IR）、必要最小限のデータ収集と分析のための IR、そして、大規模なデータを扱わないスモー



ルサイズ IR を行うことで、コストの低減をはかることができる IR としている。続いて、スモールサイズ IR の事例として、オープンキャンパス開催を中心とした募集戦略の立案と就職ガイダンス出席率と内定率の調査に基づいたキャリア支援、また、退学率と入学前の諸要因調査に基づく、退学防止活動の展開などについて説明があった。

続いて、同大学短期大学部学生のアクティブ・ラーニングについて、社会人基礎力を育成する各種の取り組みについて述べられた。こうした学修の成果の可視化として、ディプロマポリシーを核とした可視化、外部の社会人基礎力評価（PROG テストの採用）、これに加えて、卒業生インタビューを活用した卒業生評価の 3 点から学修成果の可視化に取り組んでいることが述べられた。最後に、今後は、卒業生インタビューの精緻化をはかるとともに、学科の全教員によるアクティブ・ラーニング推進にあわせたカリキュラム開発や学修成果の可視化に取り組んでいくことについて説明があった。

まとめ

本フォーラムでは、AP に採択された 2 大学から事例紹介があり、本学 AP 事業としても多くの示唆が得られたといえる。特に、IR のための IR ではなく、大学の事情にあわせた、目的の明確化がなされた IR の確立は本学においても参考にできる点が多いのではないかと考えられる。

3. 日本オープンオンライン教育推進協議会(JMOOC)

『2015年度 JMOOC 活用事例—大学の MOOC 活用—ワークショップ』

日 時 : 平成 27 年 7 月 28 日 (火) 14 : 00~16 : 45
場 所 : 大阪 ユビキタス協創広場 CANVAS
主 催 : 日本オープンオンライン教育推進協議会 (JMOOC)

プログラム

1. 2014 年度 JMOOC 講座レポート報告

JMOOC 事務局

2. 大学での活用事例① 関西大学における JMOOC 活動報告—教員・事務員の手間と効果—

関西大学 教授 青田 浩幸

3. 大学での活用事例② 「知的財産とビジネス」講座の開発・製作プロセスについて

大阪工業大学 教授 小林 昭寛

4. 大学での活用事例③ 立命館大学と「京都学」の試み

立命館大学 教授 木立 雅朗

5. 質疑応答

はじめに

本ワークショップは、近年注目の度合いが高まっている大規模オープンオンラインコース (MOOC) の日本における活用として、今後 JMOOC (日本オープンオンライン教育推進協議会) への加盟・出講を検討する大学、また、加盟大学においては新講座の開発・開発の参考となるよう提供されている。

MOOC の海外動向と JMOOC の現状について

冒頭、JMOOC 事務局より MOOC の海外動向と JMOOC の現状について報告があり、とくにヨーロッパ圏では、各言語にあわせた MOOC プラットフォームが構築されはじめ、大きなムーブメントになっていることが述べられた。また、MOOC の特徴である多様な学びについて、特に場所を問わず良質な教育を受けることができる点について挙げられ説明があった。さらに、開講時期が決まっている (限定されている) ことで、受講者同士の学び合いを喚起することができることも重要な点であると紹介された。最後に、国の政策でも MOOC は推進されており、今後は高等教育以外の教育のフィールド (例えば企業での社内教育など) での展開が期待されていることが述べられた。

活用事例①

関西大学 学長補佐 科学生命工学部 青田浩幸 教授より、関西大学における取組が紹介された。本報告は、JMOOC 開講における運営側の視点として紹介された。講座の開講まではおよそ 6 ヶ月間程度が必要であり、その具体的なスケジュールについても説明があった。講義作成者側の留意点としては、作成するプレゼンテーションスライドに掲載するコンテンツの著作権やカメラの前で (受講者の反応が見えない状況で) 講義をすることの難しさが挙げられた。また、レポートの採点は受講者同士で行いその採点基準はルーブリックを採用していることが説明された。また、専門の業者との連携によって円滑な

講座開講が可能である旨の説明があった。

活用事例②

大阪工業大学 知的財産専門職大学院 小林 昭寛 教授より、6月30日より開講中の「知的財産とビジネス」開講までの流れや教材製作について報告があった。具体的には、動画の撮影には2日間を必要とし、プレゼンテーションスライドや発表原稿の作成は1ヶ月ほどかかったことが挙げられた。講座開講には多少の労力が必要となるが、4週間分のコンテンツを作成するという考え方をとることで負担感を軽減できるのではないかと述べられた。また、テーマと履修者の設定について、40代男性は仕事にすぐ役に立つもの、助成は課程や教養を好む傾向があるなどを参考としたことが説明された。

活用事例③

立命館大学 文学部 木立 雅朗 教授より、JMOOC 講座の講師としての視点から報告があった。立命館大学ではトップ層の強力なリーダーシップのもと JMOOC での講座が開講されたことが述べられた。また、本報告では実際に使用したプレゼンテーションスライドを使用して講義内容を説明しながら、動画撮影における留意点について説明があった。例えば、学内での撮影は可能であるが、学内放送（チャイム音）やその他雑音が入ることで、撮影が中断されるので、可能であればスタジオを借りることを検討する必要があることが述べられた。また、オンラインでのディスカッションについては、一般的なネット上の掲示板のように無責任な発言による混乱などはみられず、いわゆる迷惑行為に類するような発言に対しては、受講者間で解決されるなど、非常に高度なディスカッションが展開されるケースがみられたことについて報告があった。

さいごに、JMOOC 事務局より、JMOOC の二次利用や講座作成助成金について説明があり、より多くの大学が JMOOC での講座を開講できるような仕組みを構築してゆく旨の説明があった。山口大学においてもこうした助成金や専門業者の支援を得ることで、高等教育をよりオープンなものにしてゆくことに貢献できる可能性を感じることができるワークショップであった。

4. 筑波大学大学教育センター第 58 回公開研究会 国際会議 『学生参画による大学教育の質保証:7カ国の比較の観点から』

日 時 : 平成 28 年 1 月 23 日 (土) 13:00~18:00
場 所 : 筑波大学東京キャンパス文京校舎 1階120講義室
主 催 : 筑波大学大学研究センター

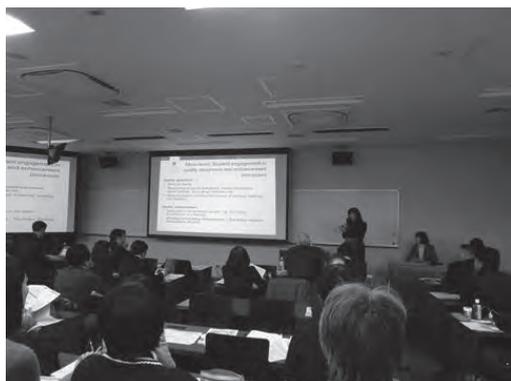
タイムスケジュール

13:00-13:00 開会挨拶
13:10-13:40 司会/ 津田塾大学 渡邊 あや、愛知教育大学 武 寛子
13:10-13:40 「スウェーデンの学生参画」 ウプサラ大学 オーサ・ケッティス
13:40-14:10 「フィンランドの学生参画」 ユバスキュラ大学 ヤニ・ウルシン
14:10-14:40 「イングランドの学生参画」 バーミンガム・シティ大学 スチュアート・ブランド
~休憩~
14:50-15:50 司会・東北大学 杉本 和弘
14:50-15:20 「アメリカの学生参画」 メルボルン大学 ライアン・ネイラー
15:20-15:50 「オーストラリアの学生参画」 メルボルン大学 ライアン・ネイラー
15:50-16:50 司会/ 国立暨南国際大学 楊 武勳
15:50-16:20 「台湾の学生参画」 清華大学 林 世昌
16:20-16:50 「日本の学生参画」 筑波大学 田中 正弘
~休憩~
17:00-17:50 総括討論 : 司会/ 大学評価・学位授与機構 森 利枝
17:00-17:15 総括コメント 同志社大学 山田 礼子
17:15-17:50 討論
17:50-18:00 閉会挨拶

はじめに

本国際会議は、「学生参画による大学教育の質保証」(大学生は教職員と協同して自らの学習経験の質を高めていく権利を有する、または責務を負う)という、新しい考え方の世界的な広まりを背景とした、学生を内部質保証のパートナーに位置づける各国の取り組みの紹介を通して、欧州・米豪・東アジアにおける、学生参画による大学教育の質保証の実態を比較検討し、各国の制度の目的や効果、および制度運営上の問題などを議論することを目的として開催された。

本国際会議の冒頭では、田中正弘 准教授(筑波大学)より学生参画の定義と、マイクロ・レベル(学生自身の学びなど)、メソ・レベル(教育の質保証など)、マクロ・レベル(大学の戦略・開発など)といった、学生参画のフレームワークについて説明があった。



各国の学生参画の事例

スウェーデンとフィンランドでは、スチューデント・ユニオン(学生自治会)の組織が非常に強いことが特徴的である。スチューデント・ユニオンが特徴的な北欧に加えてイギリスは、マクロ、メソ、マイクロいずれのレベルにおいても、大きな影響力を発揮していることが紹介された。マクロ・レベルでは、大学における教育活動に係るガイドラインを学生参画で策定するなどがなされている一方で、学生の日々の学びに着目したピアサポートに類似する活動も展開されている。北欧の大学はスチューデント・ユニオンとパートナーシップを構築することで、より効果的な学生参画を実現している。



アメリカ、オーストラリアでは、マクロ・レベルに関する学生参画については多くはなく、アメリカの事例ではマクロ・レベルの 이슈については、ほとんど語られなかった。三カ国の傾向としては、メソ・レベルとマイクロ・レベルの取り組みについて言及されることが特徴的であった。アメリカでの学生参画の取り組み(マイクロ・レベル)として、学生の声を活かした授業改善があるが、「学生達に何を教えるのか?」という問いではなく、「学生達にどのようにおしえるのか?」という点について学生の声から学び、授業改善につなげていることが説明された。

台湾と日本の学生参画については、マクロ、メソ、マイクロのフレームワークだけでは捉えきれない特徴があることが紹介された。台湾では、国策レベルでの入試改革により、アプリケーションベースの入試がはじまっており、従来のエグザムベースの方法と割合としては、半々程度で行われており、それぞれの入試のあり方により特徴が出てくることが説明された。日本では、いわゆる学生FDと呼ばれる、学生がFDに関与する取り組みや、学生による教育改善活動が紹介された。

まとめ

本国際会議では、各国の事例を比較することで、各国独自の学生参画が進められていることが明らかになった。欧米と日本を比較すると、日本での学生参画が局所的であり、組織的な展開も限定的であることが課題であることが明らかになった。今後の日本における学生参画による大学教育の質保証等を検討するうえでは、日本ならではの各大学の風土に合わせた学生参画を見出すことが重要であることが議論された。世界的なトレンドになりつつある学生参画が日本的な文脈の中で醸成されることが期待される。

5. 第9回 EMIR(Enrollment Management Institutional Research)勉強会

日 時 : 平成 28 年 2 月 20 日 (土) 10:00~15:40
場 所 : 龍谷大学 深草キャンパス 和顔館地下 1 階 B201 教室
主 催 : 山形大学 エンロールメント・マネジメント部 EM 企画課

タイムスケジュール

セッションⅡテーマ「先端的企業が挑戦する大学 IR ソリューション」

10:00-10:05 2日目開会挨拶/山形大学 学長 小山清人

10:05-10:35 課題「BIシステムと大学IRアナリティクスー見える化から言える化へー」

SAS Institute Japan 株式会社ソリューションコンサルティング本部

Information Managementグループ マネージャー 安海 栄幸

山形大学 エンロールメント・マネジメント部 教授 福島 真司

10:35-11:05 課題「IRに活用する入学前e-learning教育の課題分析

ー学生タイプ別中退率・成績との関係性近畿大学他 導入大学の事例からー

株式会社ワオ・コーポレーションソリューション事業部 法人営業 チーフ 森岡 伸之

近畿大学 生物理工学部 基礎教育センター 小野田 正之助

11:15-11:45 課題「大学のプロモーションのためのソリューション」

株式会社メディアフュージョン 代表取締役社長 榎原 淳

11:45-12:35 オープンディスカッション

ファシリテーター 山形大学 EM部 教授 福島 真司

セッションⅢ「米国大学における IR のグッド・プラクティス」

13:40-15:40 講演「IRとIEを成功させるために必要なことについて」

ニューメキシコ州サンタフェ・コミュニティ・カレッジ 副学長補佐 Yash Yamamoto

[総合司会: 山形大学 理事・副学長 (EM 担当) 大場 好弘]

はじめに

本 EMIR (Enrollment Management Institutional Research) 勉強会は、山形大学エンロールメント・マネジメント部主催にて開催されており、平成 25 年度概算要求事業 (3 年間)「戦略的意思決定のための全学統合型 IR システム構築による大学教育マネジメント・サイクルの持続的発展ー教育・研究・社会貢献及び財務データを統合した内部評価システムによる教育の質の向上ー」に採択された事業の一環として行われている。本勉強会は、国内外の先進事例を持つ大学経営者層や実務家、大学 EM や IR に関心の高い大学関係者、ICT や調査分析を専門とする企業の幅広いナレッジを蓄積し、オープンな議論

を進めることで、日本の大学の EM や IR に留まらず、世界の大学の進展に寄与するためのプラットフォームとすることをねらいとしている。



話題①

冒頭、山形大学の福島教授より、エンロール・マネジメント (EM) の全体像について説明があり、部署横断的なマネジメントである EM は、非営利組織に必要なマネジメント・スタイルであることが述べられた。IR に関する必要なサービ

スについて俯瞰的図を用いて説明があり、データを活用するための重要点について述べられた。データについても一見してそのデータが何を示すのかが把握できるような可視化が行われていることが重要であり、ツールとしての IR を実質化するためにも必要であることが説明された。

続いて、SAS Institute Japan ソリューション本部の安海氏より SAS のデモンストレーションを交えながら BI システムとアナリティクスについて話題提供があった。データを十分に活用するために必要なデータ統合・整備(データの場所、コード体系、フォーマット等の統一)は課題解決のための準備であるが、意思決定プロセスのなかで占める割合が大きい場合があることが課題になっていることが挙げられた。より付加価値の高い活動へリソースシフトするためにもデータ統合・整備をシステム化し、分析結果の説明や意思決定に充てる時間を増やすことの必要性が提案された。また、SAS を活用したデータマネジメントについても紹介があり、情報の可視化、共有化を通じた集合知を創出する IR について述べられた。



話題②

本話題提供は、入学前 e-learning 教育を通して得られた学生情報を学習タイプに分けることで見えてくる学生の傾向(中退率・成績)について分析結果などを通して説明があった。まず、ワオ・コーポレーション森岡氏より事業概要説明があった。近畿大学の小野田氏より、近畿大学では、入学前 e-learning が進められており、ワオ・コーポレーションのソリューションを導入していることが紹介された。入学前 e-learning では、学部ごとに独自の課題を用意しており、生物理工学部では 8 年間実施されている。これまでの傾向として、入学前 e-learning を修了できない学生は留年することが多いことがわかっている。

続いて、入学前 e-learning の学生の学習傾向をいくつかのタイプ別に分類し、入学後の GPA や退学率との分析をした結果について説明があった。学習タイプは、長期達成型、短期達成型等の学習の達成率が 100% のものと前半型、非習慣型等の 100% に満たないもの、達成率 0% の無学習型に分かれている。学習タイプ別の分析からは、前半型と非習慣型、無学習型の GPA が低いことが示された。また、前半型と無学習型の退学率が高くなることが示された。他にも、学習感・学習動機についてアンケートが実施されており、学習タイプとの関係性についてなどの分析が進められていることが説明された。

話題③

本話題提供では、メディアフュージョン榎原氏より「大学のプロモーションのための IR ソリューション」と題して、大学教育のブランディング(プロモーション)について紹介があった。まず、教員業績管理システムのコンセプトについて説明があった。システム導入によって期待される効果として次の 5 つが挙げられた。①教員の負担なしで、正確で充実したプロモーション素材を集積、②国内外への積極的な展開、③理系以外の研究者についても積極的にプロモーション、④定量的データの活用、⑤制度に基づく情報公開・資料提出への柔軟で迅速な対応の 5 つが導入効果として説明された。CiNii 等のデータベースに蓄積されている論文情報(科研情報、特許情報等も含む)を集積するシステムを構築し、蓄積情報をリアルタイムでインターネットに配信することで、国内外への展開が図られることが紹介された。こうしたデータを定量的に評価することで、国際大学ランキング等への波及効果が期待できることが述べられた。また、蓄積されたデータは大学認証評価など法令に基づいた教育情報の公開にも活用できることが説明された。

オープンディスカッション

オープンディスカッションでは、IR などを活用したデータ・情報の視覚化が注目されているが、視覚化以前のデータの蓄積・統合・整理や視覚化の後の改善に活かすフェーズがより重要であるということが議論された。また、システム利活用の課題として、人材の育成や異動による影響など、属人的な運用が行われている現状や個人情報の取り扱いの難しさについて挙げられ、フロアを交えて議論が行われた。最後に、アメリカの事例を参考に、我が国でも国策として、大学が持つデータの活用についての法整備を進めていく必要性について意見交換が行われた。



講演

サンタフェ・コミュニティ・カレッジの Morimoto 副学長補佐より「IR と IE を成功させるために必要なことについて」と題して講演があった。冒頭、日本にはなじみの薄い用語として、IE (Institutional Effectiveness) について、データを活用した大学改善であり、大学のアセスメント (評価) を行うにあたり用いられる用語であると説明があった。続いて、IR、IE を成功させるために必要なこととして、ソフトスキルが必須であることが述べられた。アメリカで注目されている IR、IE で必須とされるソフトスキルについて、コミュニケーションスキル、イモーションアルインテリジェンス、政治力・交渉力等が挙げられており、人を動かすためのスキルの重要性について説明があった。

続いて、サンタフェ・コミュニティ・カレッジの概要や組織について説明があり、日本との違いを明確にしながらデータの活用例について紹介があった。同カレッジで設定した KPI (評価指標) を示し、同カレッジで行った改善対策について紹介があった。また、IR や IE での重要点として、重ねて強調されていたのが、ソフトスキルであり、データや資金も人を動かさなければ活用の道が開けないという点について、アメリカの事例を交えて述べられた。さらに、データを大学改善のための内発的動機に結びつける必要があり、データを示すことで安易に組織の危機感等を高める手法では外発的動機にはなるが大学改善にはなかなかつながらにくいことが述べられた。

最後に、サンタフェ・コミュニティ・カレッジの IR、IE の課題として、リアルタイムデータとビッグデータの活用と IR 部署による集中型のデータ活用から各教職員や執行部が独自にデータを活用する分散型への転換が述べられた。

まとめ

本勉強会では、先進的な技術を活用した IR を進めるためのシステムについて、ICT や調査分析を専門とする企業よりシステムの導入事例等について紹介があり、国内での先駆的事例を捉える機会となった。また、アメリカの事例では、ソフトスキルの重要性など我が国の IR 状況においては、まだ大きな論点になってはいないと考えられるが、今後の IR の進むべき方向性として検討すべき点として示唆に富むものであった。日本における IR においても専門的な企業の協力を得ながら、アメリカの事例を参考とし日本の大学ならではのデータ活用を積極的に進めることで、国際的な競争力を持った大学へと発展していくことが期待される。

6. AP 合同フォーラム

『共通の学生調査を用いた学修成果の可視化への取組

—データに基づく Faculty Development の展開—』

日 時 : 平成 28 年 2 月 22 日 (月) 14 : 00~17 : 00

場 所 : 玉川大学 大学教育棟 2014 521 教室

主 催 : 大阪府立大学、長崎大学、玉川大学

共 催 : 大学 IR コンソーシアム

タイムスケジュール

14 : 00-14 : 05 開会挨拶

14 : 05-14 : 25 「大学教育再生加速プログラム (AP) 事業の目的とその概要」

文部科学省高等教育局大学振興課 専門職 河本 達毅

14 : 25-14 : 55 基調講演「大学 IR コンソーシアムで可視化できること、できないこと」

大阪府立大学 学長補佐 大学 IR コンソーシアム IR システム運用部会長 高橋 哲也

～休憩～

15 : 00-15 : 20 事例報告①「学修成果の可視化と FD 活動との連動性—大阪府立大学のこれまでの取組みと見えてきた課題—」

大阪府立大学 高等教育開発センター 特認助教 畑野 快

15 : 20-15 : 40 事例報告②「学修成果の可視化と FD 活動」

玉川大学 教学部長 稲葉 興己

15 : 40-16 : 00 事例報告③「長崎大学における教育改革とデータに基づく FD への課題」

長崎大学 大学教育イノベーションセンター 教育改善部門長 山地 弘起

～休憩～

16 : 10-16 : 50 パネルディスカッション

16 : 50-17 : 00 閉会挨拶

はじめに

冒頭、長崎大学の松坂理事より挨拶があり、近年アクティブ・ラーニングが推進されており、アクティブ・ラーニングを前提とした授業において、いかに学生を適正に評価するかが課題になっていることが述べられた。また、可視化された学修成果、学生のデータを教育改革に活かしていくうえでの課題についても述べられ、今後の大学教育改革のさらなる展開への期待が述べられた。

続いて、文部科学省の河本専門職より「大学教育再生加速プログラム (AP) 事業の目的と概要」と題



して挨拶があった。まず我が国の現状として、少子化・高齢化、経済成長の鈍化などについて説明があった。また、諸外国では、経済発展等の基盤として高等教育が重視されていることが紹介された。続いて、平成 25 年に教育再生実行会議の発足と、教育改革の大まかな流れについて説明があった。高等教育においては第三次提言、第四次提言に基づき政策が展開されており、大学教育再生加速プログラム (AP) もそうした展開の一環として進められていることを踏まえ、事業全体について説明があった。本事業におけるテーマ I (アクテ

ィブ・ラーニング)、テーマⅡ(学修成果の可視化)、テーマⅠ・Ⅱ複合型、入試・高大接続、そして、ギャップイヤーについて概要説明があり、また、新たに、平成28年度から高大接続改革推進事業がスタートし、これまでの各テーマの連携と新規メニューのテーマⅤ(卒業時における質保証の取組の強化)について説明があった。



基調講演

大阪府立大学の高橋学長補佐より、「大学IRコンソーシアムで可視化できること、できないこと」と題して基調講演があった。冒頭、大学間連携としてのIRネットワーク4大学の取組みが平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択され、事業が進められたことについて説明があった。本補助金事業終了の後、大学IRコンソーシアムが設立され、8大学でスタートしたことが紹介された。大学IRコンソーシアムは、ベンチマークを作成すること、共通データを用いた相互評価、システム運用とIR人材の育成を目指している。

続いて、IRシステムについての概要と専門分野サブグループ、また、IRコンソーシアムで活用できるデータについて説明があった。IRシステムから、授業外学習時間、授業外学習時間とGPAのクロス集計などを把握することができ、当該データによれば両者に相関がないことが示されていること等について説明があった。また、大学IRコンソーシアムの活動事例として、自己点検・評価報告書への活用として、大学の育成目標と学生の成長実感の整合性などを把握する事例について紹介があった。

事例報告①

大阪府立大学の畑野特認助教より「学修成果の可視化とFD活動との連動性—大阪府立大学のこれまでの取組みと見えてきた課題—」と題して報告があった。本報告の概要は①「いつからどのようにして調査を実施してきたか」、②「調査から得られた課題をFD活動にどのように活かしているか」、③「APではどのような取組みをしているのか」の3点である。大阪府立大学では、2008年から学生調査が実施されており、現在は2年生以外の全学年に対して学生調査が実施されている。また、1・3年生については、大学IRコンソーシアム共通調査を採用していることが紹介された。調査によれば、1年次のGPA(成績)は3年次GPA(成績)と比較してほとんど変化がないことが明らかになり、初年次に学びの態度を身に付けることが重要であるとの方針から初年次教育の充実化が図られたことが紹介された。充実化の取組みとして、2012年に能動的な学びの態度を身に付けることを目的とする初年次ゼミナールが開始されたことが説明された。初年次ゼミナールの開講により、学生の満足度が2010年、2011年と比べて、2012年以降は高くなっていることが示された。大学教育再生加速プログラム(AP)の取組みでは、IRを(データを)FDのミドルレベル、マイクロレベルで活用することを方針としていることが説明された。APの取組では可視化部会を設置し、学類ごとにKPIを設定したことが紹介された。APの取組である可視化部会での課題として、FDのミドルレベルでの活用が困難であることと学類間の意識の違いが大きいことが挙げられた。まとめとして、初年次教育の導入などマクロレベルでは比較的順調にIR(データ)の活用が進んでおり、ミドルレベル、マイクロレベルへ展開していく方向性について述べられた。

事例報告②

玉川大学の稲葉教学部長より「学修成果の可視化とFD活動」と題して事例報告があった。本報告の概要は、①「APの取組み」、②「学修成果の可視化」、③「FDの展開」である。冒頭、玉川大

学の AP 事業の概要について説明があった。続いて、学修成果の可視化に向けた取組みの概要について説明があった。具体的には、英語教育を強化し全学共通のプログラムを全 8 学部で導入されたことについて説明された。大学 IR コンソーシアム調査によれば、英語教育を強化したことで玉川大学の 1 年生、上級生は、他大学を含めた全体平均と比較して、英語能力が上がったと答えている学生の値が高いことが示された。玉川大学では、大学が定めるコンピテンシー（社会で働き続ける上で必要な能力）をカリキュマップで提示しており、シラバスにも明示している。また、ポートフォリオを活用して、コンピテンシーをレーダーチャートで表示しており、学生のスコアが可視化されていることが説明された。また、担任面談（定性調査）を実施することでこれまでの調査では見えなかった学生の実態を把握することができることが紹介された。大学 IR コンソーシアム調査結果としては、文章表現の能力、コンピュータの操作能力等は高い値が出ているが、一般教養や、異文化理解が低いことが明らかになり課題となっていることが紹介された。最後にジェネリックスキル測定、卒業生調査について紹介があり、まとめとして、学生の学修成果を軸にした成績評価の推進とディプロマ・ポリシーに掲げた能力の測定を通して、全学的な教学マネジメントの改善等の FD 展開について紹介があった。

事例報告③

長崎大学の山地教育改善部門長より、「長崎大学における教育改革とデータに基づく FD への課題」と題して事例報告があった。長崎大学の概要について説明があった後、AP 取組みのポイントとして、アクティブ・ラーニングと学修成果の可視化が事業の両輪になっていることが説明された。長崎大学では、平成 24 年度からの教養教育改革として、選択科目をモジュール化していることが紹介された。教養教育のモジュール化とともに、全学共有学士像、教養教育全体の目標を定め、13 の目標キーワードが設定されていることが紹介された。現在、13 の目標キーワードは、学生の自己評価調査に基づき、全学モジュールの目標として 4 つの力に縮約されている。4 つの力は次の通り、「学（自律的に学ぶ力）」、「考（批判的に考える力）」、「関（他者と関わる力）」、「表現（表現し働きかける力）」である。今後、第 4 クールからの全学モジュールとその支援体制として、多面的思考から創造的思考へ、さらに地域の問題解決への参加が挙げられ、教養教育改革の展開について説明された。また、学修行動調査の分析例、PROG と学修行動調査の相関について紹介された。まとめとして、データに基づく FD に向けて、全学モジュールにおいて「考える力」を軸としたアクティブ・ラーニングを展開していく方向性などについて述べられた。

パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、河本専門職より、3 大学の事例報告に共通する事項として、ミドルレベルの FD が困難であるということが印象的であることが述べられた。また、全体のまとめとして、学修成果の可視化というのは出発点であり、膨大なデータ、学生情報をどのように高等教育改革に活用するのか、自大学のみならず、大学間の連携、相互協力関係を築くことで、より一層の高等教育の改革・改善の展開が期待されること、そうした展開を大学 IR コンソーシアムが行うことなどについて議論が行われた。

まとめ

本フォーラムは、大学教育再生加速プログラム（AP）に採択されている 3 大学の合同で行われたフォーラムであり、各大学の特色ある取組みは示唆的であり、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の今後の発展・展開についても資するフォーラムであるといえる。国内の先進的な取組み事例からは、学修成果を含めた学生情報をいかに高等教育の改善に結び付けていくかという点で共通しており、全国的な傾向であるといえる。また、大学側から学生に示すコンピテンシーの設定や各種調査を

活用した学生の学修成果の可視化の事例などは、本学の取組みにおいても有意義なものであるといえる。他大学の事例を参考にし、今後の山口大学の大学教育再生加速がさらに推進されることが期待される。



7. 宮崎国際大学 AP 事業訪問調査

日 時：2016年3月4日（金）15:00～16:30

場 所：宮崎国際大学 eポートフォリオセンター

対応者：デボラ・オチ教授（eポートフォリオとルーブリック関連研究）

ロイド・ウォーカー教務課長（ルーブリック担当）

池田祐美子（AP事業関連事務補佐員）

訪問者：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

質問内容：

（1）実施体制

5つのワーキンググループ（WG）（【1】アクティブ・ラーニング WG、【2】クリティカル・シンキング WG、【3】英語スキル WG、【4】eポートフォリオ WG、【5】ルーブリック・ベース・シラバス WG）の組織体制について質疑。

⇒ 各ワーキンググループは、国際教養学部と教育学部の教員から構成（各 WG に 4～5 名、うち教育学部教員が 1 名）。

AP プロジェクトリーダー（学長補佐・事務系職員）が 5 つの WG をとりまとめ、実質的なリーダーシップを発揮している。e ポートフォリオセンターに AP 事業で採用されたアセスメントオフィサー（助教）と事務補佐員が配置され、各種調整機能を果たしている。

小規模大学の強みを活かして、学内教員間のコミュニケーションが活発である印象を受けた。

（2）事業内容

①アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスの明確化と実践の取組内容について質疑。

⇒ アクティブ・ラーニング WG が宮崎国際大学におけるアクティブ・ラーニングの定性的調査を行っている。初年度に、教員に対するアンケート調査を実施し、授業で行っているアクティブ・ラーニングのリストアップ化を行った。さらに、授業観察や詳しいインタビュー調査を行ないながら、アクティブ・ラーニングの方法の特徴をマトリックス化して分類を行った。今後は、定量的データと結びつけながら、授業目的や授業内容別に、アクティブ・ラーニングのベストプラクティスを取りまとめていく予定である。

ただし、ベストプラクティスを限定的に捉えることには注意を払うべきであり、あくまで、授業目的や授業内容に応じたベストプラクティスの共通理解や浸透を図ることを考えているとのコメントがあった。

宮崎国際大学では、従来から講義形式の授業はなく、アクティブ・ラーニングが既に行われている環境にあったが、改めて、アクティブ・ラーニングとしてどのような方法があるのかについて、再整理することとなり、大学内において認識が高まった。

②クリティカル・シンキングとアクティブ・ラーニングとの関係から捉えた英語スキルの可視化の取組内容について質疑。

⇒ クリティカル・シンキング WG では、米国テネシー工科大学（TTU）が開発した CAT（クリティカル・シンキング・アセスメントテスト）を実施しながら、クリティカル・シンキングとアクティブ・

ラーニングや英語スキルの相互関係性を調査する方向である。このアセスメントテストについては、1～4年生で実施している。

アセスメントテスト結果を踏まえ、各授業におけるクリティカル・シンキング養成に欠けている点を検証し、授業担当者レベルで当該授業改善に結びつけるように取り組んでいる。

③アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング及び英語スキルの対応関係をルーブリック・ベース・シラバスによる視覚化の取組内容について質疑。特に、ルーブリック・ベース・シラバスの具体的な作成や活用状況について質疑。

⇒ ルーブリック・ベース・シラバス WG では、米国におけるルーブリック活用を参考に、宮崎国際大学独自の全学ルーブリック（**Institutional Rubrics**）を作成した。宮崎国際大学の教育・学習目標である「クリティカル・シンキング」「高度なコミュニケーション能力」「グローバルな視野」「英語力」「国語力」に基づくルーブリックとなっている。来年度から、全学ルーブリックを全科目のシラバス（現在は一部の科目のみ）に掲載する予定である。各シラバスに掲載するルーブリックは、全学ルーブリックを基本とするが、各授業担当者レベルで作成したルーブリックも掲載可能である。学内では、全学ルーブリックに基づく、各科目レベルでのルーブリック作成をテーマとした FD を行う予定である。

全学的にルーブリックを普及させることに、当初は抵抗があったが、現在では浸透が図られている。また、e ポートフォリオシステム（Moodle と Mahara の連携）においてルーブリックを明記した実践を進めている。

「クリティカル・シンキング」「高度なコミュニケーション能力」「グローバルな視野」「英語力」「国語力」の達成度については、卒業時アンケートにおいて、学生に自己評価する仕組みを来年度から行う予定である。宮崎国際大学では、ディプロマ・ポリシーよりも上記の 5 つの力の達成度を重視している。

（3）雑感

宮崎国際大学は、本学と同様に、AP 事業のテーマ I・II 複合型の採択校である。アクティブ・ラーニングの類型化のアプローチ、それをベースとしたベストプラクティスの探究、さらには、大学の既存の教育・学習目標に基づく全学ルーブリックを作成とその展開など、本学の取組課題としている点と類似する項目が多く、非常に参考となった。今後も、必要に応じて情報交流していく方向である。



8. 平成 27 年度京都外国語大学 『大学教育再生加速プログラム(AP)シンポジウム』

日 時 : 平成 28 年 3 月 8 日 (月) 13 : 40~17 : 05
場 所 : 京都外国語大学 1 号館 7 階 R171
主 催 : 京都外国語大学 AP 推進委員会

タイムスケジュール

【第 1 部】

13 : 40-13 : 45 開会挨拶 京都外国語大学・京都外国語短期大学 学長 松田 武

13 : 45-14 : 45 基調講演「学生の主体的な学びを引き出す反転授業
—山梨大学における実践事例—」
山梨大学 教授 埴 雅典

～休憩～

14 : 55-15 : 45 成果報告 (事例発表)
「京都外国語大学における AP 事業の取り組み」
京都外国語大学・京都外国語短期大学 副学長 下村 秀則
「外国語教育における反転授業型アクティブラーニングの設計と実践」
京都外国語大学 教授 石川 保茂
「学修成果の可視化に向けた取り組みとジェネリックスキルに関する分析」
京都外国語大学 教授 村上 正行
15 : 45-16 : 10 「アクティブラーニングの効果をどう捉えるか」
京都学園大学 講師 三保 紀裕

～休憩～

【第 2 部】

16 : 25~17 : 05 パネルディスカッション
17 : 05 閉会挨拶 京都外国語大学・京都外国語短期大学 副学長 下村 秀則

はじめに

冒頭、京都外国語大学の松田武 学長からあいさつがあり、大学教育再生加速プログラム (AP) 事業の成果概要について、確かな語学力および人間力の育成を目指し、語学教育に適した「反転授業型のアクティブラーニング」の開発・実践およびキャリア科目群における「問題解決型学習 (PBL)」の実践に取り組んできたことが述べられた。

基調講演

埴雅典 山梨大学 教授より「学生の主体的な学びを引き出す反転授業—山梨大学における実践例—」と題して基調講演があった。まず、アクティブ・ラーニングの実践について、ビデオで反転授業実践が紹介された。アクティブ・ラーニングの捉え方と反転授業について定義などが示され、反転授業そのものは、アクティブ・ラーニングではないが、アクティブ・ラーニングと相性がいいことが述べられた。また、反転



授業の利点について説明があった。

続いて、反転授業の実施については、授業設計（インストラクショナルデザイン）が重要であることが強調された。インストラクショナルデザイン（ID）が作り込まれていれば、比較的教員のファシリテーションは重要ではないことが述べられ、IDのADDIEモデルやARCSモデル、ガニエの9教授事象を用いて、反転授業の特性が説明された。実践事例では、反転授業に使用する動画は、講義を撮影するのではなく、PC上のスライドに音声を録音するかたちの簡便なものが活用されており、簡単に動画作成が可能なウェブサイトなどのツールが紹介された。実践事例の具体的な紹介では、反転授業導入前の問題点が挙げられ、それらを解決するために講義（対面授業）を事前学習動画に置き換えることが有効であると考えられたことが述べられた。実際の授業時間では演習が実施されるが、事前学習では動画の視聴だけでなく、クイズなども活用されている。また、対面授業の時間配分の例が紹介され、ワークシートやスマートフォンのアプリの活用について紹介された。

これまでの反転授業取組の効果について説明があり、反転授業を導入した年度の間試験の結果は完全習得型学習と同様の分布がみられることがわかった。3年間で成績の伸びもみられたが、課題の難度の高度化や授業内容の複雑化などで、成績の分布が一斉講義型に近づいてきているという課題について言及する一方で、授業時間外学習時間が大幅に増えたことが述べられた。

最後に、スチューデントエンゲージメントの概念を挙げ、アクティブ・ラーニングとやる気、楽しさが、かみ合うことが大切であることを強調し、学生のやる気を引き出すには、「できる楽しさ」を通した授業設計が重要であることが述べられた。

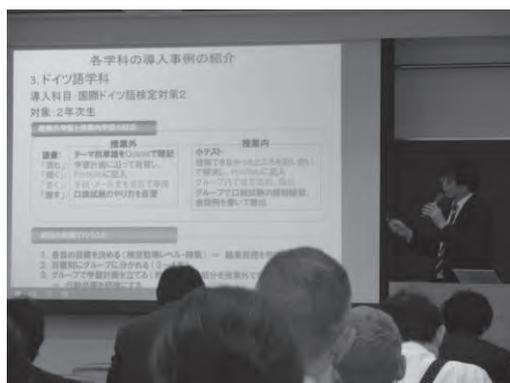
成果報告

下村秀則 京都外国語大学・京都外国語短期大学 副学長よりAP取組について紹介があり、実践的な語学力と汎用的な能力の育成を目指していることが述べられた。実践的な語学力は反転授業を通して育成され、汎用的能力についてはPBLを実施することで対応されている。学修成果の可視化では、PROGを活用して能力を測定する取り組みが進められており、京都外国語大学で設定した9つの力を測定していることが説明された。学修成果の可視化を通して、自己の学びを振り返り、主体的に学ぶ態度を涵養することが述べられ、さらに生涯にわたって学ぶ力を学生が身につけることが期待されていることについて説明があった。

石川保茂 京都外国語大学 教授より、アクティブ・ラーニングの取組について報告があり、事例紹介が行われた。一般的な授業と反転授業の概念モデルについて説明がなされ、各学科の導入事例について紹介があった。事前学習と授業の振り返りを必須化し、ICT教材の活用、ポートフォリオの作成、また、授業中はペアやグループを活用した学習が行われていることが紹介された。TOEICスコアの分析では、反転授業を導入した科目の学生が、よりよい結果を出していることがわかっており、特に、成績下位群に対しての効果が高いことが説明された。課題があったのは中位群においてであり、授業時間外学習でノートをとらない、教材を十分に活用できていないことがわかっており、中位群は、下位群に比べて伸び悩む傾向があることについて説明があった。

今後の課題として、さらなる効果検証、ICT教材の充実、反転授業ALの導入数の増加が挙げられた。

村上正行 京都外国語大学 教授より、学修成果の可視化取組について報告があった。まず、前提として大学への社会的要求について言及された。続いて、自己調整学習の概念についてと学修成果の可視化の意義について説明があり、京都外国語大学の取組であるモニタリングシステムについて説明があった。京都外国語大学では、9つの能力をモニタリングし



ており、9つの能力とは、問題発見能力・解決力、思考力・判断力、想像力・企画力、主体的に取り組む力、計画力・実行力、情報収集力・分析力、プレゼンテーション力、コミュニケーション、多文化共生力である。これらは、学生が設定する目標値、学生の自己評価、PROGテストの結果、授業ごとに設定されている修得ポイントによって各能力をモニタリングしている。また、モニタリングシステムの課題について説明があり、PROGの結果についても紹介があった。最後に、ジェネリックスキル分析の課題についていくつか挙げられた。



三保紀裕 京都学園大学 講師より、「アクティブ・ラーニングの効果検証」、「【事例紹介】量的データに基づく検討」、「教育的効果をどう捉えるのか？」の3点について話題提供があった。アクティブ・ラーニングの効果検証では、評価指標として、成績のみならず、学習動機、学習アプローチ、予習の程度、技能・態度（能力）などについて調査を進めていると同時に、アクティブ・ラーニングの尺度についても調査を進めていることが説明された。

「【事例紹介】量的データに基づく検討」については、学生の自己評価を通した測定変数について説明があった。測定変数には学習アプローチなどが挙げられる。また、事例では、授業設計が作りこまれたアクティブ・ラーニング型授業では、主体的な学習態度（宿題だけを行うのではなく、調べる、突き詰めるなどを行う）、学習アプローチなどについても大きな変化が見えることが説明された。

「教育的効果をどう捉えるか？」では、アクティブ・ラーニング授業では、学習アプローチの変化や予習の仕方における変化があると考えられることが述べられた。今後の課題として、深い学びを引き出すアクティブ・ラーニングとはどのようなものか、授業内で起きていることの詳細な検討が必要であることが述べられた。

パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、「反転授業に教育効果があるならば、すべての授業を反転授業にするべきか」といった議論が行われた。これについては、カリキュラム設計を含めて、学生に過剰な負担をかけないようなかたちで教育を展開していくことが重要であることなどの意見が交わされた。また、「反転授業（アクティブ・ラーニング）に向き不向きがあるか」といった議論については、原則として、反転授業（アクティブ・ラーニング）に向く分野、向かない分野といった枠組みで科目を捉えるのではなく、科目の目的や授業設計を踏まえることで、どのような科目分野においても反転授業（アクティブ・ラーニング）は可能であると述べられた。より有効なアクティブ・ラーニング推進においては、授業レベル（マイクロレベル）だけでなく、カリキュラムレベル（ミドルレベル）に視点をおいて、大学教育にアクティブ・ラーニングを組み込んでいくことが重要であることが議論された。

まとめ

京都外国語大学は、大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）、テーマⅡ（学修成果の可視化）複合型に採択されており、特徴的な取り組みがあるが、本学の取り組みとも共通する点も見受けられた。京都外国語大学の特徴的な取り組みとして、反転授業をアクティブ・ラーニングの軸に置いている点であり、外国語科目における反転授業の有効性がわかる成果が発表された。今後のアクティブ・ラーニングのさらなる推進において、反転授業を検討するうえで示唆的な内容のシンポジウムであったと言える。

IX . 活動日誌・編集後記

活動日誌

(2015年4月1日～2016年3月31日)

年月日	記事
2015年5月14日	<p>第3回スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) 『YC.CAM メンバーによる学習相談会』 場所：総合図書館アカデミック・フォレスト 主催：山大コーディネーターYC.CAM</p>
2015年6月2日	<p>テーマⅠ (アクティブ・ラーニング) タスクフォース第7回会議</p>
2015年6月4日	<p>テーマⅡ(学修成果の可視化) タスクフォース第6回会議</p>
2015年6月12日	<p>2015年度 第1回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会 (YU-AP 委員会)</p>
2015年7月3日	<p>第4回スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) 『ぶち、教えちゃる！大学職員の仕事 ー大学職員の先輩に聞いてみようー』 場所：総合図書館アカデミック・フォレスト 【開会挨拶】 16：10～16：20 【第一部 話題提供】 16：20～17：00 「ぶち、教えちゃる！大学職員の仕事」 重松 隆寛 (学生支援部教育支援課総務係) 東 真知子 (情報環境部情報企画課情報企画係) 【第二部 ダイアログ】 17：00～17：35 【クロージング】 17：35～17：40 (総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授)</p>
2015年7月9日	<p>山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) & KEEPAD JAPAN アクティブ・ラーニング研究会 共同企画 FD・SD ワークショップ 『アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう！ ー大人数授業、理系基礎科目を事例にしてー』 場所：総合図書館アカデミック・フォレスト 【開会挨拶・趣旨説明】 16：10～16：20 【事例報告】 16：20～17：20 (1) 「やればできる、大人数による双方向型授業」 鍋山 祥子 (山口大学経済学部教授) (2) 「理系基礎科目におけるアクティブ・ラーニング ～クリッカー活用によるピア・インストラクション～」 新田 英雄 (東京学芸大学自然科学系教授) (3) 「今すぐ始められるクリッカー利用方法」 山口 達也 (KEEPAD JAPAN ICT&テクニカルサポートマネージャー) 【グループワークセッション】 17：20～17：55 「学生の学びを促進するアクティブ・ラーニングであるために！」 【クロージング・閉会挨拶】 17：55～18：00 (総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授)</p>

2015年7月14日	テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）タスクフォース第8回会議
2015年7月21日	テーマⅡ(学修成果の可視化) タスクフォース第7回会議
2015年8月2日	<p>第5回スチューデント・リーダー・プログラム (SLP)</p> <p>『山大流・学生参画型FDのこれまでとこれから ービジョンを輝きあるものにてー』</p> <p>場所：総合図書館学習室1</p> <p>【趣旨説明・話題提供】16：00～16：40</p> <p>【ダイアログ】16：40～17：55</p> <p>【クロージング】17：55～18：00</p> <p>(総合司会 河島 広幸 大学教育機構大学教育センター助教 (特命))</p>
2015年9月15日	テーマⅡ(学修成果の可視化) タスクフォース第8回会議
2015年9月24日	テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）タスクフォース第9回会議
2015年9月28日	<p>山口大学 共育ワークショップ2015</p> <p>『みんなで山大の教育（共育）について語ろう！』</p> <p>場所：総合図書館・アカデミック・フォレスト</p> <p>【開会挨拶・趣旨説明】13：30～13：40</p> <p>【基調講演】13：40～14：10</p> <p>「大学での学びを変える、学生が変わる」</p> <p>曾根健吾（横浜国立大学 大学教育総合センター助手）</p> <p>【グループワーク・オリエンテーション】14：10～14：30</p> <p>【グループワーク】14：30～16：30</p> <p>【全体発表】16：30～17：20</p> <p>【クロージング・閉会挨拶】17：20～17：30</p> <p>(総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授)</p>
2015年9月29日	<p>第6回スチューデント・リーダー・プログラム (SLP)</p> <p>『学生参画型FDとピアサポートの今を語ろう！ ーYC.CAMによる成果報告ー』</p> <p>場所：共通教育棟1階15番教室（アクティブ・ラーニング教室）</p> <p>【報告】10:00～12:00</p> <p>岡山大学学生・教職員教育改善専門委員会主催：「i*See2015」</p> <p>古谷 晃一・西尾 翔太・須藤 亜莉 (YC.CAM)</p> <p>追手門学院大学学生FDパレット・教育開発機構「学生FDサミット2015夏」</p> <p>杉元 茜・藤坂 勇汰・江角 寛・井本 圭祐 (YC.CAM)</p> <p>広島大学高等教育研究開発センター「シンポジウム『大学と学生』」</p> <p>井本 圭祐 (YC.CAM)</p> <p>【コメント&アドバイジング】</p> <p>曾根 健吾 横浜国立大学大学教育総合センター助手</p>
2015年9月30日	<p>山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) FD・SD ワークショップ</p> <p>『授業科目シラバスから作成するルーブリック</p>

	<p>ー観点別到達目標を活かしてー』</p> <p>場所：共通教育棟1階15番教室（アクティブ・ラーニング教室）</p> <p>【開会挨拶】13：30～13：35</p> <p>【イントロダクション】13：35～13：50</p> <p>(1)「授業設計を助けるルーブリックの特徴と効果」</p> <p>星野 晋（国際総合科学部講師）</p> <p>【グループワーク】13：50～15：10</p> <p>(2)「ルーブリック作成のファシリテーション」</p> <p>林 透（大学教育機構大学教育センター准教授）</p> <p>(3) グループ対話</p> <p>【リフレクション】15：10～15：25</p> <p>(4)「コメント（シラバス充実・教員授業自己評価入力を含めて）」</p> <p>野村 厚志（教育学部教授）</p> <p>【クロージング】15：25～15：30</p> <p>（総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）</p>
2015年10月8日	くらしき作陽大学訪問調査受入
2015年10月9日	名城大学訪問調査受入
2015年10月26日	2015年度第2回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会（YU-AP委員会）
2015年10月29日	<p>山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）& SCSK(株)共同企画FD・SDワークショップ</p> <p>『アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう Part2 ーアクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器を中心にー』</p> <p>場所：共通教育棟1階15番教室（アクティブ・ラーニング教室）</p> <p>【開会挨拶・趣旨説明】16：10～16：20</p> <p>【事例報告】16：20～17：10</p> <p>(1)「初等中等教育におけるタブレット端末の活用実践経験から」</p> <p>鷹岡 亮（山口大学教育学部教授）</p> <p>(2)「タブレット端末を活用したアクティブ・ラーニング ～外国語科目における実践事例を通して～」</p> <p>岩居 弘樹（大阪大学全学教育推進機構教授）</p> <p>【デモンストレーション】17：10～17：55</p> <p>「タブレット端末を活用したアクティブ・ラーニングを体感しよう！」</p> <p>【閉会挨拶】17：55～18：00</p> <p>（総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）</p>
2015年11月6日	第4回アドバイス会議
2015年11月13日	県立広島大学訪問調査受入
2015年12月1日	2015年度第3回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会（YU-AP委員会）
2015年12月4日	<p>第7回スチューデント・リーダー・プログラム（SLP）</p> <p>『図書館における学修支援について考えよう！』</p> <p>場所：総合図書館アカデミック・フォレスト</p>

	<p>【開会挨拶・趣旨説明】 16：10～16：20</p> <p>【基調講演】 16：20～16：50 「図書館における学修支援の可能性」 長澤 多代（三重大学附属図書館研究開発室 准教授）</p> <p>【ダイアローグ】 16：50～17：25</p> <p>【閉会挨拶】 17：35～17：40 (総合司会 河島 広幸 大学教育機構大学教育センター助教 (特命))</p>
2015年12月18日	<p>山口大学・大学コンソーシアムやまぐち SD セミナー2015 『大学職員の専門性について考えてみよう！』</p> <p>場所：大学会館2階会議室</p> <p>【開会挨拶・趣旨説明】 13：30～13：40</p> <p>【第一部 基調講演&ショートトーク】 13：40～14：50</p> <p>(1) 「大学職員に期待される専門性とは」 吉武 博通（筑波大学ビジネスサイエンス系教授（お茶の水女子大学監事、元筑波大学理事・副学長））</p> <p>(2) 「教育・研究支援に発揮できる大学職員の専門性」 中村 早苗（山口県立大学経営企画部財務グループ）</p> <p>(3) 「ダブルアドバイザー制度に発揮できる大学職員の専門性」 中嶋 智久（徳山大学学生支援センター入試室）</p> <p>【第二部 グループワークセッション】 15：00～17：10 「Let's Challengeー大学職員の専門性について考えてみよう！ー」</p> <p>【クロージング・閉会挨拶】 17：10～17：15 (総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授)</p>
2016年1月21日	日本私立学校振興・共済事業団訪問調査受入
2016年1月28日	福岡工業大学訪問調査受入
2016年1月29日	2015年度 第4回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会(YU-AP委員会)(メール審議)
2016年2月15日	テーマⅡ(学修成果の可視化) タスクフォース第9回会議
2016年2月17日	テーマⅠ(アクティブ・ラーニング) タスクフォース第10回会議
2016年3月3日	第2回自己点検・評価タスクフォース委員会
2016年3月7日	第5回アドバイス会議
2016年3月7日	<p>山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) & IR室合同企画FD・SDワークショップ</p> <p>『教学マネジメント強化のためのIRとは ーデータ活用方策を理解し、実践に活かすためにー』</p> <p>場所：総合図書館アカデミック・フォレスト</p> <p>【開会挨拶・趣旨説明】 13：30～13：35</p> <p>【第一部 基調講演】 13：35～14：15 「教育の質保証に向けた教学IRのチャレンジ」 鳥居 朋子（立命館大学教育開発推進機構 教授）</p>

	<p>【第二部 グループワークセッション】 14 : 15～16 : 25 「データを活用するためのリサーチ・クエスチョンの作り方」 川那部 隆司 (立命館大学教育開発推進機構 准教授)</p> <p>【閉会挨拶】 16 : 25～16 : 30 (総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授)</p>
2016年3月11日	第5回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会 (YU-AP 委員会)
2016年3月14日	第6回アドバイス会議
2016年3月14日	<p>『AP 事業成果発表ジョイントフォーラム 2016』 ー山口・広島地区大学教育再生加速プログラム (AP) 採択校の成果発信ー』 場所：専門学校 YIC グループ YIC Studio2 階講堂</p> <p>【開会挨拶・来賓挨拶】 14 : 00～14 : 10</p> <p>【基調講演】 14 : 10～14 : 50 「ラーニングコミュニティにおける学生の『学び』とは ～アセスメント科目の設定と効果～」 関田 一彦 (創価大学教育・学習支援センター長 教授)</p> <p>【成果報告】 14 : 50～16 : 00 石本 英樹 (徳山大学経済学部長) 馬本 勉 (県立広島大学学長補佐 (教育改革・大学連携)) 林 透 (山口大学大学教育機構大学教育センター 准教授) 斉藤 克幸 (比治山大学・比治山大学短期大学部質的転換加速化 本部 AP ワーキンググループ座長) 武藤 義彦 (宇部工業高等専門学校経営情報学科 教授)</p> <p>【協同学習ワークショップ】 「アクティブ・ラーナー、リフレクティブ・ティーチャーであるために」 関田 一彦 (創価大学 教授) 河島 広幸 (山口大学 助教 (特命))</p> <p>【クロージング・閉会挨拶】 17 : 20～17 : 30 (総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授)</p>
2016年3月23日	<p>第8回スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) 『ジローさんの迫熱教室 Part2』 場所：共通教育棟 1階 15 番教室 (アクティブ・ラーニング教室) 「ジローさんの迫熱教室」 新日鉄住金ソリューションズ(株) 人事部専門部長中澤 二郎</p>
2016年3月24日	<p>第2回外部評価委員会 (外部評価委員：高橋 哲也 大阪府立大学学長補佐、鳥居 朋子 立命館大学教育開発推進機構 教授、中澤 二郎 新日鉄住金ソリューションズ(株) 人事専門部長、秦 敬治 追手門学院大学 副学長、伴 浩一 山口県立山口高等学校 校長)</p>

編集後記

2015年度は、前年度に採択となった文部科学省・大学教育再生加速プログラム（テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）・テーマⅡ（学修成果の可視化）複合型）の取組が着実に進み、その成果を学内外の研修会、学会等において情報発信することができた。

テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）では、ALポイント認定制度が本格実施となり、授業科目シラバスにおいてALポイントが明記され、各授業科目におけるアクティブ・ラーニングの度が明示されることとなった。ALポイント認定制度、アクティブ・ラーニングをテーマとしたFD・SDワークショップに取り組むことで、学内におけるアクティブ・ラーニングに関する理解と認知度は高まった。このことは、AP事業をテーマとした、部局主催の教育改善FD研修会で趣旨説明・意見交換を行う中で強く実感することができた。

テーマⅡ（学修成果の可視化）では、『山口大学教育理念』を整理して、山口大学生として期待される汎用的能力を明確化できたことが特筆すべき事項である。このことにより、2015年度から全学実施が本格化した学修到達度調査による汎用的能力の測定、その結果を可視化する環境整備を進めることができた。今後は、各調査結果を踏まえながら、学生によるリフレクションや教員によるアドバイジングに活かすための諸方策に取り組むステージへと進むことになる。

これらの取組を支えとなるのは、教員・職員・学生の協働によるラーニングコミュニティの充実にほかならない。さらには、学内外、国内外における大学関係者や関係機関とのネットワーキングを通して、高等教育のイノベーションを目指していきたい。各方面からのご指導、ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）は、事業開始2年目となり、ALポイント認定制度、学修到達度調査及び学修行動調査をはじめとした多くの取組が進められています。特に、組織的なAL推進取組であるALポイント認定制度は、本格的に全学的な取組として展開される方向性で進んでいます。本事業のテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）、テーマⅡ（学修成果の可視化）をさらに展開し、本学の教育理念である「発見し、はぐくみ、かたちにする 知の広場」を実践することで、山口大学らしい「教育（共育）」を進めてまいります。

今後とも大学関係者、関係諸機関等からのご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

大学教育機構 大学教育センター助教（特命） 河島 広幸

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)アニュアルレポート 2015

発行 : 山口大学
大学教育機構大学教育センター (YU-AP 推進室)
〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1
TEL. 083-933-5261
2016年3月 発行
